主要地方道成田松尾線Ⅳ

小池元高田遺跡
柳谷遺跡
上宿遺跡
井森戸遺跡

昭和61年3月

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

主要地方道成田松尾線Ⅳ

小池元高田遺跡
柳谷遺跡
上宿遺跡
井森戸遺跡

昭和61年3月

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

序　　文

千葉県の北部にひろがる下総台地は，先土器時代から歴史時代に至る数多くの遺跡が知られております。

主要地方道成田松尾線事業地内におきましても遺跡の所在が確認され，昭和53年度から千葉県教育委員会の指導のもとに，当センターが発掘を実施してまいりました。既にその一部は「主要地方道成田松尾線Ⅰ」「同Ⅱ」として成果を発表しております。

このたび，昭和56年度から58年度に発掘した№7，24，27，29遺跡の調査成果がまとまり本報告書として刊行する運びとなりました。

当遺跡からは，先土器時代，縄文時代，古墳時代，歴史時代，近世の遺構が確認されており当該地域の古代生活を窺い知る貴重な資料を得ることができました。特に，№7遺跡の集落跡，№27，29遺跡の縄文時代資料には興味深いものがあります。

本報告書が学術資料として利用されるばかりでなく，教育資料及び郷土を知る資料として広く活用されることを望んで止みません。

最後に，発掘調査から整理に至るまで多大な御協力，御指導をいただきました千葉県土木部，千葉県成田土木事務所，千葉県教育庁文化課，芝山町教育委員会をはじめ，関係諸機関に感謝の意を表わすとともに発掘調査，整理に協力された調査補助員の皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和61年3月

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　　山本　孝也

例　　言

1．本書は，主要地方道成田松尾線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。遺跡コード番号は，小池元高田遺跡（№7）を409－10，柳谷遺跡（№24）を409－13，上宿遺跡（№27）を409－12，井森戸遺跡（№29）を409－14とした。

2．小池元高田遺跡は，山武郡芝山町小池元高田字向台1584他に所在する。柳谷遺跡は，山武郡芝山町大里字柳谷32－1他に所在する。上宿遺跡は，山武郡芝山町岩山字上宿1，750他に井森戸遺跡は，山武郡芝山町岩山字井森戸134－1他に所在する遺跡である。

3．発掘調査は，小池元高田遺跡が，昭和56，57年度に，柳谷遺跡が，昭和56年度に，上宿遺跡が昭和56～58年度に，井森戸遺跡が，昭和57，58年度に実施し，整理作業を昭和58，59年度に行った。作業は，千葉県教育委員会の指導のもとに，千葉県土木部との委託契約に基づいて，財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4．遺構に使用した方位は小池元高田遺跡，柳谷遺跡，上宿遺跡については磁北，井森戸遺跡については座標北で表わした。

5．作業の分担は，調査部長白石竹雄（56～58年），鈴木道之助（59年），部長補佐天野努（56年），岡川宏道（57，58，60年），根本　弘(59年)，班長斎木　勝(56，57年)高橋賢一（58年），主任調査研究員萬崎博昭（56，57年），調査研究員奥田正彦（56～58年）榊原弘二（56年），伊藤智樹（57～59年），土屋潤一郎（58年）が担当した。整理作業は，小池元高田遺跡・柳谷遺跡を伊藤智樹が，上宿遺跡・井森戸遺跡を高橋賢一が担当し執筆した。

6．井森戸遺跡の古銭は今泉　潔氏に，上宿遺跡の陶磁器は小高春雄氏に御教示を得た。上宿遺跡の石器集中地点は田島　新氏に実測とまとめをお願いした。

7．発掘調査から本書の刊行に至るまで下記諸機関，諸氏の御指導，御協力を賜わり，深く謝意を表わす次第であります。

千葉県教育庁文化課，千葉県土木部道路建設課，千葉県成田土木事務所，芝山町教育委員会
小高春雄，今泉　潔，田島　新，地元諸氏

8．現地発掘調査にあたり，酷暑・酷寒の中，調査に従事して頂いた調査補助員の方々及び，整理作業にあたって頂いた調査補助員の方々には終始調査に対する御協力を頂き感謝致します。

本 文 目 次

序文
例言
第1章　遺跡の位置と環境 …… (高橋賢一)…… 1
第1項　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 1
第2章　小池元高田遺跡 …… (伊藤智樹)…… 4
第1項　調査の方法と概要 …… 4
第2項　遺構 …… 4
第3項　遺物 …… 26
1　遺構出土の遺物 …… 26
2　グリッド出土の遺物 …… 45
第4項　小結 …… 56
第3章　柳谷遺跡 …… (伊藤智樹)…… 60
第1項　調査の方法と概要 …… 60
第2項　遺構 …… 60
第3項　遺物 …… 68
第4項　小結 …… 71
第4章　上宿遺跡 …… (高橋賢一)…… 72
第1項　調査の方法と概要 …… 72
第2項　遺構 …… 80
第3項　遺物 …… 99
1　遺構出土の遺物 …… 99
2　グリッド出土の遺物 …… 103
第4項　小結 …… 132
第5章　井森戸遺跡 …… (高橋賢一)…… 136
第1項　調査の方法と概要 …… 136
第2項　遺構 …… 143
第3項　遺物 …… 167
1　遺構出土の遺物 …… 167
2　グリッド出土の遺物 …… 179
第4項　小結 …… 190
第6章　まとめ …… (伊藤智樹)…… 192

挿 図 目 次

第１図　周辺地形図（1/50,000）…… 2
第２図　小池元高田遺跡周辺地形図（1/5,000）…… 5
第３図　土層柱状図…… 6
第４図　小池元高田遺跡遺構分布図（1/1,000）…… 6
第５図　第１ブロック遺物出土状況（1/40）…… 7
第６図　001号住居跡実測図（1/60）…… 8
第７図　002号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）…… 10
第８図　003号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）…… 11
第９図　004号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）…… 12
第10図　005号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）…… 14
第11図　006号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）…… 16
第12図　007号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）…… 17
第13図　008号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）…… 18
第14図　009号住居跡実測図（1/60）…… 20
第15図　009号住居跡カマド実測図（1/40）…… 21
第16図　010号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）…… 22
第17図　011号住居跡実測図（1/60）…… 23
第18図　011号住居跡カマド実測図（1/40）…… 24
第19図　012号跡実測図（1/20）…… 25
第20図　013号跡実測図（1/120）…… 26
第21図　第１ブロック出土石器実測図（2/3）…… 27
第22図　001号住居跡出土遺物実測図（1/4）…… 28
第23図　002号住居跡出土遺物実測図（1/4）…… 29
第24図　003号住居跡出土遺物実測図（1/4・1/2）…… 31
第25図　004号住居跡出土遺物実測図（1/4）…… 33
第26図　005号住居跡出土遺物実測図（1/4）…… 34
第27図　006号住居跡出土遺物実測図（1/4・1/2）…… 36
第28図　007号，008号住居跡出土遺物実測図（1/4・1/2）…… 38
第29図　009号住居跡出土遺物実測図（1/4・1/2）…… 39
第30図　010号住居跡出土遺物実測図（1/4・1/2）…… 41
第31図　011号住居跡出土遺物実測図(1)（1/4）…… 43

第32図　011号住居跡出土遺物実測図(2)（1/4）……44
第33図　グリッド出土縄文式土器拓影図(1)（1/3）……47
第34図　グリッド出土縄文式土器拓影図(2)（1/3）……48
第35図　グリッド出土縄文式土器実測拓影図(3)（1/3）……49
第36図　グリッド出土遺物実測図（1/4・1/2）……51
第37図　グリッド出土石器実測図（2/3）……53
第38図　グリッド出土石器，紡錘車実測図（1/2）……54
第39図　グリッド出土埴輪拓影図（2/3）……55
第40図　柳谷遺跡周辺地形図（1/5,000）……61
第41図　柳谷遺跡遺構分布図（1/1,000）……62
第42図　馬土手，柵列実測図（1/400，1/200，1/80，）……64
第43図　003号跡実測図（1/40）……65
第44図　005号跡実測図（1/40）……67
第45図　006号跡実測図（1/40）……68
第46図　007号跡，008号跡実測図（1/200，1/120）……69
第47図　グリッド出土遺物実測図（2/3・1/3）……70
第48図　上宿遺跡周辺地形図（1/5,000）……73
第49図　土層柱状図……74
第50図　遺構配置図(1)……75
第51図　遺構配置図(2)……77
第52図　001号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60，1/40）……81
第53図　002・003・004・005・006号土壙実測図（1/60，1/30）……83
第54図　007号土壙，008号方形周溝遺構実測図（1/30，1/200，1/80）……85
第55図　009・010・011・012・013号土壙実測図（1/60，1/30）……86
第56図　014・015・016・017・018号土壙実測図（1/30，1/60）……88
第57図　019・020号土壙・021号竪穴状遺構実測図（1/30，1/80）……89
第58図　022・024号土壙・023号井戸跡実測図（1/60，1/100）……90
第59図　縄文時代遺物出土状況（1/80）……92
第60図　縄文時代石器分布図（1/40）……93
第61図　縄文時代石器実測図(1)（2/3）……95
第62図　縄文時代石器実測図(2)（2/3）……96
第63図　縄文時代石器長幅比……98
第64図　001号住居跡出土遺物実測図（1/4）……99

第65図　005・008・009・021号遺構出土遺物（1/2，1/4）……101
第66図　024号遺構出土遺物（1/2）……102
第67図　グリッド出土縄文式土器拓影図(1)（1/3）……104
第68図　グリッド出土縄文式土器拓影図(2)（1/3）……106
第69図　グリッド出土縄文式土器拓影図(3)（1/3）……108
第70図　グリッド出土縄文式土器拓影図(4)（1/3）……110
第71図　グリッド出土縄文式土器拓影図(5)（1/3）……112
第72図　グリッド出土縄文式土器拓影図(6)（1/3）……114
第73図　グリッド出土縄文式土器拓影図(7)（1/3）……117
第74図　グリッド出土土器実測図(1)（1/3）……119
第75図　グリッド出土土器実測図(2)（1/3）……120
第76図　グリッド出土土器実測図(3)（1/3）……121
第77図　グリッド出土土器実測図(4)（1/3）……122
第78図　グリッド出土土器実測図(5)（1/3）……123
第79図　グリッド出土土器実測図(6)（1/3）……124
第80図　グリッド出土土器実測図(7)（1/3）……125
第81図　グリッド出土土器実測図(8)（1/4）……126
第82図　グリッド出土石器実測図(1)（2/3）……127
第83図　グリッド出土石器実測図(2)（1/2）……129
第84図　グリッド出土石器実測図(3)（1/2）……130
第85図　グリッド出土石器実測図(4)（1/2，1/1）……131
第86図　縄文式土器出土状況図(1)（1/500）……133
第87図　縄文式土器出土状況図(2)（1/500）……133
第88図　縄文式土器出土状況図(3)（1/500）……134
第89図　縄文式土器出土状況図(4)（1/500）……134
第90図　井森戸遺跡地形図（1/5,000）……137
第91図　土層柱状図……138
第92図　遺構分布図(1)（1/500）……139
第93図　遺構分布図(2)（1/500）……141
第94図　001号住居跡実測図（1/60）……144
第95図　001号住居跡貯蔵穴及びカマド実測図（1/20，1/40）……145
第96図　002号住居跡実測図（1/60）……146
第97図　002号住居跡貯蔵穴及びカマド実測図（1/20，1/40）……147

第98図　003号住居跡実測図（1/60）……149
第99図　003号住居跡カマド実測図（1/40）……150
第100図　031号住居跡実測図（1/60）……151
第101図　031号住居跡ピット・貯蔵穴及びカマド実測図（1/20，1/40）……152
第102図　032号住居跡実測図（1/60，1/20）……153
第103図　032号住居跡カマド実測図（1/40）……154
第104図　004・005・006・007号土壙実測図（1/30）……155
第105図　008・009・010号土壙実測図（1/30）……157
第106図　011・013・014号土壙，012号溝状遺構実測図（1/30）……158
第107図　015・016・017号土壙，018号土壙墓実測図（1/30）……160
第108図　019・020号土壙実測図（1/30）……161
第109図　021・022・023・024・025土壙実測図（1/30）……163
第110図　026・027号土壙・033・034号溝実測図（1/30，1/120）……164
第111図　縄文式土器・礫出土状況（1/100）……166
第112図　001号住居跡出土遺物実測図（1/2，1/4）……168
第113図　002・003号住居跡出土遺物実測図（1/4）……170
第114図　031号住居跡出土遺物実測図（1/4，1/2）……172
第115図　032号住居跡出土遺物実測図（1/4，1/1）……173
第116図　土壙出土遺物（2/3）……174
第117図　010号土壙出土土器（1/3）……177
第118図　007・013号土壙出土土器（1/3）……178
第119図　グリッド出土縄文式土器拓影図(1)（1/3）……180
第120図　グリッド出土縄文式土器拓影図(2)（1/3）……182
第121図　グリッド出土縄文式土器拓影図(3)（1/3）……184
第122図　グリッド出土遺物実測図(1)（2/3）……186
第123図　グリッド出土遺物実測図(2)（2/3）……187
第124図　グリッド出土遺物実測図(3)（1/2，1/4）……189

表　目　次

第１表　遺跡一覧表…… 3
第２表　001号住居跡出土土器 …… 28
第３表　002号住居跡出土土器 …… 29
第４表　003号住居跡出土土器…… 32
第５表　004号住居跡出土土器 …… 33
第６表　005号住居跡出土土器 …… 35
第７表　006号住居跡出土土器…… 36
第８表　007号住居跡出土土器 …… 38
第９表　008号住居跡出土土器 …… 39
第10表　009号住居跡出土土器 …… 40
第11表　010号住居跡出土土器 …… 42
第12表　011号住居跡出土土器 …… 44
第13表　グリッド出土土器…… 52
第14表　陶磁器観察表…… 102
第15表　石器計測表…… 128
第16表　銭貨計測表…… 175
第17表　石器計測表…… 188

図 版 目 次

図版1　調査区北側，南側発掘調査前全景
図版2　001，002号住居跡全景
図版3　003，004号住居跡全景
図版4　003，004，005号住居跡遺物出土状況，005号住居跡全景
図版5　006号住居跡全景，同カマド
図版6　007，008号住居跡全景
図版7　010号住居跡全景，同カマド内銙帯具出土状況
図版8　009，011号住居跡全景
図版9　012号跡全景，006～011号住居跡全景
図版10　013号跡上面坏出土状況，同掘り方全景
図版11　001号住居跡，002号住居跡出土遺物
図版12　003号住居跡出土遺物
図版13　004号住居跡，005号住居跡出土遺物
図版14　006号住居跡，007号住居跡，009号住居跡，010号住居跡出土遺物
図版15　011号住居跡出土遺物
図版16　011号住居跡，グリッド出土遺物
図版17　グリッド出土遺物
図版18　グリッド出土縄文式土器(1)
図版19　グリッド出土縄文式土器(2)
図版20　第1ブロック（1～9），グリッド出土遺物（10～21）
図版21　柳谷遺跡調査前近景，馬土手調査近景
図版22　馬土手断面，柵列跡
図版23　003号跡全景，005号跡全景，006号跡全景
図版24　007号跡全景，008号跡全景
図版25　上宿遺跡発掘前遠景，発掘前近景
図版26　トレンチ設定状況(23～17グリッド)土層
図版27　001号住居跡全景，炭化物出土状況カマド，炭化物出土状況
図版28　002号土壙，001，002切合い状況，003号土壙，004号土壙，005，006号土壙，005号遺物出土状況
図版29　008号溝状遺構全景，008号B－B'土層，008号A－A'土層，009号土壙，009号土壙
図版30　010号土壙，011号土壙，012号土壙，013号土壙，014号土壙，015号土壙，016号土壙，017，018号土壙
図版31　019号土壙，020号土壙，021号竪穴状遺構，同遺物出土状況，023号井戸
図版32　遺物出土状況，縄文式土器出土状況(北端部)
図版33　26H，Gグリッド遺物出土状況，26G－16グリッド遺物出土状況
図版34　001号住居跡出土遺物，005，008，009号土壙出土遺物
図版35　021，024号土壙出土遺物
図版36　縄文時代石器(1)，(2)
図版37　グリッド出土縄文式土器(1)
図版38　グリッド出土縄文式土器(2)
図版39　グリッド出土縄文式土器(3)
図版40　グリッド出土縄文式土器(4)
図版41　グリッド出土縄文式土器(5)
図版42　グリッド出土縄文式土器(6)

図版43　グリッド出土縄文式土器(7)
図版44　グリッド出土土器(1)
図版45　グリッド出土土器(2)
図版46　グリッド出土土器(3)
図版47　グリッド出土土器(4)
図版48　グリッド出土土器(5)
図版49　グリッド出土石器(1)
図版50　グリッド出土石器(2)
図版51　グリッド出土石器(3)
図版52　井森戸遺跡発掘前近景，トレンチ設定状況，土層（11B－07）
図版53　001号住居跡全景，貯蔵穴遺物出土状況，遺物出土状況
図版54　002号住居跡全景，遺物出土状況，貯蔵穴遺物出土状況，カマド
図版55　003号住居跡全景，遺物出土状況，カマド遺物出土状況
図版56　031号住居跡全景，カマド遺物出土状況，カマド，貯蔵穴遺物出土，土層状況
図版57　032号住居跡全景，カマド
図版58　調査区南側土壙，004号土壙，006号土壙，007号土壙，008号土壙
図版59　009号土壙，010号土壙，011号土壙，012号溝
図版60　013号土壙，014号土壙，015号土壙，016，017号土壙，018号土壙遺物出土状況，019号土壙，020号土壙，021，022号土壙
図版61　023号土壙，024号土壙，025号土壙，026号土壙，027号土壙，２Ａ－13，14，２Ｂ－01，02グリッド遺物出土状況
図版62　033，034号溝，11B，12B，11C，12Cグリッド縄文土器，礫出土状況
図版63　11B・C，12B・Cグリッド出土礫(1)（約2/5）
図版64　11B・C，12B・Cグリッド出土礫(2)（約2/5）
図版65　001号住居跡出土遺物
図版66　001，002号住居跡出土遺物
図版67　002，003，031号住居跡出土遺物
図版68　031号住居跡出土遺物
図版69　031，032号住居跡，010号土壙出土遺物
図版70　007，013号土壙出土土器
図版71　018号土壙墓及びグリッド出土遺物
図版72　グリッド出土縄文式土器(1)
図版73　グリッド出土縄文式土器(2)
図版74　グリッド出土縄文式土器(3)
図版75　グリッド出土石器(1)
図版76　グリッド出土石器(2)

第１章　遺跡の位置と環境

第１項　遺跡の地理的・歴史的環境

房総半島の北部は，茂原と木更津を結ぶ線を境として，南は上総丘陵，北は下総台地となる。この下総台地は洪積台地で，比較的起伏の少ない平坦な地形を呈する。南で標高130m，北で10m，東で40mを測り，南高北低，東高西低の緩傾斜を示す。台地北側は利根川・印旛沼水系の沖積地となり，常総台地，行方台地と接する。東は，大きく湾曲する九十九里平野と接して太平洋となる。南西は東京低地，東京湾と接する。この下総台地は浅海性の砂層の上に下末吉，武蔵野，立川の火山灰層が堆積したもので，平坦な広範な台地面を形成しているが，太平洋，東京湾，利根川水系の中小河川や湧水によって台地が浸蝕され，樹枝状の台地と谷津，谷地が連綿として続く複雑な地形を呈する。

今回調査を行った柳谷遺跡・井森戸遺跡・上宿遺跡・小池元高田遺跡は，下総と上総の国境にあり，現在の千葉県山武郡芝山町に位置する。芝山町は，下総台地の南東部に位置し，太平洋へ注ぐ栗山川と木戸川に挟まれた両総台地の上流部に当たる。この台地の東側は水量の多い高谷川と湧水によって台地奥深くまで開析が進み，谷津田と瘠尾根の繰り返す変化にとんだ地形を呈する。西側の木戸川は水量が少なく，浸蝕も浅くて単調な出入りとなる。標高は，40m前後で水田面との比高差は20mを測る。柳谷遺跡・井森戸遺跡・上宿遺跡は，新東京国際空港の南に接する地点で，太平洋水系と利根川水系の分水嶺に近く，周辺には先土器時代[1]，縄文時代草創期・早期[2]の著名な遺跡が知られる。３遺跡は，高谷川と中間地点であり、高谷川の白枡付近で分流する小支流によって開析される樹枝状台地に所在する。台地の幅は500m程の瘠尾根で谷が複雑に入り込むことから，平坦な台地はさほど広くはない。谷津は，低湿で湧水が認められる。斜面は，急で台地との比高差27mを測る。小池元高田遺跡は，芝山町の市街地に隣接する地点で木戸川に面する。周辺には，縄文時代，古墳時代，奈良・平安時代の遺跡が多く，特に，殿塚・姫塚を擁する国指定遺跡の芝山古墳群を代表とする古墳群[3]と，縄文時代後期[4]・晩期の貝塚は注目されるところである。

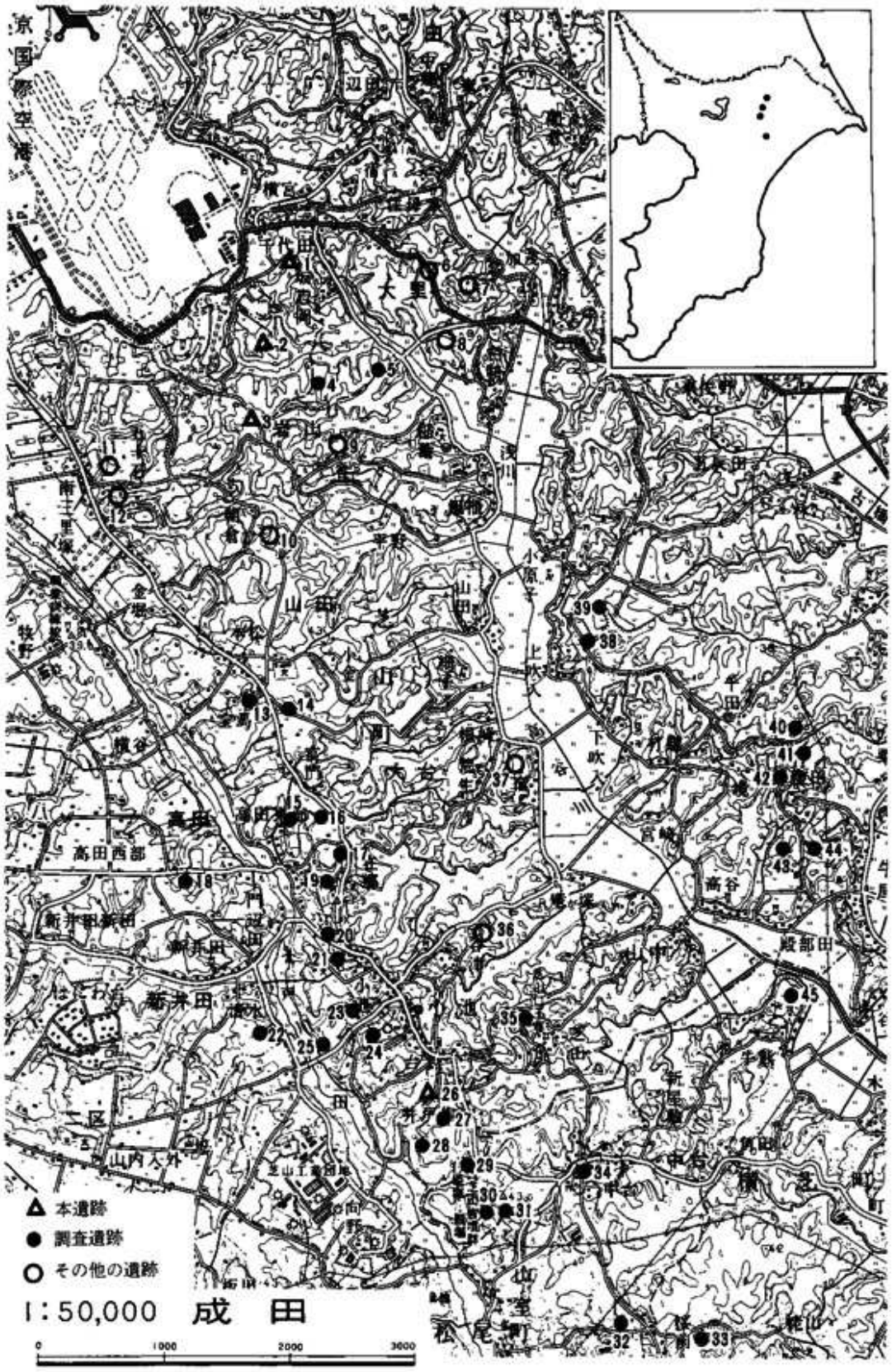
（注）

(1)　南大溜袋遺跡，東内野遺跡，新東京国際空港用地内№７・10・55・61遺跡

(2)　新東京国際空港用地内№12・60遺跡

(3)　芝山古墳群，小池古墳群，小池台古墳群，殿部田古墳群，山田古墳群，宝馬古墳群，朝倉古墳群

(4)　山武姥山貝塚，境遺跡，中台貝塚，牛熊貝塚


京国際空港
大里
高田
高田西部
新井田
殿部田
中台
横堤
松尾
本遺跡
調査遺跡
その他の遺跡
1:50,000　成田
0
1000
2000
3000

第１図　周辺地形図

第1表　遺跡一覧表

No	遺跡名	備考（調査成果等）	No	遺跡名	備考（調査成果等）
1	柳谷	包蔵地。馬土手。土壙。	23	小池地蔵	縄文，古墳，奈良，平安時代。住居跡23軒。溝1条。
2	井森戸	縄文，古墳時代。住居跡5軒。	24	小池新林	縄文，古墳，奈良，平安時代。住居跡11軒。
3	上宿	先土器，縄文，古墳時代。住居跡1軒。土壙。	25	小池台	縄文時代，包蔵地。
4	後田台	先土器，縄文，古墳，奈良，平安時代。中近世。石器集中地1か所。住居跡5軒。土壙4基。溝2条。	26	小池元高田	縄文，古墳，奈良，平安時代。住居跡11軒。掘立柱建物跡1棟。
			27	小池向台	古墳，奈良時代。住居跡7軒。
5	大里	古墳，奈良，平安時代。溝2条土壙2基。	28	小池大塚	前方後円墳。
6	大里田辺台古墳群	円墳6基現存，円墳5基消滅。	29	鰐ヶ窪	縄文，古墳時代。古墳3基。
7	田辺野東古墳群	円墳1基現存，円墳三基消滅。	30	芝山古墳群	殿塚，姫塚。形象埴輪。
8	内堀	縄文土器散布地。(阿玉台，加曽利B)	31	中台柿谷	古墳時代。
9	岩山城址	中近世城址。	32	遠山天ノ作	先土器，縄文時代。
10	朝倉城址	中近世城址。	33	姥山貝塚	縄文時代（晩期）。
11	金堀たたら址	中近世。	34	中台貝塚	先土器，縄文時代。土壙150基。住居跡1軒。
12	五十石古墳群	円墳4期，前方後円墳1基現存。	35	新起	古墳時代。住居跡1軒。
13	宝馬古墳群	前方後円墳，円墳，形象埴輪。	36	小池麻生古墳群	前方後円墳1基。円墳4基現存。円墳1基消滅。
14	山田古墳群	前方後円墳，円墳，形象埴輪。	37	大台城址	中世。
15	櫟現	古墳，奈良，平安時代，塚。	38	上吹入	古墳時代。住居跡5軒。
16	大台西	古墳時代。住居跡14軒。製鉄遺構。	39	林	先土器，縄文，古墳，平安時代。住居跡8軒。土壙。工房址。
17	大台西藤ヶ作	古墳，平安時代。円墳1基現存。	40	船越枯梗地	古墳，奈良，平安時代。住居跡33軒。土壙。
18	高田古墳群	前方後円墳。円墳。形象，円筒埴輪。	41	儘田台	縄文，古墳，奈良，平安時代住居跡13軒。土壙。
19	宮門	縄文，古墳，奈良，平安時代住居跡35軒，土壙，炉穴。	42	境	縄文，古墳時代。住居跡1軒。土壙。
20	猪ノ堤	古墳時代。住居跡3軒。	43	殿部田	縄文，古墳時代。住居跡23軒。
21	小池麻生	縄文，古墳，奈良，平安時代住居跡32軒。	44	殿部田古墳群	前方後円墳。円筒，形象埴輪。
22	清水台	縄文，古墳，奈良，平安時代住居跡17軒。	45	牛熊貝塚	縄文時代（中期～後期）。

第２章　小池元高田遺跡

第１項　調査の方法と概要

小池元高田遺跡は，千葉県山武郡芝山町小池元高田字向台に所在する。遺跡は，木戸川によって開析された沖積低地に東から西に舌状にのびた標高約40mの緩やかな起伏を示す台地上に占地している。沖積低地との比高差は約10～12mで，台地上は，杉を主とする山林とスイカなどの畑として利用されている。調査区は，この台地のほぼ中央部を南から北に横断する面積3.500m²の範囲である。（第２図）

遺跡は農道によって丁度南北に分断されたようになっているが，この北側の範囲を昭和56年度に，南側の範囲を昭和57年度に分けて発掘調査を実施した。調査の期間は，昭和56年度が昭和57年３月１日～３月31日，昭和57年度が昭和57年４月１日～５月31日までであった。

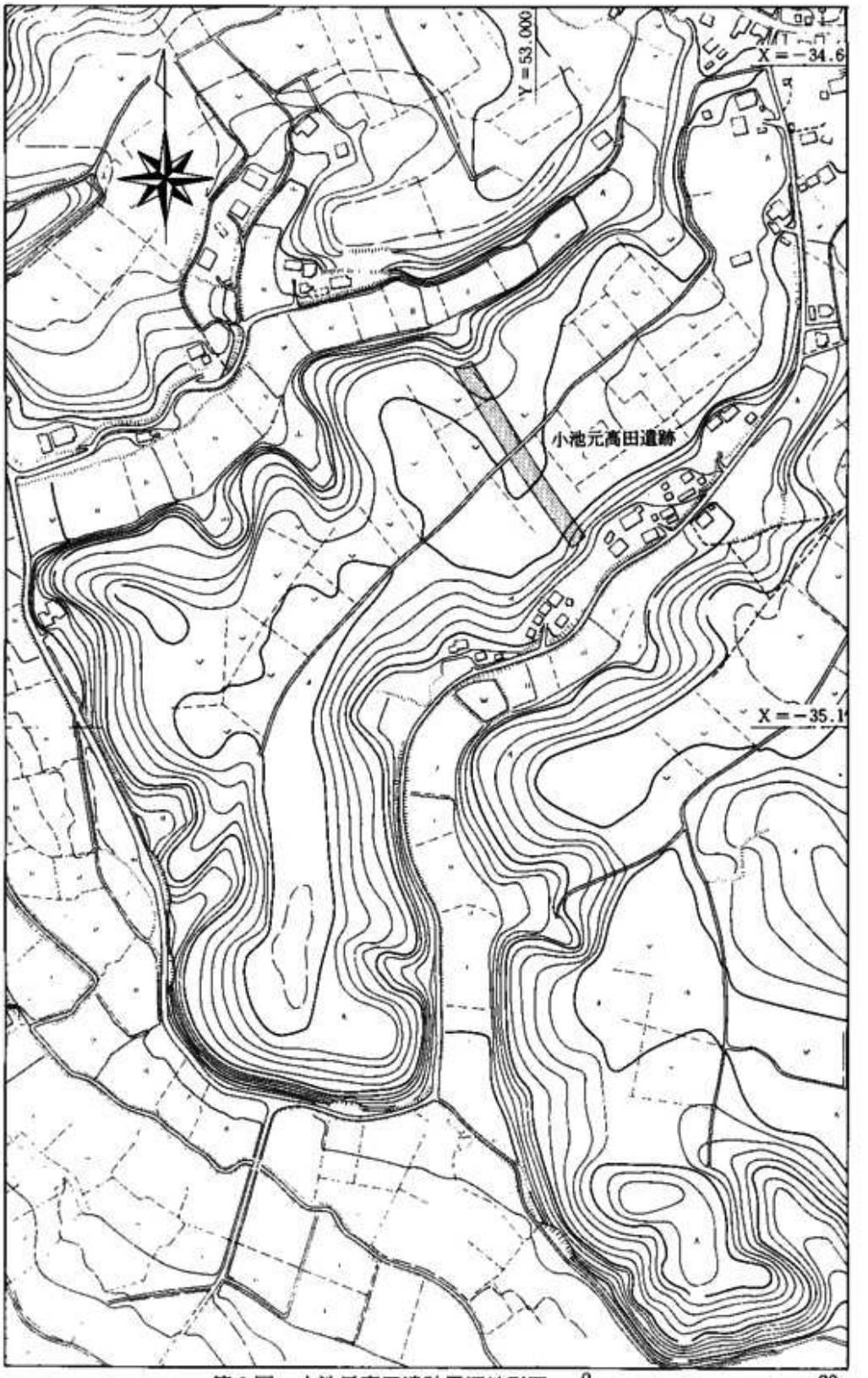
調査の方法は，南北に長い調査区のため，道路中心杭№345と№347を結んだ延長線上を基本軸として東西をＣ，Ｄ区に，南北を20m単位で１～10区に区分し，20×20mグリッドを基本として設定，以下これに従った。さらにこの大グリッドを，５×５mの小グリッドに分割して，東北隅を01とし，南までの横列を02，03，04，西方向の縦列を01，05，09，13，南西隅を16と呼ぶことにした。この各々の小グリッドは，２Ｃ－01，２Ｄ－16等のように記録した。

北側と南側のそれぞれについて，ローム層より上層での遺構，遺物の調査後に下層の先土器時代の調査を実施した。発掘調査前の状況では，土師器の包蔵地であることが判明していたが，幅２mのトレンチによって遺構の分布，確認面までの深さを把握し，その後，重機によって表土の除去を行い，遺構を検出した。遺構の実測は遣り方を用いて，20分の１の縮尺図での記録を原則とした。カマドは10分の１で記録した。先土器時代の石器集中箇所の確認は上層遺構の調査をまって２×２mのテストピットを設定し，それぞれ武蔵野ローム層までの掘り下げを行い確認に努めた。本遺跡での層序は第３図のとおりである。

この結果，北側調査区では，坏を伴うピット１カ所と土師器の包含層が検出され，南側調査区では，住居跡11軒，ピット群１カ所，先土器時代の石器集中箇所１カ所が検出され５月31日，調査の全日程を終了した。（第４図）

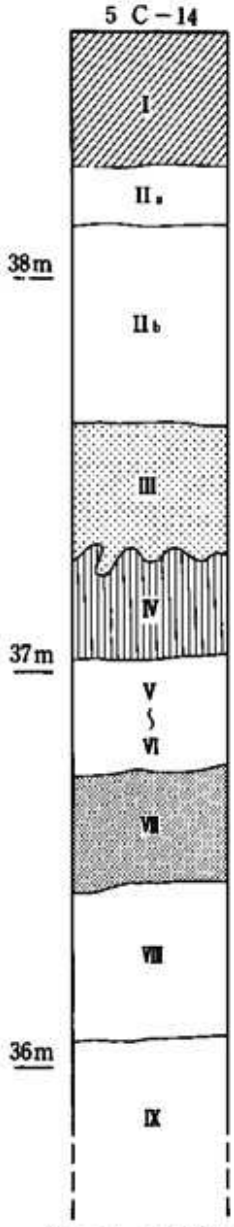
小池元高田遺跡層序（第３図）

第Ⅰ層は黒褐色土。耕作土である。第Ⅱａ層は暗褐色土。Ⅰ層と同じく耕作が入っている。第Ⅱｂ層は暗褐色土でローム粒を含んでいる。この層の下部で住居跡が確認可能である。第Ⅲ層はいわゆるソフトローム層で黄褐色を呈する。第Ⅳ層は明るい黄褐色を呈しクラックが発達している。赤色スコリア、黒色の微粒子を含んでいる。第Ⅴ，Ⅵ層は分層が不可能である。橙褐色を呈し赤色スコリアを若干含んでいる。第Ⅶ層は立川ローム層第二黒色帯に相当する層で褐色を呈している。第Ⅷ層は立川ローム層の最下層に相当する層で茶褐色を呈している。第Ⅸ層は本地域で武蔵野ローム層に相当する。暗茶褐色を呈し上層に比べ軟質で粘性をもつ。

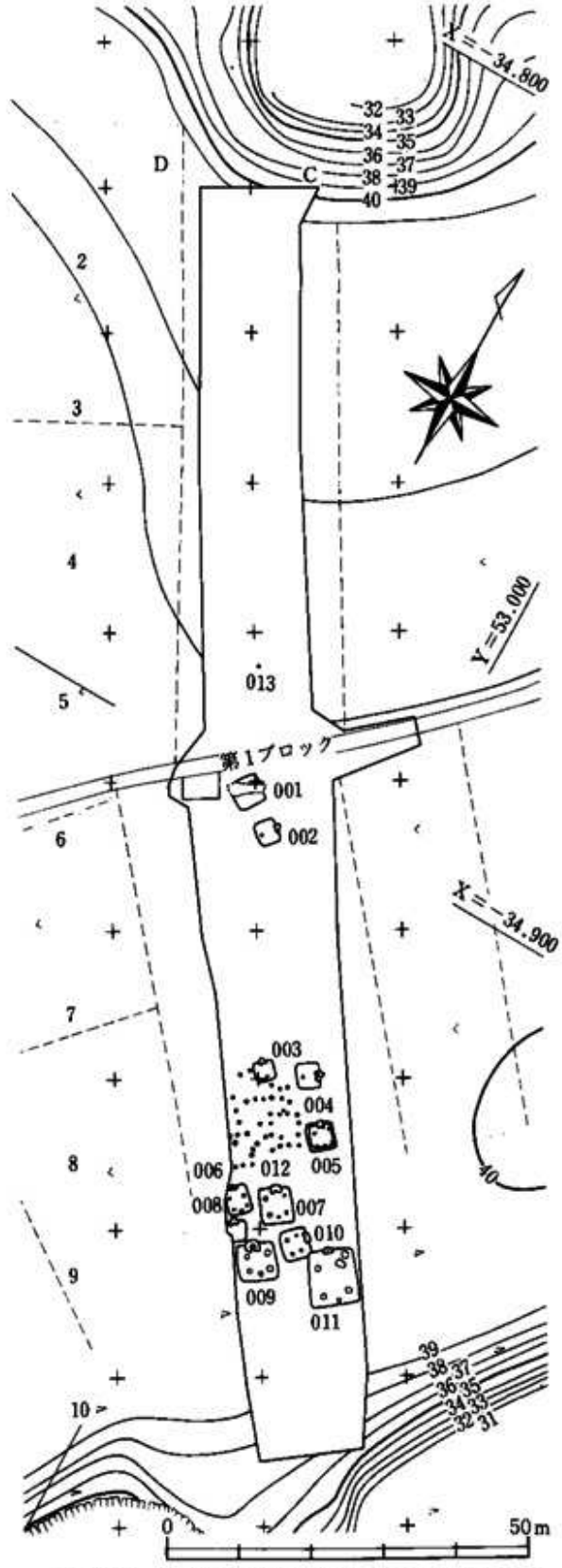


第2図　小池元高田遺跡周辺地形図
(1/5000)

0　20m



第３図　土層柱状図



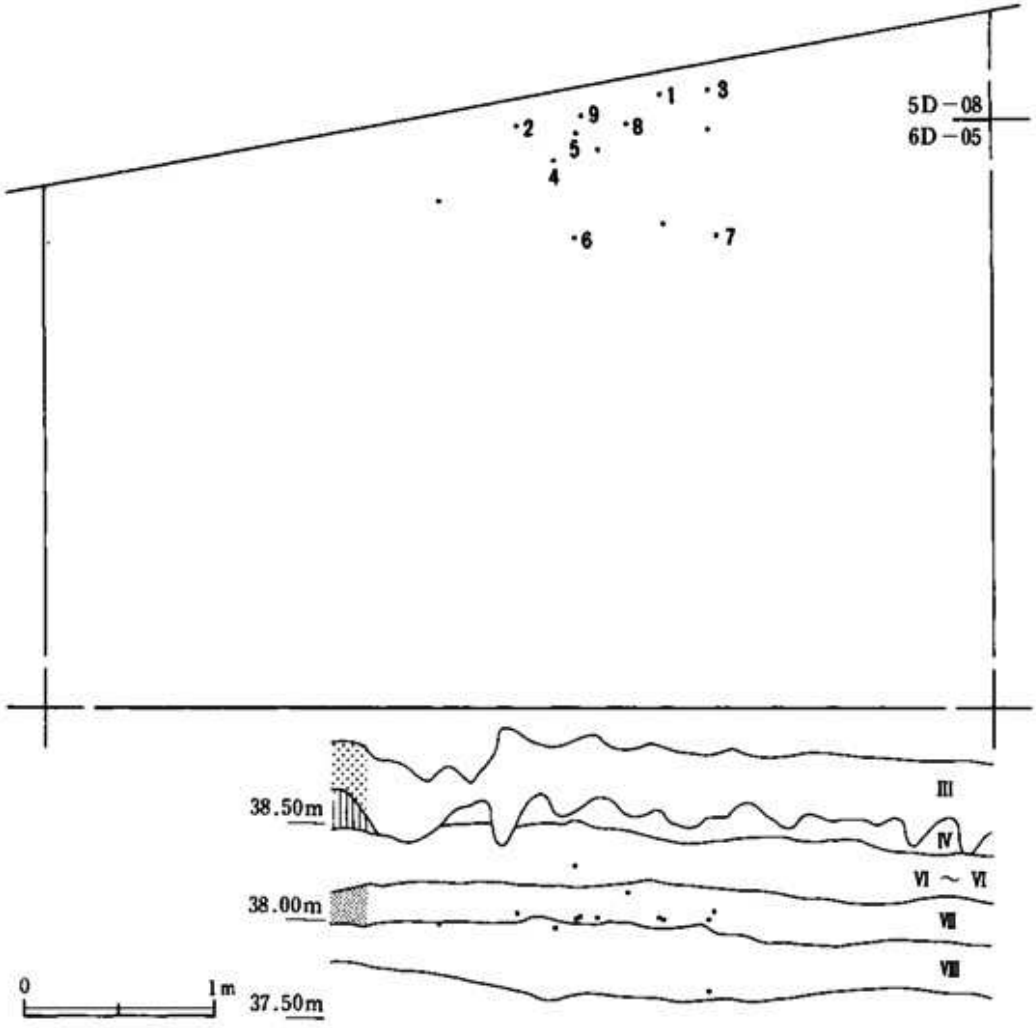
第４図　小池元高田遺跡遺構分布図（1/1,000）

第2項 遺 構

先土器時代

第1ブロック（第5図）

先土器時代の遺物集中箇所は，5D－08，6D－05グリッドにまたがる地点で，調査区内では，丁度中央部にあたる位置である。遺物の出土層位は第Ⅶ層が中心であるが，Ⅷ層下部でも1点が出土しており，その高低差は80cm程であった。平面的な広がりは東西1.8m，南北1mの小範囲で，出土した遺物の総数は14点であった。



第5図 第1ブロック遺物出土状況（1/40）

住居跡

001号住居跡（第６図，図版２）

本住居跡は，調査区のほぼ中央６Ｄ－01グリッドに位置する。本跡の東約2.5mに002号住居跡が存在する。遺構の検出面は第IIb層下部の暗褐色土であるが，全体に削平及び攪乱を受け遺存状態は良くない。

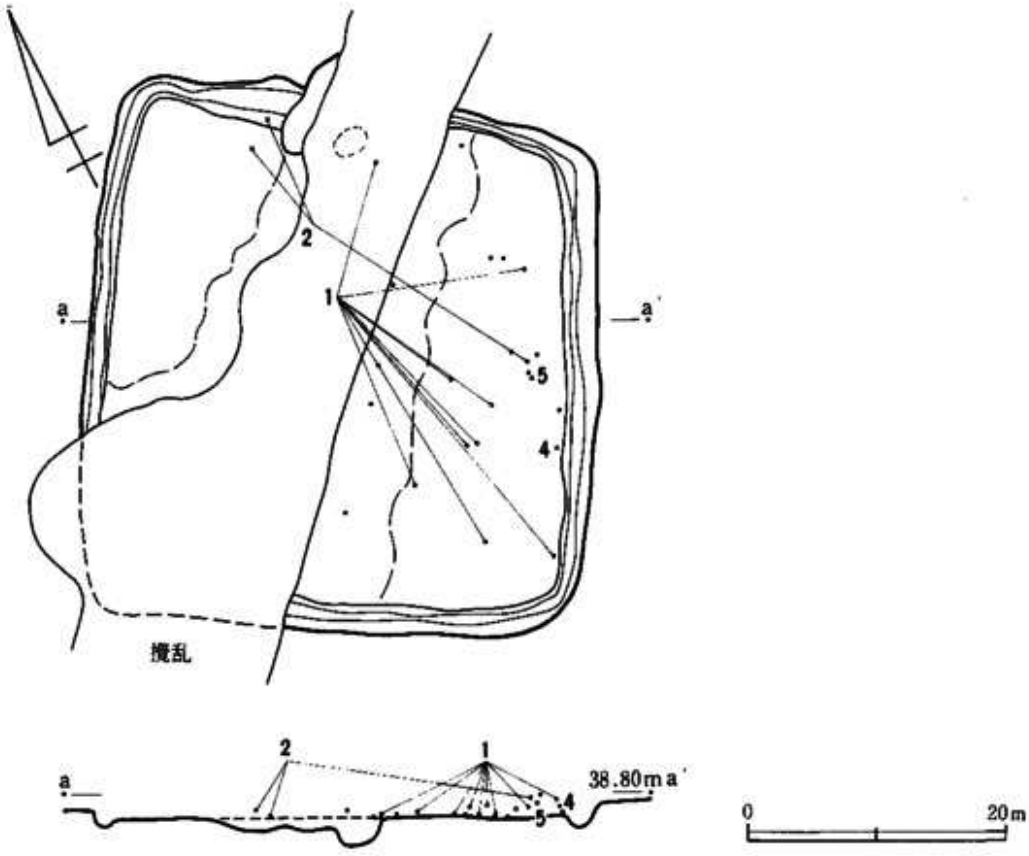
平面形は方形を呈する。規模は3.79×3.83mを測り，主軸方位はＮ－33°－Ｅとなる。

壁の遺存は非常に悪く東側から南側の一部で検出されたにすぎない。壁溝は全周するものと思われる。検出分では幅10～15cm，深さ２～９cmである。床面は，中央部に攪乱を受け全体を検出できなかったが，カマドからその対面の壁側の中央付近が壁寄りの部分より堅緻な状態である。柱穴は検出されていない。

カマドは北東壁のほぼ中央に砂質粘土によって構築されているが，遺存状態が悪く，わずかに左袖部の一部を残すのみである。

遺物は，すべて土器でカマド周辺と東南壁寄りで出土しているが，量的には少ない量である。

覆土は，黒褐色土の単一層である。



第６図　001号住居跡実測図（1/60）

002号住居跡（第7図，図版2）

本住居跡は，調査区ほぼ中央6C－14グリッドに位置しており，001号住居跡の東約2.5mの距離にある。

住居跡の遺存状態は良く，やや小形の隅丸方形を呈し，規模は2.9×2.84mを測る。主軸方位はN－20°－Eとなる。

壁はほぼ垂直に掘り込まれ，高さ41.9～29cmを測る。壁溝はカマド下を除いて全周する。幅，深さともに10cm前後である。床面は全体に平坦でよく踏み固めてあるが，カマドから対面の壁にかけて幅1.5m程度の帯状の部分で特に堅緻な状態であった。カマド対面の南壁中央寄りで小ピットが検出されている。径20cm，深さ9cmを測る。

カマドは，北壁のほぼ中央に砂質粘土を主体として構築されている。壁外への掘り方が大きい三角形状を呈し，右袖部は東側に大きく崩落していたが，遺存は良好である。この右袖を含めて袖部の住居跡内への張り出しは少なく，火床も同様である。煙道部から煙出口に至る傾斜は緩やかな立ち上がりを示している。天井部は若干遺存している。

遺物は，カマド内及びその対面の壁寄りを中心に出土している。出土量は少ない。

覆土は12層に細分されたが，全体にレンズ状の堆積を示している。主体は黒褐色土，暗褐色土である。

003号住居跡（第8図，図版3）

本住居跡は，調査区南側の7D－04グリッドに位置する。東側に004号跡が隣接する。検出面は第IIb層下部の暗褐色土層である。

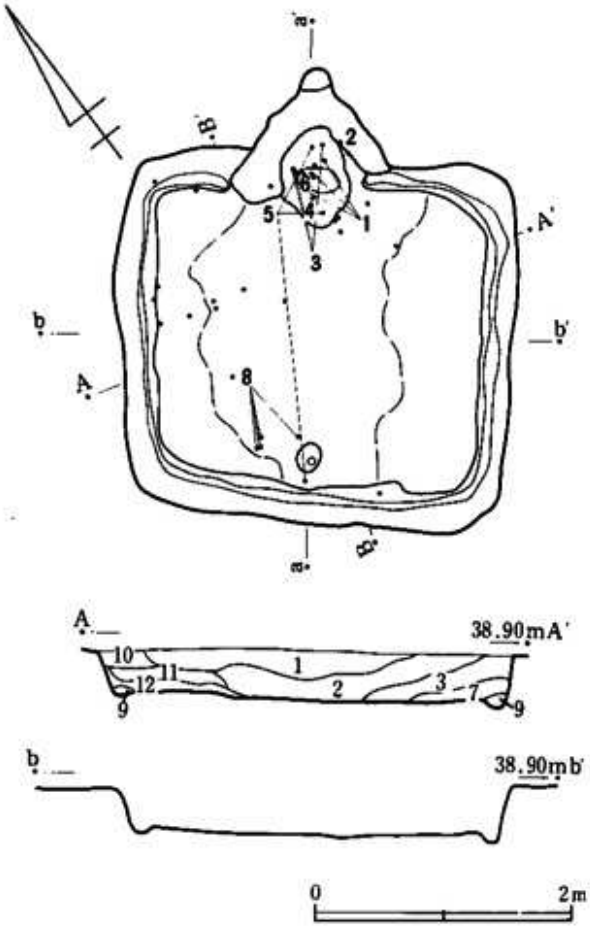
平面形は隅丸方形を呈し，規模は2.96×2.9mを測る。主軸方位はN－49°－Wとなる。

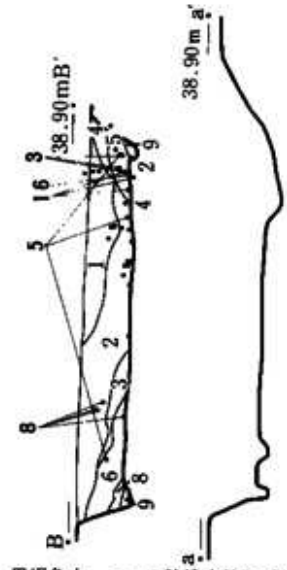
壁の遺存は良く，立ち上がりは垂直に近い。高さ34.5～19.5cmを測る。壁溝はカマド下を除いて全周している。カマド付近と東壁側でやや幅が広く20～15cmである。床面は全体に平坦であり，カマドから対面の壁にかけての中央寄りが特に堅くしまりがある状態であった。ピットは2カ所で検出されている。住居中央で40×24cmの長方形に掘り込まれたピットは，しっかりとした掘り方であった。深さ27.5cmである。また南壁中央で壁溝に接して小ピットが掘り込まれている。深さ18.5cm，径21cmを測る。

カマドは北西に向いた壁の中央に位置している。壁外へ三角形状に約30cm程掘り込まれ住居内への袖部の張り出しは少ない。天井部は崩落している。火床部は楕円形で，掘り込みは浅い。煙道部の立ち上がりは急傾斜である。火床部上面で甕，坏がまとまって出土している。

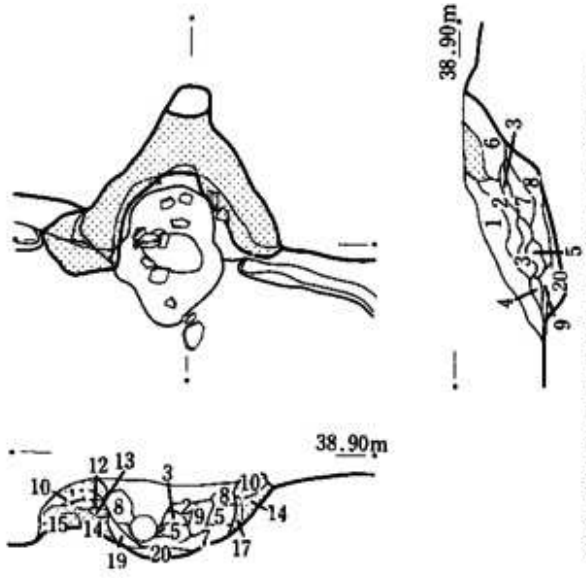
遺物は，土器が主体で全体から出土しているが，カマド内とその周辺に多く出土した。レベル的には床面に近い位置に多い。砥石が3点出土しているが，それぞれ分散している。

覆土は，暗褐色土が主体で下層には炭化粒が混入していた。





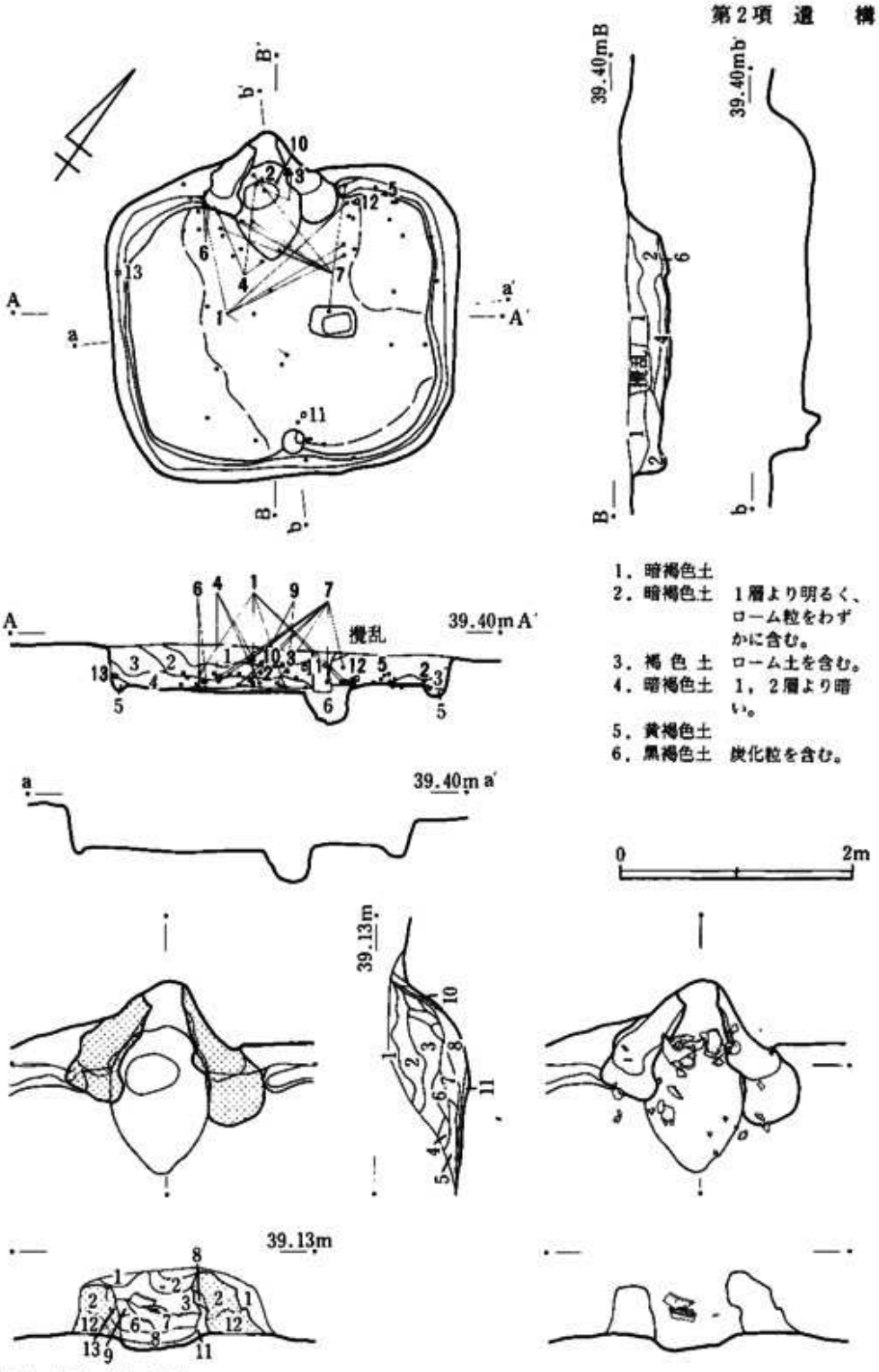
1．黒褐色土　ローム粒焼土粒わずかに含む。
2．暗褐色土　ローム粒わずかに含む。
3．暗褐色土　ローム粒多く含む。焼土粒わずかに含む。
4．暗褐色土　ローム粒わずかに含む。
5．暗褐色土　ローム粒多く含む。
6．暗褐色土　ローム粒多く含む。
7．暗褐色土　ローム粒わずかに含む。
8．暗褐色土　褐色土混りじり。
9．褐色土
10．暗褐色土　ローム粒多く含む。
11．暗褐色土　ローム粒多く含む。やや明るい。
12．暗褐色土　ロームブロック、ローム粒多く含む。



1．暗褐色土　焼土、砂質粘土、木炭を少量含む。
2．暗褐色土　砂質、黄白色粘土、ブロック含む。
3．砂質黄白色粘土層
4．暗褐色土　灰を多く含む。焼土ブロック少量含む。
5．焼土層　砂質黄白色粘土のやけたもの。
6．炭化物木炭層
7．木炭層　炭化物ブロック少量含む。
8．黄白色砂質粘土
9．暗褐色土　黄土色砂質粘土多く含む。焼土少含む。
10．暗褐色土　黄土色砂質粘土混じり。
11．暗褐色土　黄土色砂質粘土混じり。
12．黄土黄土色砂質粘土
13．暗褐色土　黄土色砂質粘土混じり。
14．黄土色砂質粘土
15．暗褐色土　黄土色砂質粘土混じり。
16．黄土色砂質粘土
17．砂質粘土　赤変
18．暗褐色土
20．暗褐色土　焼土多く含む。
21．焼土粒、灰、炭化物層。

0　1m

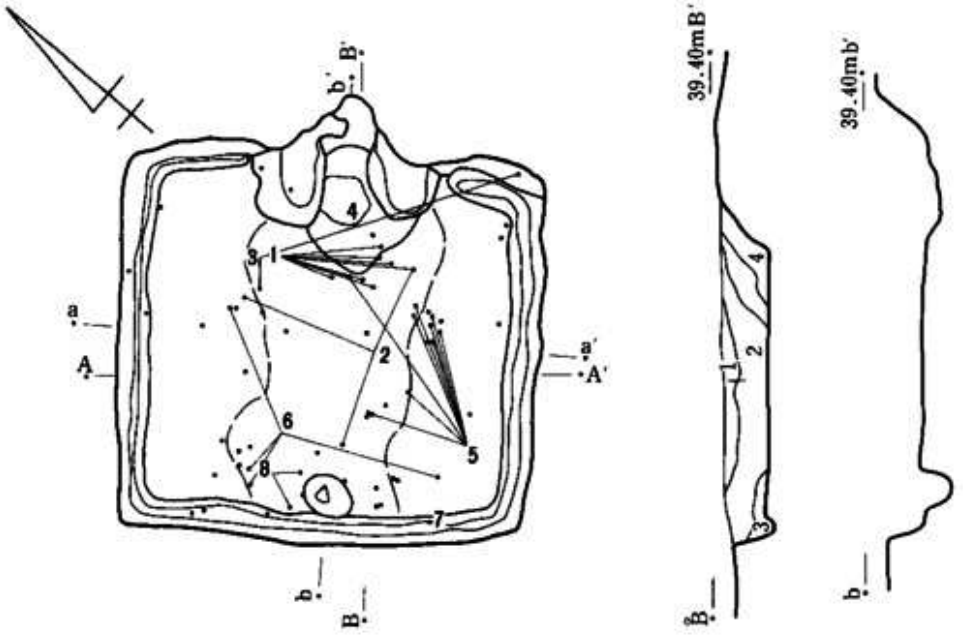
第７図　002号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）

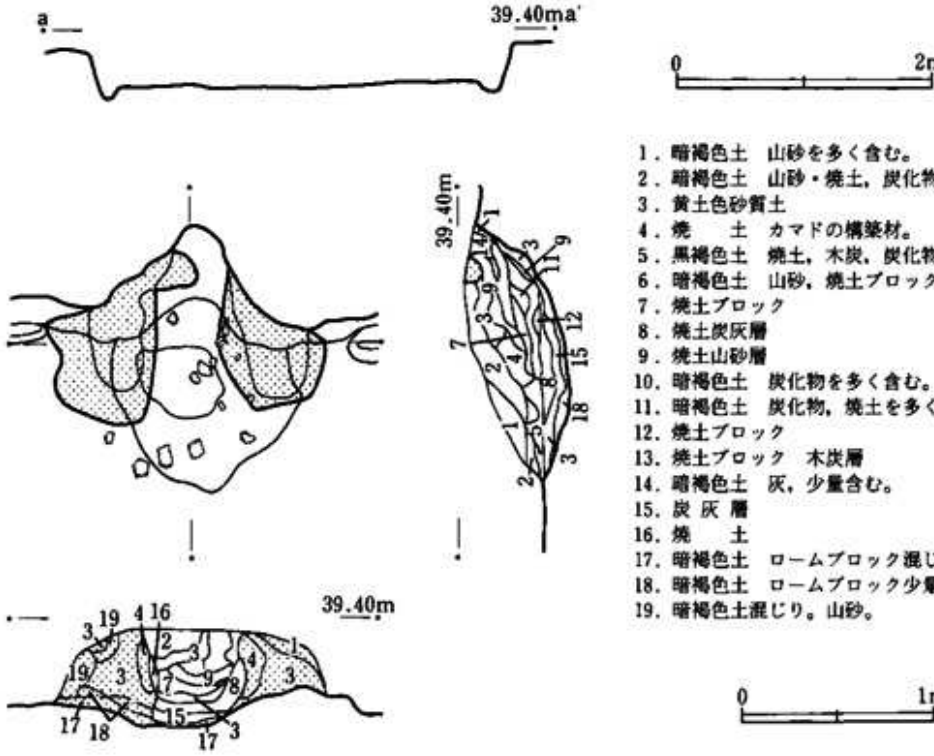


1．暗褐色土
2．暗褐色土　1層より明るく、ローム粒をわずかに含む。
3．褐色土　ローム土を含む。
4．暗褐色土　1，2層より暗い。
5．黄褐色土
6．黒褐色土　炭化粒を含む。

1．暗褐色土　山砂、焼土少量含む。
2．黄土色砂質土
3．暗褐色土　山砂、焼土炭化粒多く含む。
4．暗褐色土　山砂多く含む。
5．黒色土　炭化物多量に含む。
6．焼土層
7．暗褐色土　山砂、焼土多く含む。
8．灰　層　焼土多く含む。
9．焼土ブロック
10．灰　層
11．灰　層　炭、焼土ブロック多く含む。
12．褐色土　ロームブロック、砂質土多く含む。
13．砂質土

第8図　003号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）





第９図　004号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）

004号住居跡（第9図，図版3）

本住居跡は，調査区の南側7C－12，8C－09グリッドに位置し，003号住居跡とは東に約3mの距離にある。住居跡の掘り込み面は第IIb層下部の暗褐色土層である。遺存状態は良く，しっかりとした掘り方である。

平面形は方形を呈し，規模は3.16×2.96mを測る。南北方向に若干長めの規模である。主軸方位はN－52.7°－Eとなる。

壁は高さ32.5～20.5cmで，やや斜めの立ち上がりである。壁溝はカマド下を除いて全周しており幅22～15cm，深さ9～4cmである。床面は平坦であるが，カマドとその対面の南西壁にかけての幅1.5～1m程が特に堅緻な状態である。南西壁の中央で壁溝に接する小ピットが1カ所検出されている。径38cm，深さ28cmを測る。底面は丸い。

カマドは北東壁の中央に位置する。砂質粘土で構築されている。壁外への掘り込みは三角形状で50cm程である。袖は内側に62～40cm張り出して造られている。火床部掘り込みは不整形である。煙道部は緩やかな立ち上がりである。火床部やや上より甕の破片が出土している。

遺物は全て土器である。住居跡の中央寄りとカマド付近に多く出土している。床面上に出土したものが多いが上層でも総量の13程を得た。甕はやや分散した出土状態を示している。

覆土は4層に区分できた。暗褐色土が主体で，流れ込みによる堆積の状態である。

005号A・B住居跡（第10図，図版4）

本住居跡は，004号住居跡の南約5mで8C－10グリッドに位置している。調査の過程で2軒が重複していることが判明し，005－A・Bとした。

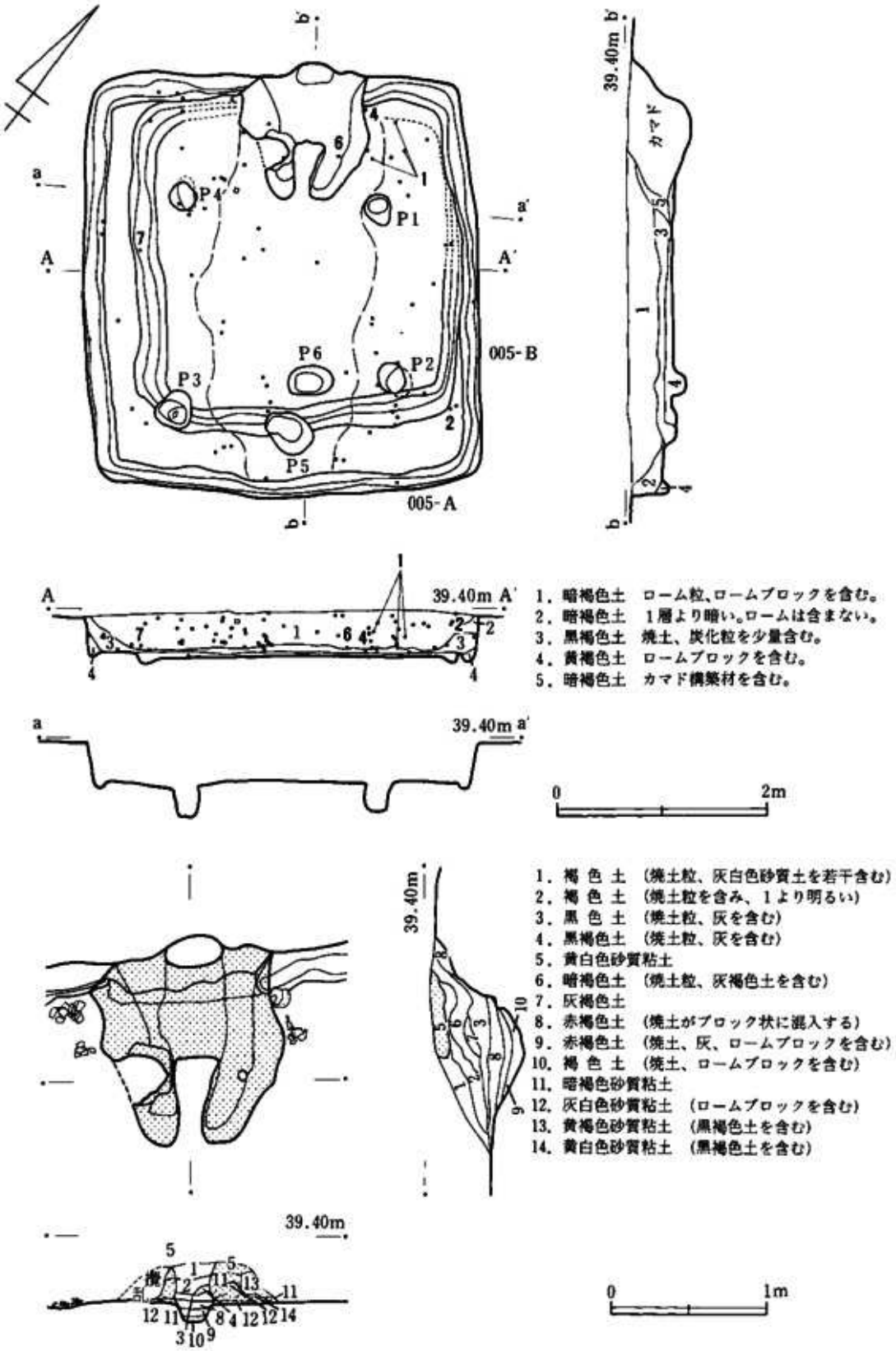
A号跡は，他の住居跡と同様に暗褐色土層中にて検出された住居跡である。平面形は方形を呈し，規模は3.75×3.7m，主軸方位はN－38.5°－Wとなる。

壁はほぼ垂直に立ち上がり，高さ40～23cmを測る。壁溝は全周する。幅14～18cm，深さ10cm前後である。床面は平坦で，カマドと対面の壁の中央寄りが帯状に堅緻な状態である。ピットは5カ所で検出された。住居跡の対角線上に位置するP1，2，3，4が主柱穴である。径36～25cm，深さ42.7～27cmを測る。P5は南東壁の中央寄りに位置する。不整形で44×38cm，深さ16.7cmである。

カマドは北西壁中央に位置する。壁外への掘り込みは少なく，袖部が住居跡内に長く張り出して造られている。左袖の一部が崩落している。天井部の遺存は良く，煙出口も明瞭に確認されている。長径38cmの楕円形を呈する。煙道部は2段に掘り込まれる。火床部掘り込みは浅く煙道側で深くなっている。

遺物は全て土器である。破片が多くレベル的にも分散した傾向にある。第1層に区分した層が厚く堆積し，遺物の多くはこの中で出土している。

A号跡覆土は，暗褐色土，黒褐色土が主体である。



第10図　005号A・B住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）

B号住居跡はA号住居跡床面の下から検出された住居跡である。壁溝によって規模が判断できたのみでA号住居跡とは主軸方向を同じくするもと思われる。北側から北東側にかかる部分はA号跡と完全に重なっていることから，B号住居跡からA号住居跡へと拡張した可能性が考えられる。規模は3.14×3.04mを測る。床面は全体に堅く，平坦である。ピットは南東側の壁溝寄りの1カ所でP6が検出されている。43×28cmの楕円形で，深さ10.5cmである。

006号住居跡（第11図，図版5）

本住居跡は，調査区の南側8D－04グリッドに位置し，南側に008号住居跡，東側に007号住居跡が近接している。検出面はソフトローム層上面で，西隅が調査区外にのびるため一部調査が実施できなかった。

平面形はやや隅の丸い方形を呈する。規模は3.5×3.35m，主軸方向はN－48°－Wとなる。

壁はしっかりと掘り込まれほぼ垂直に近い立ち上がりを示す。高さ39.6～26cmを測る。壁溝はカマド部分を除いて全周すると思われる。幅20cm前後，深さ5cm前後である。床面はわずかに起伏があり，カマドから対面の壁にかけての住居中央部が他より堅緻な状態である。ピットは5ケ所で検出された。各コーナーに寄ったピットが柱穴である。このうちP1，P4は2段に掘り込まれている。P5は南東壁中央寄りに位置する。ピットの規模はP1～4が径44～34cm，深さ42～37cmを測る。P5は径24cm，深さ11cmである。

カマドは北西壁の中央に位置する。砂質粘土で構築され，全体の遺存は良い。壁外への掘り込みは山形を呈し，奥行き50cm程である。袖部は左右ともに約50cm程張り出されている。火床部掘り方は楕円形で，皿状に掘り込まれている。煙道からの立ち上がりは階段状になっている。天井部はわずかに遺存し，橋状となっている。

遺物は，カマド付近と各コーナー寄りに出土している。総量は少ない。レベル的には床面上に少なく，第1層と2層の境に浮いた状態のものが多い。

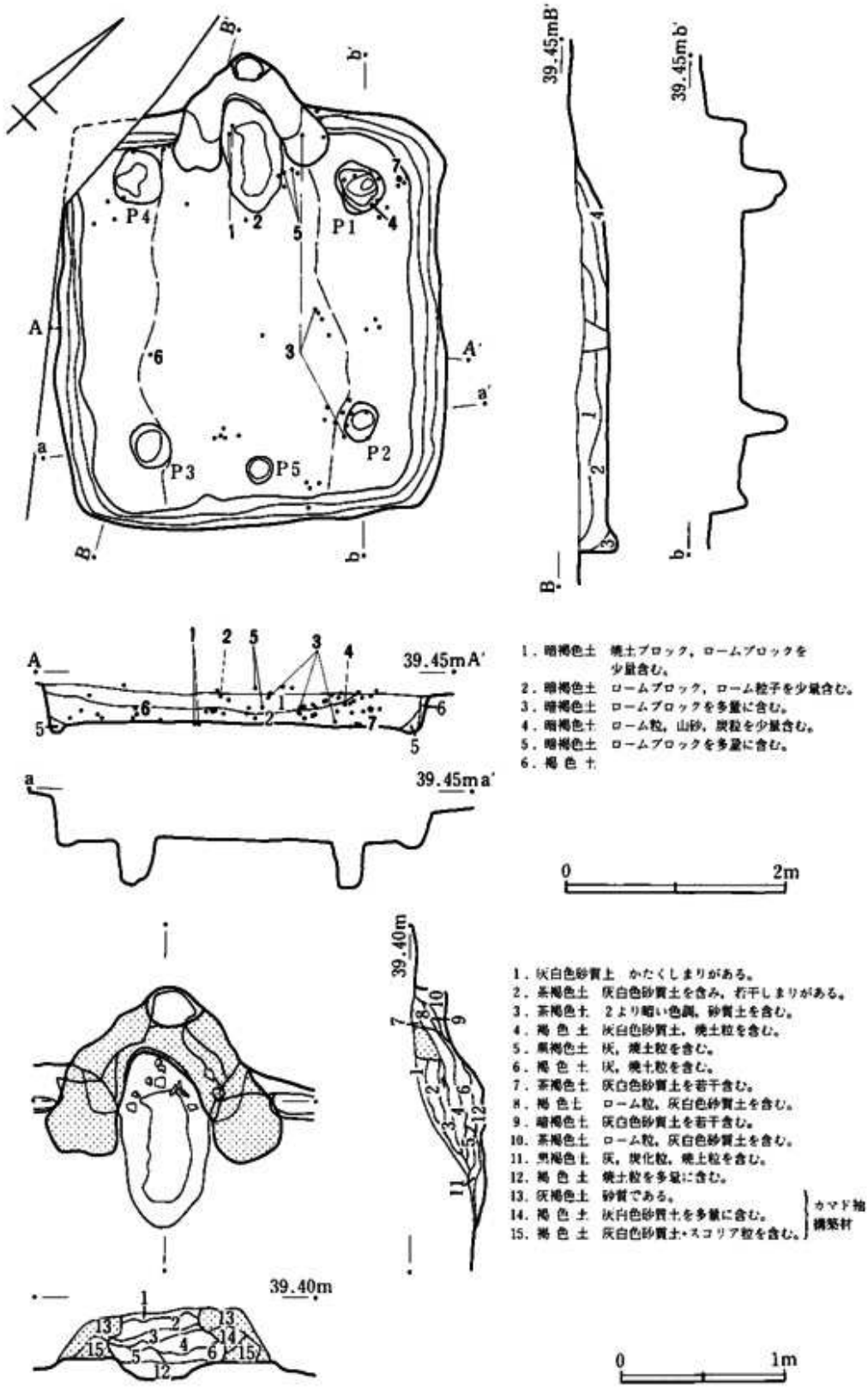
覆土は5層に区分できたが，暗褐色土が主体を占めている。

007号住居跡（第12図，図版6）

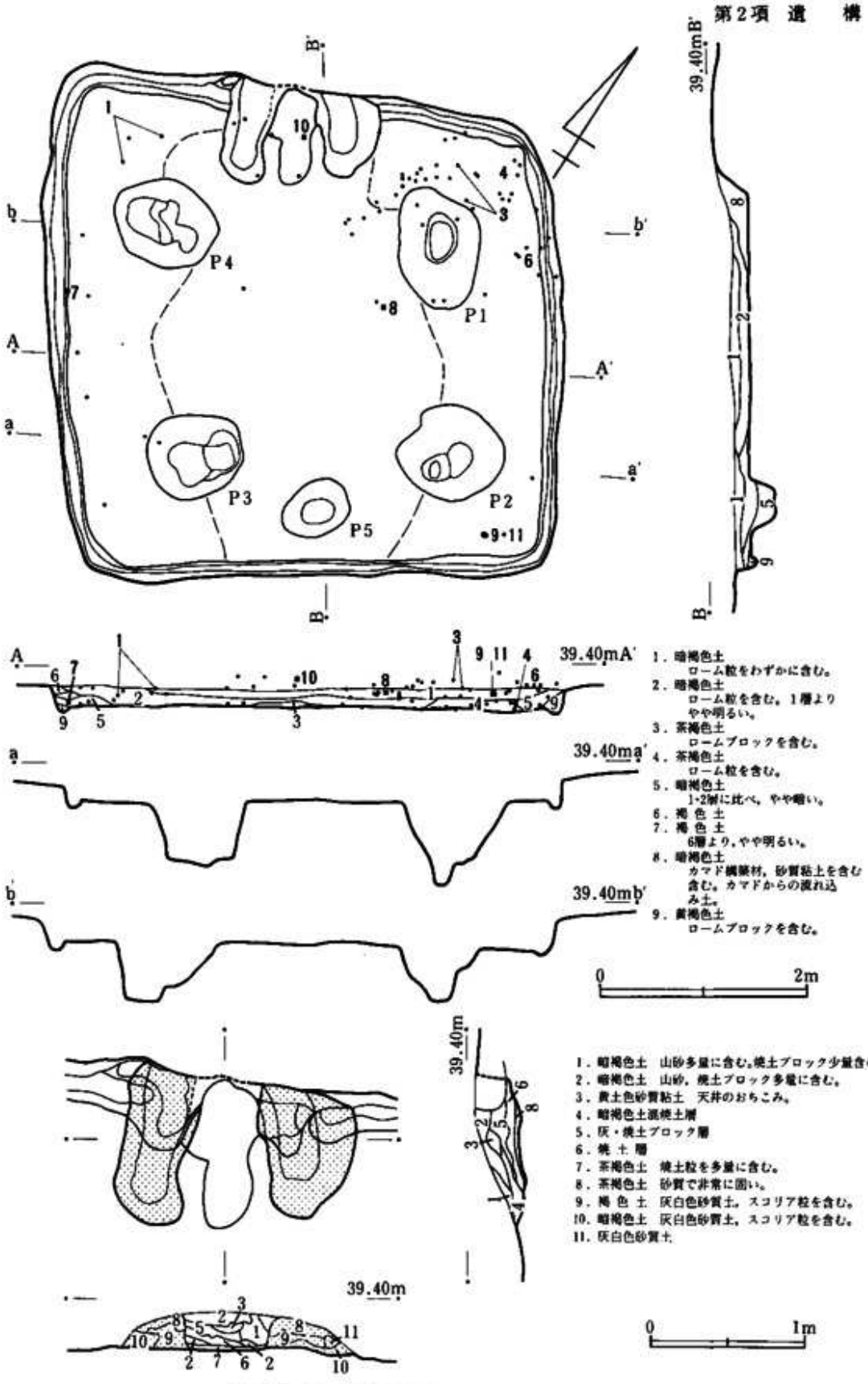
本住居跡は，調査区南側8C－16グリッドに位置する。西側約1.5mに006号住居跡，南東側約1mに010号住居跡が近接している。

平面形はやや歪んだ形の方形を呈する。規模は4.75×4.35m，主軸方位はN－37°－Wとなる。

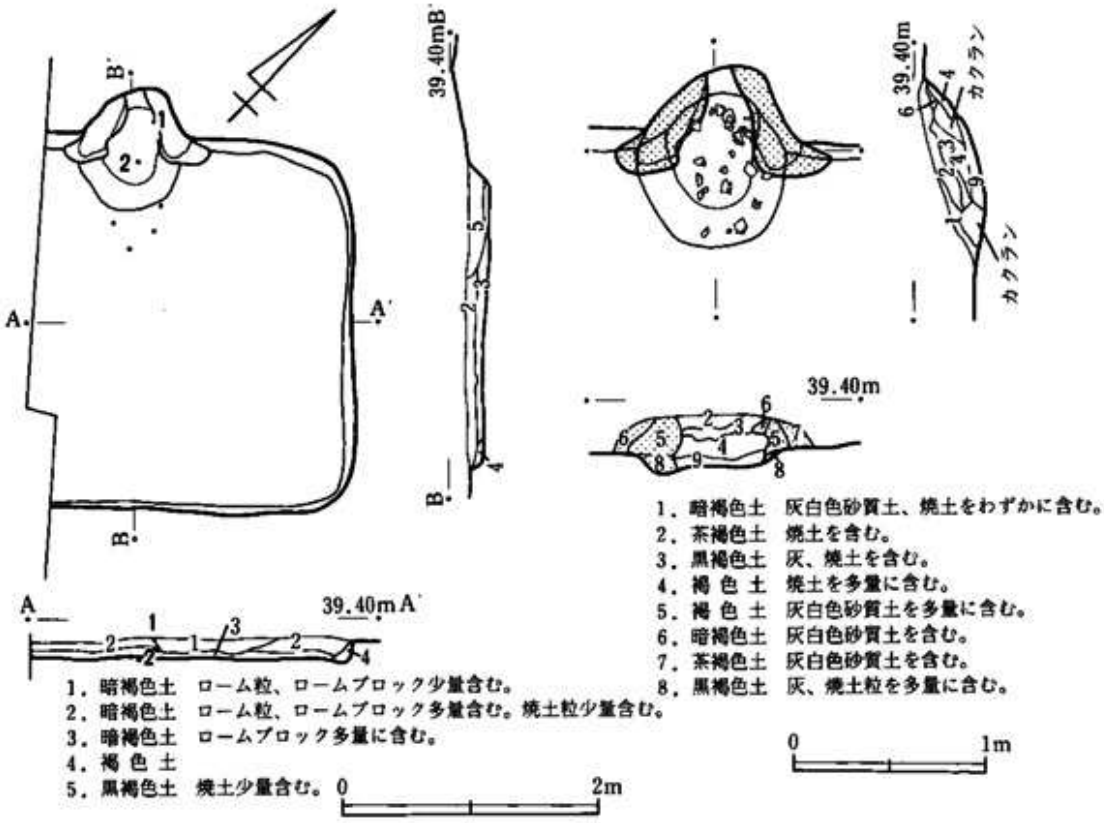
壁の遺存状態は良好である，確認面からの高さは33～14cmを測り南壁側で浅くなっている。壁溝はカマド下を除いて全周する。幅15cm前後，深さ10cm前後である。床面は全体に平坦であり，カマドから対面の壁にかけての柱穴間は堅緻な状態である。ピットは5ケ所で検出されている。P1～4は住居跡の対角線上に位置する主柱穴で，いずれも大きく，また2段に掘り込まれている。一段目と二段目の深さの差が10～20cm程認められる。径113～80cm，深さ79～52



第11図　006号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）



第12図　007号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）



第13図　008号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）

cmである。Ｐ５はカマドの対面，東南壁寄りに位置する。径68cm，深さ26cmと他の柱穴より規模が小さい。

カマドは北西壁の中央に位置する。煙道部の奥に部分的に攪乱を受けているが，遺存状態はさほど悪くない。壁外への掘り込みは，ごくわずかなものである。袖が住居内へ長く張り出し98～86cmを測る。天井部は遺存していない。火床部は浅い掘り方である。

遺物は，カマド右脇からＰ１周辺に認められたが総量は多くない。土器，鉄器が出土しており，西壁側の壁溝脇より鎌が出土している。遺構検出面で出土した遺物が1/3を占めている。

覆土は，暗褐色土が主体であり，９層に区分される。自然堆積である。

008号住居跡（第13図，図版６）

本住居跡は，調査区の南端８Ｄ－04，９Ｄ－01グリッドに位置する。北側に006号住居跡，東側に009号住居跡と近接している。西側は調査区外にかかる為，全体を検出することはできなかった。

平面形は，わずかに隅の丸い方形を呈すると思われる。規模は東側で2.8mを測る。主軸方位はＮ－40.7°－Ｗとなる。

壁の遺存は悪く，高さ16.5～14cmでる。床面より垂直に立ち上がる。壁溝はない。床面は平坦で，全体に堅くしまりがある。他の住居跡で認められた床面の堅さの違いは特に認められな

かった。ピットは検出されていない。

カマドは，北西壁に位置する。壁外への掘り込みは大きく奥行きは36cmである。袖部の張り出しはすくない。火床部は，楕円形に掘り込まれている。煙道部の立ち上がりは緩やかである。火床部上面より，坏，甕が破片で出土している。

遺物は，すべて土器片で少量が出土している。カマド付近に偏在している。

覆土は，4層に区分される。暗褐色土が主体を占めている。

009号住居跡（第14・15図，図版8）

本住居跡は，調査区南端9C－13，14，9D－01，02グリッドにまたがって位置する。北西隅で008号住居跡に近接している。

平面形は方形を呈し，規模は5.14×4.98mを測る。主軸方位はN－39°－Wとなる。

壁は遺存が良く，ほぼ垂直に立ち上がる。高さ47.5～42cmを測る。壁溝は全周する。幅20～15cm，深さ5cm前後である。床面は全体に平坦で，カマドから対面の壁まで帯状に堅緻な面が認められる。ピットは5ケ所で検出されている。P1～P4は主柱穴である。平面形が不整円形でいずれも大きく2段に掘り込まれている。規模は径94～68cm，深さ67～53cmを測る。P5はカマドの対面，南東壁寄りに位置する。径53cm，深さ29cmで住居内側に向ってやや斜めに掘り込まれる。

カマドは北西壁の中央に位置している。袖部および天井部を構成する砂質粘土が大きく崩落していた。壁外への掘り込みはあまり大きくない。袖部と壁との接する位置にピットが掘り込まれており，主柱穴と同様2段になっている。性格は判然としない。煙道部の立ち上がりは緩やかである。

遺物は土器，鉄器がある。出土レベルは床面に近いものが多く，平面的には分散した出土状態である。

覆土は5層に区分されたが，暗褐色土が主体であり，焼土，炭化粒が混入している。流れ込みの状態を示している。

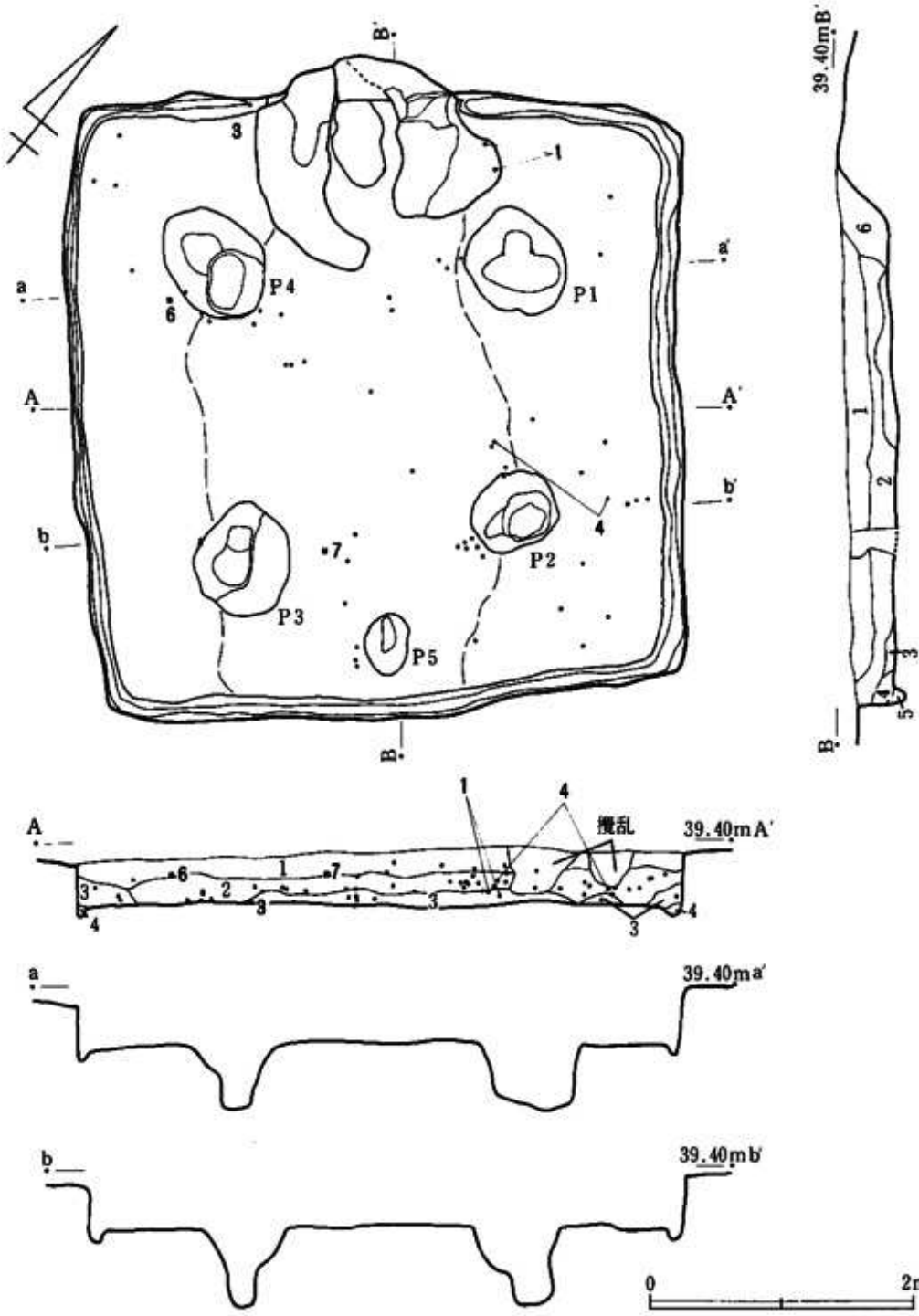
010号住居跡（第16図，図版7）

本住居跡は，調査区南端の9C－09，13グリッドに位置する。東隅で011号住居跡と重複している。検出面はソフトローム層上面であるが，木根による攪乱を受け遺存状態は良くない。

平面形は方形を呈する。規模は3.83×3.73mを測る。主軸方位はN－46.5°－Eとなる。

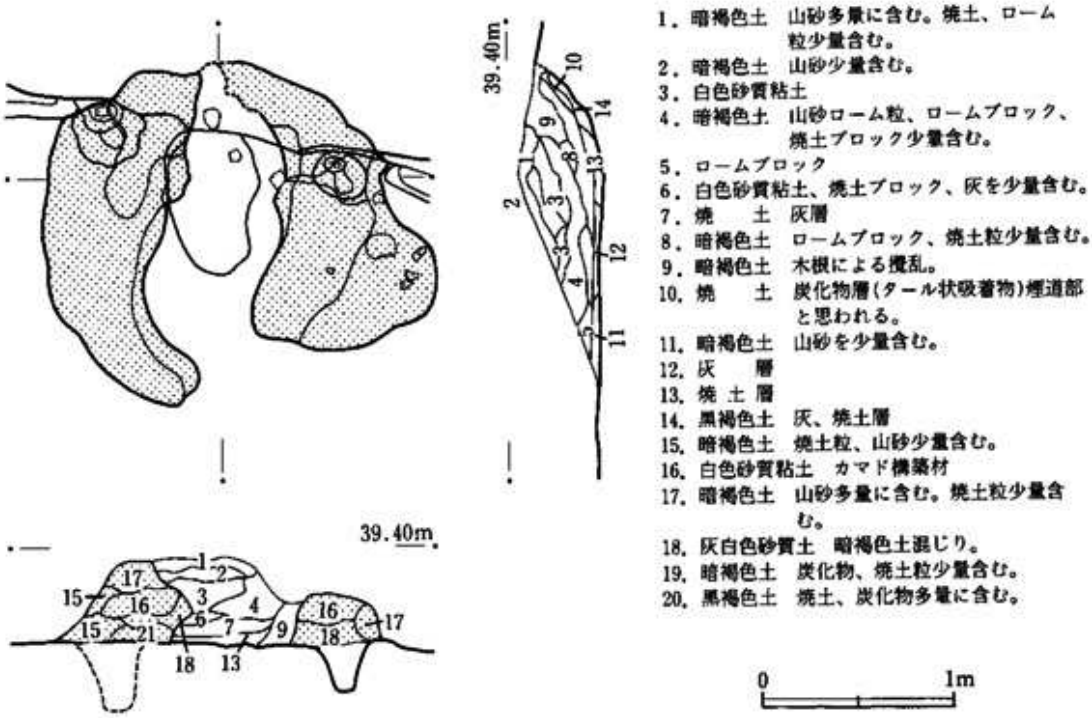
壁の遺存は悪く立ち上がりがわずかに検出されただけである。高さ21～12cmを測る。壁溝はカマド下を除いて全周する。幅10cm程で深さ10～5cmである。床面は根によって攪乱を受け随所に凹凸が認められる。ピットは住居跡の対角線上に4ケ所配されている。主柱穴である。径55～36cm，深さ75～57cmで，しっかりとした掘り方である。

カマドは北東壁の中央に位置している。壁外へ掘り込みは三角形状で，奥行き×43cmであ



1．暗褐色土　ロームブロック、ローム粒、焼土粒少量含む。
2．暗褐色土　ロームブロック、ローム粒やや多く含む。
3．暗褐色土　ロームブロック、ローム粒多量に含む。
4．褐 色 土
5．暗褐色土　ロームブロック多量に含む。
6．暗褐色土　焼土、山砂やや多量に含む。ロームブロック少量含む。
　　カマドの流れ出したもの。

第14図　009号住居跡実測図（1/60）



第15図　009号住居跡カマド実測図（1/40）

る。天井部は崩落している。袖は湾状に張り出し，火床部はほぼ円形に掘り込まれている。煙道部の立ち上がりは直線的な傾斜となる。左袖の構築材の中より銙帯具（巡方）が出土している。

遺物は，土器，鉄器，銙帯具，土製紡錘車が出土している。床面に近いものが多く，住居跡の北側に分散している。量的にはさほど多くない。カマド内から出土した巡方は，構築材中に埋め込まれた状態であり，本跡に伴うものと思われる。

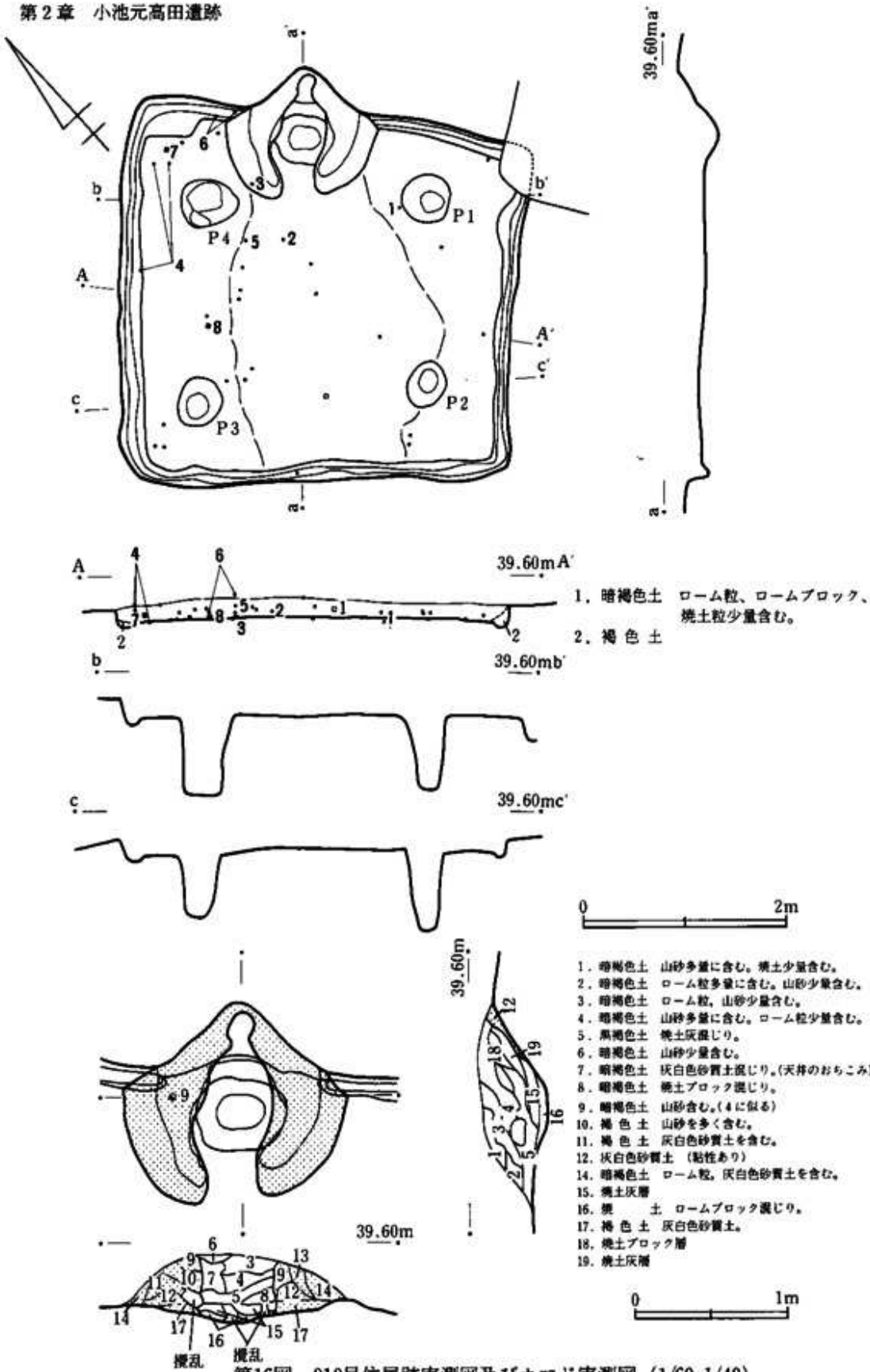
覆土は2層に区分されたが，主体は暗い褐色土の単層である。

011号住居跡（第17・18図，図版8）

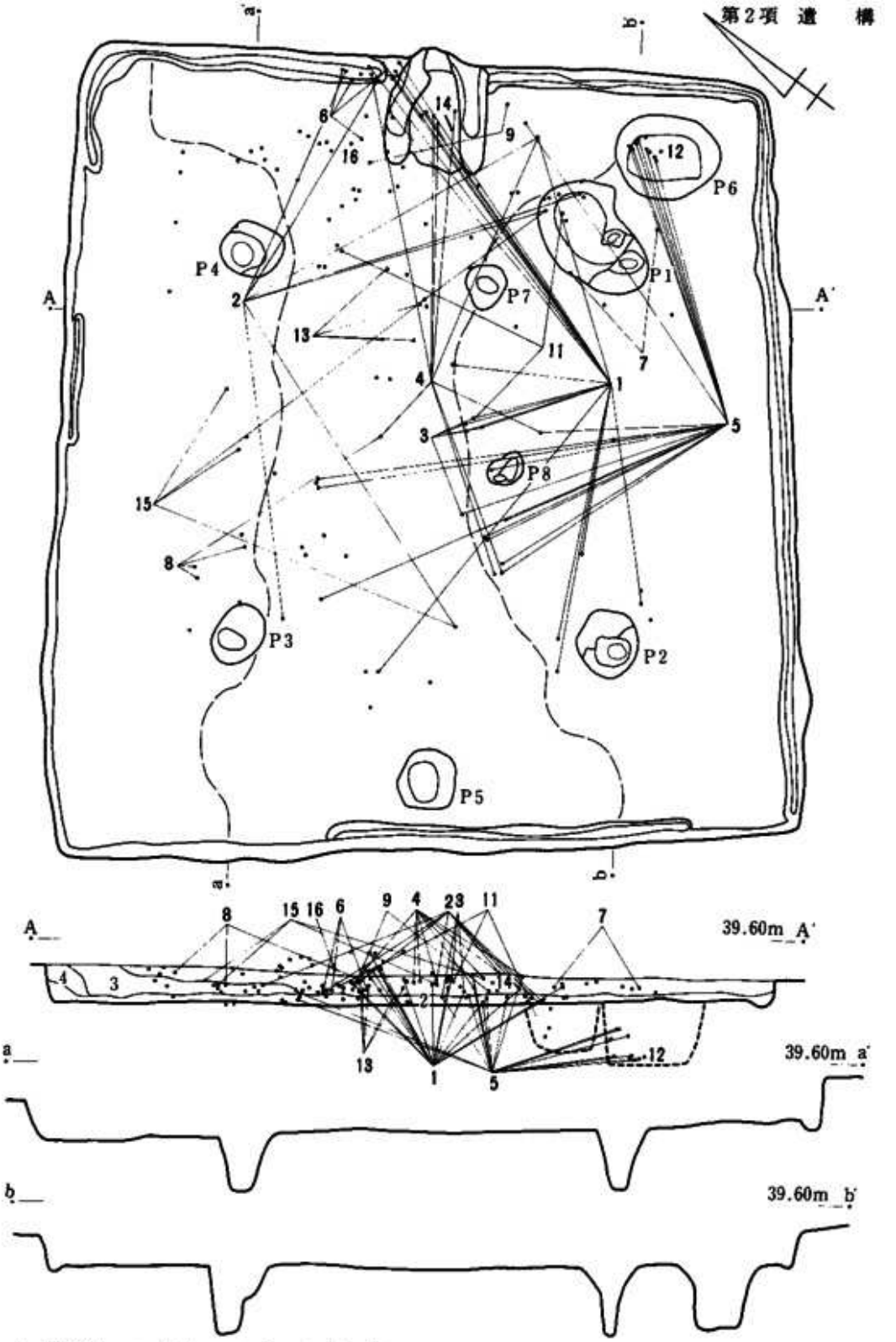
本住居跡は，調査区南東端9C－05，06，09，10グリッドにまたがって位置する。西隅で010号住居跡を重複している。全体の遺存状態は良好である。

平面形はほぼ方形で，7.95×7.67mと大形の住居跡である。主軸方位はN－32°－Wとなる。

壁は，しっかりとしており床面より垂直に立ち上がる。高さ42～17cmを測る。壁溝は浅く部分的に跡切れている。床面の遺存は良く平坦である。カマドから対面の壁での柱穴間が周囲より堅緻な状態であった。ピットは8ケ所で検出されている。P1～P4が配置により主柱穴である。P1は2つのピットが重複している。P6は貯蔵穴で，やや歪んだ楕円形で底面は平坦に掘り込まれる。主柱穴間に位置するP7，8は支柱穴であろうか。P7は78cmと深く掘り込ま



第16図　010号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）



1．暗褐色土　ローム粒、ロームブロック多量に含む。
2．暗褐色土　ロームブロック、ローム粒、焼土粒、炭化物粒少量含む。
3．暗褐色土　ローム粒、ロームブロック少量含む。
4．暗褐色土

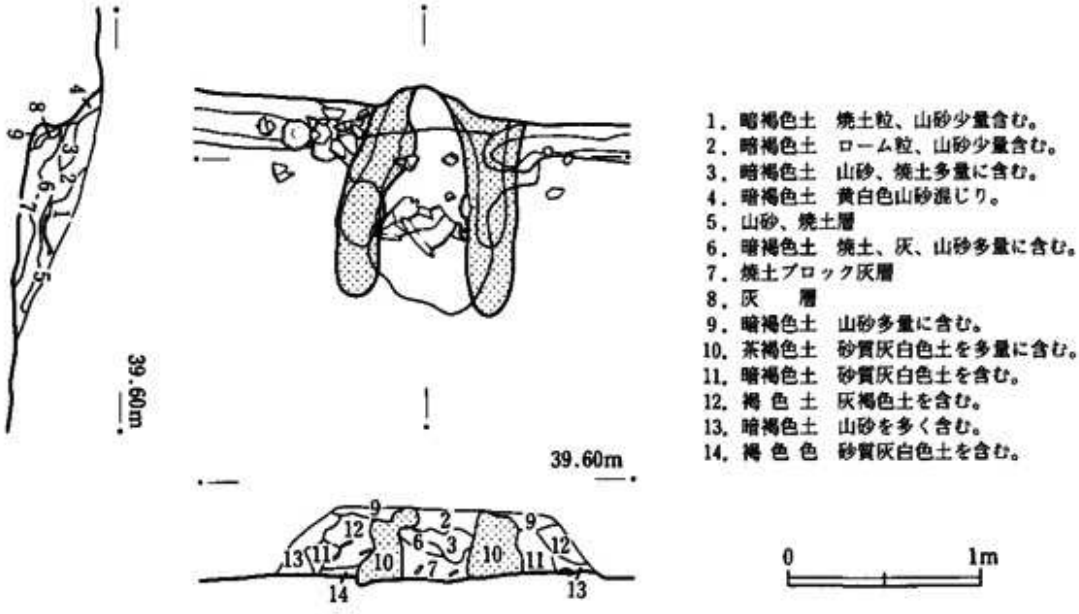
第17図　011号住居跡実測図（1/60）

れている。Ｐ５はカマドの対面の壁際に配されている。それぞれのピットの規模はＰ１が長径104cm，深さ69cm，Ｐ２～４が径60～51cm，深さ63～53cm，Ｐ６が長径97cm，深さ59cm，Ｐ５が径55cm，深さ29cmである。

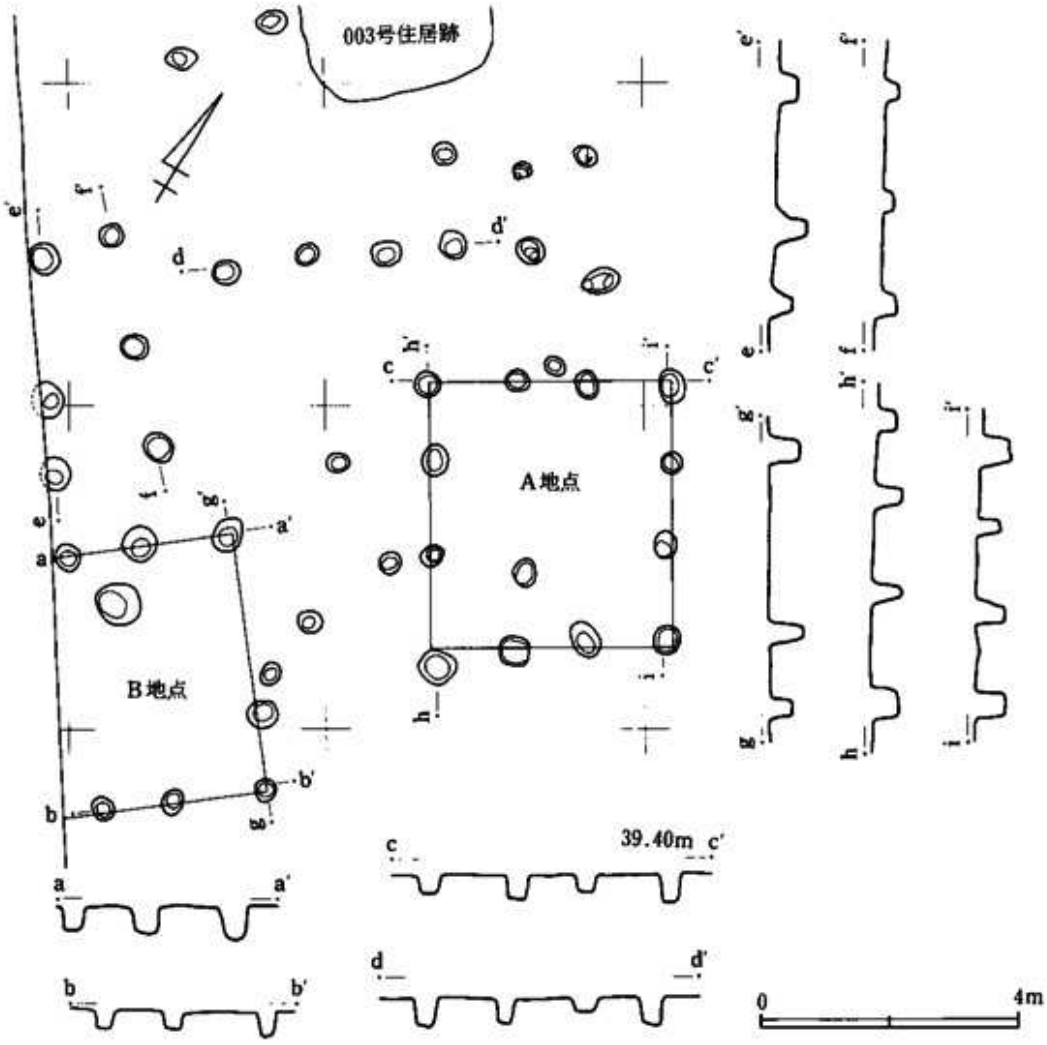
カマドは，北西壁の中央に位置する。壁外への掘り込みはすくなく，袖が長く張り出している。左袖の一部は崩落していた。火床部は床面をほとんど掘り込まないで使用している。煙道部の立ち上がりは２段になっている。火床部中央より甕が出土している。

遺物は，カマド周辺から住居跡中央に散在していた。接合状況から観察すると床面近くのものと住居中央付近のものといった様にかなり広範囲に分散している状態であり，住居廃絶時に投棄された可能性が強い。

覆土は，４層に区分された。暗褐色土，褐色土が主体で，床面近くでは焼土粒，炭化粒が混入していた。



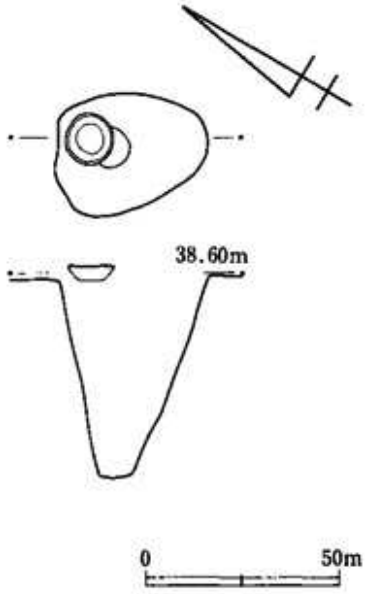
第18図　011号住居跡カマド実測図（1/40）



第19図　012号跡（ピット群）(1/120)

012号跡（ピット群）（第19図，図版9）

調査区の南側，8C－13，14，8D－01，02グリッドを中心とした地区に検出されたピット群で，大小43のピットから構成されている。規模や配列の状況からみると規則性に欠ける点が多く，掘立建物跡，削平された竪穴住居跡の柱穴かその性格は不明である。平面的にみるとA地点で3間×3間，B地点で2間×3間の建物跡の存在が予想できるが，判断はできない。各ピットの覆土には上面に砂質粘土が認められることから，建物の根固めの穴の可能性も考えられる。規模は径45～20cm，深さ47～12cmである。



第20図　013号跡実測図（1/20）

013号跡（第20図，図版10）

調査区のほぼ中央５Ｃ－13グリッドで検出されたピットである。確認面はソフトローム層上面で，遺構確認の過程で完形の坏が出土したため，精査したところ本ピットの存在が判明したのである。

ピットの平面形は不整円形で，径41×33cm，深さ53cmを測る。掘り方はしっかりとしており，底面は丸底となる。覆土は，１層黒褐色土，２層褐色土となっている。坏（第32図，図版13）はピット上面で中心よりやや外側（北側）から検出されている。

この他周辺の暗褐色土中より６点の坏形土器が出土していることから，本ピットは住居跡の痕跡である可能性が考えられる。

第３項　遺　物

１.遺構出土の遺物

第１ブロック（第21図，図版20）

第１ブロックにおいて出土した遺物はすべて剝片で総数14点を数える。石器としての特徴を示すものはなく，石材はチャート６点，安山岩３点，頁岩５点である。

１～６は小型で不整形な剝片である。１と５は片面に自然面を残している。７～９はやや大型の剝片で，７は片面に自然面を残している。図示できた剝片の石材は１～４がチャート，５，６，８が安山岩，７，９が頁岩である。

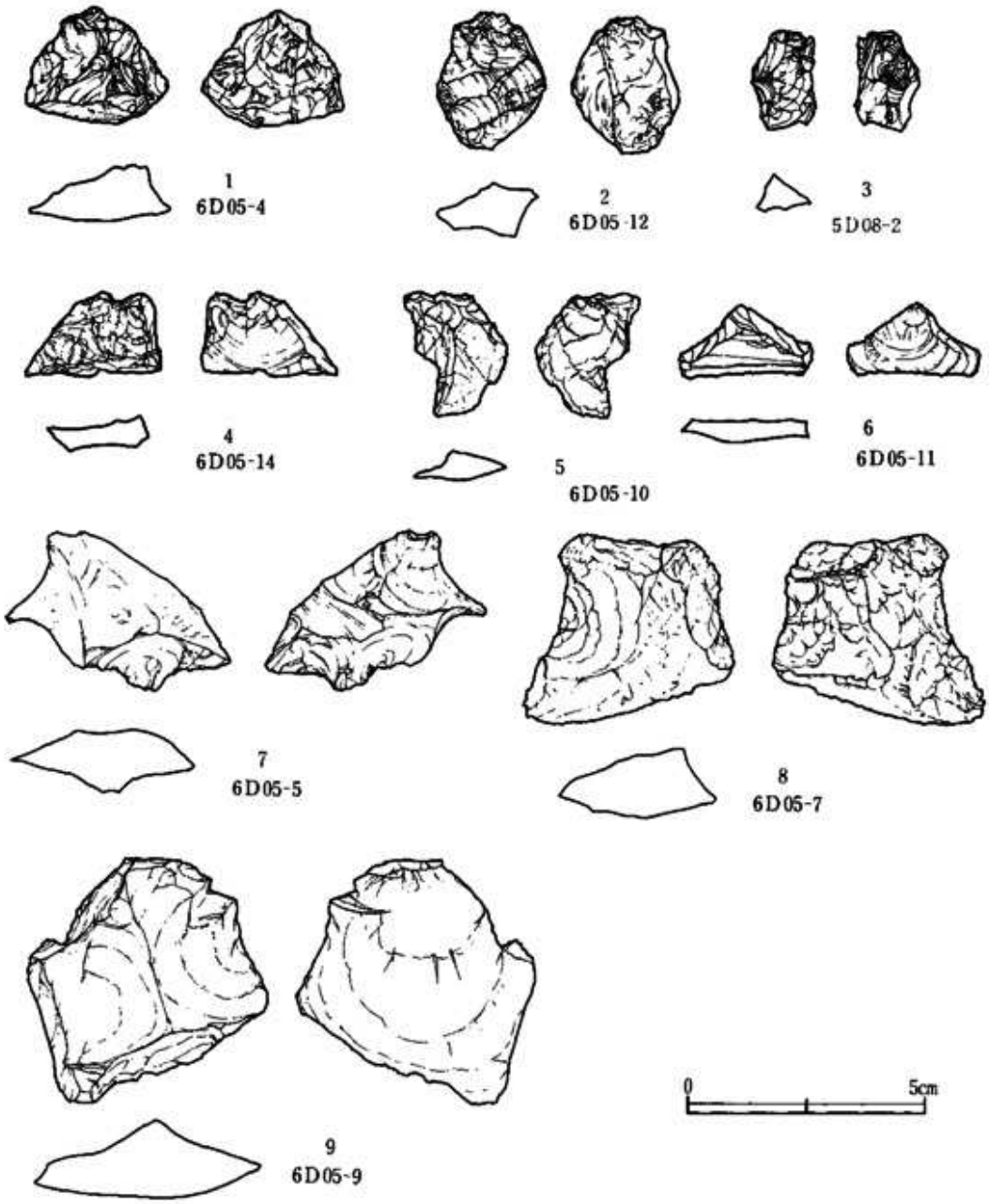
001号住居跡（第22図，図版11）

１，２，５，６は甕である。１，２は張りの少ない胴部から口縁部が強く外反し口唇部が厚く，若干つまみ出される。最大径は口縁部にある。６はやや上げ底となる底部である。

３，４は坏である。ロクロ成形で体部が緩やかに立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。３は口唇部が厚さを増す。

002号住居跡（第23図，図版11）

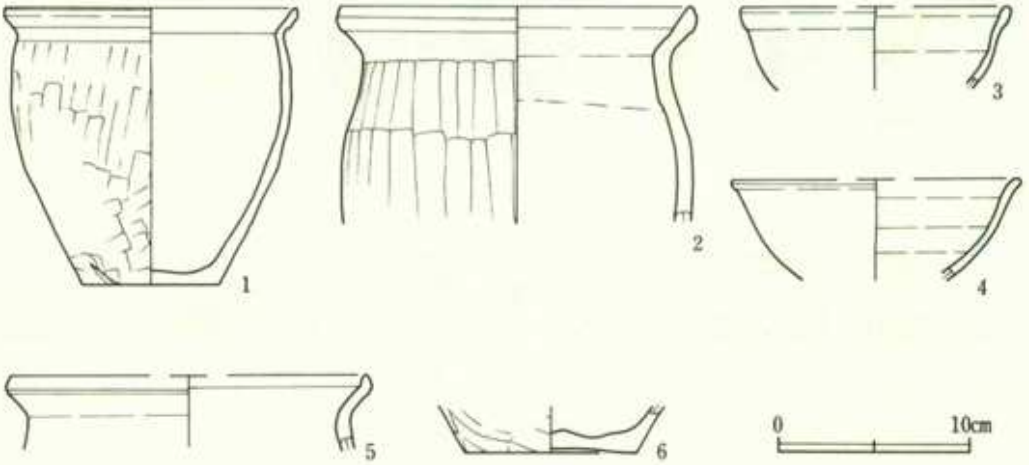
１～３は甕である。１はわずかに張りのある胴部から口縁が大きく屈折するように外反して口唇部が小さくつまみ出される。２は張りのない胴部から口縁部が緩やかに外反し，大きく開く。３は丸みのある胴部から口縁部が強く外反し口唇部が直立ぎみにつまみ出される。胴部は縦方向のヘラ削りが施される。10は甕の底部である。



第21図　先土器時代第1ブロック出土石器実測図（2/3）

4は甕の底部である。輪積み成形で，内面に痕跡が残る。

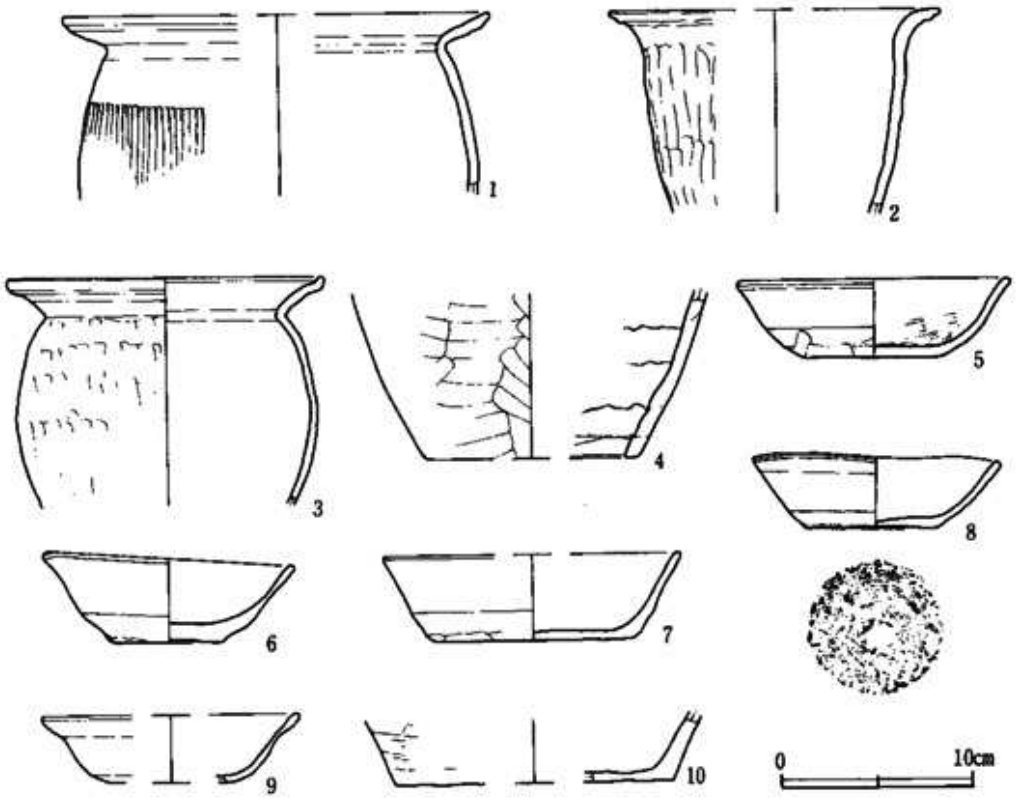
5～9は坏である。5は平底の底部から緩やかに立ち上がり外反する。回転糸切り離し後底部周縁を手持ちヘラ削りする。6は完形で体部下端に腰部をもち，口縁が肥厚して外反する。底部は全面手持ちヘラ削りされる。9も同じ特徴である。7は底径と口径の差が少なく，体部から直線的に立ち上がり口縁がわずかに外反する。8は体部から大きく開いて口縁へと至る。底部は回転糸切り離しのままである。歪みのある成形である。



第22図　001号住居跡出土遺物実測図（1/4）

第２表　００１号住居跡出土土器

挿図番号	器種	遺存度	法量(cm) 口径 底径 器高 ( )は推定 〈 〉は現存高	成形・調整の特徴	胎土 焼成 色調他	図版番号
22図 1	甕 土師器	½	(15.5) 7.12 14.4 胴部最大径 14.62	口唇部から頸部ヨコナデ，胴上半部は縦方向のヘラ削り，下半部は，斜方向ヘラ削り，底部は，ヘラ削り。内面，口縁部，ていねいなヨコナデ，以下はやや雑なナデ調整。	砂粒を含み密 良 赤褐色	11
2	甕 土師器	⅓	18.5 —— 〈11.6〉	口縁部内外面ともヨコナデ。外面胴部は縦方向ヘラ削り。	砂粒を含む 良好 赤褐色	11
3	坏 土師器	⅓	(14.0) —— 〈 4.2〉	口縁部から体部内外面ともにヨコナデ。	砂粒混入 良好 灰褐色	
4	坏 土師器	⅓	(15.0) —— 〈 5.8〉	口縁部内外面ともヨコナデ。体部下端ヘラによるナデ。内面はヘラによるナデ。	砂粒混入 良好 黒褐色	
5	甕 土師器	口縁部 ⅓	(18.7) —— 〈3.7〉	口縁部はナデ。胴部は縦方向ヘラ削り。	砂，小粒の砂利 良好 赤褐色	11
6	甕 土師器	底部	—— 9.05 〈2.40〉	上げ底の底部。内側，中心より外で山状に盛り上がる。	砂粒，雲母粒含 良 (外－黒～茶褐色 内－茶褐色	



第23図　002号住居跡出土遺物実測図（1/4）

第３表　００２号住居跡出土土器

挿図番号	器　種	遺存度	法　量(cm) 口径 底径　( ) は推　定 器高　〈 〉は現存高	成形・調整の特徴	胎　土 焼　成 色　調他	図版番号
23図 1	甕 土師器	⅙	(22.2) —— 〈9.45〉	外面は口縁～胴上部ヨコナデ。 胴部タタキ目。 内面はヨコナデ。	わずかに砂粒を含む 良　中間焼成 赤褐色	11
2	甕 土師器	¼	(17.2) —— 〈10.55〉	外面は口縁～頸部ヨコナデ。 胴部縦方向ヘラ削り。 内面はヘラによるヨコナデ。	砂粒多い 良 暗茶褐色	
3	甕 土師器	口縁～ 胴部約 ¼欠く	16.42 胴部最大径　15.6 〈16.6〉	口縁部は内外面ともヨコナデ。 胴部は縦方向のヘラ削り。 内面はナデ。	砂粒わずかに含み密 良 茶褐色	11
4	甑 土師器	底部～ 胴部¼	(11.4) —— 〈8.45〉	輪積み成形。 外面はヘラ削り。 内面は輪積み痕残る。ヘラナデ。	砂粒わずかに含む 良 赤褐色。内面スス残る	

5	坏 土師器	体部⅚	14.22 6.89 4.05	ロクロ成形 体部下端手持ちヘラ削り。 底部回転糸切りの後手持ちヘラ削り。 内面はヘラミガキ。	砂粒わずかに含む 良 赤茶褐色	11
6	坏 土師器	完形	13.1 5.55 4.75	ロクロ成形 体部下端～底部を手持ちヘラ削り。 内面はヨコナデ。	小石、砂粒含む 良 (体部，黄褐色 底部～体部下，黒～灰褐色)	11
7	坏 土師器	体部～口縁約⅓	(15.6) (10.3) 4.35	ロクロ成形 底部～体部下端手持ちヘラ削り。 内面はヨコナデ。	砂粒を含む 良 にぶい赤褐色	
8	坏 土師器	復元ほぼ完形	12.85 6.2 3.85	ロクロ成形 底部は回転糸切り。 内面はヨコナデ。	砂粒多く含む 良 薄茶褐色	11
9	坏 土師器		(13.4) (6.16) 3.45	ロクロ成形 体部下端から底部はヘラ削り。 内面はヨコナデ。	砂粒を含む 良 淡茶褐色～褐色	
10	甕 土師器	底部⅓	(14.5) (3.3)	底部～胴部下半ヘラ削り	砂粒を含む 良 褐色	

003号住居跡（第24図，図版12）

1，2は甕である。胴上部に張りがあり，口縁部がくの字状に著しく外反する。口唇部は垂直につまみ出される。

3～9は坏である。体部に丸みをもち内湾ぎみに立ち上がり口縁部でやや肥厚して外反する坏と体部が内湾ぎみでそのまま口縁へと至る坏がある。3は体部に墨書「卅千」が書かれている。体部周縁から底部は手持ちヘラ削りされる。

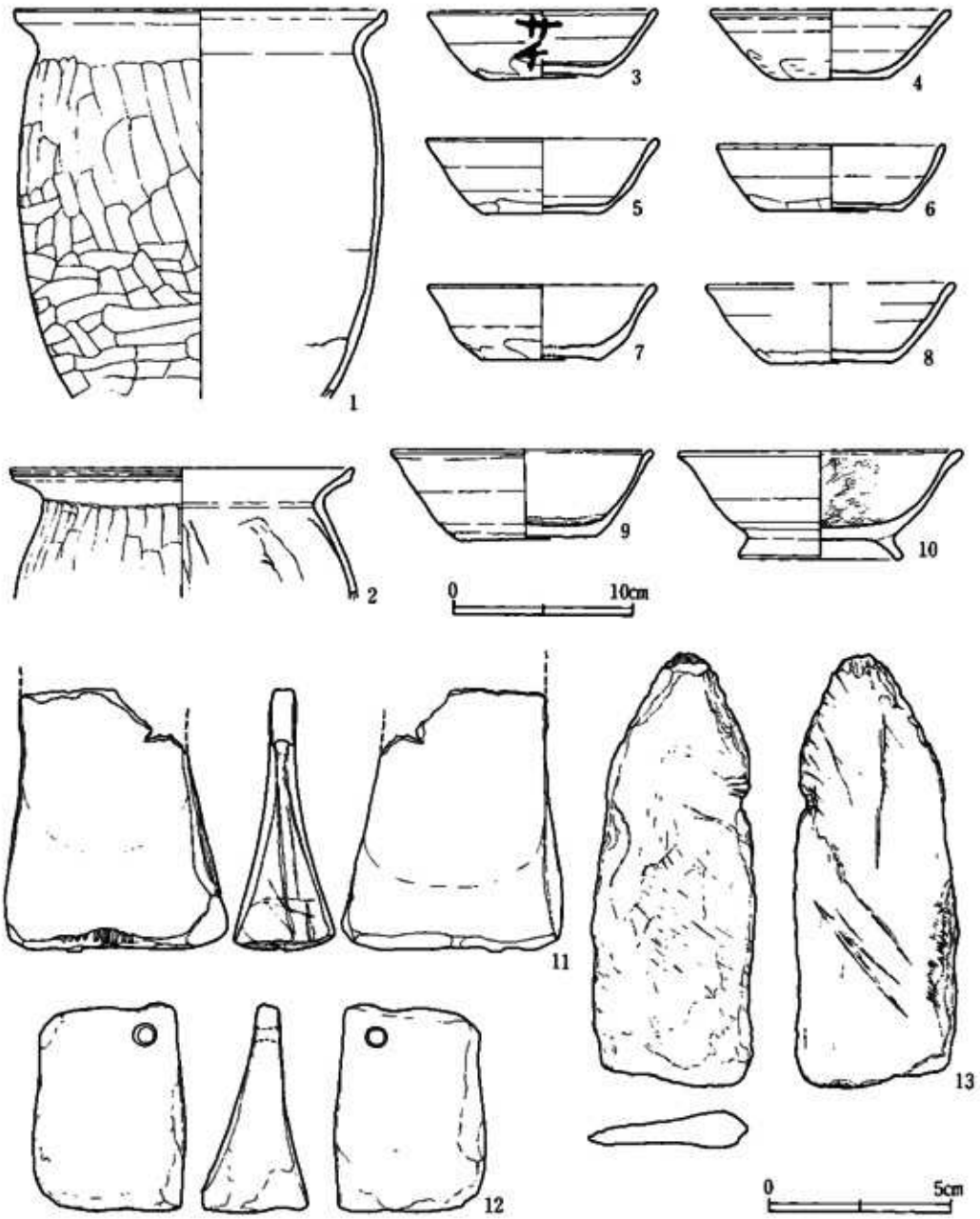
10は高台付坏である。小さいハの字状に開く高台が付き，体部に丸みをもち口縁部で外反する。口唇部が肥厚している。内面はヘラナデ，赤彩が認められる。

11～13は砥石である。11，12は凝灰岩製で口には小孔があけられている。13は粘板岩を利用している。両面とも磨られて光沢をもつ。

004号住居跡（第25図，図版13）

1～5は甕である。胴上部に張りをもち，短い頸部から口縁が強くくの字状に外反する。口唇部は小さくつまみ出され，1はつまみ出しが内傾している。

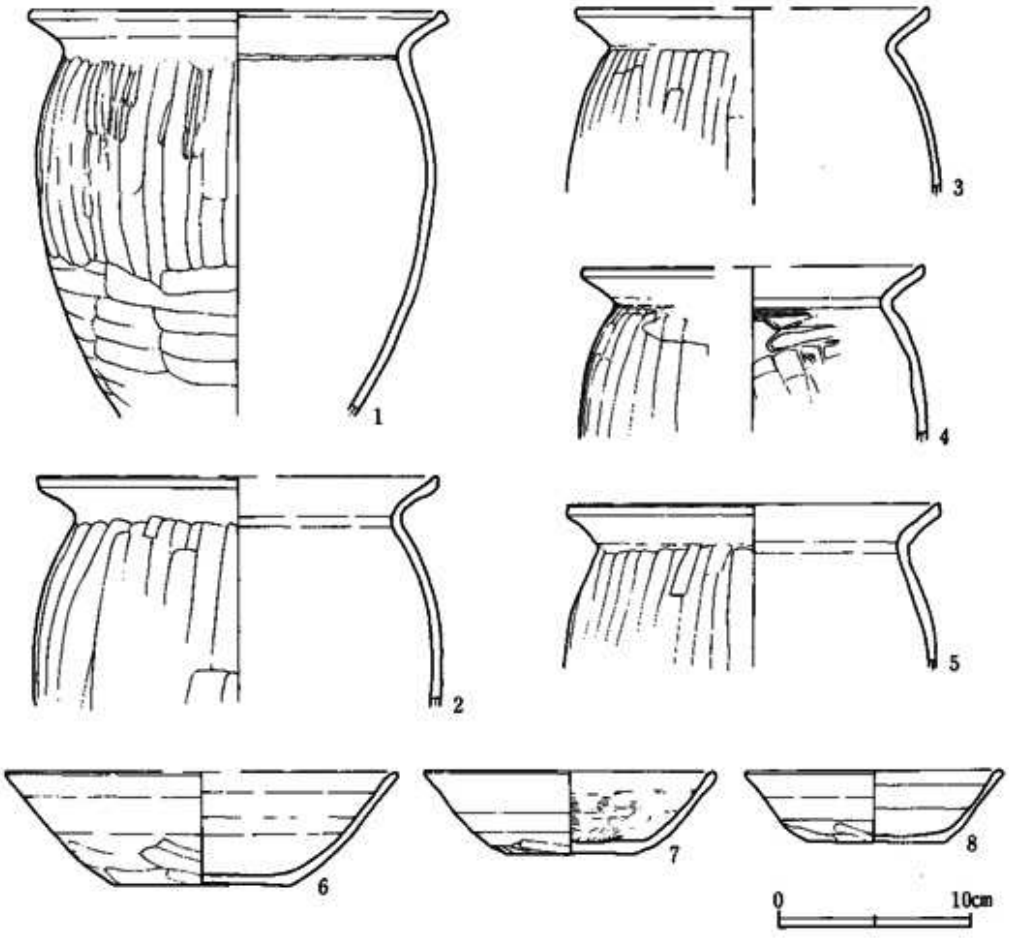
6～8は坏である。6は大形で，わずかに丸みのある体部から口縁が大きく開く。7，8は丸みのある体部から口縁部が小さく外反し，口唇部が肥厚する。いずれも底部～体部下端は手持ちヘラ削りがされる。



第24図　003号住居跡出土遺物実測図（1/4・1/2）

第４表　００３号住居跡出土土器

挿図番号	器種	遺存度	法量(cm) 口径 底径 器高 ( )は推定 〈 〉は現存高	成形・調整の特徴	胎土 焼成 色調他	図版番号
24図 1	甕 土師器	底部なし　⅔	胴部　20.6 20.1 〈21.2〉	外面，口縁～頸部ヨコナデ削り。 胴上半～縦方向ヘラ削り。 胴下半～横方向ヘラ削り。 内面，ヘラによるヨコナデ。 口唇部は，内外ともていねいな調整。	砂粒多い，密。 良 茶褐色（黒斑あり）	12
2	甕 土師器	口縁～胴部	18.9 胴部（18.9） 〈7.1〉	ロクロ成形 外面，頸部以下縦方向ヘラ削り。 成形時の工作痕あり。 口縁部はヨコナデ。	砂粒含む やや堅め 茶褐色	12
3	坏 土師器	ほぼ完形	12.8 6.25 3.8	ロクロ成形 体部下端～底部手持ちヘラ削り。 内面はナデ。	砂粒含む 良 淡い茶褐色 墨書「卅千」または「平」あり	12
4	坏 土師器	約½弱	(13.3) 6.3 3.85	右回転ロクロ成形 底部～体部下端は手持ちヘラ削り。 内面はナデ。	砂粒多い 良 茶褐色一部黒斑あり	
5	坏 土師器	完形	12.9 6.8 9.15	ロクロ成形 体部下端から底部手持ちヘラ削り。 内面はナデ。	砂粒含む 良 褐色	
6	坏 土師器	底部完存，体部 ¼	(12.6) 7.7 3.65	右回転ロクロ成形。 底部～体部下端手持ちヘラ削り。 指頭痕あり。	砂粒多く含む 良 褐色，黒斑あり	12
7	坏 土師器	½	12.7 6.7 4.02	右回転ロクロ成形。 体部下端～底部手持ちヘラ削り。 内面はナデ。	砂粒を多く含む 良 淡黄褐色	
8	坏 土師器	底部完存，体部～口縁約½	(13.7) 6.6 4.2	ロクロ成形。 底部～体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒を多く含む 良 淡黄褐色（黒斑あり）	12
9	坏 土師器	¾	14.6 7.5 4.98	ロクロ成形。 体部下端～底部手持ちヘラ削り。 内面はナデ。	砂粒含む 良 茶褐色，一部黒味を帯る	12
10	高台付坏 土師器	⅔	15.62 9.01 5.95	ロクロ成形 外面，高台内回転ヘラ削り。 内面，丹彩，横斜の方向のヘラナデ。	砂粒を多く含む 良 外，茶褐色，内，赤褐色	12

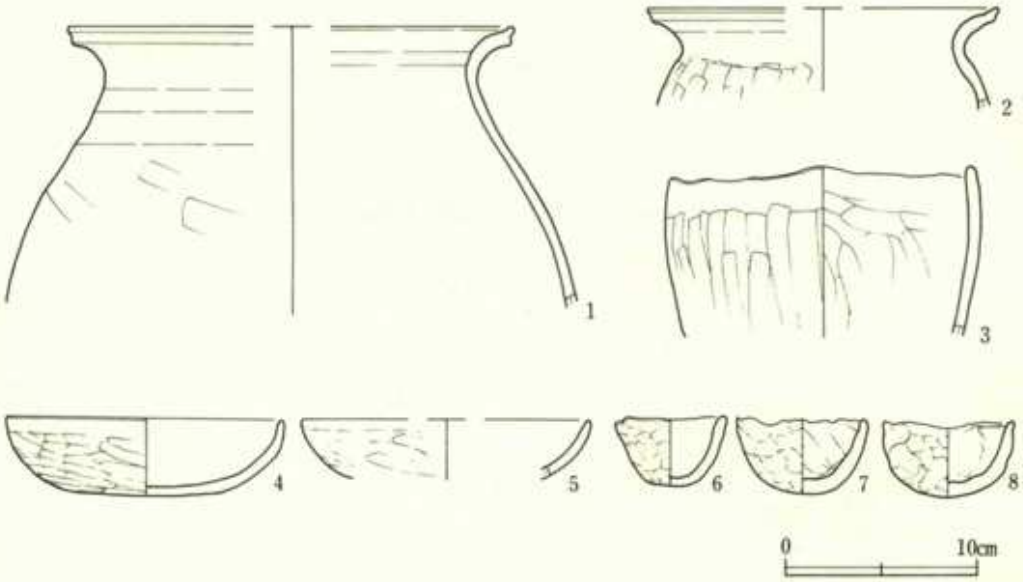


第25図　004号住居跡出土遺物実測図（1/4）

第５表　００４号住居跡出土土器

挿図番号	器　種	遺存度	法　量(cm) 口径 底径 器高 ( )は推　定 〈 〉は現存高	成形・調整の特徴	胎　土 焼　成 色　調他	図版番号
25図 1	甕 土師器	底部 欠損	21.4 胴部　20.95 〈20.95〉	外面は胴部上半縦ヘラ削り。 下半横ヘラ削り。 内面はヨコナデ。	砂粒を多く含む 良 褐色～茶褐色	13
2	甕 土師器	約¼	(20.9) 胴部　11.3 〈11.8〉	外面は頸部以下縦方向ヘラ削り。 口縁部はヨコナデ。	砂粒やや多い 良 茶褐色	13
3	甕 土師器	口縁～ 胴部破 片約¼	(18.4) 胴部　19.5 〈 9.5〉	外面は頸部以下を縦方向のヘラ削り。 内面はヨコナデ。	砂粒を含む 良 茶褐色	

4	甕 土師器	口縁～ 胴　部 破　片	(17.8) 胴部 (18.2) 〈 8.7〉	外面，胴部縦方向ヘラ削り。 内面，粗雑なヘラナデ。ヘラによる押え痕あり。	砂粒を含む 良 茶褐色 ２次的な火熱を受けている	
5	甕 土師器	⅓	19.3 胴部　19.25 〈 8.4〉	外面は頸部以下ヘラ削り。 口縁部はヨコナデ。	砂粒多く含む 良 口縁～頸部茶褐色 胴部以下暗褐色～黒褐色	
6	坏 土師器	約½	(20.4) 8.9 5.65	ロクロ成形 外面，底部～体部下手持ちヘラ削り。 内面はナデ。	砂粒を含む 良 黄褐色	13
7	坏 土師器	完形	15.3 6.6 4.15	ロクロ成形 底部～体部下端手持ちヘラ削り。 内面はヘラミガキ。	砂粒を含む 良 茶褐色 外面，体部～底部にかけて部分的に油煙付着	13
8	坏 土師器	約¾	13.4 7.15 3.2	右回転ロクロ成形 底部～体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒を多く含む 良 橙褐色	13



第26図　005号住居跡出土遺物実測図（1/4）

005号住居跡（第26図，図版13）

1，2は甕である。1は大きく張りのある胴部から口縁が短く外反する。口唇部は垂直ぎみにつまみ出される。胎土にやや大きめの砂粒を混入するのが特徴である。

3は甑と思われる。平縁の歪みのある口縁部で，内湾ぎみに立ち上がる。

4，5は坏である。平らな感じで，丸底の底部から内湾ぎみに丸みをもって体部から口縁へと至る。体部は全面ヘラ削りである。

6～8は小形の手捏土器である。歪みのある器形で指頭によって整形される。6は片口が認められる。

第6表　005号住居跡出土土器

挿図番号	器種	遺存度	法量(cm) 口径 底径 器高 ( )は推定 〈 〉は現存高	成形・調整の特徴	胎土 焼成 色調他	図版番号
26図 1	甕 土師器	口縁～胴上半部 ⅓	外面，(23.2) —— 〈14.4〉	外面は斜めにヘラナデ。 口縁部は内外面ともにナデ	やや大きめの白っぽい砂粒を多く混入 やや甘い感じ 橙褐色～くすんだ灰褐色	13
2	甕 土師器	破片	(18.3) —— 〈4.8〉	外面，胴部縦方向のヘラ削り。 口縁は内外面ともヨコナデ。	砂粒を含む 良 茶褐色	
3	甑 土師器	½	(15.8) 胴部 (16.5) 〈8.65〉	外面，口唇部ヨコナデ，胴部，縦ヘラ削り及びヘラナデ。 内面，口唇部ヨコナデ。胴部，斜方向ヘラナデ	砂粒を含む 普通 黄褐色，2次的な火熱のため大半が黒褐色を呈する。特に胴部はほとんどが黒褐色	13
4	坏 土師器	ほぼ完形	14.3 —— 3.95	外面はヘラ削りの後，弱いヘラナデ。 内面はヘラナデ。	砂粒わずかに含む 良 外，茶褐色 内，淡い黄褐色	13
5	坏 土師器	口縁部破片	(15.1) —— 〈3.05〉	外面，ヘラ削りの後，ヘラナデ 内面，横方向のヘラミガキ	砂粒を含む 良 橙褐色	
6	小型土器	完形	5.83 —— 3.6	片口状の突出部がみとめられる。 手捏ね。	砂粒を含む 良 褐色	13
7	小型土器	½	(6.5) —— 3.95	手捏ね，ヘラによるナデ。	砂粒少ない 普通 黄褐色	13
8	小型土器	完形	6.6 —— 3.85	外面，手で持ちながら指頭による押えで成形。 内面をかるくヘラナデ	砂粒少ない 良 黄褐色	

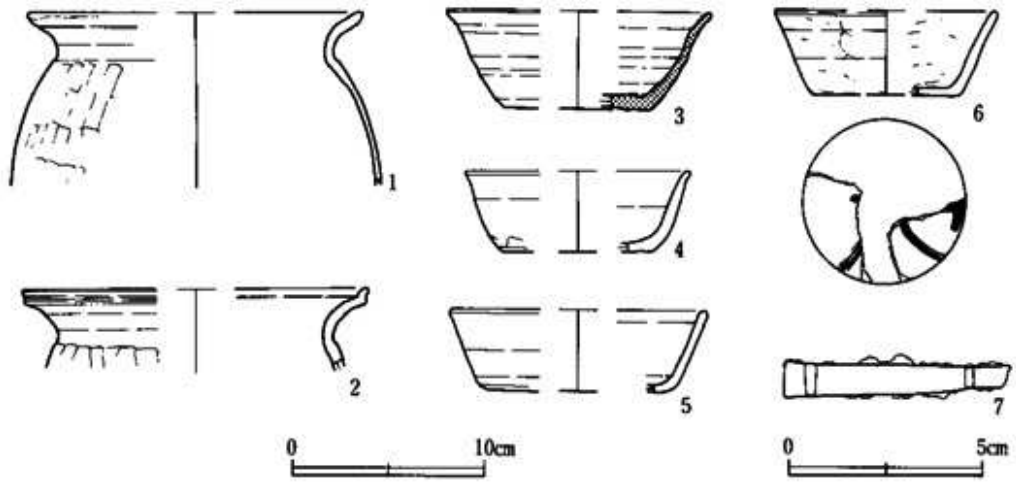
006号住居跡（第27図，図版14）

１，２は甕である。１は丸みのある胴部から肩部に稜をもち口縁がわずかに内湾して立ち上がる。２は口唇部が垂直につまみ出される。

３は須恵器の坏である。体部中位で屈曲して口縁が外反する。底部とそ周縁部は回転ヘラ切り手法が施される。

４～５は土師器の坏である。平底で，口径と底径の差が少ない。体部から直線的に立ちあがるが，４では口唇部で小さく外反する。６の底部には墨書がみえるが判読は不可能である。

７は偏平で棧状の鉄製品である。両端を欠失しているため用途は不明である。現存長58㎜，幅８～５㎜，厚さ３㎜を測る。



第27図　006号住居跡出土遺物実測図（1/4・1/2）

第７表　００６号住居跡出土土器

挿図番号	器種	遺存度	法量(cm) 口径 底径 器高 ( )は推定 〈 〉は現存高	成形・調整の特徴	胎土 焼成 色調他	図版番号
27図 1	甕 土師器	⅙	(17.3) —— 〈8.75〉	外面，胴部～縦方向のヘラ削り。頸部と胴部の境に稜をもつ	砂粒を多く含む 普通 茶褐色	
2	甕 土師器	⅙	(17.8) —— 〈3.9〉	外面，胴部はヘラ削り。口縁部は内・外面ともヨコナデ。	砂粒は少ない 良 黄褐色	
3	坏 須恵器	⅓	(13.8) 7.7 4.9	ロクロ成形 底部は回転ヘラ切り離し。周縁を回転ヘラ削り。	砂粒（やや大粒）を含む 普通 青灰色	

4	坏 土師器	⅙	(11.7) (7.9) 4.15	ロクロ成形 底部～体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒少ない 良 黒褐色～褐色	
5	坏 土師器	⅔	(13.45) 9.2 4.15	ロクロ成形 底部～体部下端回転ヘラ削り。	砂粒を多く含む 普通 茶褐色	
6	坏 土師器	⅙	(11.5) (8.45) 4.3	ロクロ成形 外面・内面共成形のあと軽いヘラナデ。 底部は手持ちヘラ削り。	砂粒が少ない 良 明褐色 墨書あり	

007号住居跡（第28図，図版14）

1，2は甕である。1は張りのない胴部から口縁が広く開き口唇部が小さくつまみ出される。2は口縁部と胴部の境にわずかに稜をもち，口唇部は外方につまみ出される。

3，4，6は坏である。3，4は丸底に近い底部から内湾ぎみに立ち上がり口縁部でやや直立する。内面はナデ調整される。6は大きめの坏で，丸みのある体部からそのまま口縁へと至る。

5は須恵器の坏である。底部と体部との境がややあまく，口縁部は直線的に外反する。底部は手持ちヘラケズリがされる。

7～11は鉄製品である。7は鎌で，切先の部分が失われている。現存長95㎜，幅27～16㎜，厚さ3㎜，返しの高さ8.5㎜をそれぞれ測る。8は刀子。身の一部から切先まで遺存している。現存長68㎜，厚さ4㎜，幅9㎜を測る。11は片箭式の鉄鏃で身と茎被の一部が遺存している。現存長79㎜，身幅12～8㎜，厚さ3.5㎜，茎被の厚さ3㎜を測る。9は幅広の偏平な製品で，錆化が著しいため用途不明である。10は先端が丸く造り出されている製品であるが，用途不明である。

008号住居跡（第28図）

1は甕である。くの字状に外反する口縁部から口唇部が垂直につまみ出される。

2は坏である。内湾ぎみに立ち上がる口縁部で，口唇部が小さく屈曲する。体部はヘラ削りされる。

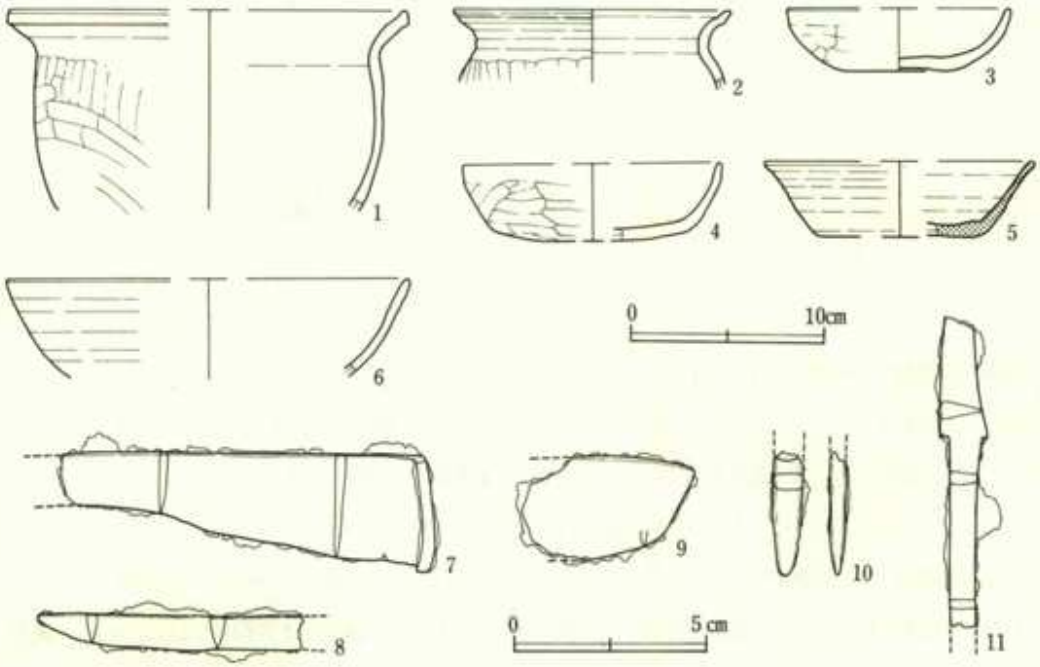
009号住居跡（第29図，図版14）

1は甕である。張りのある胴部から口縁が緩やかに外反する。口唇部は小さくつまみ出される。

2，3は坏である。2は丸底に近い底部から体部が内湾ぎみに立ち上がり，そのまま口縁へと至る。内面はヘラミガキが施される。3は口縁部がわずかに外反し，口唇部で尖りぎみとなる。

4，5は須恵器の坏である。底部と体部との境がややあまく，直線的に口縁部へと立ち上がる。底径と口径との差はあまりない。4は底部のみ手持ちヘラ削り，5は底部と体部下端が手

007号住居跡



008号住居跡

第28図　007・008号住居跡出土遺物実測図（1/4 ・ 1/2）

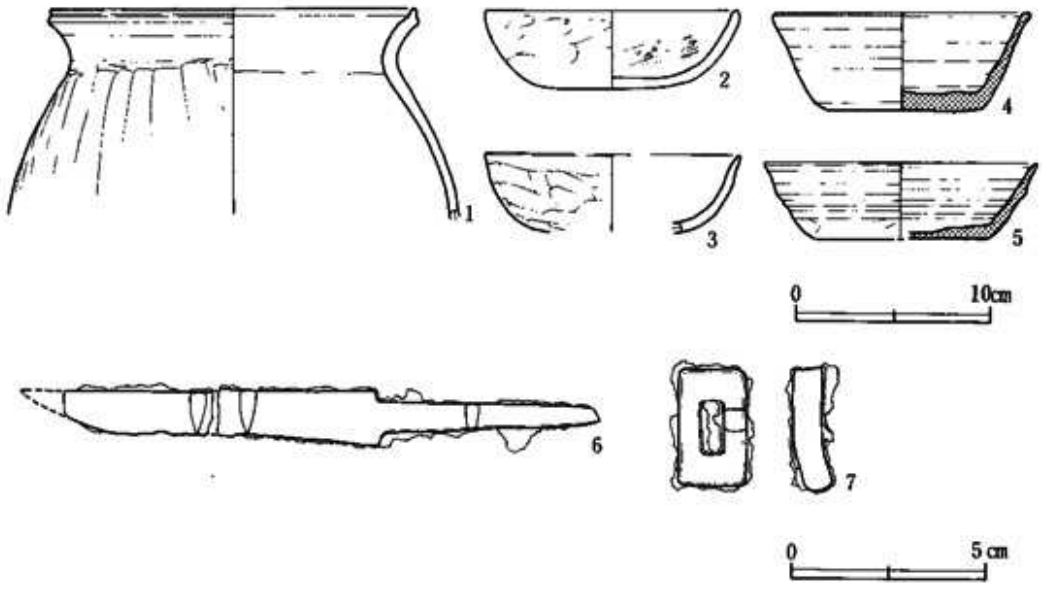
第８表　００７号住居跡出土土器

挿図番号	器種	遺存度	法量(cm) 口径 底径 器高 ( )は推定 〈 〉は現存高	成形・調整の特徴	胎土 焼成 色調他	図版番号
28図 1	甕 土師器	破片口縁約½	(20.4) 胴部 (17.9) 〈10.35〉	外面，胴部は縦～横のヘラ削り。	砂粒やや多い 普通 赤茶色（茶褐色に近い）	
2	甕 土師器	口縁部⅓	(14.4) —— 〈3.76〉	外面，胴部は縦方向ヘラ削り。	砂粒を含む 良 褐色，一部黒斑あり	
3	坏 土師器	⅓	(11.6) 6.0 3.3	口縁部は内・外面ともヨコナデ。 体部から底部をヘラ削り。	砂粒少なく密 良 黒褐色	
4	坏 土師器	⅓	(13.6) (9.9) 4.0	外面，体部から底部をヘラ削り。 口縁部及び内面はヨコナデ。	砂粒少なく密 普通 赤褐色	

5	坏 須恵器	⅓	(13.9) 8.5 3.9	ロクロ成形 底部回転ヘラ削り。	雲母，大粒の砂粒をわずかに含む 良 灰褐色	
6	坏 土師器	⅓	(18.8) —— 〈4.95〉	ロクロ成形 内，外面ともに赤彩を施す。 口縁部は内・外面ともヨコナデ。	砂粒少なく密 良 赤褐色	

第9表　００８号住居跡出土土器

挿図番号	器　種	遺存度	法　量(cm) 口径 底径 器高 ( )は推　定 〈 〉は現存高	成形・調整の特徴	胎　土 焼　成 色　調他	図版番号
28図 1	甕 土師器	口縁部 ⅓	(15.4) —— 〈3.8〉	口縁部稜の下に輪積み痕残る。 胴上部は縦方向のヘラ削り。 器面は荒れていて剥落が目立つ。	砂粒を含む 普通 茶褐色	
2	坏 土師器	口縁部 ¼	(12.4) —— 〈3.15〉	外面，体部はヘラ削り。 内面はナデ。 口縁部は内・外面ともヨコナデ。	砂粒を含む 良 茶褐色	



第29図　009号住居跡出土遺物実測図（1/4・1/2）

第10表　００９号住居跡出土土器

挿図番号	器種	遺存度	法量(cm) 口径 底径 器高 ( )は推定 〈 〉は現存高	成形・調整の特徴	胎土 焼成 色調他	図版番号
29図 1	甕 土師器	口縁～胴上半部	18.8 —— 〈10.4〉	外面，胴部縦方向のヘラ削り。 内面，横方向のヘラナデ。 口縁部は内外面ともヨコナデ。	ごく細かい砂粒を含むが全体に少ない。 普通 茶褐色	14
2	坏 土師器	完形	13.3 —— 3.97	口縁部は内，外面ともヨコナデ。 外面は体部から底部ヘラ削り。 内面はヘラミガキ（斜方向）， 全体に外面側の器面の剥落が著しい。	ごく細かい砂粒を含む 良 黄褐色	14
3	坏 土師器	¼	(13.3) —— 〈3.97〉	口縁部は内，外面ともヨコナデ。 体部から底部はヘラ削り。 内面はヘラミガキ。 内面は器面の剥落あり	ごく細かい砂粒を含む 良 褐色～茶褐色	
4	坏 須恵器	¾	13.3 8.2 5.0	ロクロ成形 底部，手持ちヘラケズリ。 器面全体が磨り切れている感じを受ける。	やや大粒の砂粒わずかに含む やや不良 灰白色	14
5	坏 須恵器	⅓	(14.2) (8.9) 3.85	ロクロ成形 底部から体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒，わずかに含まれる 良 灰褐色	14

持ちヘラ削りされる。

６，７は鉄製品である。６は刀子。切先の先端を欠く。茎はほぼ完存しているが目釘穴はない。２つに折れて接合はしないが同一製品と思われる。身幅14～11㎜，厚さ４㎜，茎幅８～５㎜，厚さ3.5㎜を測る。７は用途不明品。錆のためわずかに反っている。31×17㎜の長方形で中央に長方形の孔があけられている。厚さは７㎜である。締金具の一種であろうか。

010号住居跡（第30図，図版14）

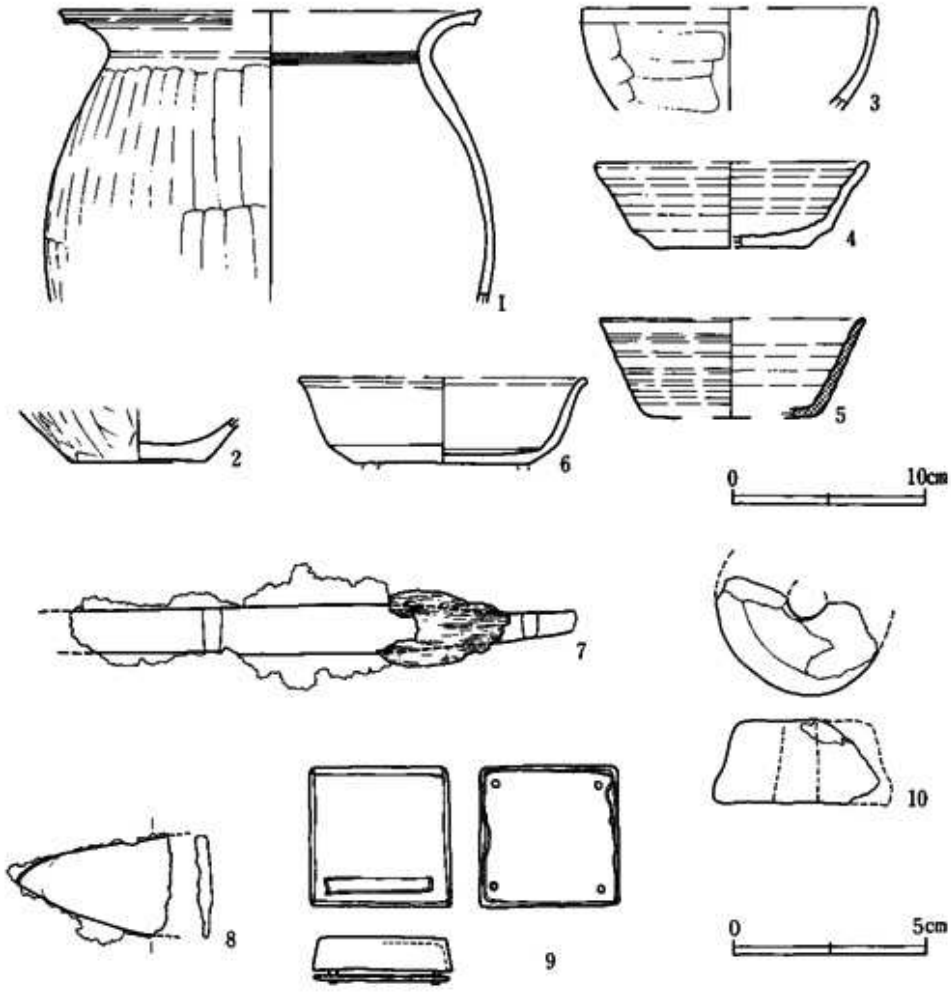
１は甕である。張りのある胴部から口縁部が大きく外反する。口唇部は水平に近く開きわずかにつまみ出される。胴部は縦位のヘラケズリがされる。２は甕の底部である。

３～５は坏である。３は体部が内湾ぎみに立ち上がり，口縁部下端に稜をもつ。口唇部は小さく内傾する。４は平底の底部から体部下部で強く屈曲して直線的に口縁部へと至る。

５は須恵器である。体部から直線的に口縁へと立ち上がる。口唇部は小さく外反する。

６は高台付坏である。高台は失われているが，底部に痕跡が明瞭に残る。体部下端に稜を有し，口縁部で外反する。底部と体部下端は回転ヘラ削りである。

７，８は鉄製品である。７は刀子に似た形状を示すが刃部は造り出されていない。基部に木質が遺存しているがその用途は不明である。現存長131㎜，幅11～５㎜，厚さ４㎜前後を測る。



第30図　010号住居跡出土遺物（1/4・1/2）

8は，先端が三角形状に造り出された鉄片で，片側が刃部のように観察できるが，錆ぶくれのためその形状を明らかにし得ない。鎌の刃先の可能性が考えられる。

9は銅製の銙帯具で巡方である。正方形で一辺に長方形の透し穴があく。裏金具も遺存しており4隅を鋲で留められる。全体に遺存状態が良い。縦，横とも36mm，高さ11.5mm，銙の厚さは1.5～2mmで鋳造されている。裏金具の厚さは1.5～1mmである。

10は土製の紡錘車で1/2が残っている。径は推定で45mm，厚さ22mmを測る。

011号住居跡（第31・32図，図版15・16）

1～3は大形の甕である。大きく張りのある胴部から口縁部が湾曲するように外反する。胴部と口縁部との境に明瞭な稜を有する。

5～8は小形の甕である。5は完形で口縁部に成形に歪みが生じている。胴部は球形に近く

第11表　０１０号住居跡出土土器

挿図番号	器種	遺存度	法量(cm) 口径 底径 器高 ( )は推定 〈 〉は現存高	成形・調整の特徴	胎土 焼成 色調他	図版番号
30図 1	甕 土師器	口縁～ 胴部	(21.7) 胴部 23.3 〈15.1〉	外面は縦方向ヘラ削り。 口縁部は内・外面ともヨコナデ。	細砂粒を含む 普通 にぶい赤褐色	14
2	甕 土師器	底部	—— 7.1 〈2.80〉	胴下半～底部，ヘラ削り。	白っぽい砂粒を含む 普通 褐色	
3	坏 土師器	⅙	(15.0) —— 〈5.2〉	口縁部は内・外面ともヨコナデ。 体部はヘラ削り。 内面はナデ調整。	砂粒を若干含む 良 茶褐色	
4	坏 土師器	¼	(14.2) (7.9) 〈4.4〉	ロクロ成形 口縁部内・外面ともヨコナデ。 底部は手持ちヘラ削り。 体部にロクロ目。	砂粒を含む 良 橙褐色	
5	坏 須恵器	⅙	(13.7) (8.4) 5.08	ロクロ成形 底部回転ヘラ切り離し。	やや大粒の砂粒をわずかに含む やや不良～全体に甘い 灰白色	
6	高台付 坏 土師器	⅓	(15.1) 坏部 9.2 〈4.4〉	ロクロ成形 体部下端は回転ヘラ削り。 底部は回転糸切り後回転ヘラ削り。 高台は欠くが痕跡が認められる。	砂粒を含む 良 茶褐色	14

膨む。6はやや肩の張った器形で口縁部は小さく外反する。8は胴部の張り方が小さく，上端に弱い稜が認められる。

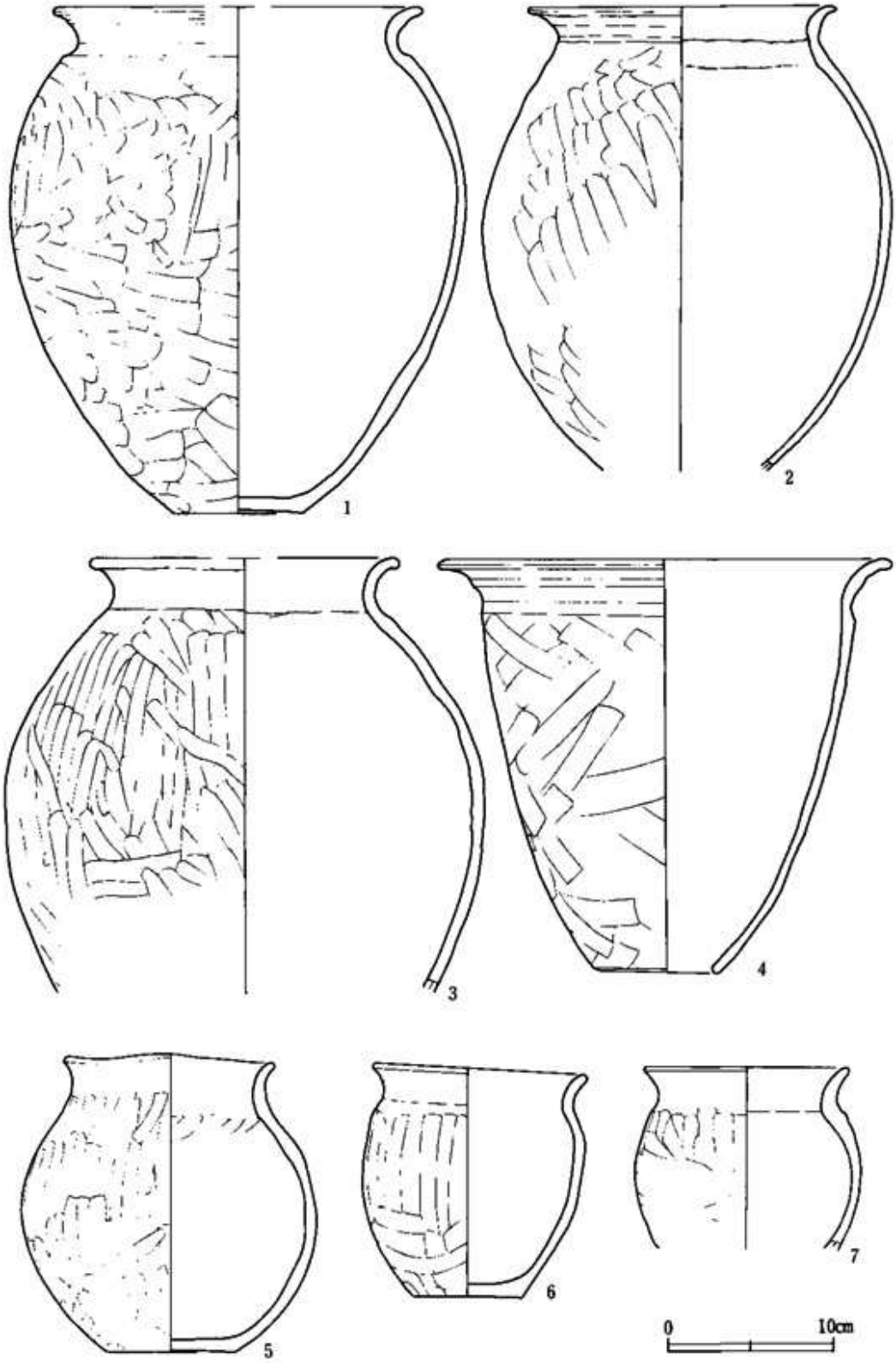
4は甑である。緩やかに内湾して立ち上がる胴部から口縁部が大きく外反する。口唇部は水平に近い開き方である。口縁部と胴部との境に稜を有する。

9は坏である。丸底で体部が内湾して立ち上がり口唇部で直立ぎみとなる。

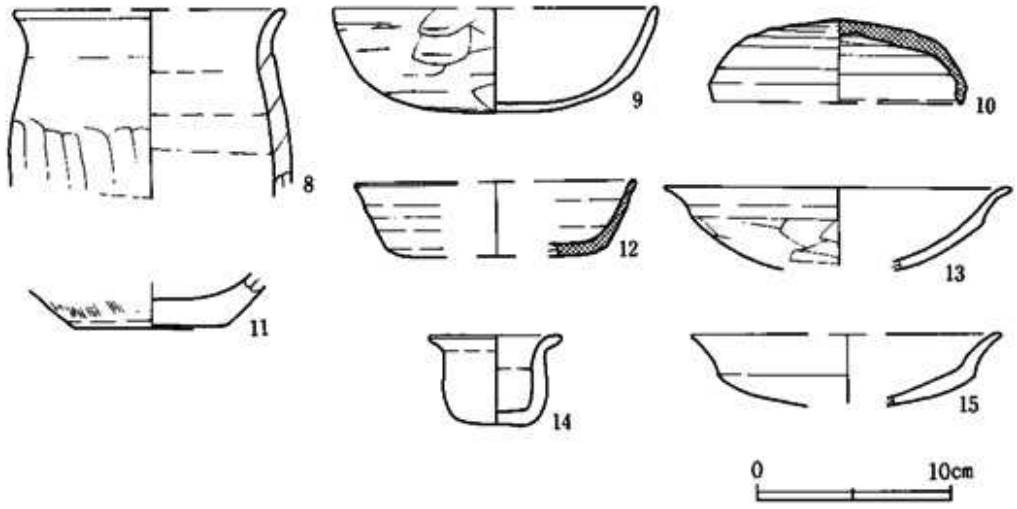
10，12には須恵器の坏である。10は蓋で天井部がやや高く口唇部は内傾する。胎土は砂粒を含むが緻密である。12は底部と体部との境がややあまく，直線的に口縁部に至る。底部は回転ヘラケズリである。10と対照的に胎土に大粒の砂粒をふくみ粗い感じである。

13，15は高坏の坏部である。体部で強く明瞭な稜を有し，口縁部は大きく外反する。内面は内黒となりヘラミガキ，外面は赤彩されている。

14は丁寧なつくりの手捏土器である。内外面に赤彩を施される。



第31図　011号住居跡出土遺物実測図（1）(1/4)



第32図　011号住居跡出土遺物実測図（２）(1/4)

第12表　０１１号住居跡出土土器

挿図番号	器種	遺存度	法量(cm) 口径 底径 器高 ( )は推定 〈 〉は現存高	成形・調整の特徴	胎土 焼成 色調他	図版番号
31図 1	甕 土師器	口唇部 ⅙ 胴部⅔	(22.2) 7.7 30.4 胴部 27.5	胴部上⅙はヘラ削りの後ヘラナデ。 以下はヘラ削り	小石・白っぽい砂粒を含む 普通 茶褐色	15
2	甕 土師器	¾	18.7 胴部 24.9 〈27.8〉	外面は胴部ヘラ削り 口縁部は内・外面ともにヨコナデ。	白っぽい砂粒 やや不良 黄褐色～暗褐色	15
3	甕 土師器	口縁～ 胴下半 部 ⅓	(18.7) 胴部 (29.1) 〈25.75〉	外面は胴部ヘラ削りの後部分的にナデ調整。 内面はヘラナデ（入念である）	白砂粒を含む 良 茶褐色	15
4	甑 土師器	⅚	27.5 7.02 24.5	外面、胴部ヘラ削りの後ていねいなヘラナデ。 内面、横方向のヘラナデ。	白っぽい砂粒多い 良 茶褐色	15
5	甕 土師器	口縁～ 胴部約 ⅚	12.75 7.7 12.6 胴部 17.8	外面、胴部ヘラ削り。 内面、ナデ	白っぽい砂粒を多く含む 普通 茶褐色	15
6	甕 土師器	ほぼ 完形	13.8 胴部 13.5 6.7 13.8	外面は胴部ヘラ削り。中位まで縦、中位以下横方向。 口縁部は内・外面ともヨコナデ。	白砂粒多く含む 普通 茶褐色	15
7	甕 土師器	胴上半 ½	12.3 胴部 13.5 〈10.8〉	外面、胴上半縦方向ヘラ削り。 下半斜め横方向ヘラ削り。	白っぽい砂粒を多く含む 良 暗褐色	

32図 8	甕 土師器		—— (14.6) ——	内面ナデ。 外面，上半部ヨコナデ。 下半部ヘラ削り。	緻密，砂が少ない 良 茶褐色 土器の断面内部は灰色	
9	坏 土師器	⅓	(17.0) —— 5.4	外面，口唇部ヨコナデ。 体部から底部ヘラ削り。 内面ナデ。	砂まじり 良 赤褐色	16
10	坏蓋 須恵器	½	(13.4) —— 9.3	左回転，ロクロ成形	緻密，砂粒を含む 良 内・外共灰色	16
11	甕 土師器	底部	—— 8.0 ——	底部木葉痕有り。	長石，砂粒を含む 良 褐色	
12	坏 須恵器	約⅓	(14.7) (8.45) 3.85	ロクロ成形 底部回転ヘラ切り離し。	大きめの砂粒を含む 普通 青灰色	
13	高坏 土師器	坏部の ¼	18.0 —— ——	内面，ヘラミガキ 外面，上半部ヨコナデ。 下半部ヘラ削り後ナデ。	砂を含む 良 内，黒外，赤彩	
14	小型 土器 土師器	完形	7.0 —— 4.5	内・外面ともヨコナデ。 手捏ね	砂が多くもろい 良 赤彩（内・外）	16
15	高坏 土師器	坏部の ⅓	(16.0) —— ——	内面ヘラミガキ 外面上半部ヨコナデ。 下半部ヘラ削り後ナデ。	砂，長石を含む 良 内，黒。外，赤彩	

2.グリッド出土の遺物

本項では，遺構外の出土遺物を取り扱う。遺跡全体からみると5区及び7区に須恵器，土師器が割合多く出土している。特に5区では第36図が示した坏のうち3と4，5，6がそれぞれ重なり合って5C－15グリッドより出土し，また013号跡（ピット）上面より坏13が出土している。これらは遺構との関連が充分考えられるところであるが，付近より遺構が検出されなかった為グリッド出土遺物として一括して取り扱った。

縄文時代の遺物は5区，6区に多く出土しているが表土層に混入しており遺構の存在を推定しうるような状況ではない。

(1) 縄文式土器

本遺跡において出土した縄文式土器は早期前半から後期に比定されるものであるが，文様などの特徴によって大きく第Ⅰ群から第Ⅳ群に分類して説明を加えることにする。

第Ⅰ群土器（第33図，1～19，図版18）

縄文時代早期前半の撚糸文系土器を一括する。

1，2は口唇部が肥厚して外反し，文様帯を有するものである。1は口唇に羽状縄文を施

し，頸部以下撚りの異なる縄文を方向を変えて施文している。原体はＬＲおよびＲＬである。

２は頸部が無文帯となり口唇部断面は角頭状となる。原体はＲＬ。

３は口唇が肥厚してわずかに外反する。口唇部より原体ＬＲの縄文を施している。

４～８はほぼ直立する口縁部となり，口唇部や下から縄文が施文される土器である。口唇部はわずかに肥厚している。施文原体は６がＬＲ，４，５，７，８がＲＬである。

９はほぼ直立する口縁部で無文となる土器である。

10～15は撚糸文の施される口縁部で，10，11，13は口唇部で肥厚している。10は原体Ｌの撚糸を方向を変えて施文している。他の施文方向は一方向で，11はＬ，12～15はＲの施文原体を施している。

16，17，19は胴部破片である。16は原体ＲＬの縄文が施文されている。17，19は撚糸文が施文されるが，19は周縁が研磨され円板として利用された土器片で，横と縦に方向を変えて施文されている。原体はＲである。

18は底部破片である。原体Ｒの撚糸文が施文されている。

以上のＩ群土器は胎土に細砂粒，長石粒をわずかに含み，焼成は全体に甘い感じである。色調は褐色，明褐色を呈している。

第II群土器（第33図20～22，図版18）

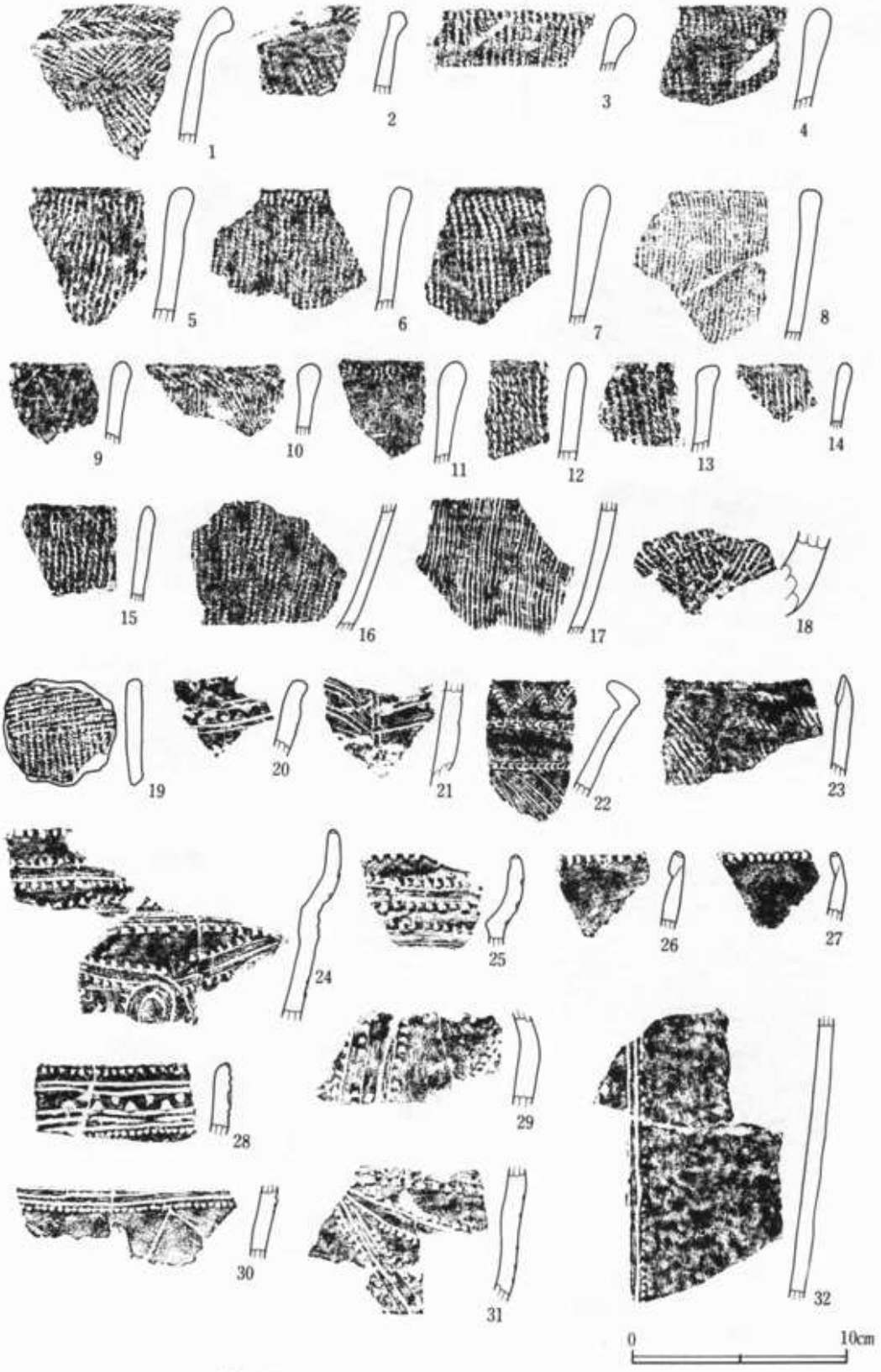
本群は縄文時代前期の土器を一括する。３点とも胎土に繊維を混入しているのが特徴である。

20は平縁の口縁部で，わずかに外反している。半截竹管により，肋骨文が施文された胴部破片である。22は口縁部が鋭く内傾する土器で，口縁部には鋸歯状に，胴部との境には無文帯をはさんで横方向２列に押引文を施し，以下斜方向に条線文が加えられている。20，21は色調が褐色で，胎土が粗いのに対し，22は色調が明褐色，胎土が密である。

第III群土器（第33図23～32，第34図33～35，第35図51，図版18・19）

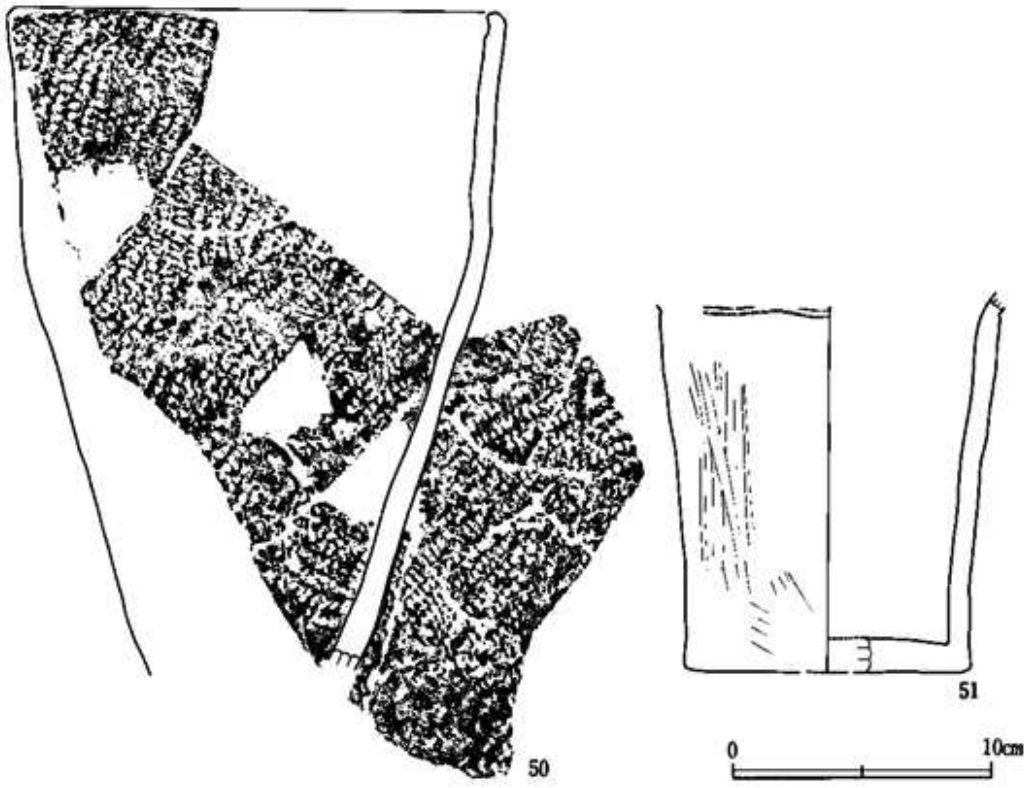
本群は縄文時代中期の土器を一括する。

24は湾曲して立ち上がる口縁部である。口唇部に刻目が入り，以下平行沈線とその外縁に沿って列点文が施される。胴部では同心円状に沈線が画かれる。胎土に砂粒を含み，色調は褐色を呈する。焼成はやや甘い感じである。25，30，31は同一個体の破片で，沈線が斜めに入るものも認められる。28は直立する口縁部で口唇部に細かい刻目が入る。２条に横走する平行沈線間は交互に竹管を刺突することによって鋸歯状文を表出している。沈線下端に沿って細かい列点文が施される。胎土には砂粒を混入し，色調は褐色を呈する。29，32は平行沈線の外縁に沿って細かい列点文が入る。器面の成形は丁寧である。26，27は口唇部に刻目が入り，以下無文となる小破片で，口唇部が内側に折り返えされている。刻目の特徴，胎土の特徴が24等に似ている為，本群に一括した。中期初頭に位置づけされる土器であろう。33はわずかに内湾する



第33図　グリッド出土縄文式土器拓影図(1)(1/3)

第34図　グリッド出土縄文式土器拓影図(2) (1/3)



第35図　グリッド出土縄文式土器実測拓影図(3)（1/3）

口縁部で，口唇部に列点文，無文部を挟んだ隆線上に刻目を施し，さらに横走する平行沈線の間に，波状の沈線を施文している。胎土は砂粒を含むが緻密である。34は平縁の口縁部である。口唇部の隆帯とその下端の弧状に配された隆帯に沿って，平行あるいは鋸歯状に連続する押引文が施される。胎土に若干雲母粒を含み，色調は黒褐色を呈する。35はやや内傾するキャリパー状の口縁部から胴部上端の破片である。口縁部は棒状工具による刺突が外面２カ所，内面１カ所され，沈線によって左右対称の渦巻文が施文される。胴部は逆U字状に沈線が垂下し，区画内に縄文が施文される。胎土に砂粒を含み，色調は褐色を呈する。51は胴部下半～底部破片で上端に横方向の浅い沈線が認められる。以下幅のせまい工具で丁寧にナデ調整がされる。底部は平底で直立して立ち上がる。胎土，焼成が32に類似している。

第Ⅳ群土器（第34図36～49，第35図50，図版19）

本群は縄文時代後期の土器を一括する。

36は口縁部把手である。内側に沈線による渦巻文と刺突文を配し，側面に穿孔している。

37～39は波状口縁で，口縁上端に沈線がめぐり，沈線間に列点文が施される。39は渦巻状に沈線が施される。胎土に細砂粒をわずかに含み，色調は褐色を呈する。40は口縁部が内湾する浅鉢で原体ＬＲの縄文が前面に施文されている。胎土に細砂粒をわずかに含む。41～43，44は

縄文を地文として押捺のある紐線文を有する土器である。このうち，41，44は条線文が加えられている。縄文は全体に粗い撚りで原体はＬＲである。45は縄文を地文として横走する３条の沈線を短い縦の刻目で区画している。縄文はＲＬである。46～48は沈線によって縄文帯と磨消縄文を区画し，２条ないし１条の連続刺突文が加えられる。器厚は薄手で，胎土に細砂粒を若干含む。全て単節のＲＬ縄文である。49は縄文を地文として太い沈線で意匠文を施している。沈線内は磨消縄文となる。縄文は細かく密集して施文方向を変えている。原体はＬＲである。50は前面に縄文が施文される。深鉢である。縄文は粗く原体は単節のＬＲである。内側の調整は丁寧で，胎土に細砂粒をわずかに含み，色調は褐色を呈する。

(2) 土師器，須恵器（第36図，図版16・17）

１，２は甕である。１は大きく張りのある胴部から，くの字状に小さく口縁部が外反する。口唇部はわずかにつまみ出される。２は底部から胴部下端であるが，色調，胎土，焼成及び成形の特徴が１に良く似ており，同一個体の可能性が考えられる。

３～７，11～14は土師器の坏である。３～７，12，14は体部で弱く屈曲して口縁部が外反する。６は口縁の外反が少なく直線的に開く。11は箱形に近い器形で底径と口径の差があまりない。底部および体部下端は回転ヘラ削りされ，墨書「午」が底部にみえる。底部は周縁部手持ちヘラ削りするものと（３），全面手持ちヘラ削りのもの（４～７）があり，体部下端はすべて，手持ちヘラ削りである。13は口縁部が外反せず逆台形状の器形を呈する。体部下端と底部周縁部を手持ちヘラ削りする。18は須恵器蓋で，つまみは中央部がわずかに突出し，口縁端部の内側にかえりを有している。偏平な器形である。９，10は須恵器高台付坏である。短い高台の開きは少なく，体部下端で強く折れ曲り口縁部へと至る。口唇部でわずかに外反する。15は高坏の脚部で八の字に開いて底部で屈曲する。17，18は坏，体部に墨書の書かれた破片である。18は「本申」であろうか。17もこれに近い字だと思われる。

(3) 石器，土製品

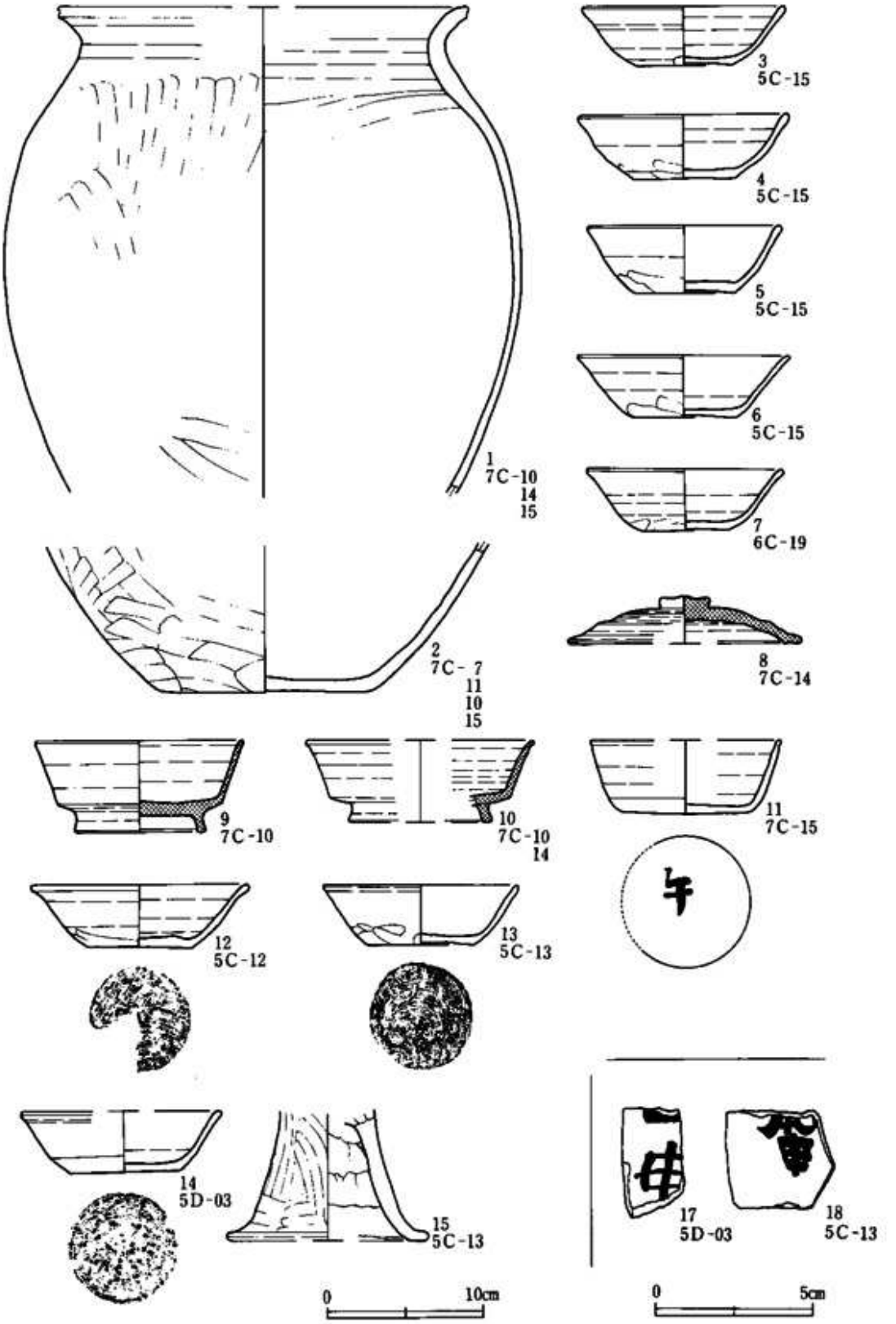
尖頭器（第37図１・２，図版20）

両者とも有茎のものである。１は基部および先端部を欠失している。両面を丁寧な剝離によって調整しており，先端部はわずかに湾曲させてる。石材は頁岩で，現存長は52.35㎜である。

２は完形である。これも両面調整で，丁寧な剝離がされている。頁岩製で全長33.7㎜である。

石鏃（第37図３・４，図版20）

３は，大形の石鏃で先端部を欠失している。基部の抉りが大きく，全体の形状は二等辺三角形になる。やや粗い調整である。現存長40㎜である。４は有茎鏃で，やや幅広である。薄手で周縁と基部を入念に調整している。全長18.9㎜である。石材は３が安山岩，４が頁岩である。

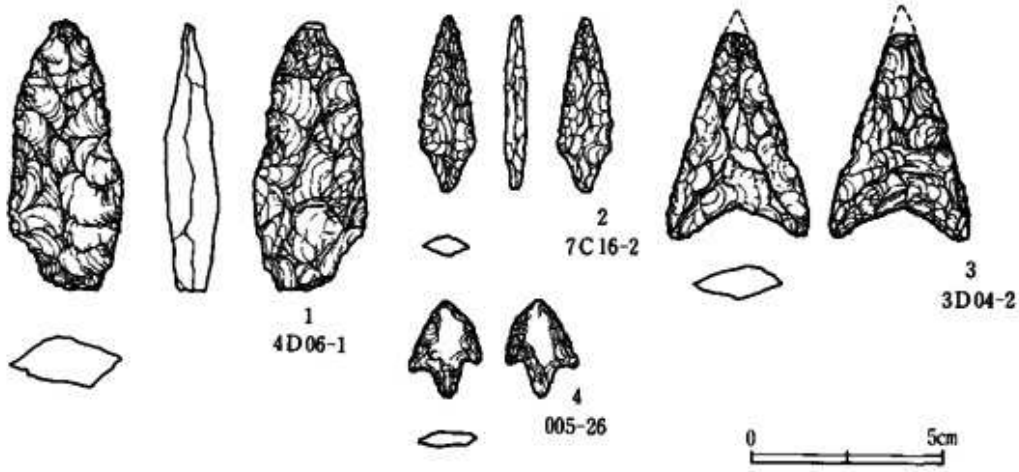


第36図　グリッド出土遺物実測図(1/4・1/2)

第13表　グリッド出土土器

挿図番号	器種	遺存度	法量(cm) 口径 底径 器高 ( )は推定 〈 〉は現存高	成形・調整の特徴	胎土 焼成 色調他	図版番号
36図 1	甕 土師器	口縁～胴下半 ⅙	(26.4) 胴部 (33.2) 〈30.5〉	外面ヘラ削りの後ヘラナデを行うが全体に器面の剝落があり整形痕は部分的でしかない。 内面，ヘラナデ（入念である）	白色砂粒を含むが混入度は少ない 良 黄褐色，胴部は部分的に黒色を呈する	
2	甕 土師器	胴下半～底部 ⅓	13.5 〈9.2〉	外面，ヘラ削り。 内面，ヘラナデ。	砂粒含む 良 黄褐色～褐色	16
3	坏 土師器	完形	13.1 6.15 3.9	右回転，ロクロ成形 底部，回転糸切りの後周縁を手持ちヘラ削り。	長石，白砂粒を含む 良 黄褐色	16
4	坏 土師器	完形	13.54 6.45 4.15	右回転ロクロ 体部下端～底部手持ちヘラ削り。	白っぽい砂粒を含む 良 橙褐色	16
5	坏 土師器	½	12.4 6.3 4.15	右回転ロクロ成形 体部下端～底部手持ちヘラ削り。	長石，白砂粒を含む 普通 橙褐色	16
6	坏 土師器	⅔	12.5 5.5 4.05	右回転ロクロ成形 底部～体部下端手持ちヘラ削り。	白色砂粒を含む 普通 黄褐色	16
7	坏 土師器	⅔	13.54 6.7 3.9	ロクロ成形 体部下端～底部手持ちヘラ削り。	白色砂粒を含む （小石なども） やや不良 黄褐色	16
8	坏蓋 須恵器	⅙	12.8 —— 2.95	ロクロ成形	やや多めに砂粒を含む 石英も含む やや不良 淡黄褐色一部黒褐色（つまみの部分）	17
9	高台付坏 須恵器	口縁～体部⅓ 台は完存	13.3 坏部 10.5 台部 8.4 5.75	ロクロ成形	大粒の砂粒わずかに含む 良 濃灰色	17
10	高台付坏 須恵器	口縁～底部⅓	(14.7) 坏部 11.6 台部 9.2 5.15	ロクロ成形	大粒の砂粒わずかに含む 良 青灰色	
11	坏 土師器	底部⅔ 体部⅓	12.1 8.16 4.6	右回転ロクロ 底部回転ヘラ切り離し。 体部下端回転ヘラ削り。	砂粒を含む 普通 黄褐色	

12	坏 土師器	½	13.85 6.7 4.05	右回転ロクロ成形 底部回転糸切りの後周縁を手持ちヘラ削り。 体部下端手持ちヘラ削り。	白色砂粒を含む しまりのないやや甘い感じ 良 すすんだ赤褐色	16
13	坏 土師器	ほぼ 完形	12.5 6.8 3.75	右回転ロクロ成形 底部周縁回転糸切りの後手持ちヘラ削り。	雲母片，白砂粒を含む 良 橙褐色	16
14	坏 土師器	口縁～ 体部½	12.9 7.15 3.9	右回転ロクロ成形 底部回転ヘラ切り離し。 体部下端回転ヘラ削り。	長石，白色砂粒を含む 普通，器面にザラつきあり 黄褐色	17
15	高坏脚 土師器	脚据部 ⅛	—— (12.9) 〈8.15〉	外面，縦方向のヘラ削りの後斜め横方向のヘラナデ。 外面は赤彩を受ける。	砂粒を含む密 良 (外，赤褐色 内，黄褐色	15



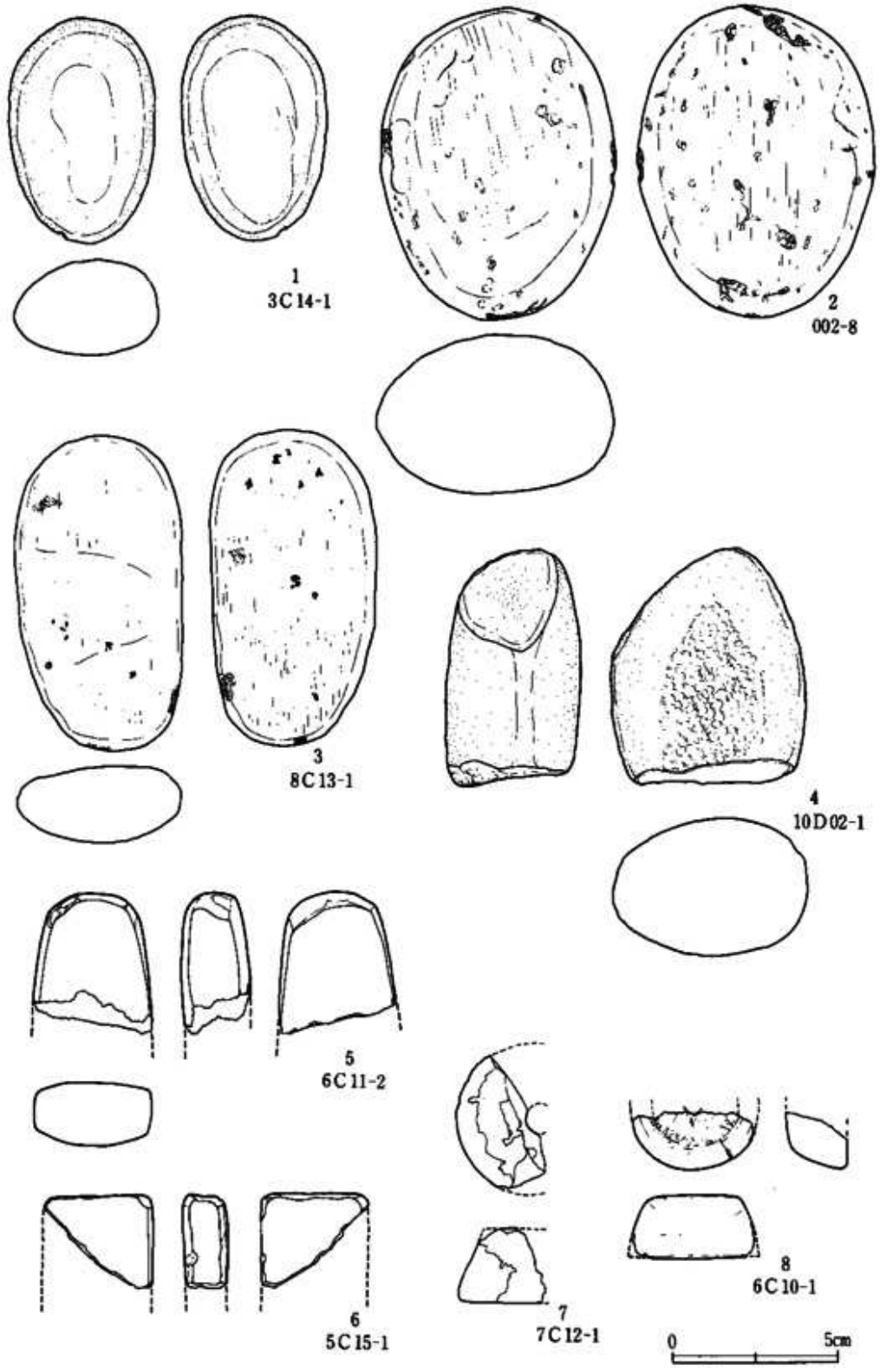
第37図　グリッド出土の石器実測図(2/3)

磨石（第38図1～4，図版20）

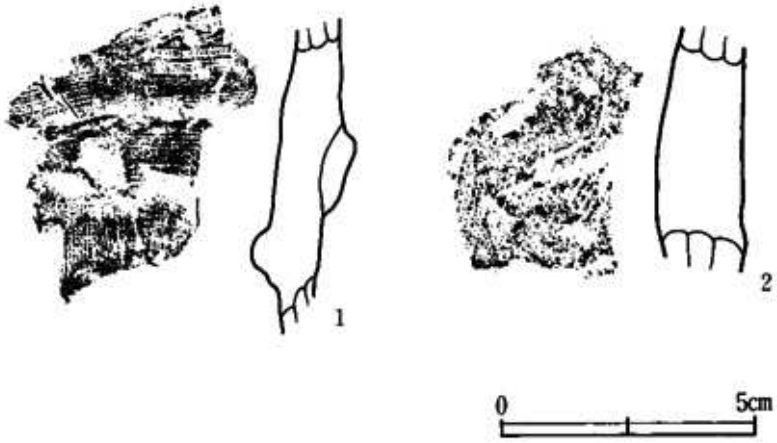
1は小形の礫を利用したもので，両面の中央部が特に磨られている。2は拳大の丸みのある礫で両面とも全体に磨られている。幅のせまい側縁は部分的に敲打痕が認められる。3は偏平な礫で全面を利用している。4は，敲石としても利用しており，偏平な面の中央部に痕跡が認められる。石材は，1，4が砂岩，2は閃緑岩，3は石英斑岩である。

石斧（第38図5，図版20）

刃部を欠失している。頭部から側縁も良く研磨され，光沢を帯びている。石材はチャートである。現存長41mmである。



第38図　グリッド出土の石器，紡錘車実測図(1/2)



第39図　グリッド出土埴輪拓影図（2/3）

砥石，紡錘車（第38図6～8，図版20）

6は砥石の欠損品である。偏平で定形化している。使用痕は少ない。凝灰岩製である。

7は土製の紡錘車である。約2/3を欠失している。推定径は45mm前後である。

8は石製の紡錘車で約1/2を欠失している。頭部は放射状の研磨痕が認められる。石材はチャートである。推定径40mm前後である。

埴輪（第39図1・2）

破片2点が出土している。出土グリッドは調査区の南端にあたる9D区である。1は凸帯の部分で，内面には巻き上げ痕が残っている。調整は外面が横方向の刷毛目，内面は，ナデ調整がされている。2は外面に斜方向の刷毛目調整が認められる。胎土に砂粒，長石を含み，粗い質である。色調は黄褐色を呈する。

第４項　小　結

本遺跡の調査は，台地平坦部を南北に横断するきわめて限定された範囲の中での調査であった。検出された遺構は先土器時代の石器集中箇所１カ所，古墳時代から奈良・平安時代の住居跡11軒，ピット群１カ所，ピット１基であった。

先土器時代

先土器時代では６Ｄ－05グリッドにおいて剥片14点が第二黒色帯に相当する層を中心として検出された。いずれも不定形な剥片でチャート，安山岩，頁岩を母岩として任意に剥離されたものであり石器は出土していない。本ブロックは遺物の出土範囲から推定すると調査区西側に広がる可能性をもつことが考えられる。

縄文時代

縄文時代に伴う遺構は確認されていない。表土層より６区，７区を中心として早期撚糸文系土器群，前期黒浜式，中期五領ヶ台式，阿玉台式，後期称名寺式，堀之内式，加曽利Ｂ式の土器片が出土している。早期撚糸文系土器群は本遺跡の西北木戸川を挟んで対岸の清水台遺跡より井草式，稲荷台式の資料が出土しているが本遺跡の土器群もこれに相当するものであろう。縄文式土器はいずれも破片で表土層出土という状況であるため，遺構の存在は確定できない。

古墳時代

古墳時代では住居跡１軒が検出されている。

011号住居跡が相当する。住居跡群中最も南端の台地縁辺に立地しており，規模はもっとも大きいものである。カマドを有し，柱穴，貯蔵穴の状況もこの時期に通有のあり方をしている。出土遺物は土師器の甕，甑，坏，高坏，須恵器坏がある。土師器坏の特徴は，丸底の底部から体部が内湾して立ち上がり，口縁部が直立ぎみとなる器形で，外面の調整はヘラケズリが施されている。須恵器坏蓋は器高が高く，内湾ぎみに口縁部に至り口唇部は内傾する器形で口唇部内面にしめが認められる。これらの特徴と，高坏，甕の形態の特徴を加えると，本住居跡の出土遺物は古墳時代後期鬼高期に相当し，鬼高式土器の細分によれば鬼高Ⅳ期に分類された土器群に類似するものである。なお住居跡出土遺物のうち須恵器坏12はより後出的な特徴を示す坏であるが，この遺物は住居内覆土第１層上面より出土していることから直接本住居跡に伴うものでないことを断わっておく。

奈良・平安時代

本遺跡の住居跡のほとんどがこの時期に相当する。数は011号住居跡を除く10軒である。限定された範囲の調査であり，かつ出土遺物の比較資料も多いものではないが，各住居跡に見られる土師器坏形土器の分類を中心にして時期的な位置付けをおこなうことにする。

土師器坏は形態的な分類により次のようになる。

A類　成形にロクロを使用せず，全体に器高がすくなく底径と口径の差が少ない坏。丸底に近い底部より内湾ぎみに体部が立ち上がり口唇部でわずかに直立する器形となる。調整は口縁部ヨコナデ，体部から底部が全面ヘラ削りされる。

B類　ロクロ成形で，底径と口径の差が少なく器高が高い坏。平底の底部より体部が直線的に開き口縁部へと至る器形で箱形に近い外観を呈する。体部下端と底部は回転ヘラ削りと手持ちヘラ削りされるものがある。

C類　B類に類似するが，口唇部がわずかに外反する坏。体部下端から底部は手持ちヘラ削りされる。

D類　底径と口径の差が少なく，かつ器高の少ない坏で，平底の底部から体部，口縁部へ直線的に開く器形のもの。ロクロ成形で，体部下端から底部は手持ちヘラ削りとなる。

E類　ロクロ成形で，口径と底径の差が2：1に近い坏で，体部で弱く屈曲して口縁部がわずかに外反する器形となるもの。体部下端から底部は手持ちヘラ削りがされる。

F類　E類に近いが体部の屈曲が強く口縁部が肥厚して外反する坏。体部下端から底部は手持ちヘラ削りされる。

G類　ロクロ成形で口径と底径の差はE類に近いが，体部から口縁部へ直線的に大きく開く坏。体部下端から底部を手持ちヘラ削りするものと回転糸切りのままのものがある。

以上7つに分類した坏は，住居跡ごとにみるといくつかの共伴するグループにまとめられる。各類に相当する坏はA類では005号住4，007号住2，009号住2がある。B類は006号住6でC類の坏4を伴う。010号住の6は高台を有すると考えられる坏であるが坏部の形態はC類に類似している。D類は002号住7及び003号住6が相当する。 E類は002号住5，003号住5，004号住8が相当する。F類は002号住6，003号住7が相当する。G類は002号住8，003号住4，004号住6，7等が相当する。これらを坏の変化からみるとロクロ未使用で丸底に近い底部を有する坏→ロクロ使用で口径，底径の差が少なく箱形に近い坏→ロクロ使用で口径，底径の差が2：1に近く，器形が分化するという特徴が認められ，時間的な変化として把えられる。この結果から住居跡群をⅠ期－坏A類を伴う005,007,009号住居跡。Ⅱ期－坏B，C類を伴う006，010号住居跡。Ⅲ期－坏D～G類を伴う002，003，004号住居跡の3つの群にわけることが可能である。なお001号住については坏の破片が出土しているが，形態がE類に類似すること，伴出した甕形土器の特徴などからⅢ期として考えたい。

次に坏の変化によりⅠ～Ⅲ期に大別した住居跡についてふれることにする。この時期に含めた住居跡は10軒である。平面形からみるとほぼ同じ形態の方形を呈しており，規格性が認められる。規模は一辺5～3.5mの住居跡が6軒，3.5m以下の住居跡が4軒である。住居の構造では柱穴が対角線上に4カ所とカマドの対面に1カ所配される住居が5軒，カマド対面に1カ所だけ柱穴をもつ住居が3軒，柱穴が検出されなかった住居が1軒となり，一辺3.5m以上では

柱穴を住居の四隅に配しており，それ以下では柱穴は１カ所あるいは無しという状況が認められる。カマドの構築状況では一辺3.5m以上の住居跡ではカマドの壁外への掘り方より袖部の住居跡内への張り出し方が概して大きく，一辺3.5m以下では逆に袖部の張り出しが小さく壁外への掘り方が大きいという特徴がみられる。カマドの遺存状況にもよるが，住居内の有効利用という点からみると，こうした特徴は当然のことのように思える。

この住居跡の規模，構造の差異を先にⅠ～Ⅲ期に区分した時期に対応するとⅠ期，Ⅱ期の住居跡では柱穴が四隅に配される一辺3.5m以上の規模をもち，Ⅲ期では柱穴がカマド対面に１カ所だけ配される一辺3.5m以下の住居跡へと変化している。住居跡の規模，構造からも時期的な変化が認められる結果となった。

最後にこれらのⅠ～Ⅲ期の年代についてふれることにする。年代を推定する資料としては須恵器坏と010号住居跡より出土した銙帯具が上げられるが数量的にも少なく，限定されたものであるため比較資料として土師器坏との関係から推定することにする。

住居跡内より出土した須恵器坏はⅠ期とした００７号住の５，００９号住の４，５，Ⅱ期とした００６号住の３，０１０号住の５がある。Ⅰ期の須恵器坏は口径と底径の差が少なく、器高が低いものと高いものが供伴している。底部と体部の境はやや甘いが明瞭で，体部より直線的に開き口縁部でわずかに外反する特徴を有している。底部調整は体部下端から手持ちヘラ削りをおこなうものと底部のみ手持ちヘラ削りをおこなうものがある。Ⅱ期では，平底で体部で弱く屈折し口縁が外反する器形となるもの，体部から直線的に開き口縁部に至る器形となるものがある。底部調整は回転ヘラ削りされ，器高が高い特徴を有している。伴出する土師器坏はⅠ期ではＡ類、Ⅱ期ではＢ，Ｃ類に分類した坏を伴っている。

Ⅱ期にあたる０１０号住居跡より出土した銙帯具は銅製の巡方である。この銙帯具は律令制に基づく官位に応じた服制に規定されたもので文献によりその使用年代が限定されている。銙が文献上最初にみえるのは慶雲四年（７０７）であり，特に養老令衣服令（７５７年施行）では位階に応じた使用の規制が最も整ったものとなっている。安部義平氏は銙帯と官位制について考察しているが，これによると本資料は烏油腰帯（くろつくりのようたい）にあたるものであり官人の中でも六位以下の下級官人または无位の無位の官人の制服に規定されていたものである。この銙帯の制は日本後記延暦十五年（７９６）に銅材を鋳銭に用いるため銙帯を禁ずるという記事がみられ禁止されることになり，銅製から石製の石帯が用いられるようになる。しかし大同二年（８０７）から弘仁元年（８１０）に至るまで石帯の使用が禁止されたため再び一時的に銅製の銙帯に復したことが認められる。これにより銙帯の使用年代は７０７年から７９６年，８０７年から８１０年に限定されるようである。

こうした銙帯具が集落跡から出土する例は多く知られているが本遺跡同様いずれも銙帯の使用状況を把握できるような出土例はなく，住居跡内に遺棄された状況で検出されている。

本遺跡においても住居跡のカマド袖部材の中から出土しており，この状況からみると銙帯具本来の持つ性格はすでに失われた段階とみるのが妥当であるが前述した使用年代との時間的な隔たりはさほどないものと思われる。

いっぽうこの銙帯具に伴出した須恵器坏の形態，特徴は公津原Loc．15遺跡出土の坏と類似しており，土師器坏も箱形に近い形態を呈することからシンポジウム資料の長内・越川編年のⅣ期に相当し，このことからも銙帯具の年代的なズレは少ないものと思われる。従って０１０号住居跡を含めたⅡ期の年代は８世紀後葉から９世紀初頭を考えたい。また，Ⅰ期は須恵器坏の平底化と底部調整を手持ちヘラ削りによる点，土師器坏では底部が丸底に近く全面ヘラ削り調整がみられることから８世紀中葉を中心とした年代を考えたい。Ⅲ期は須恵器の出土はないが土師器坏の形態の特徴と００３号住10の高台付坏の形態が布佐・余間戸遺跡，江原台遺跡出土の資料に類似すること等から９世紀末から10世紀前半の年代を考えたい。またグリッド出土の須恵器の中では第36図９，10の高台付坏のように印旛地域及び茨城県鹿ノ子Ｃ遺跡に多く出土しているものと類似する資料が認められる。

限定された資料をもとにⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期の年代を推定したが、以上により集落が古墳時代後期から奈良・平安時代を通じて営まれていたことが推察される。本地域は旧上総国武射郡にあたる地域であるが出土遺物の様相は旧下総国東部地域と共通性が認められるものが多く今後木戸川流域も含めた文化内容の検討が必要になってくると思われる。

引用・参考文献

阿部義平「銙帯と官位制について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編　昭51

天野　努他『八千代市村上遺跡群』房総考古資料刊行会　昭50

奥田正彦・伊藤智樹「小池地蔵遺跡」『主要地方道成田松尾線Ⅱ』（財）千葉県文化財センター　昭60

鬼高期研究グループ「房総における鬼高期の研究（研究編）」『日本考古学研究所集報Ⅳ』昭57

柿沼修平他『清水台－千葉県山武郡芝山町清水台№1遺跡発掘調査報告』清水台№1遺跡発掘調査会 昭55

亀田　博「銙帯と石帯」『考古学論叢』関西大学考古学研究室　昭58

斎木　勝他「妙福寺裏遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－成田地区』（財）千葉県文化財センター　昭60

白石竹雄・天野　努他『公津原Ⅱ』（財）千葉県文化財センター　昭56

白石　浩・榊原弘二『千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター　昭58

シンポジウム資料『房総における奈良・平安時代の土器』史館同人　昭58

高田　博他『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（財）千葉県文化財センター　昭55

高野博光他『布佐・余間戸遺跡』我孫子市布佐・余間戸遺跡調査会　昭56

松村恵司・石田広美・金子真土他『山田水呑遺跡』山田水呑遺跡調査会　昭52

萬崎博昭・奥田正彦他『主要地方道成田松尾線Ⅰ』（財）千葉県文化財センター　昭58

三浦和信他『吉高家老地遺跡』吉高家老地遺跡調査会　昭51

第３章　柳谷遺跡

第１項　調査の方法と概要

柳谷遺跡は，千葉県山武郡芝山町大里字柳台32－１他に所在する遺跡である。主要地方道成田松尾線の関連遺跡のうち最も北に位置し，道路建設計画の中でも基点となる地区である。

発掘調査は，昭和56年11月15日～昭和57年２月15日までの期間で実施した。調査対象は包蔵地2.500㎡と馬土手25mの範囲であった。

調査の方法は，道路予定地内の中心杭を基準として20×20mの大グリッドを設定し，北側からＡ１～Ｄ７区とした。大グリッドをさらに５×５mの小グリッドに区画し，北隅から南側へ01～16と番号を付しＡ１－01のように呼称した。馬土手については調査対象範囲及びそれに続く一部分を25cmコンタで実測した後，対象範囲のうちの２カ所を盛土状況の観察と下層遺構の確認のため切断した。この結果，対象範囲の大部分が最近になって改築されていたことが判明した。このことは馬土手下から検出された柵列跡の方向との差異からも裏付けされた。

包蔵地については，グリッドの南北方向のラインに沿って遺構検出面の確認のため，幅２mのトレンチを掘り下げ，その後対象地全体の表土除去をおこなった。この結果平坦面ではゴボウ栽培による遺構検出面の攪乱が著しく，悪条件の元での調査となった。そして４Ｂ区，４Ｃ区，６Ｃ区の３カ所で炭焼窯３基，４Ｃ区から６Ｃ区の台地傾斜面にかかる部分で溝状遺構２条，７Ｄ区の調査区南端で土壙１基がそれぞれ検出された。

先土器時代については，上面での遺構調査後各小グリッド毎に２×２mの範囲で，確認調査をおこなった。表土除去の際５Ｃ区において細石刃２点が出土していたため，この周辺について精査をくり返したが，残念ながら遺物の検出は皆無であった。

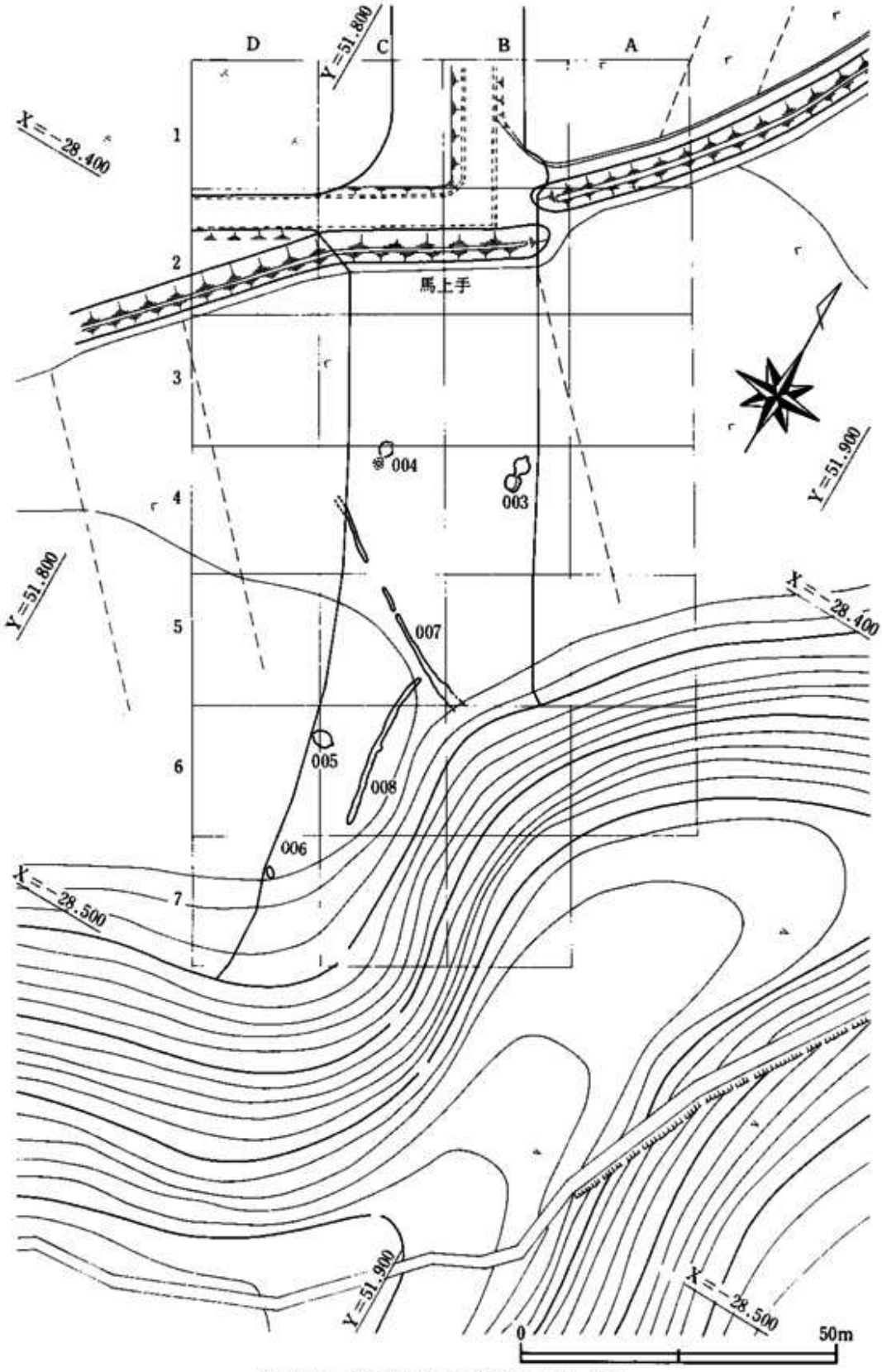
調査は，この先土器時代の遺構，遺物の検出作業をもって全工程を終了し，埋め戻し後２月15日現場を撤収した。

第２項　遺　構

馬土手（第42図，図版21・22）

馬土手は調査区の北端に位置しており，遺跡ののる台地を西から東に取り囲むように進入している谷津の入口を結ぶ線上に南西から北東方向に延長約370mにわたって断続的に構築されている（第40図）。調査の対象となった部分はこのうち25mの範囲である。調査前の現況は土手全体を覆って雑木，篠竹などが繁茂している状況であった。土手の北西側には，土手裾に接するように直角に曲がる農業用道路が設けてあり，南西方向から延びてきた土手はこの部分

第40図　柳谷遺跡周辺地形図（1/5,000）



第41図　柳谷遺跡遺構分布図（1/1,000）

でやや折れている。また調査区北東端で，さらに北東に延びる土手との間に幅2～3m程の間口を広げて近接している。

土手の規模は裾部の幅4m前後，頂部の幅0.8m～1m前後，平坦面との比高差2～2.5mを測る。土手の頂部はほぼ平坦になっている。前節で若干触れておいたが，この馬土手の調査中，土手盛土内より最近利用されたと思われる農耕用ビニールやゴミなどが多量に出土した為，旧地主に確認したところ，土手北西側に接する道路を付設する際に改築していた事実が明らかになった。この為，盛土状況の把握は調査範囲のうち最も南西側のよりプライマリーな部分が残る個所で観察した。

盛土の状況をみると，黒褐色土，暗褐色土，黄褐色土が主体となり，それぞれを混合した土砂が利用されている。旧表土上に均一的な厚さで平らに均すように積み上げをおこなっている。土手の両側裾付近では，土手下層の黒褐色，暗褐色土が認められていないところから周辺の土砂を盛土用に利用したものと思われる。

柵列跡（第42図，図版22）

土手の盛土を除去した結果，調査範囲の土手下に重なるような位置でピット列が検出された。土層観察をおこなった西南端の土手裾からほぼ直線的に北東方向に延びる遺構で，検出時においては溝状であったが，精査の結果，浅い溝中にピットが連らなった状態で検出された。各ピットの規模に大差なく，断面は底面積の小さいスリ鉢状を呈している。径0.6～1.2m，深さ41～56cmを測る。溝の底面とピット底面との差は28～32cmでピットが深く掘り込まれている。

このピット列は直線的に北東方向にのび，調査区外の南西～北東方向に構築された馬土手の裾の位置に配される恰好となる。この状況から，このピット列は馬土手裾に付設された柵列の痕跡と考えられる。

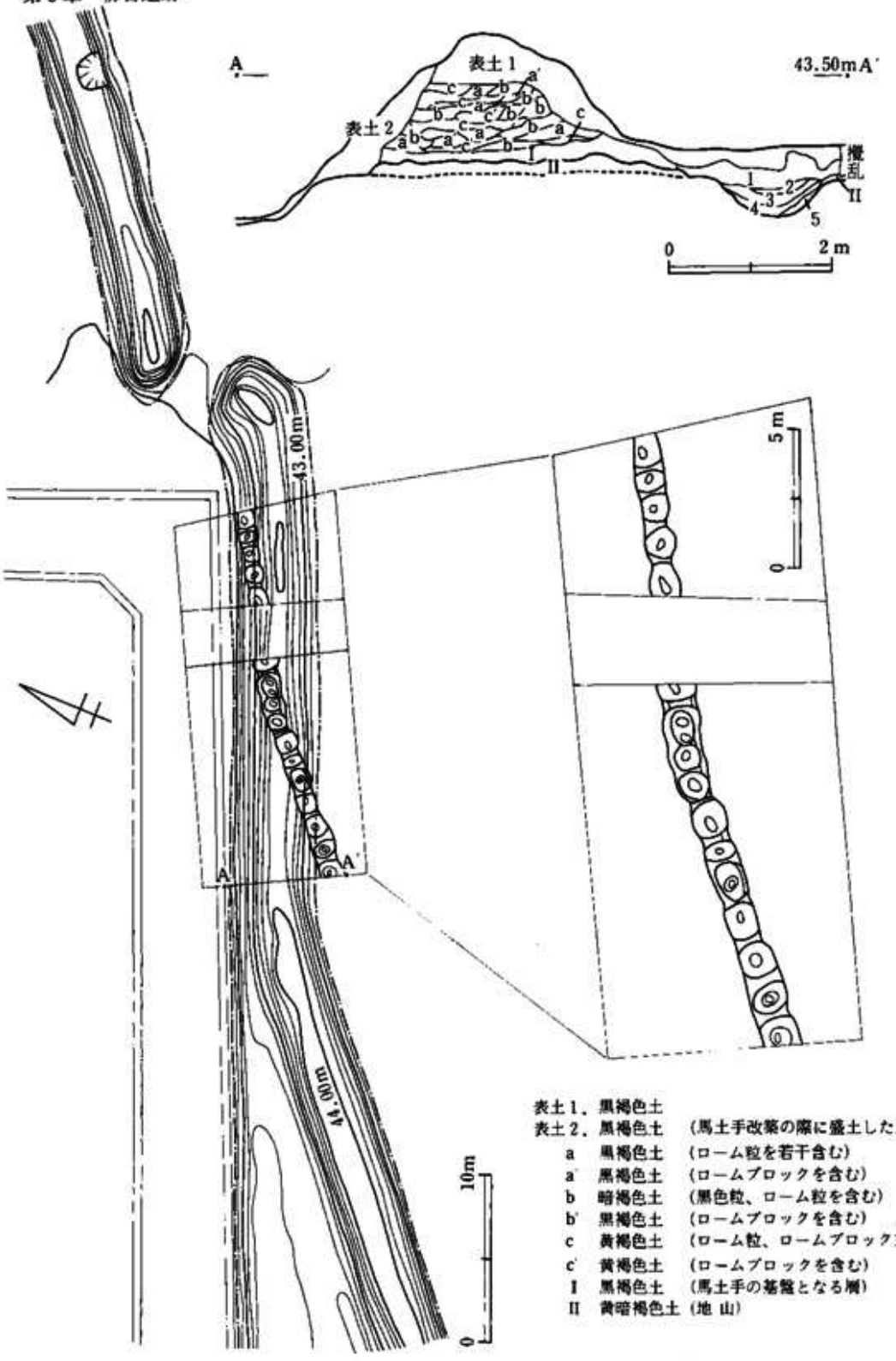
炭焼窯跡

炭焼窯跡は3基検出された。このうち4C区で検出された004号跡は攪乱が著しく規模等を明確に把えることができなかった為図示することを控えた。なお調査時に付した遺構番号は003～005号跡である。

003号跡（第43図・図版23）

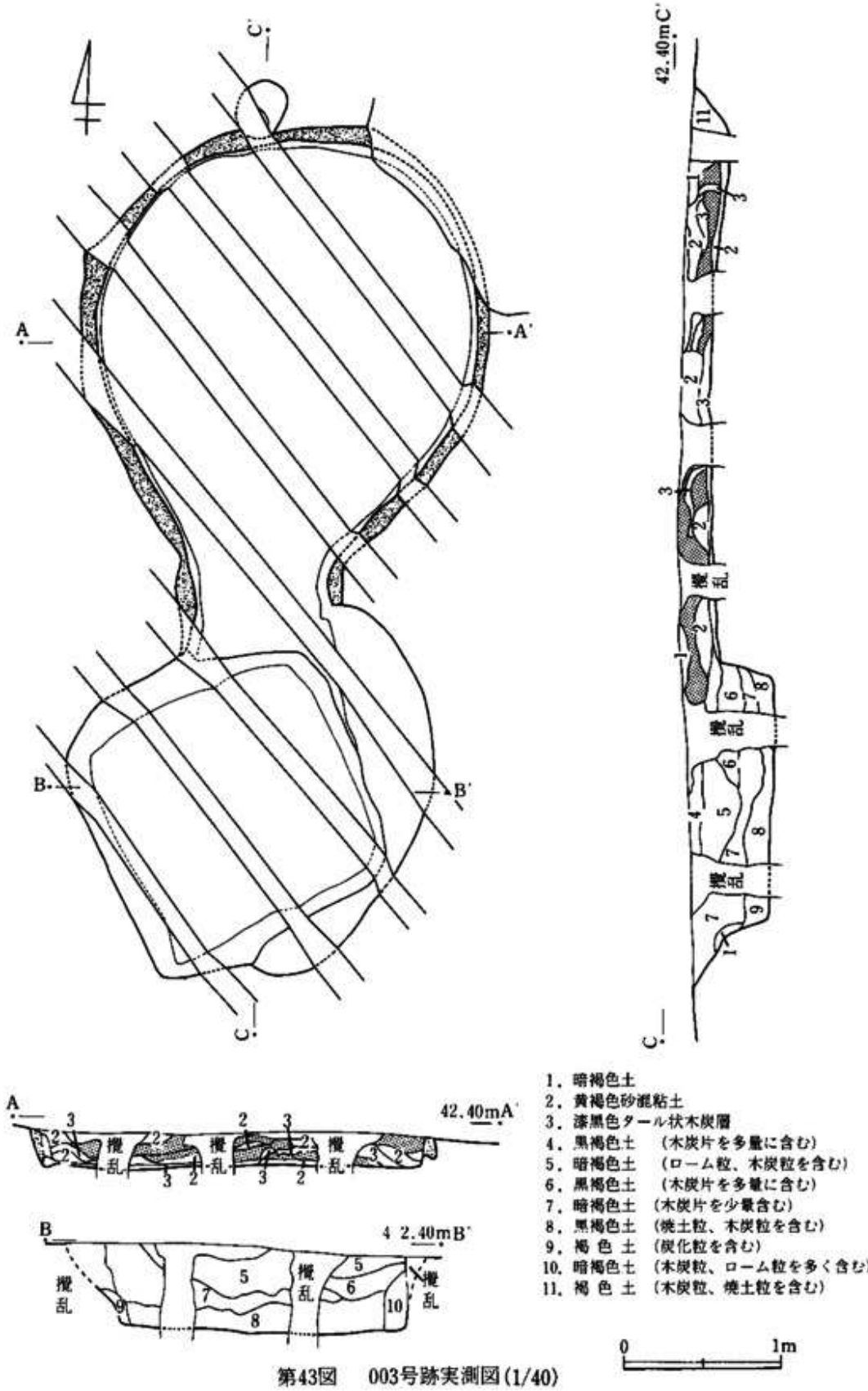
本跡は，調査区のほぼ中央4B－05，06グリッドに位置する。検出面は耕作による攪乱を受けていた為，遺存状態は良くなく炭窯本体とそれに続く焚口，付属施設の掘り方のみが確認された。

窯本体から付属施設の全長は5.60m，煙出口の方向である主軸方位はN－3°－Wとなる。窯本体は，焚口部で開口する楕円形を呈する。長径2.64m，短径2.57mを測る。壁は，黄褐色の山砂及び灰白色砂質粘土を用いてつくられているが，木炭のタール化した付着物で外側が漆



1　茶褐色土　（ローム粒を少量含みしまりがある。）
2　黒褐色土　（有機質の黒色土を含みサラサラした感じ）
3　黒褐色土　（２層より明るいローム粒を若干含む）
4　黒褐色土　（ローム粒を多量に含む）
5　暗褐色土　（黒色粒を少量含み２層とほぼ同じ土質）

第42図　馬土手，柵列実測図（1/400・1/200・1/80）



第43図 003号跡実測図(1/40)

黒色となっている，検出面からの深さは20m前後である。また，壁の厚さは13～10cmである。底面は，タール化した木炭を吸着し，非常に固くなっており，この部分が５cm程の厚さである。煙出口は攪乱のため明確に検出していないが，推定径35cm前後となろう。

付属施設は焚口部より楕円状に掘り込まれる部分と方形に掘り込まれる部分が重なって検出されている。全体の規模は長軸方向が2.01m，幅2.32mであり，方形プランの掘り方は1.80×1.75mを測る。断面の検討からは掘り方の新旧を決定できない状態であった。覆土中には木炭粒が多量に堆積しており特に下層では木炭片が多く認められることから窯本体で焼かれた木炭の残片および灰などを掻出し，廃棄する施設として考えられる。

005号跡（第44図，図版23）

本跡は，調査区南側５Ｃ－13，14，６Ｄ－01，02グリッドに位置する。調査区との境に接するため焚口部から付属施設の検出はできなかった。

窯は，長軸方位をＮ－91°－Ｓにとり，ほぼ東方向に煙道を向けて構築されている。検出部分の規模は長さ3.39m，幅2.48mを測る。平面プランは楕円状となり，東側で煙出口が突出している。壁は砂質粘土を厚さ15cm前後にロームの掘り方に貼り付けてつくられている。強い火熱によって内側にタール化した木炭が付着し，外側は焼土化している。深さ15cm前後を測る。底面は固くタール化した木炭を吸着している。ほぼ平坦である。

煙出口は，径31cmを測り，煙道部が窯の底面よりわずかに深く掘り込まれている。

焚口側は付属施設へ連なる部分が一部検出されている。幅72cmであり，焼土化した砂質粘土が堆積している。

遺構内から出土した遺物はない。

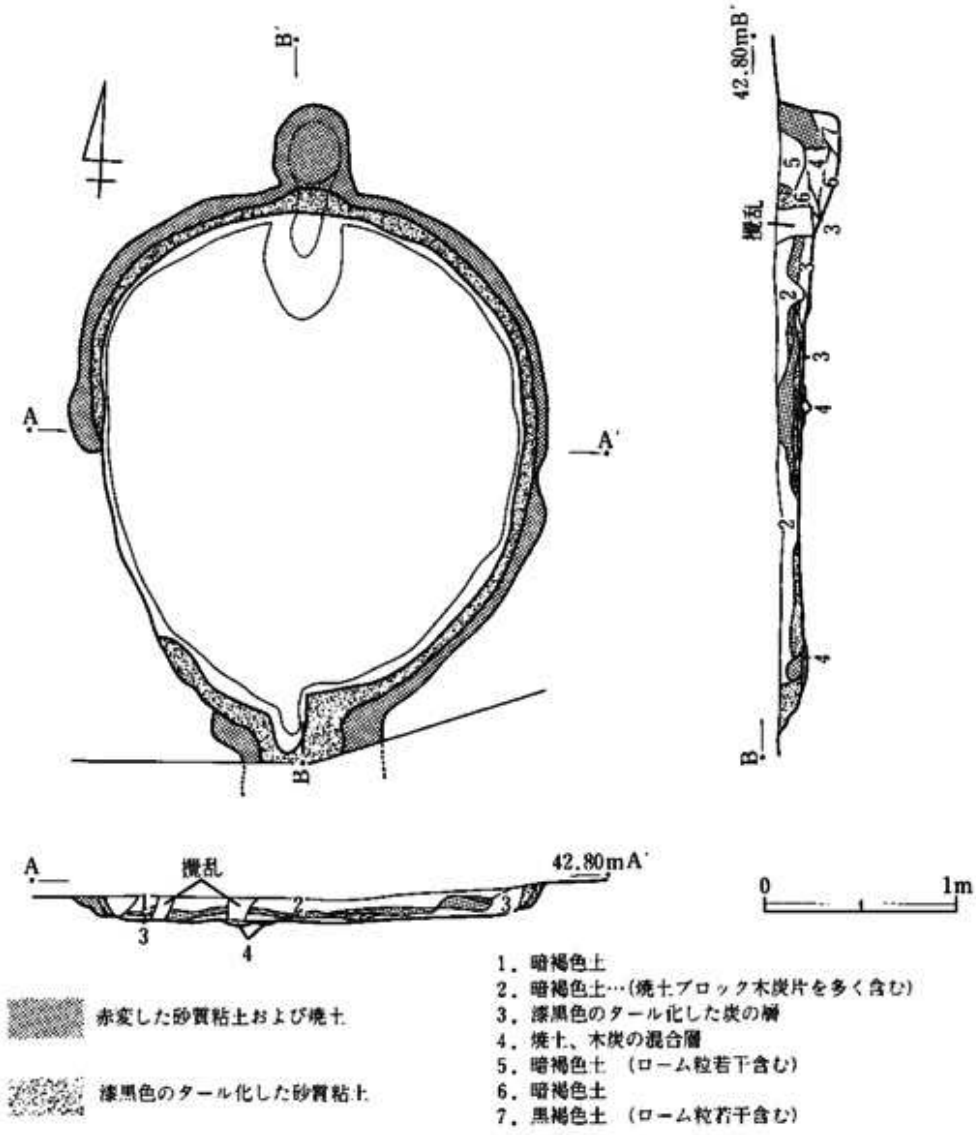
006号跡（土壙）（第45図，図版23）

本土壙は，調査区の南端７Ｄ－06グリッドに位置する。台地平坦面と斜面との境に接している。

平面形は，楕円形を呈し長径1.75m，短径1.21mを測る。長軸方位はＮ－56°－Ｗとなり，台地斜面に対して長軸方向が相対する方向をとる。底面はほぼ平坦で固く，形は隅丸方形に近いプランを呈する。断面では上辺でやや外に開く程度で，立ち上がりはほぼ垂直になる。深さ2.37mを測る。

覆土は，４層に区分されている。基本的には黒色土の混入が多い１～３層とローム粒の混入が多い４層の２つの層に大別される。

遺物は出土していない。

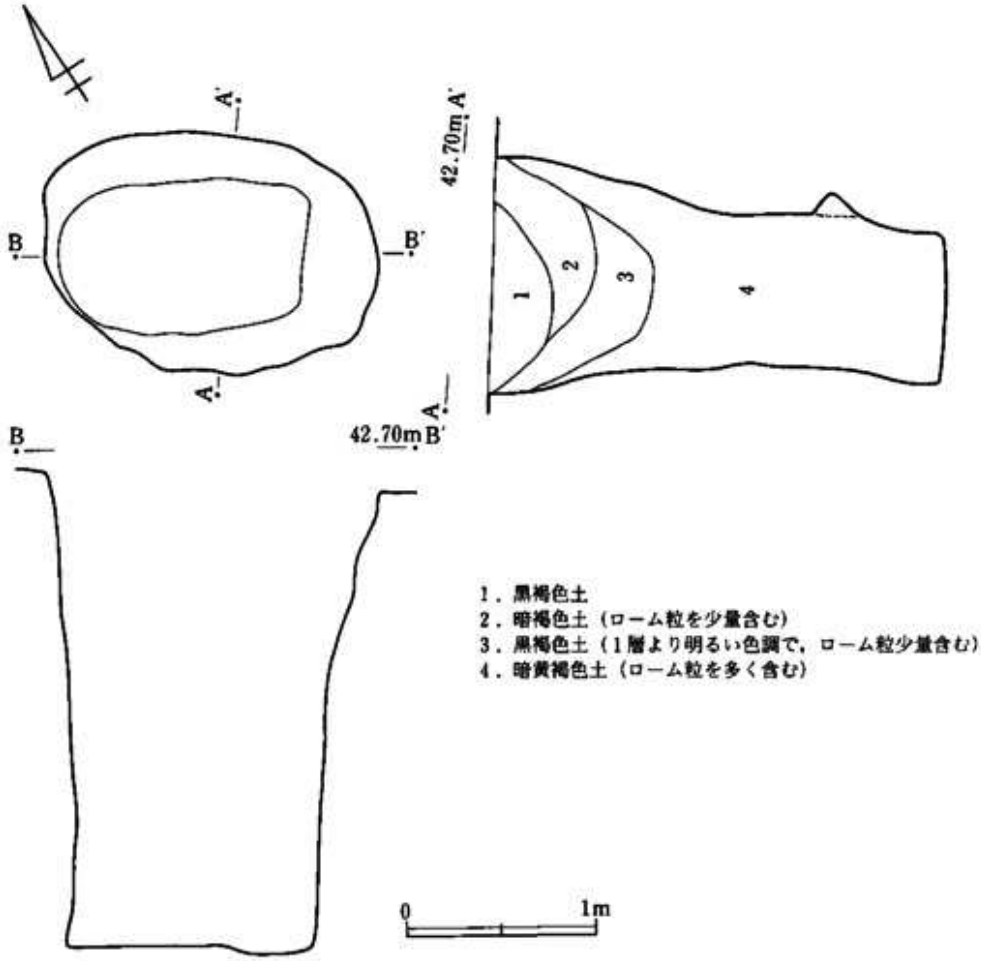


第44図　005号跡実測図（1/40）

007号跡（溝）（第46図，図版24）

本跡は，調査区の中央よりやや南に位置しており，4C区から5B区までの台地平坦部から斜面に（ほぼ西から東に）向かって掘り込まれた溝状の遺構である。平坦面では遺存状態が悪く部分的に浅くなり止切れている。最も良く遺存していた部分は東端の斜面にあたる部分であり，幅1.74m深さ59cmを測る。断面はV字状を呈する。溝底の幅は45～10cmで一定していない。

溝内からの出土遺物はない。



第45図　006号跡実測図（1/40）

008号跡（溝）（第46図，図版24）

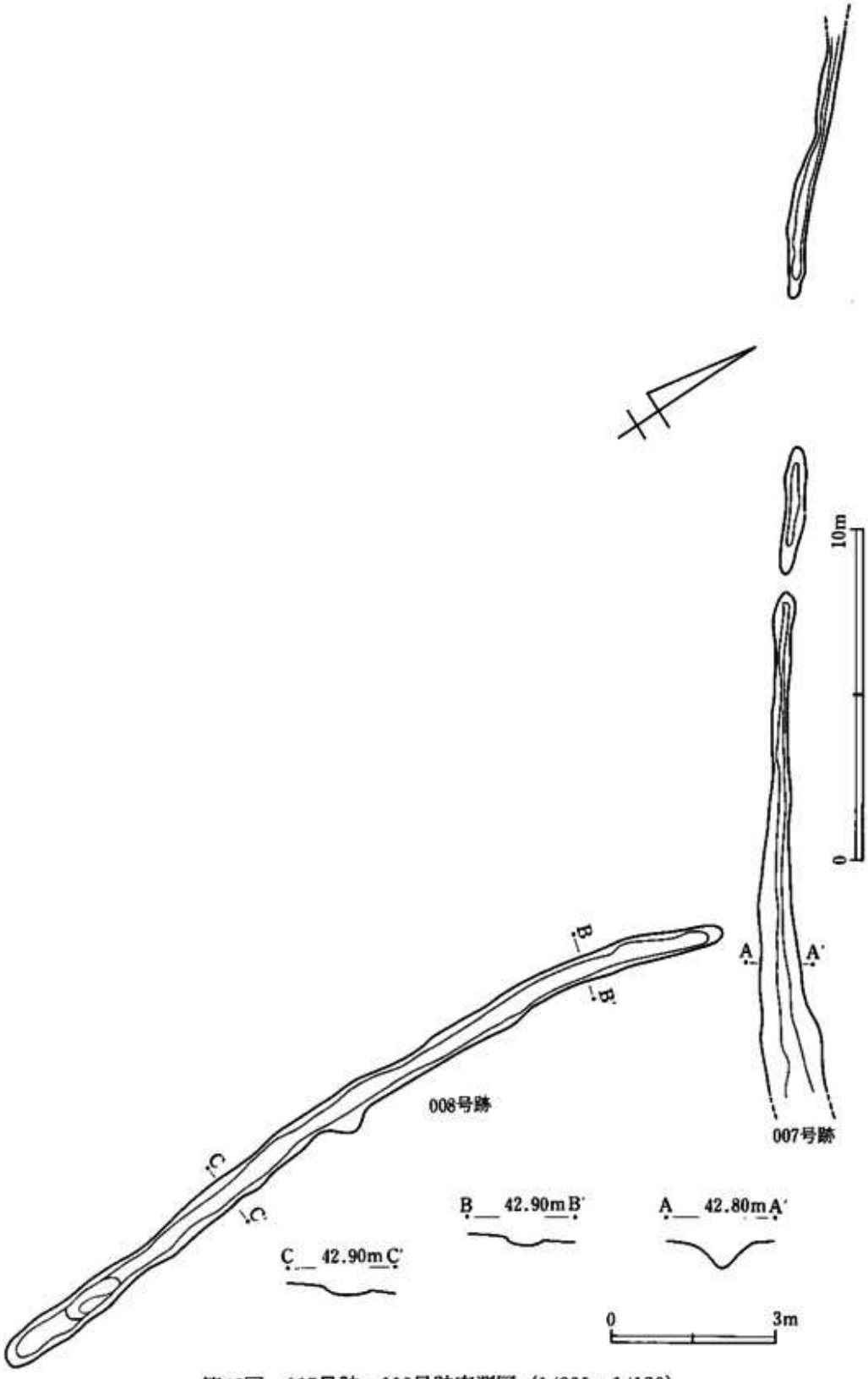
本跡は007号跡の南側に位置する。５Ｃ区から６Ｃ区のほぼ北から南に向かって掘り込まれた溝状遺構である。台地縁辺に相対している。全体に上面を削平されているため，浅い掘り込みで遺存状態は良くない。

延長25.5mで，幅96～71cm，深さ29～６cmを測る。底面は断面が皿状を呈し，幅60～40cmである。南北方向へ続く溝は検出されていない。

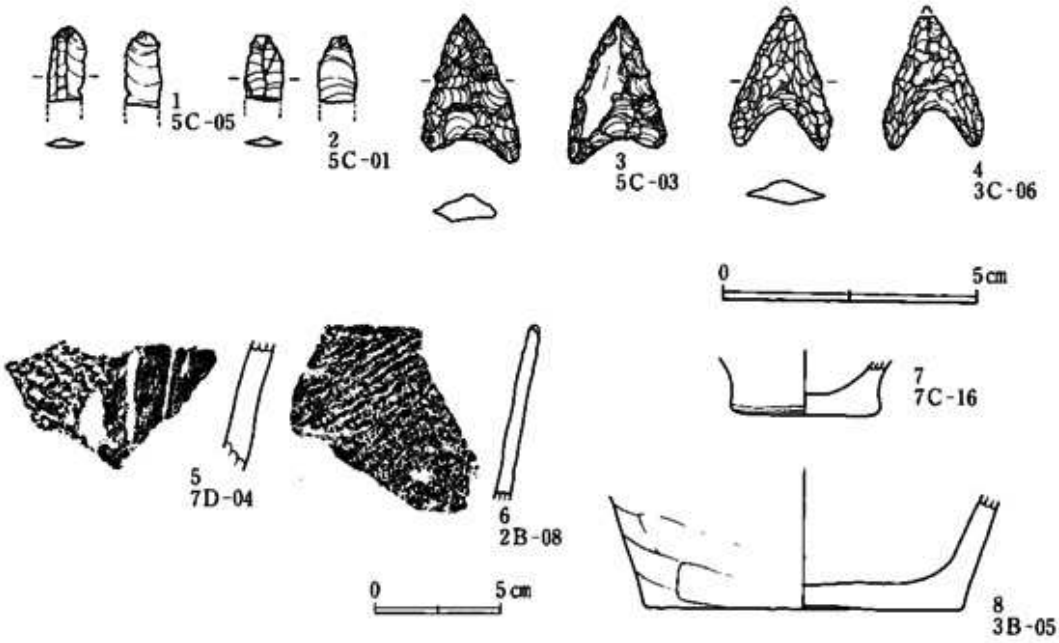
遺物は出土していない。

第３項　遺　物

本遺跡より出土した遺物は量的に少なく，遺構より伴出した遺物は皆無であった。すべて表土層中より出土しており，分散した状態である。



第46図　007号跡、008号跡実測図（1/200・1/120）



第47図　グリッド出土遺物実測図（2/3・1/3）

石器（第47図）

１，２は細石刃である。両者とも欠損しており，石材はチャートである。側縁部には調整は特にされていない。

３，４は石鏃である。３は基部の片方を欠き，形状は二等辺三角形に近い。 抉りは深くなく，片面に付着物が認められる。石材は黒曜石である。４は抉りの大きい石鏃で，先端を欠く。両面とも入念な調整がおこなわれている。石材は頁岩である。

土器（第47図５～８）

５，６は縄文式土器破片である。５は沈線によって縄文部と無文部を区画している。縄文は原体ＬＲの単節である。胎土に砂粒を含みやや赤褐色に近い色調を呈する。

６は口縁部である。一端に小突起を有し，外面は縄文が施文される。施文原体は単節のＬＲである。口唇内面には２条の沈線が横走する。胎土に砂粒を含み，色調は褐色を呈する。

５は縄文時代中期加曽利Ｅ式，６は後期加曽利Ｂ式と思われる。

７は底部で外反ぎみに立ち上がる。胎土に砂粒を含み，色調は褐色を呈する。外面の整形はヘラ状工具によるナデである。底径6.3cmを測る。

８は平底の大形の底部である。やや直線的に立ち上がる。胎土にやや大粒の砂粒を含み粗い感じである。色調は明褐色を呈し，底径13.4cmを測る。外面の整形はヘラ状工具を用いている。

第4項　小結

本遺跡において検出，調査した遺構は，馬土手1条と，柵列跡1条，炭焼窯3基，溝2条，土壙1基であった。遺物は遺構に伴出したものはなく，表土層から分散的に，小量出土したのみで，先土器時代の細石刃及び縄文時代中期，後期の土器片，石鏃を呈示するにとどまった。

7D区で検出された土壙は時代的には不明であるが形態的には陥穴状土壙に相当するものである。立地も谷津に面した傾斜面に位置していることから調査区外でもこうした土壙が存在している可能性が考えられる。隣接する空港№6遺跡[(1)]で検出された陥穴状土壙のうちC類として分類された土壙に類似している。

馬土手は野馬の補込，　牧の区画施設として構築されたもので，調査区内を横断して南西から北東に延びる総延長370mのうち一部を調査した。この結果，構築時期を示す遺物は出土せず，近年の改築により切断されていたことが，下層より検出された柵列遺構の存在などから判明した。本遺跡を含めて芝山町岩山，成田市三里塚地域には馬土手が多く残っており，牧の経営が盛んであったことが知られている。下総地方での牧の経営の歴史は古代まで遡るが，主に軍馬の徴用を目的としたものであった。江戸時代には幕府の直轄領として，松戸市，柏市域周辺の小金5牧と印旛郡富里町周辺の佐倉7牧が経営され，特に八代将軍吉宗の時代には積極的な牧の整備がされている。香取郡栗源町に残る佐倉7牧のひとつ油田牧はこの時期に駒止めの土手を整備したことが記録として残っている[(2)]。本遺跡の地域は佐倉7牧の一つ取香牧にあたる地域であるが，この取香牧は西北と南東に野馬取込地をもち，本遺跡に近い芝山町岩山が東南の野馬取込地であった[(3)]。今回調査の対象となった馬土手はこの取香牧の外郭の土手として機能していたと思われる。

炭焼窯は，全体に遺存が悪く使用時の状態を復元するまでには至らなかった。この地域での木炭の生産は，昭和20年を境として消えていき，その後は何基かで細々と続けられていたという地元の人の話を耳にしたが，今となっては，何時，誰が利用していたのかも明確に把握できないものとなってしまった。

（1）　宮　重行「陥穴状土壙」№6遺跡『木の根』（財）千葉県文化財センター　昭56

（2）　『栗源町史』栗源町役場　昭49

（3）　小笠原長和・川村　優『千葉県の歴史』山川出版社　昭46

第４章　上宿遺跡

第１項　調査の方法と概要

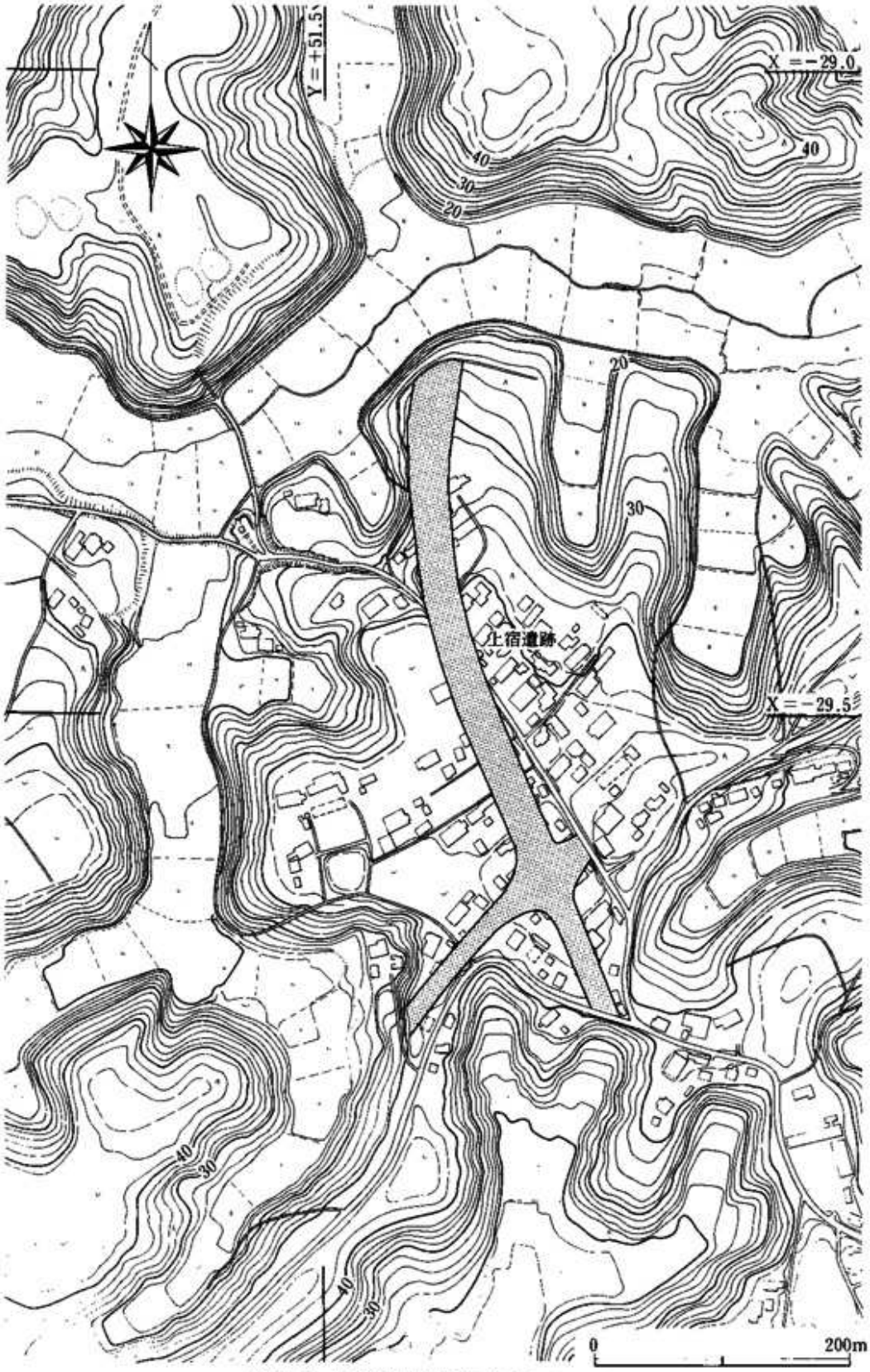
１.調査の方法

第一次調査は，昭和56年６月から11月まで行われた。８月まで確認調査を行った後３ケ月の本調査を行ない，交差点より北側の調査区を完了した。第二次調査は，昭和57年12月から昭和58年１月まで２ケ月間実施し，交差点より南側と西側の一部を完了した。第三次調査は，昭和58年11月に行ない，交差点より西側を全て終了した。調査方法は調査対象地が道路敷内と狭いため，道路方向に沿ったグリッド設定が有効と考え，道路中心杭№70～№60間の直線部を基準に，20×20mの大グリッドを設定した。グリッド名は，北から南へ２～28，東西方向は東をＢとしたアルファベットを付した。大グリッドの中を５×５ｍの小グリッドに分け北西から北東へ，次に南東の段へと１～16の小グリッド名を付した。

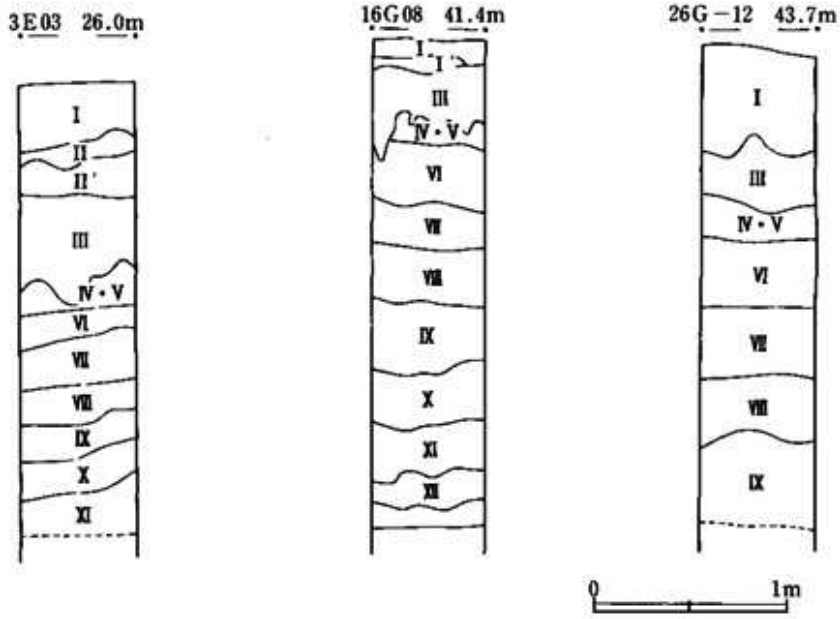
発掘調査は，グリッド，道路方向に沿って２ｍ幅のトレンチを数条設定して遺構，遺物を確認した。遺跡の内容を把握した後，確認調査に基づき本調査範囲の表土を剝ぎ，遺構，遺物の精査を行った。実測は，簡易遣り方測量を基本とし，一部平板測量を採用した。上層遺構の調査後，先土器時代の確認を２×２ｍのグリッドで武蔵野ローム層上面まで掘り下げ確認した。遺構番号は，各調査毎に001号から使用したため，整理作業で下記に記述するように変更した。写真は，４×５，６×７，35mmの白黒とカラースライドを撮影した。遺物は，遺構検出面より上をグリッド名で取り上げ，整理時に遺構出土の遺物と接合した。また，この大グリッドの基準杭は，道路建設予定地中心杭№62.（公共座標Ｘ＝－29，511.956　Ｙ＝51，622.778）と17Ｈ－01が，№65（公共座標Ｘ＝－29，566.399，Ｙ＝51，647.691）と20Ｈ－01，№68（公共座標Ｘ＝－29，621.011　Ｙ＝51，672.631）と23Ｈ－01が対応する。遺構ナンバーは，56年以外次のように変更した。57年12月001→008，002→009，003→010，004→011，005→012，006→013，007→014，008→015，009→016，010→021，011→017，012→018，013→019，014→020，015→022，016→021，017→023，018→024　58年１月001→005，002→003，003→004，004→006，005→007

２.土層（第49図，図版26）

立地は，高谷川の支谷へ舌状に延びる台地で，側面，後方もすでに開析が進み，独立した台地状を呈する。他の台地とは痩せ尾根で繋がる。台地幅は250m程である。調査地は中央部を縦断するように先端の突出部へ至る。標高は41mから26mを測る。図示する柱状図は，26Ｇ－12，16Ｇ－07，３Ｅ－03，グリッドの土層図である。

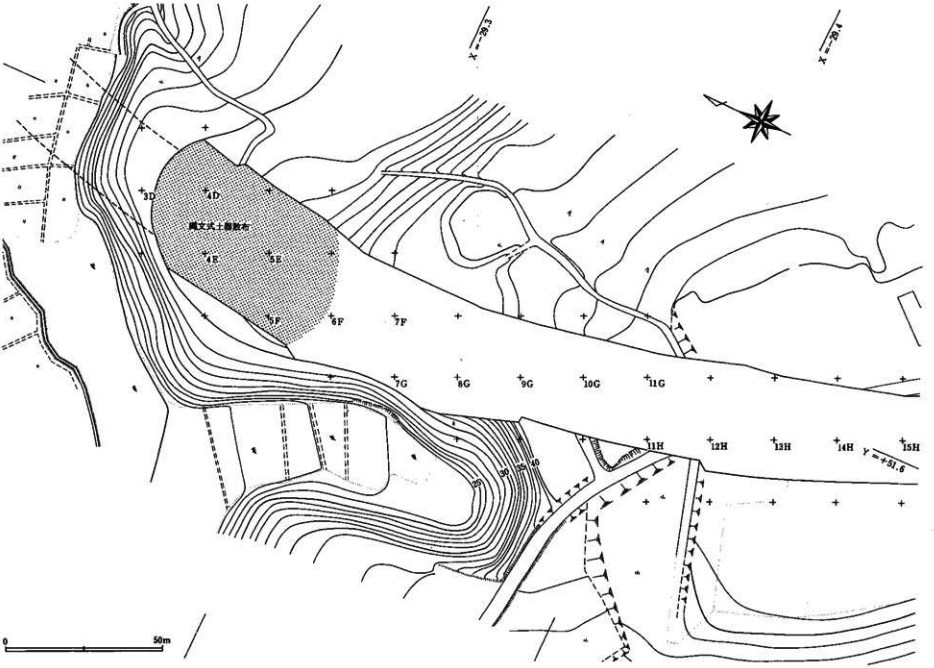


第48図　上宿遺跡周辺地形図（1/5,000）

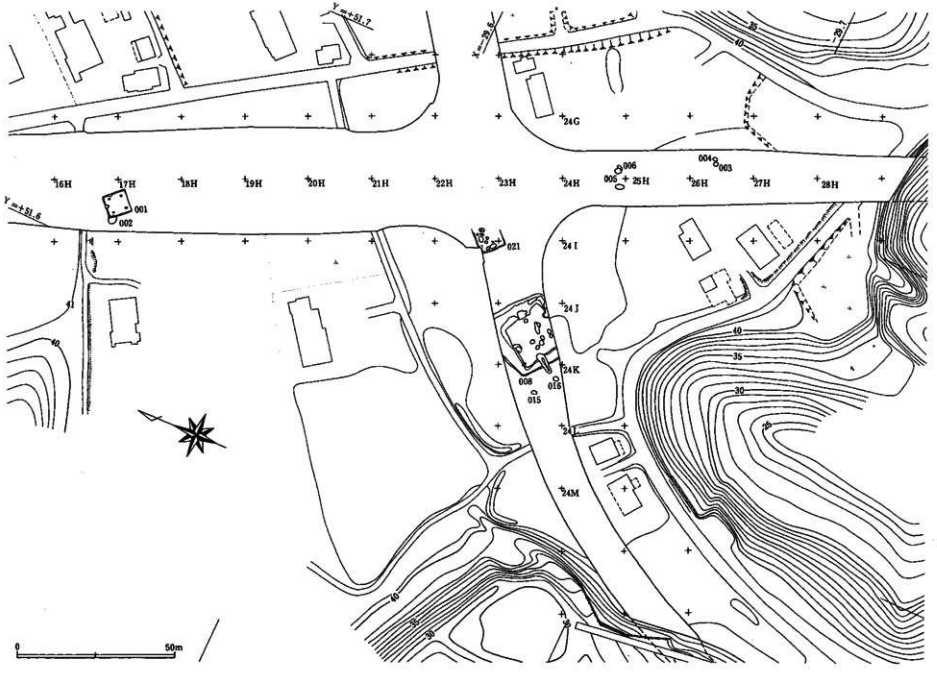


第49図　土層柱状図

I	層……	暗褐色土	表土層及び耕作土
II	層……	褐色土	
III	層……	明褐色土	いわゆるソフトローム層
IV～V	層……	橙褐色土	ハードローム層，クラックが発達する。赤色スコリア，黒色粒子を含む。
VI	層……	赤褐色土	全体に明るく赤色スコリア黒色の粒子を多く含む。
VII	層……	暗赤褐色土	いわゆる暗色帯である。立川第二黒色帯に比定できる。
VIII	層……	赤褐色土	赤色スコリア黒色粒子を含むがIV～VI層より少ない。
IX	層……	褐色土	上層に比べ軟質である。黒色粒子を含む武蔵野ローム最上部に相当する。
X	層……	茶褐色土	上層より硬質である。
XI	層……	茶褐色土	上層より粘性がある。
XII	層……	硬質茶褐色土	
XIII	層……	灰褐色土	粘土質で灰白色を呈する。



第50図　遺構配置図(1) (1/1,000)



第51図　遺構配置図(2) (1/1,000)

3.調査の経過

第一次発掘調査は，昭和56年6月から11月まで実施した。

6月15日～25日　現場設営　現場器材の搬入グリッドの設定　草刈り

6月26日～7月29日　トレンチ掘り（14～23グリッド完了）

7月13日～22日　北側の環境整備　草刈り

7月22日～8月31日　トレンチ掘り

8月17日～31日　先土器時代の確認

9月1日～14日　表土除去

9月21日～11月17日　先端部の遺物検出

9月8日～11月19日　遺構調査

11月19日～11月30日　先土器調査

第二次発掘調査は，昭和57年12月から翌年1月まで実施した。

12月2日～4日　現場設営，現場器材の搬入グリッド設定，表土剝ぎ

12月6日～27日　遺構調査

12月18日～24日　先土器確認作業

1月7日～12日　グリッド設定，表土剝ぎ

1月13日～1月31日　グリッド出土遺物の検出，遺構調査

第三次発掘調査は，昭和58年11月に実施した。

11月1日～11月14日　グリッド設定，現場設営，トレンチ発掘

4.調査の概要

本遺跡において検出された遺構は，古墳時代の住居跡1軒と近世の土壙，方形周溝，竪穴遺構である。近世の遺構は交差点部分を中心として集中的に検出された。遺物は，北側の台地縁辺から縄文時代早・前・中・晩期の土器片が多く出土した。また交差点より南でも，田戸下層の土器片と黒曜石の剝片類が多く出土した。

第2項　遺　構

001号住居跡（第52図，図版27）

三方より樹枝状に刻まれた台地の中央部に1軒のみ検出された。主軸方位はN－28°－Eを指す。

平面形は，5.3×6.1mの横長方形を呈する。床面は，ほぼ平坦，堅緻で約30m²の床面積を測る。壁溝は，南壁中央を攪乱されているため明らかでないが，南壁下で切れると思われる，ほぼ同規模の形態で幅20cm，深さ7cmを測る。壁高は20～30cmを測り，緩く外反するように立上がる。主柱穴は4本で，壁から1.1～1.4mの位置にある。各ピット間の距離は，P1P2-3.7m，P2P3-3.1m，P3P4-3.4m，P4P1-3.2mを測る。位置関係は住居と同じく横長の方形で住居の対角線上に位置する。各柱穴の深さは，P1-66cm，P2-51cm，P3-74cm，P4-45cmを測る。

カマドは，北壁の中央を若干掘り込み構築する。袖は砂質粘土を主体とし袖幅25cm，壁から張出し75cmを測る。火床は75×45cmの規模をもち暗赤色土の焼土層が残る。火床は20cm程の凹みを測る。

遺物は，細片が多く実測可能な土器は5点しか出土しなかった。この5点も覆土中の出土で住居に伴うか疑問ものこる。

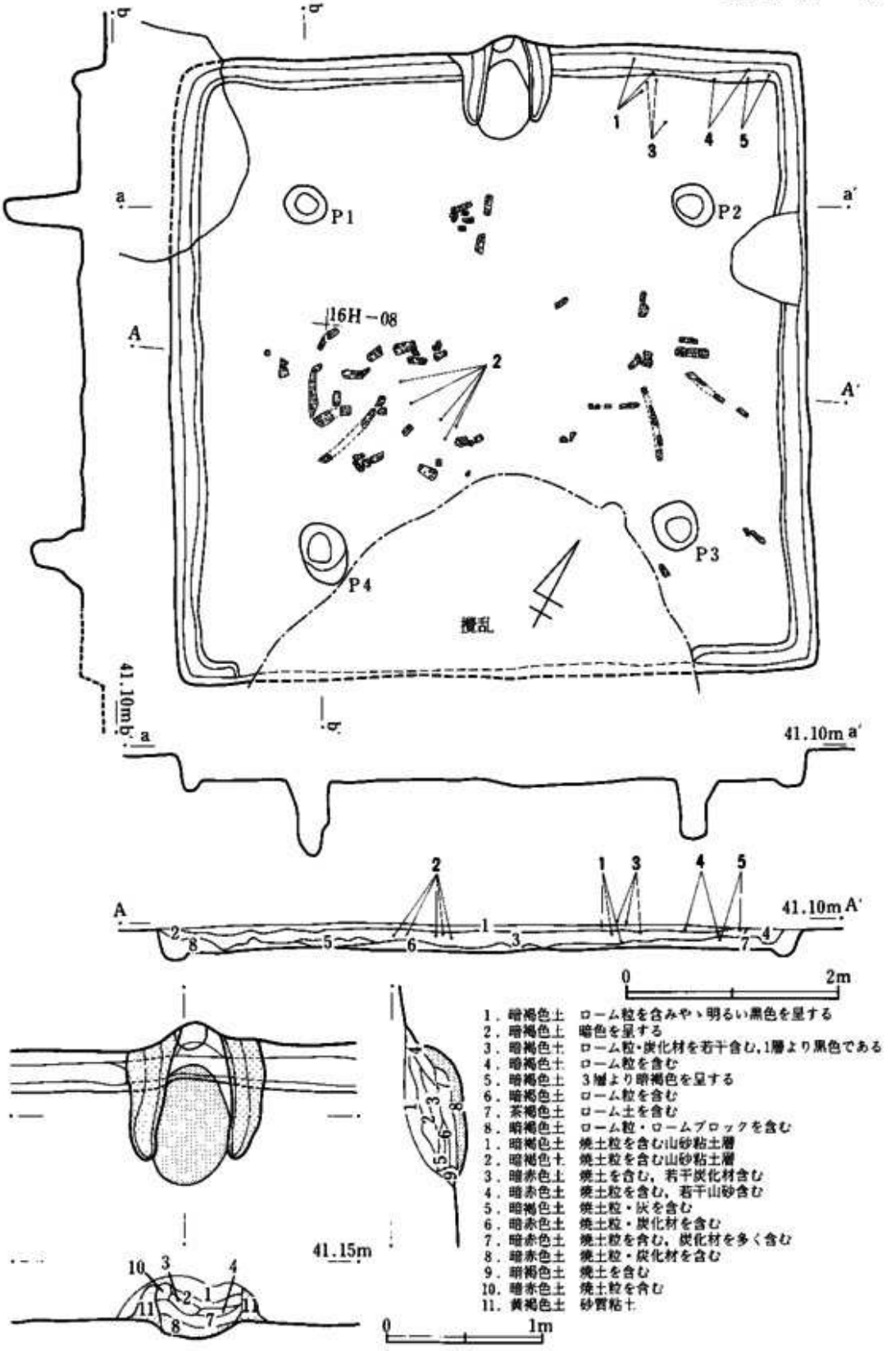
覆土は，8層に分層できた。床面と床より10cmの高さに炭化材を多く検出することから火災住居の可能性が高い。002号土壙との切合いは土壙が古く本跡が新しいことが土層観察より窺える。（第53図002号土層）002号土壙7層は貼床である。北東壁には，高さ20cm程の焼土塊がみられた。

002号土壙（第53図，図版28）

調査区の中央16H－12区に位置する。001号住居跡の北西隅と切り合う。土層より001号住居が新しく，本遺構が古いことが判明している。規模は，長軸3.1m，短軸2.3mで掘り込み60cmを測る。覆土は，14層に分層できた。本遺構に伴う土層は5層で暗褐色を呈する。遺物の出土はなく，時期，性格は不明である。

003号土壙（第53図，図版28）

26G－12区に位置する，1.5×1.4mのほゞ円形を呈する。掘り込みはソフトローム上面からレンズ状に18cm，さらに南で8cm程低く掘り込む，底面はハードロームに達せず軟質である。覆土は，3層に分層できた。土層断面の状況から掘り込み面は検出面より上位であることが窺える。覆土は全体にしまりがあった。遺物は，検出面で国分期の坏底部が，第1層で縄文早期の土器片が3点出土したが，双方とも流れ込みの可能性が高い。時期，性格共に不明である。



第52図　001号住居跡実測図及びカマド実測図（1/60・1/40）

004号土壙（第53図，図版28）

26G－12区に位置する。長軸1.3m，短軸1.0mの楕円形を呈する。掘り込みはソフトローム上面からレンズ状に18cmを測る。側面，底面共に軟質で固めた状態でない。覆土は2層で流れ込みの状態を示し，しまりがある。遺物の出土はなかった。時期，性格共に不明である。

005号土壙（第53図，図版28）

24G－16区に位置し006号土壙と重複する。1.65×1.6mのやや偏った方形を呈する。掘り込みは，皿状に30～40cmを測る。底面はしまりのあるハードローム面で，中央が若干凹む。覆土は，側面に暗褐色土が流れ込む，主体は黒褐色土である。006号との切り合いは，検出状況，土層から本跡が新しいことが確認できた。遺物の出土は，鉄製品2，砥石1，陶器片4，土師器片6点が出土する。陶器の灯明皿2点（第65図1，2）が底面より10cm程浮いた状態で出土することから近世の土壙と判明した。祭祀的な遺構と思われる。

006号土壙（第53図，図版28）

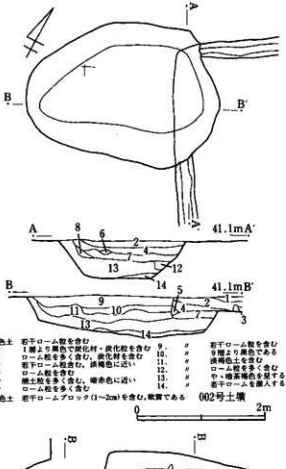
24G－16区に位置し005号土壙と重複する。1.65×0.75mの歪んだ長方形を呈する。ソフトローム上面で遺構が確認され，10～12cm掘り込まれる。底面の中央よりピットが検出された。覆土上面に黒褐色土が下層に砂質土がしまって充填されている。覆土は，暗褐色土が主体で005号土壙よりしまりがある。遺物は，陶器2点と土師器底部の3点である。陶器製茶碗は床面より5cm程浮いた状態で検出できたが，ピットの真上なので帰属が判然としない。005号との重複関係は，確認面の精査，土層観察より本跡が古い。土師器底部は上面の出土で，本跡とは伴わない可能性が高い。時期的には近世の土壙の可能性が強い。

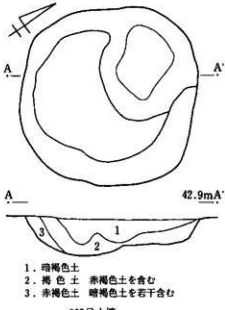
007号土壙（第54図）

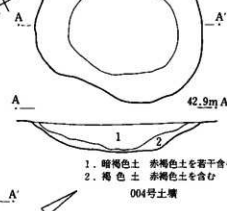
26G－14区に位置する。長軸1.8m，短軸1.1mの楕円形を呈する。掘り込みは，確認面のソフトローム上面より81cmを測る。底面はほぼ長方形を呈し，ハードローム層で平坦で固くしまる。壁は，ほぼ垂直から一部オーバーハングするように立上がり，上部1/3程で外反する。覆土は6層に分層された。暗褐色土，褐色土が主体である。遺物は6点出土している。周辺にも散布が認められる縄文時代早期の沈線文系土器片である，覆土に散在しているが，1点は底面で検出された。本土壙の時期は，この縄文時代早期末と考えられる。性格は不明であるが，いわゆる陥し穴の可能性もある。

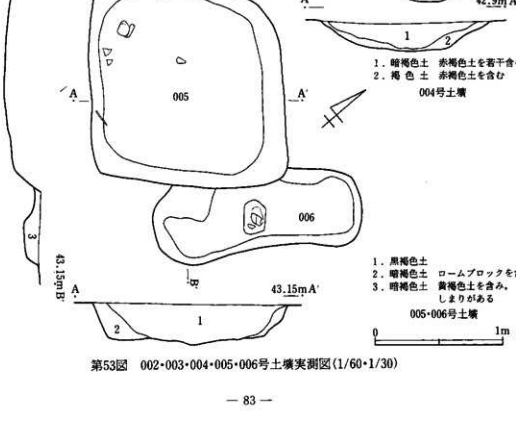
008号方形周溝遺構（第54図，図版29）

23J区に位置する。北西部と南東部のコーナーを調査区外とするため全容は明らかでないが，現状から推定すると，溝外側で約21m・内側で約14mの規模と思われる。周溝内，溝内に遺構が重複するが，本跡に伴うか解明できず，独立した遺構番号を付した。平面形は南北側がほぼ平行する。東側は北東側で張らむが，ほぼ方形を考えた掘り方と思われる。掘り込みは30～60cmで，溝幅は2～6mを測り一定でない。覆土は暗褐色土・黒褐色土を主体とする。遺物









第53図　002・003・004・005・006号土壙実測図(1/60・1/30)

は，古銭１（天保通宝）砥石１，鉄片６，陶器，土器片が出土する。本跡の時期は近世で墓址と考えられる。

009号竪穴状遺構（第55図，図版29）

23Ｊ－２区に位置する。一辺2.3mの方形を呈する竪穴に，階段状の施設が伴う。掘り込みは85cmを測る。底面は平坦である。覆土はローム粒を含み一気に埋没した形態を示す。階段部は底にロームブロックを多量に含むフラットな褐色土層を認める。008号方形周溝と重複する。008号土層（第54図）より本跡が新しいことが観察できる。遺物は，焙烙片２，陶器，寛永通宝が出土する。時期は近世と思われるが性格は不明である。

010号土壙（第55図，図版30）

23Ｊ－７・11区に位置する。長軸1.3m，短軸1.1mの不正形を呈する。掘り込みは１ｍを測る。覆土は，暗褐色土・黒褐色土を主体に６層に分層できた。人為的に埋没した形態を示す。遺物の出土はなかった。時期は近世以降と思われるが，性格は不明である。

011号土壙（第55図，図版30）

23Ｊ－11区に位置する。長軸1.6m，短軸1.4mの不正円形を呈する。掘り込みは35cmを測る。覆土はロームブロックを含む３層に区分できた。人為的に埋没した状態を示す。底面は平坦で外反するように立ち上がる。出土遺物はなく時期，性格を判断するものはなかった。

012号土壙（第55図，図版30）

23Ｊ－11区に位置する。長軸1.3m，短軸0.9mの楕円形を呈する。掘り込みは20cmを測る。覆土は暗褐色土の単層でローム粒を含む。出土遺物はなかった。時期，性格を判断するものはなかった。

013号土壙（第55図，図版30）

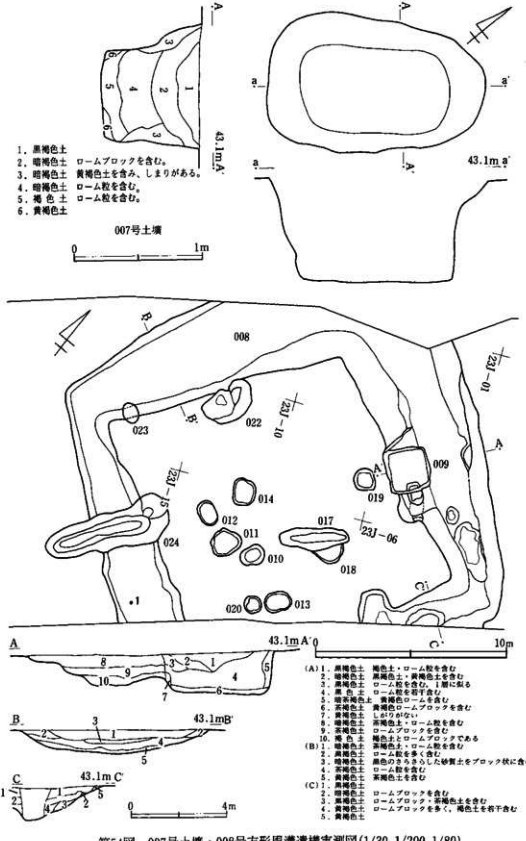
23Ｊ－７区に位置する。長軸1.5m，短軸1.0mの楕円形を呈する。掘り込みは40cmを測る。覆土は，黒褐色土と黒色土の２層に区分できた。底面は平坦で，壁はほぼ垂直に立上がる。出土遺物はなかった。時期，性格を判断するものはなかった。

014号土壙（第56図，図版30）

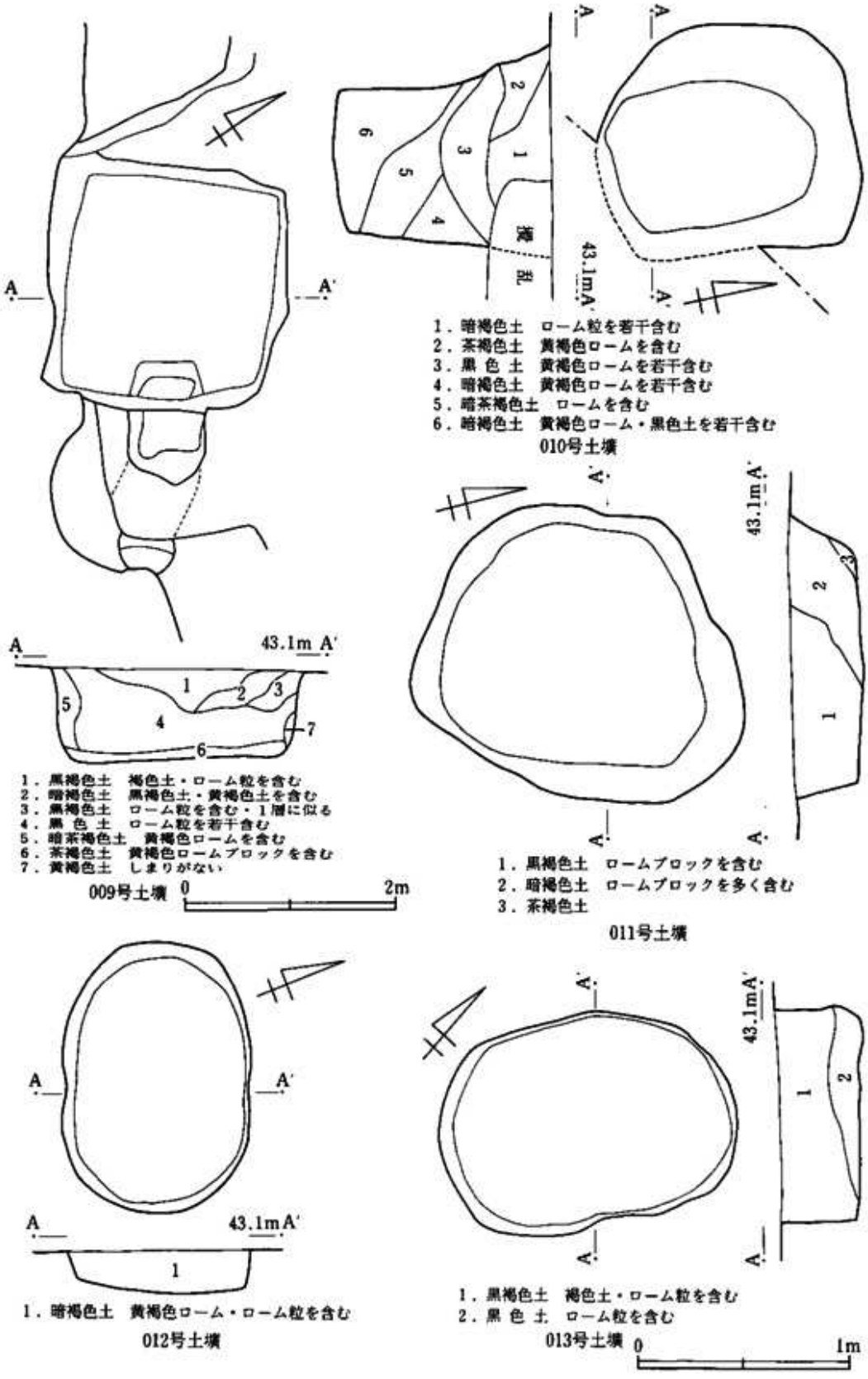
23Ｊ－10・11区に位置する。長軸1.4m，短軸1.2mの不正円形を呈する。掘り込みは25cmを測る。覆土は褐色土を主体として５層に区分できた。埋没は人為的状態を示す。底面は平坦で壁は緩かに外反する。出土遺物はなかった。時期，性格を判断するものはなかった。

015号土壙（第56図，図版30）

23Ｋ－６・７区に位置する。長軸1.4m，短軸1.0mの楕円形を呈する。掘り込み70cmを測る覆土は４層に区分できた。底面は平坦でほぼ垂直に立上がる。出土遺物はなかった。時期，性格を判断するものはなかった。



第54図 007号土壙・008号方形周溝遺構実測図(1/30, 1/200, 1/80)



第55図　009・010・011・012・013号土壙実測図(1/60・1/30)

016号土壙（第56図，図版30）

23K－4区に位置する。長軸1.6m，短軸1.2mのほぼ長方形を呈する。掘り込みは，南側に浅いテラス状を有し55cmを測る。底面は狭く擂鉢状に立上がる。覆土は5層に分層できた。遺物の出土はなかった。時期，性格を判断するものはなかった。

017号土壙（第56図，図版30）

23J－7区に位置する。長軸3.7m，短軸1.2mの長楕円形を呈する。018号土壙との重複関係は，遺構検出，土層から本跡が新しいことが観察できた。掘り込みは1.6mを測り急傾斜で底面で狭まる。覆土は，暗褐色土・褐色土を主体に7層に区分できた。自然埋没の状態である。遺物の出土はなかった。時期，性格は不明であるが，遺構の形態から陥し穴の可能性が高い。

018号土壙（第56図，図版30）

23J－7区に位置し，017号と重複する。土層観察から017号跡より古い遺構であることが判明した。約1.5mの円形プランを推定できる。掘り込みは10cm弱を測る。床面・壁の立上がりともやや軟質なロームである。時期，性格共に不明である。

019号土壙（第57図，図版31）

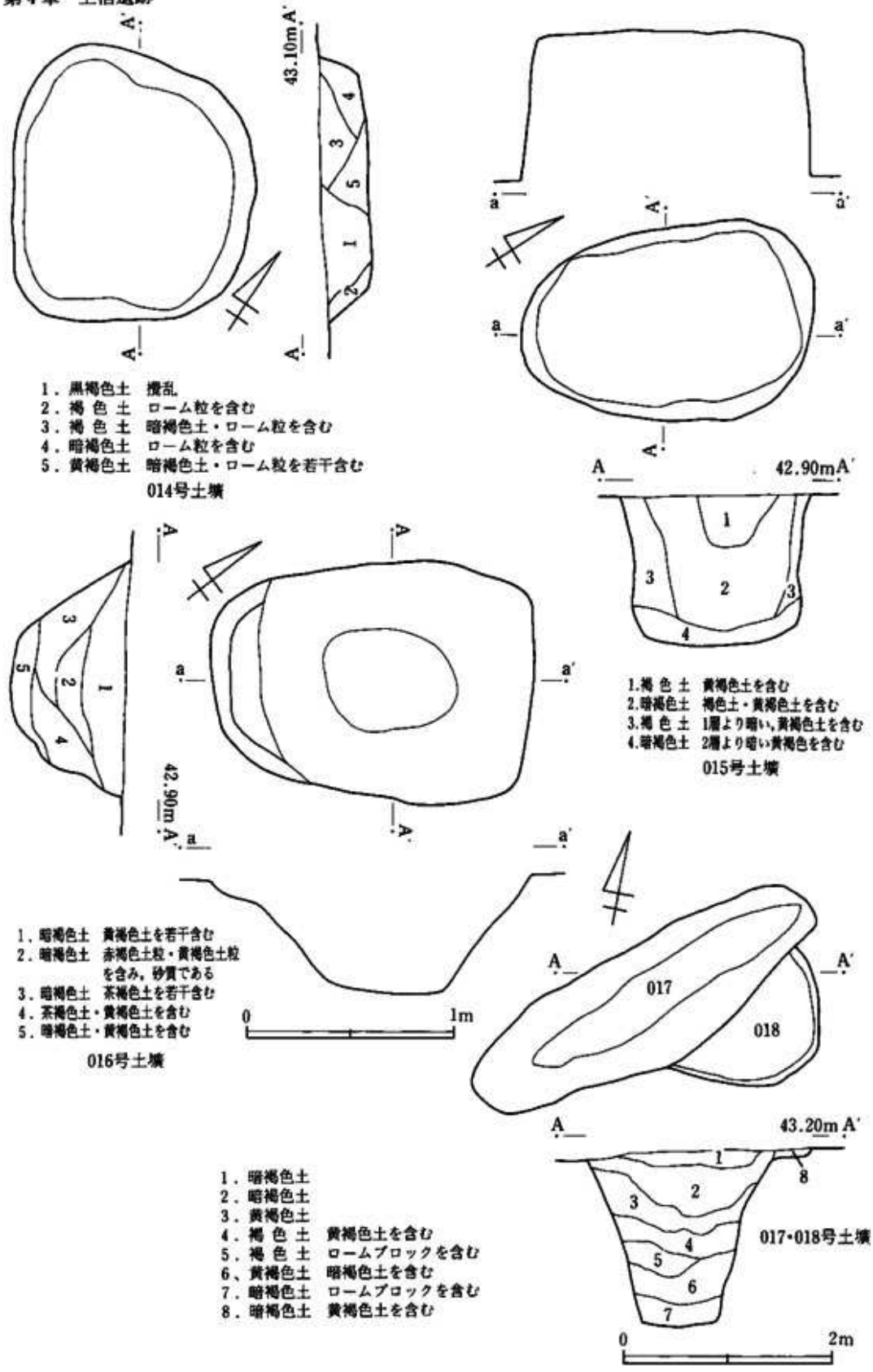
23J－6区に位置する。1.1mの隅丸方形を呈する。掘り込みは20cmで，壁は緩かに立上がる。覆土は，ロームブロックを含む黒褐色土の単層である。遺物の出土はなかった。時期，性格を判断するものはなかった。

020号土壙（第57図，図版31）

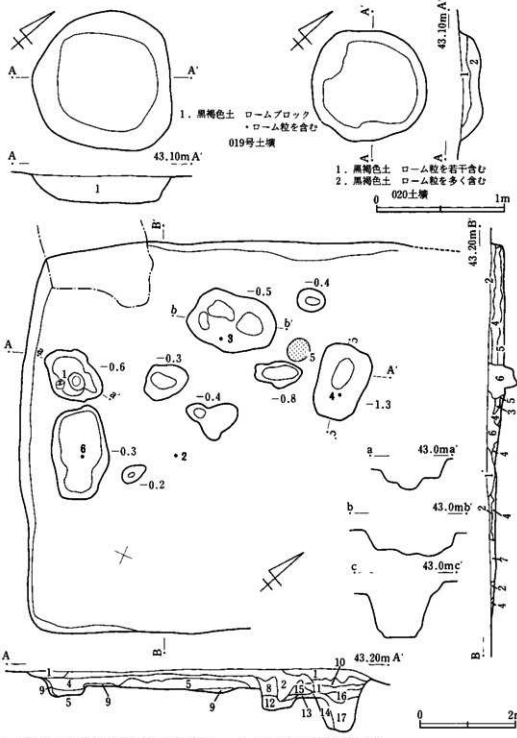
23J－8区に位置する。約0.9mのほぼ円形を呈する。掘り込みは底面からだらだらと立上がり20cmを測る。土層は黒褐色土で2層に区分できた。遺物の出土はなかった。時期，性格を判断するものはなかった。

021号竪穴土壙（第57図，図版31）

22・23I区に位置し，008号方形周溝遺構と平行する。北東壁が確認されず全容は明らかでない。北西から南東8.0m，現存する南西から北東7.5mを測り方形を呈する。15～30cmを掘り込み北東で消える。方形の中に比較的大きいピットが4基，小さいピットが5基検出された。方形の掘込みと重複しないこと。底面よりピットの掘り込みが確認されたものがある等本跡に伴う可能性が高い。覆土は，暗褐色土・褐色土を主体としてローム粒を含む，ピット群より1ケ所粘土塊が検出された。遺物は渡瓶・古銭3（寛永通宝），青銅製キセル2，砥石1，鉄釘，鉄片等が出土した。ピットに伴って出土する傾向を示す。施釉陶器の渡瓶（第65図，021－1）は，ピット覆土の上層より出土したものである。本跡は，出土遺物から区画された近世の土壙墓群と考えられる。なお，ピット横の数字は，深さをm単位で記した。



第56図　014・015・016・017・018号土壙実測図（ 1/30・1/60）



1．暗褐色土　焼土ブロック・木炭塊を多く含む
2．暗褐色土　ローム粒を少し含む
3．暗褐色土　ローム粒を多く含む
4．暗褐色土　ローム粒・焼土・木炭を少し含む
5．褐　色　土　ローム粒・ロームブロックを多く含む
6．暗褐色土　ロームブロック・ローム粒・焼土を多く含む。撹乱と思われる。
7．褐　色　土　ロームブロック層・撹乱と思われる
8．暗褐色土　ロームブロックを多く含む
9．黄褐色土　褐色土を若干含む
10．茶褐色土　ローム粒を含む
11．暗褐色土　ローム粒を含む
12．褐　色　土　ロームブロックを含む
13．暗褐色土
14．暗褐色土　ロームブロックを多く含む
15．褐　色　土　黄褐色土・ロームブロックを含む
16．褐　色　土　ローム粒を含む
17．褐　色　土　茶褐色土を含む

021号竪穴状遺構

第57図　019・020号土壙・021号竪穴状遺構実測図(1/30・1/80)

022号土壙（第58図）

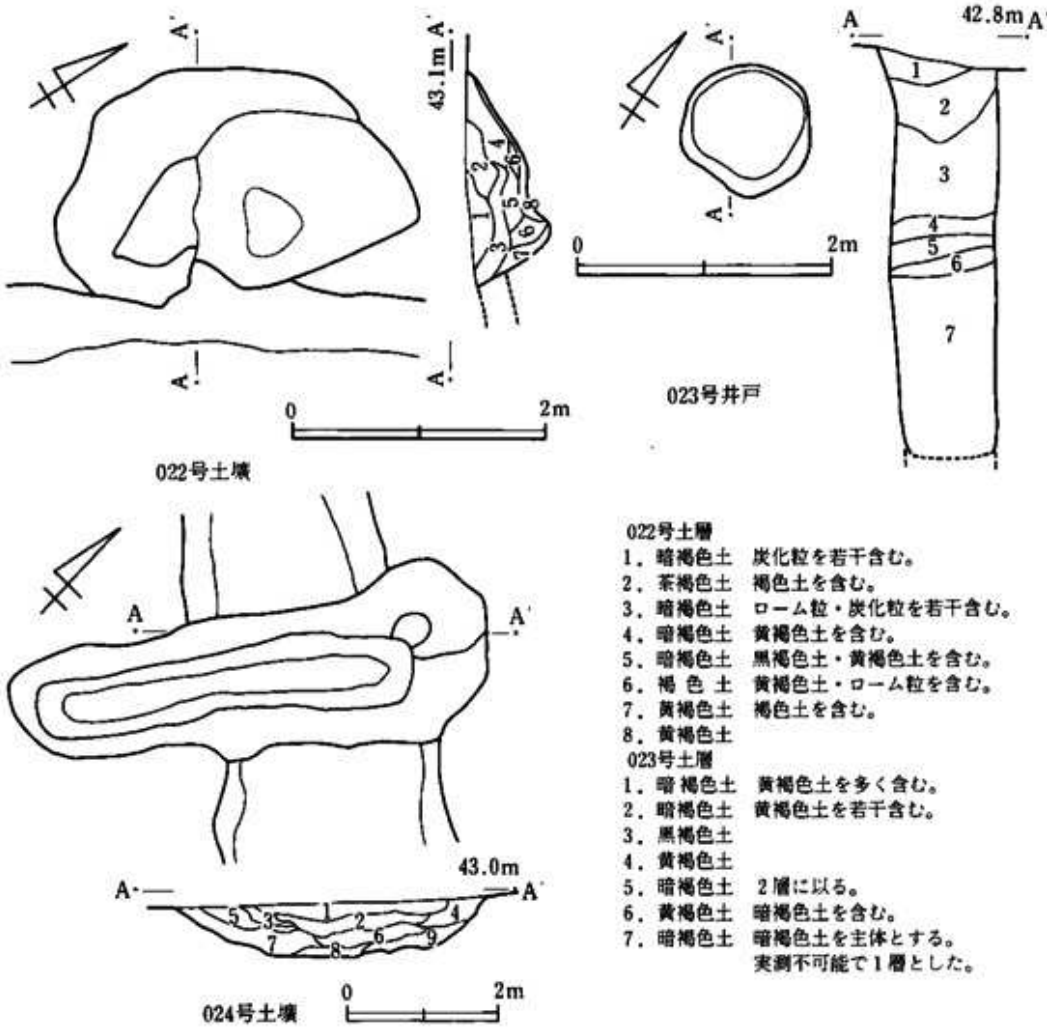
23Ｊ－10区に位置する。008号溝に接する。重複関係は土層断面より本跡が新しい。長軸 2.9m，短軸1.8m掘り込み62cmを測る。遺物の出土はない。時期，性格を判断するものはない。

023号井戸跡（第58図，図版31）

23Ｊ－14区に位置する。径1.0mの円形を呈する。深さは3.1mまで掘り下げた。遺物の出土はない。008号を切るので近世以降の井戸と思われる。

024号土壙（第58図）

23Ｊ－15区に位置する。長軸6.3m，短軸約２mの長楕円形を呈する。掘り込みは，40～80cmを測る。壁面は急傾斜で底面近くで緩くなる。008号との重複関係は，土層より本跡が新しい。008号の溝底から35cm程掘り込む。覆土は，９層に区分できた。遺物は，陶器片２点と土器の灯明皿が出土する。本土壙の時期は近世以降で性格は不明である。



第58図　022・024号土壙・023号井戸跡実測図（1/60・1/100）

縄文時代石器集中地点

(1) 石　器

本集中地点からは縄文時代の石器類が総数156点出土しており，その内訳は石鏃12，削器・U－fl　8，楔形石器7，石核6，剥片86，砕片37である。また，石材別では黒曜石154，チャート2であり，ほとんど黒曜石で占められている。また，これらの石器群の帰属時期については，共伴する土器群が縄文時代早期前半の田戸下層式を主体とし，他時期の土器片はほとんどみられないことから，早期前半に位置づけられる。

石鏃（第61図1～12，図版36）

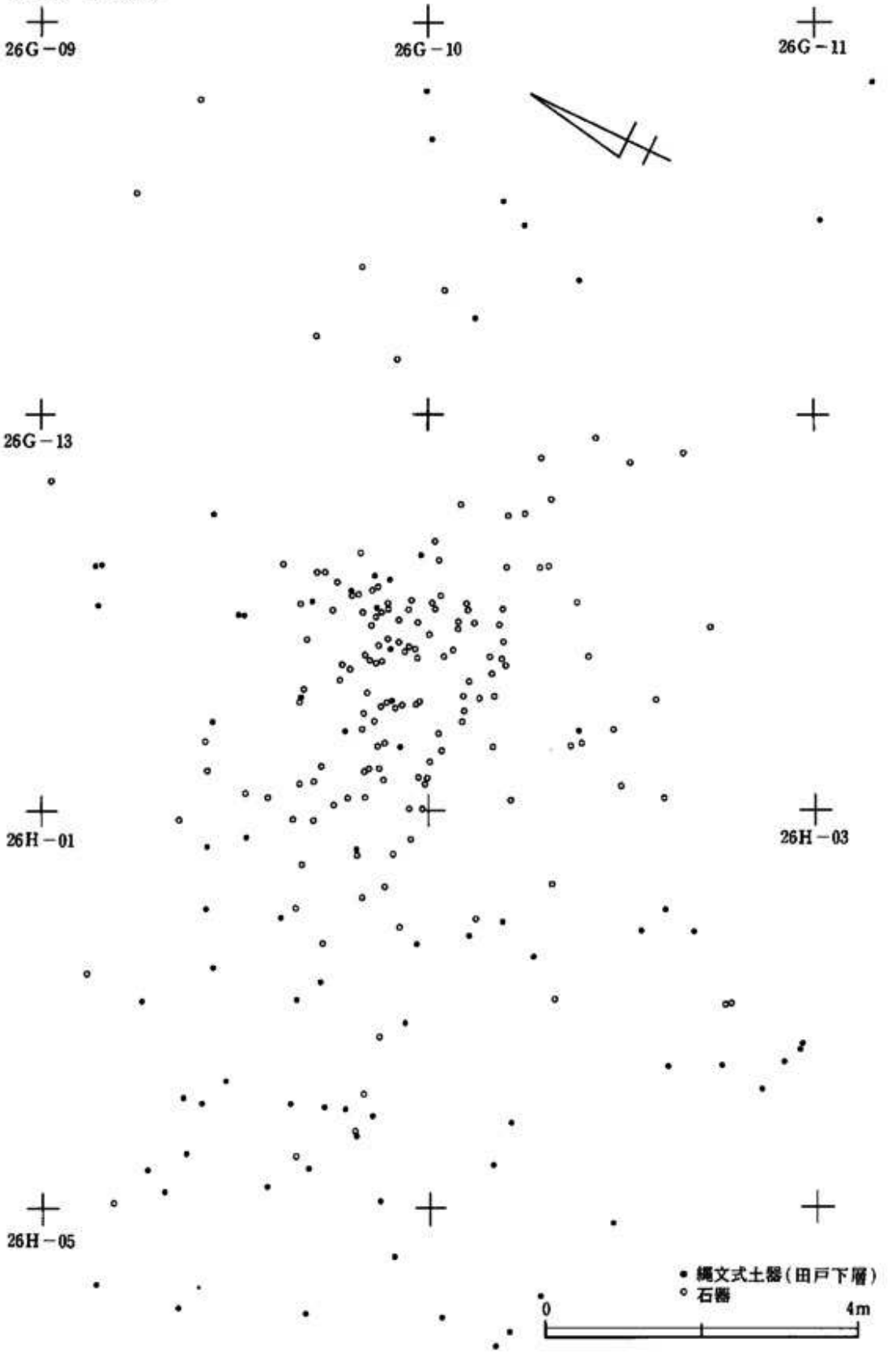
本集中地点の石鏃は，すべて未製品であるので，長幅比・製作工程・素材の差から2類に分類した。長幅比では，1.5：1（I類：1～4・9）のものと1：1（II類：5～8・10～12）のものとに区分された。さらに，これらは製作工程上，側縁調整の初期の段階でI類は，表裏を反転させ，さらに上下を入れ替えることで反対側縁を加工する傾向（1・2・4・9で5点中4点を占める）をもつのに対し，II類は上下を入れ替えるだけで両側縁の加工を行う傾向（7・10・11で不明分を除くと4点中3点を占める）をもつ。[1] 次に素材からみると，折断剥片を素材とするものはI類で2・3・9の3点，II類で6・7・8・11の4点である。一方，剥片を素材とするものはI類で1・4の2点，II類で5・10・12の3点である。また，これらの剥片類は両類ともほぼ半数づつ縦や横に用いられている。これらのことから，上宿人は石鏃の素材として剥片類を選ぶ際，縦長剥片か横長剥片か，あるいは折断されているか否か[2]ということについては意識しなかったが，形態的には二等辺三角形状を呈す剥片類をI類として，正三角形状を呈す剥片類をII類の素材として選び，それぞれ異なる人間が製作に関与した可能性が考えられる。

削器・U－fl（第61図13～20，図版36）

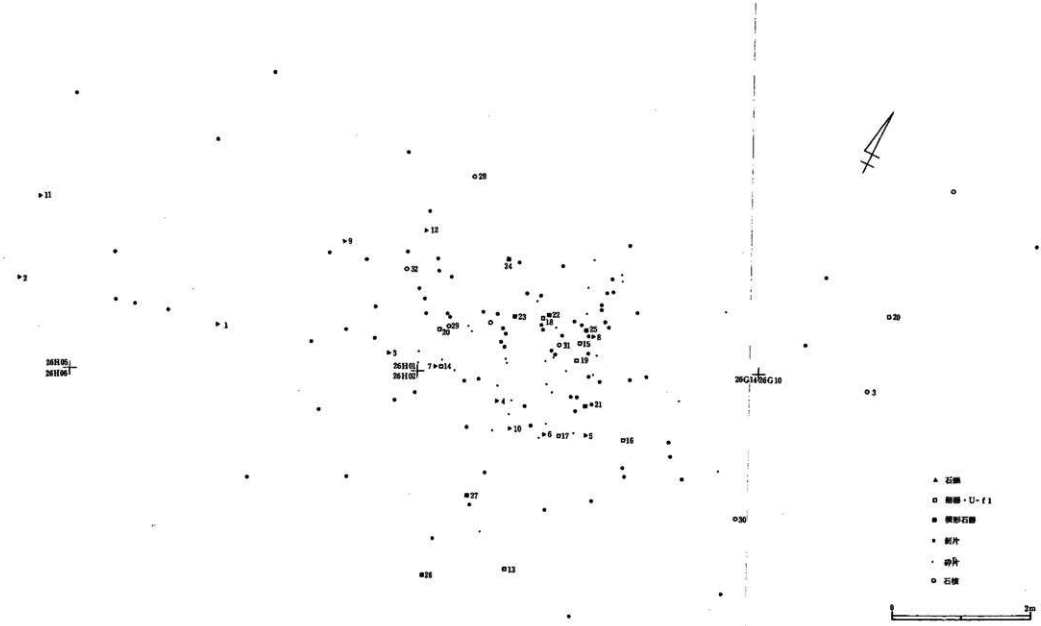
ここでは，微細な剥離痕を有する石器をU－fl，より大きな剥離痕を有する石器を削器とした。これらの石器は長幅比より2：1のA類（13・14・20），1.5：1のB類（15・18・19），1：2のC類（16・17）に分けられ，形態的にもA類は台形状，B類は長方形状，C類は三角形状を呈す。15・19が端部に剥離痕を有する以外はより長い直線状の縁辺部に剥離痕を有する。また，これらの石器は大形の剥片を素材としており，石鏃・楔形石器の素材の選択とは異なっている。

楔形石器（第62図21～27，図版36）

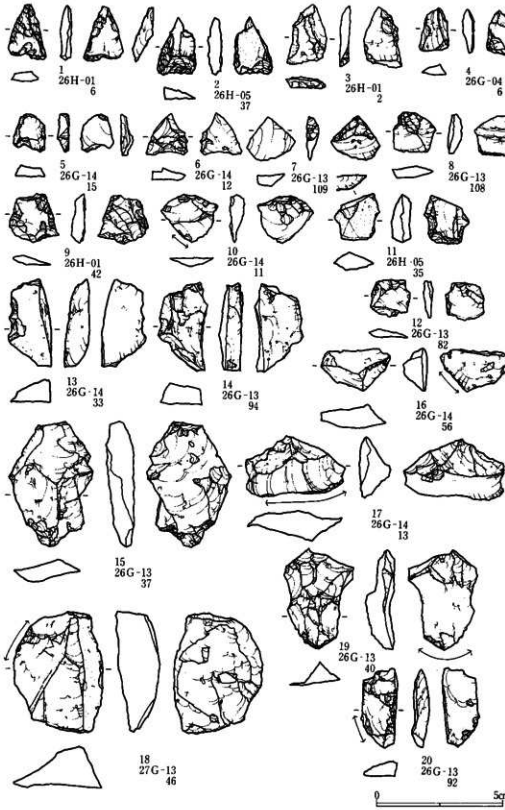
剥片の上下ないしは左右の縁辺部に対になる剥離痕をもつ石器である。自然面を残すもの（22・23・25）と残されないもの（21・24・26・27）に分けられる。特に21は上下だけでなく左右にも交錯する剥離痕を残していることから，少なくとも2回以上の加撃が行われたものと思われる。また，21・22・24・27は剪断面をもつ。これらの楔形石器も欠損品を除き，ほぼ形状的



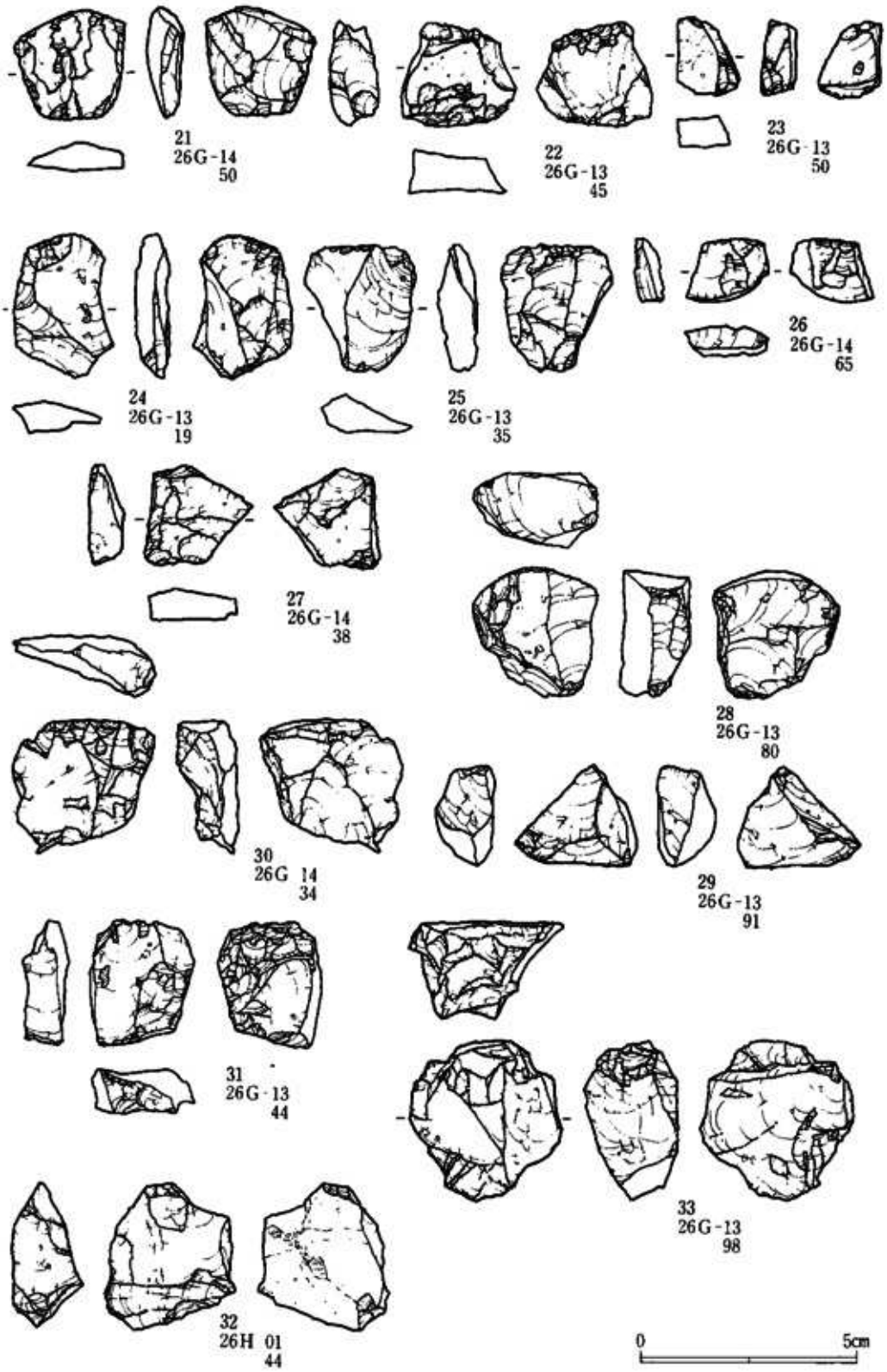
第59図　縄文時代遺物出土状況（1/80）



第60図　縄文時代石器分布図（1/40）



第61図 縄文時代石器実測図(1) (2/3)



第62図　縄文時代石器実測図(2)（2/3）

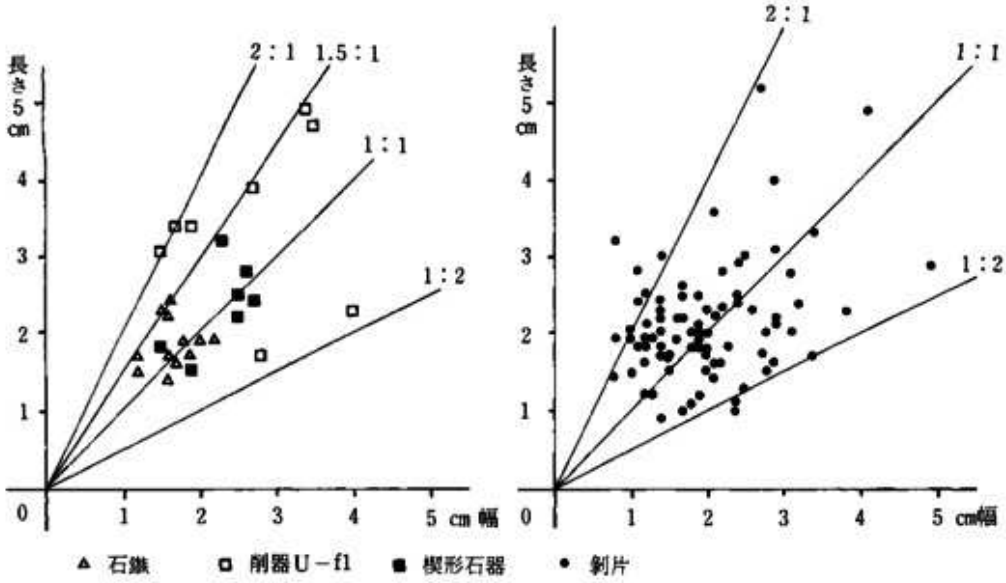
にも大きさ的にも一定していることから，21のように数回の段階である程度の選択を行っていた可能性が考えられる。

石核（第62図28～33，図版36）

いづれも厚手の剥片を素材とするもので，先行する剥離面を打面として不規則に剥離作業を行っている。28は上面を最終的な剥離面とし，4面の剥離面から構成されている。一部に自然面を残している。29は剥片剥離の際に折損した石核の一部と思われる。30・31は四方向から剥離によってほとんど消耗しきてっおり，特に31剥片上下に潰痕状の剥離を有し，形態的にも楔形石器の可能性がある。32・33はそれほど剥離作業を行わずに本集中地点に残されたものである。

(2) 石器の分布

石器は26G－13・14区の3m×3mの範囲を中心として東西に弧状に分布する（第59図）。器種毎の分布をみると，石鏃は本集中地点の東側の南北にのびるかたちで分布している。特にⅠ類は4を除き，この中心部から離れて西側に点在する。それに対しⅡ類は中心部の北側の外縁を形成するかのように分布している。長幅比等の差で分類された両類が分布的にも分離される。そこで次に削器・U－fl，楔形石器の分布をみてみよう。ここでA類・B類・C類の分布をみると，それぞれがまとまって分布しているのが理解されよう。A類は西側に南北にのびるかたちで分布し，B類は石鏃Ⅱ類に対峙するかのように1m程の幅をおいて南側の外縁を形成している。そしてC類は東側で5・6の石鏃と密接に結びついているかのような分布を示している。さらに楔形石器では，削器・U－flと同様な傾向を示しており，ほぼ3ケ所に偏在しそうである。すなわち，A類に近い分布を示す27・26，B類に近い22・23・24・25，C類に近い21の3ケ所である。分布からみる限り本集中地点の楔形石器は，石鏃よりも削器・U－flと結び付きが強いように思われる。[3] 次に石核の分布は，31のように中心部に位置するもの（ただし，31については楔形石器の可能性もある）や30のように中心部から離れたものもあるが，ほぼ削器・U－f l等と同様，南側及び西側の外縁を形成しているようである。最後に80%近くを占める剥片・砕片類については，本集中地点の外縁を形成する石鏃等のトゥール類の中におさまるように散漫して分布している。これらの剥片類は長幅比（第63図）では石鏃（未製品）とほぼ一致しており，石鏃の素材の確保を目的とした剥離作業によって生じたものと考えられる。これらの剥片類の中から該当なものを選んで，集中部の外に持ち出して調整を行ったことは十分考えられよう。[4] 同様のことは外縁を形成する他の石器類についてもいえよう。さて，これらの分析から抽出されることは，少なくとも3ないし4ケ所の場が存在し，これらの場は2人あるいは2集団以上の上宿人が石器製作に関与した結果生じたということである。そしてこれらの場は，土器群と石器群の集中がそれほど重ならないことから，土器の廃棄後それを避けるように形成されたものであろう。



第63図　縄文時代石器長幅比

注

（1）　もちろんII類についても次の段階では表裏を反転させ，側縁調節を行うことは予想されるが，ここでは素材に対して側縁調整を初めにどのように行うのか観察した結果，Ⅰ類・II類間に差異が生じたのである。これらの傾向は石器製作者の癖ないしは社会的規制によるものであろう。

（2）　本集中地点での剥片と折断剥片の比率は46：40で，これは石鏃の素材の選択にもその割合が反映しているように思われる。従って，石鏃製作において折断技法が存在しなかったとはいえないが，折断という現象自信は剥離の際，自然的要因でおこりうると考えられる。

（3）　スクレイピングやカッティングといったこととは異なる機能，例えば「擦り切り溝あるいは細長い凹みにあてて骨角を縦長に割る（岡村　1983）といった機能が楔形石器に想定されるとすれば，削器・U－f1及び楔形石器の集中する場は矢柄等の製作の場として可能性もでてこよう。今後，分布論と結びついた使用痕研究が縄文時代の石器研究にも望まれる。

（4）　これらの検証には，計画的な水洗選別による微細な砕片（特に石鏃製作時の砕片）の検出とそれらの分布状態の分析が不可欠である。

引用・参考文献

麻生　優（1975）「原位置論の現代的意義」『物質文化』23

阿部祥人（1982）「剥離痕による石鏃の分析－試論－」『東京都埋蔵文化財センター　研究論集』1

岡村道雄（1983）「ピエス・エスキーユ，楔形石器」『縄文文化の研究』7

上守秀明・田村　隆（1983 9「第3章第4部2　縄文時代の遺物」『千原台ニュータウン』II

田中英司（1979）「縄文時代の剥片石器製作」『風早遺跡』

野口行雄（1983）「第3章第2節　縄文時代」『新東京国際空港　埋蔵文化財発掘調査報告書III－№14　遺跡』

山下秀樹（1983）「V 6　ブロック2」『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』1　『久保山』

第3項 遺　物

1.遺構出土の遺物

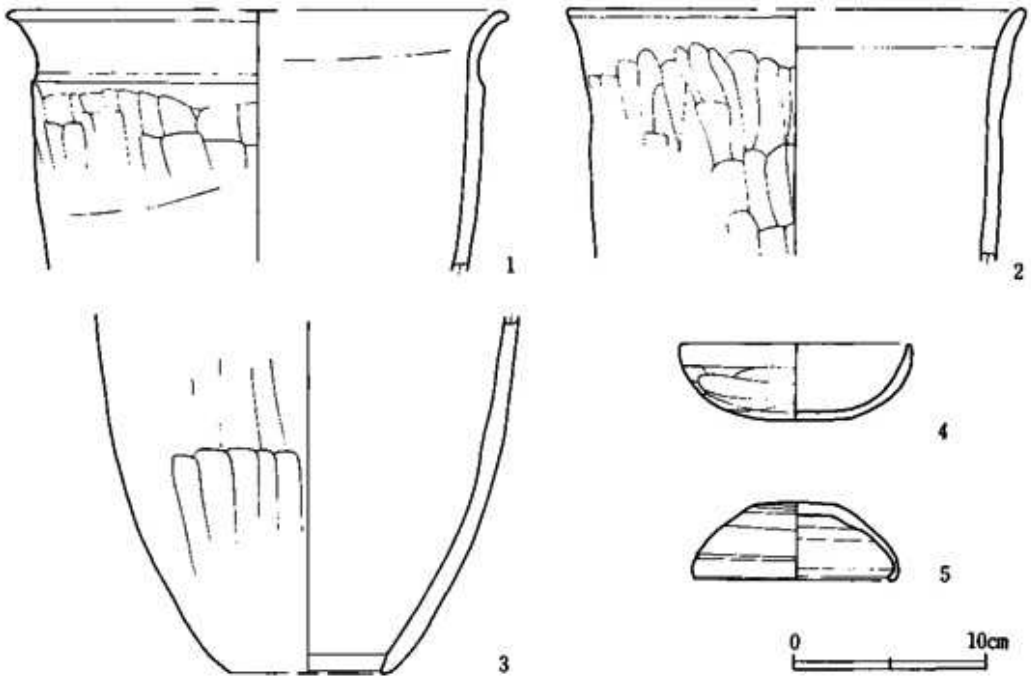
001号住居跡（第64図，図版34）

住居跡の遺存は良い。遺物は細片が多く，実測可能な土器は5点しかなかった。

1～3は，土師器の甕である。1・2は口縁部にヨコナデ，胴部に縦方向のヘラ削りが施される。1は，口縁が胴部と稜をなし，強く外反する。胴部上半は，ヘラ削り痕が明瞭に残るが，胴部中央は，ヘラ削り後横ナデされる。2は，口縁部がやや外反し最大径となる。輪積みが残り，器表に凹凸が残る。調整は丁寧である。3は，胴下半部である。胎土に砂粒を多く含み，ざらざらしている。ヘラ削り後，縦横のナデを施す。

4は，土師器の坏である。半球形の体部から口縁部が内湾気味に立上がる。口唇は，尖り気味である。内面は，黒色処理され丁寧な調整を施す。口縁から底部にかけ，煤が付着する。

5は，須恵器の坏蓋である。左廻りロクロ回転によるひきあげ成形で，体部に自然灰釉がまだらに付着する。



第64図　001号住居跡出土遺物実測図（1/4）

005・008・009・021号遺構（第65・66図，図版34・35）

ここで出土する遺物は，全て18～19世紀に比定できるものであり，時期的な差はさほどないものと考えられるので，一括して記述したい。

出土した磁器は，碗，皿（009－4は，他の器種の可能性もある）であるが，いずれも破損品であって，形状の窺えるものは2個である。胎土は，いずれも灰白色を呈し，呉須の発色はよい。009－1は，青黒色を呈する。これら染付磁器は，関東，東海地方の近世遺跡で多く出土するものであり，広い流通を示す。

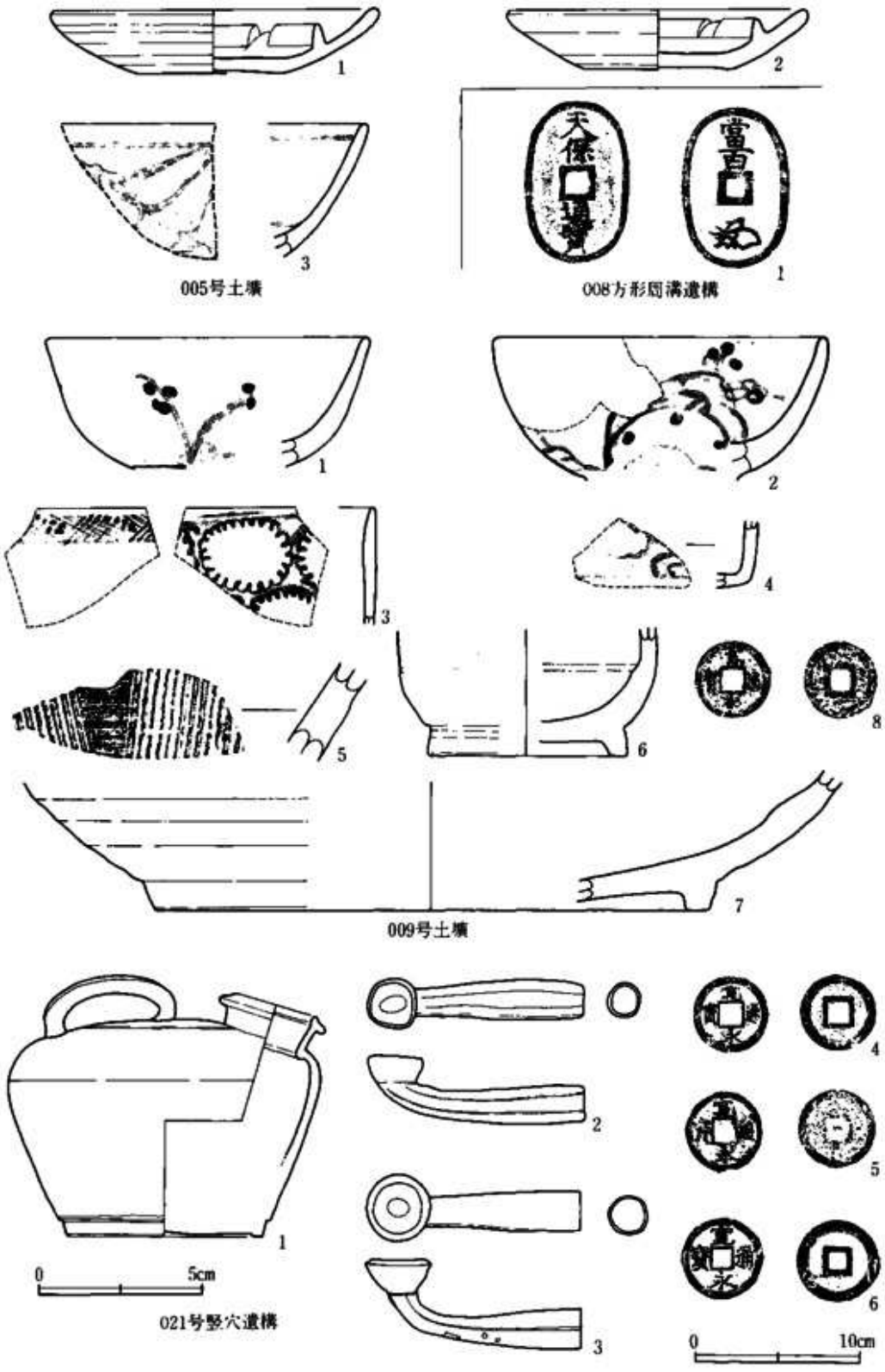
出土した陶器は，燈明皿，香炉，擂鉢，埦，溲瓶，坩である。燈明皿は，最近の調査で各地から出土しているが，その多くは幕末19世紀のものである。本例は多少古いタイプになると思われる。香炉は，009－9・024－3に三足の一部が認められるが，024－2には付かないと思われる。胎土は，前者が黄白色に比べ，後者は，灰白色である。溲瓶は，肩の張った整形の整った器形を呈する。胎土は，黄白色である。これら陶器類は，いずれも瀬戸あるいは美濃産と推定され，その年代は18，19世紀に比定してもよいものと思われる。

焙烙は，口辺部片で内外面に炭がしみこんで黒変している。外面に煤の付着がみられる。

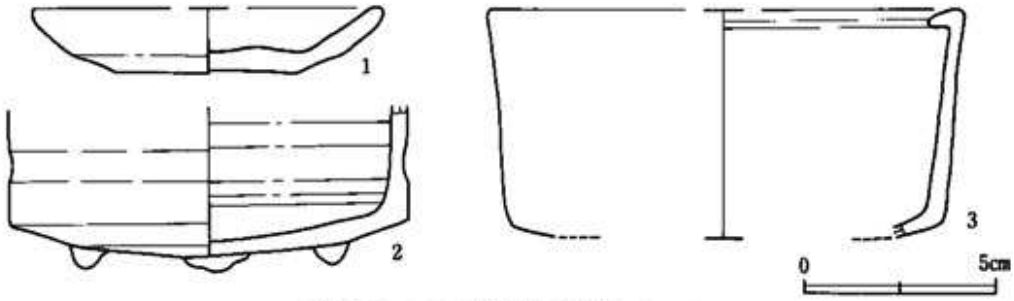
土器（かわらけ）の皿は，口縁の若干内傾する器形で，底径の比が大きい。輪積み成形後，ロクロナデを行なう，底面は糸切り，色調は明赤褐色を呈する。

古銭は，008－1が天保通宝（弘仏吹継天保銭），021－4が寛永通宝（元文十蔓坪八分銭，無印）009－8が寛永通宝（不明），021－5が寛永通宝（元文亀戸銭），021－6が寛永通宝（沓谷銭　正足宝濶縁）である。

キセルは，銅製の雁首で，2は肉厚の八角形を呈する。11gを計る。3は2に比べ，薄手で丸形を呈する。7gを計る。



第65図　005・008・009・021号遺構出土遺物(1/2・1/4)



第66図　024号遺構出土遺物（1/2）

第14表　陶磁器観察表

出土遺構	No	種別	器種	法量（cm）			文様	備考
				口径	底径	器高		
005	1	施釉陶器	燈明皿	10	4	2		鉄釉を施す，受けを有する。旧001-0009
〃	2	施釉陶器	燈明皿	9.2	4.5	1.8		鉄釉を施す，受けを有する。旧001-0008，0010
〃	3	染付磁器	碗				外面菊花文，外面二条界線	口縁から体部片，18世紀後半，伊万里 旧001-0011
〃	4	施釉陶器	燈明皿					鉄釉を施す。旧001-0017
009	1	染付磁器	碗	(9.8)			外面草花文	約十個体。18世紀伊万里。旧002-0001
〃	2	染付磁器	碗	(10.1)			外面草花文	約½個体。18世紀伊万里。旧002-0001
〃	3	染付磁器	碗				外面丸文内面花菱文	口縁片。18世紀伊万里。旧002-0001
〃	4	染付磁器	碗				外面草花文内面界線	体部から底部片。18世紀後半伊万里。旧002-0001
〃	5	施釉陶器	擂鉢					内外面に鉄釉を施す。旧002-0001
〃	6	施釉陶器	壺					内外面に飴釉を施す。旧002-0001
〃	7	施釉陶器	坏					全面に灰白釉を施す。旧002-001
〃	8	施釉陶器	香炉					外面に飴釉を施す，三足。内面に褐色の付着物。旧002-0001
〃	9	白磁	小皿	5.3	2.8	1.7		全面施釉。伊万里。旧002-0001
〃	10	焙烙	鍋					口辺部片。内外面にススが付着し黒変している。旧002-0001
021	11	施釉陶器	瓶		11.9	15.7		外面黄褐色の釉を施す。18世紀。旧010-0021
024	1	土器	皿	(9.8)	5.5	1.2		輪積み成形後ロクロナデを行なう。底部は糸切り。旧018-0002
〃	2	施釉陶器	香炉					御深井釉，白色の胎土。旧018-0001
〃	3	施釉陶器	香炉					外面飴釉，三足。旧018-0001

2．グリッド出土の遺物

(1) 縄文式土器

本遺跡出土の縄文式土器は，調査区の表土層から出土したものであり，当該期の遺構は検出できなかった。但し，前述した時期，性格不明の土壙が伴う可能性はある。

出土範囲は，北側先端部の3～5グリッドに早期～晩期の土器（第86～89図，図版32）が，19Hグリッドに後期の土器片が，26Gグリッドに早期の土器片（第59図，図版33）が集中して出土する。以下従来の編年に基づいて分類し，説明を加える。

第1群土器　早期の土器を一括した。

第Ⅰ類　撚糸文系土器（第67図1～25，図版37）

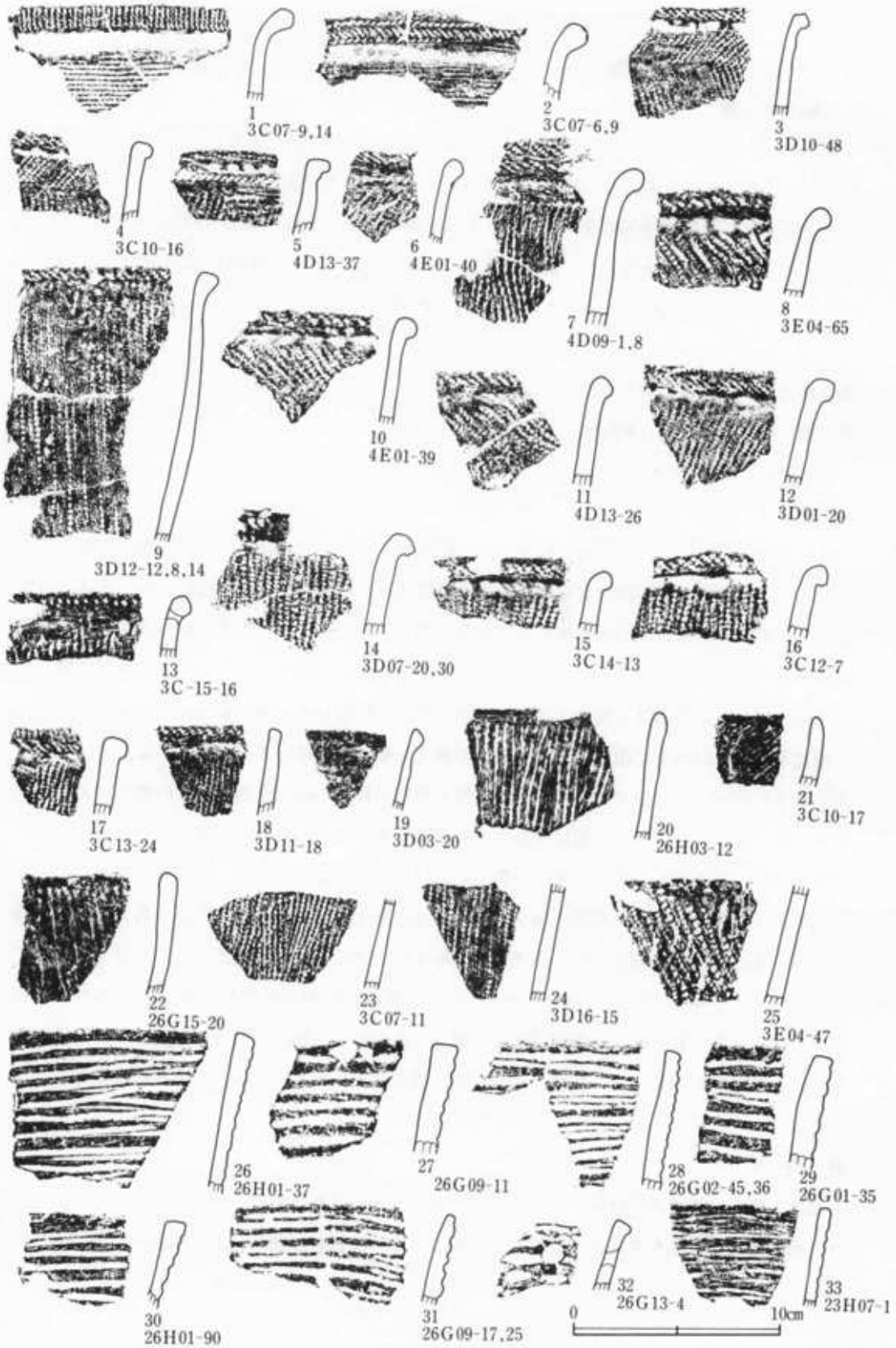
全て破片で178点を数える。

第Ⅰ類－A

1～18は，口唇部が肥厚し強く外反する口縁部である。1・2は，口頸部に横位の縄文を施す。1は，口唇部にRの撚糸文を施文する。頸部はRLの縄文を横位に回転する。2は，口唇部にRの縄文を回転し，両側を挟むようにRの撚糸を押圧する。口頸部はRの縄文を回転し指頭で圧痕する。3・4は，口唇と頸部・胴部にRLの縄文を施す。口唇上端より外側に施文する。頸部にRLの斜縄文を施す。5は，上面が平坦な肥厚した口唇をもつ。口唇・頸部にRLの縄文を施す。口唇下に指頭の圧痕とRLの縄文を横に一条押圧する。6・7は，口唇下に一条の縄文を押圧する土器である。6は，口唇・頸部にRLの縄文を施文し，口唇下にRLの縄文を一条押圧する。7は，口唇にRLを2条施文し胴部にLの撚糸文を施す。8・10・11は，口唇・頸部に右下がりのRLの縄文を施文し，口唇下に指頭圧痕をもつ。12は，口唇と頸部にRLの異条の縄文を施す，指頭圧痕をもつ。9は，薄手の土器で口唇，胴部にRLの縄文を施す。13～16は，口唇・胴部にRLの縄文を回転する土器で，口唇が肥厚し強く外反する土器である。口唇下に指頭の圧痕を明瞭に残す。13は，頸部に両面より穿孔する補修孔をもつ。17は，口唇に2条のRL縄文と胴部にRLの縄文を施文する。18は，口唇が肥大せず，口唇と胴部にRLの縄文を施す。1～18は，井草式の土器で，1～8，10・11はⅠ式に比定できる土器である。

第Ⅰ類－B

19は，薄手の無文の口縁部である。口唇は肥厚し，やや外反する。口頸部に指頭の圧痕を残す。胎土は，細砂粒を含み密で，焼成も良好である。口唇の形態から，早期前半の時期と思われる。



第67図　グリッド出土縄文式土器拓影図(1)（1/3）

第Ⅰ類－C

20～22は，口唇が無文で尖り気味の口縁部である。20は，口縁がやや開き気味となる。胴部は，Ｌの撚糸文が施される。21は，口縁がやや内傾するように丸味をおびる口縁部である。胴部はＲＬの縄文を施文する。22は，口縁がやや内傾する土器で胴部はＲの撚糸文を施す。

第Ⅰ類－D

23～25は，胴部破片である。全てＲＬの縄文を施文する。25は左から強く押して回転する。

第Ⅱ類　沈線文系土器(第67・68図26～45，図版37・38)

全て破片で230点が出土する。26Ｇグリッドと台地先端部から出土するが，多くは，26Ｇグリッドより出土する。

第Ⅱ類－A

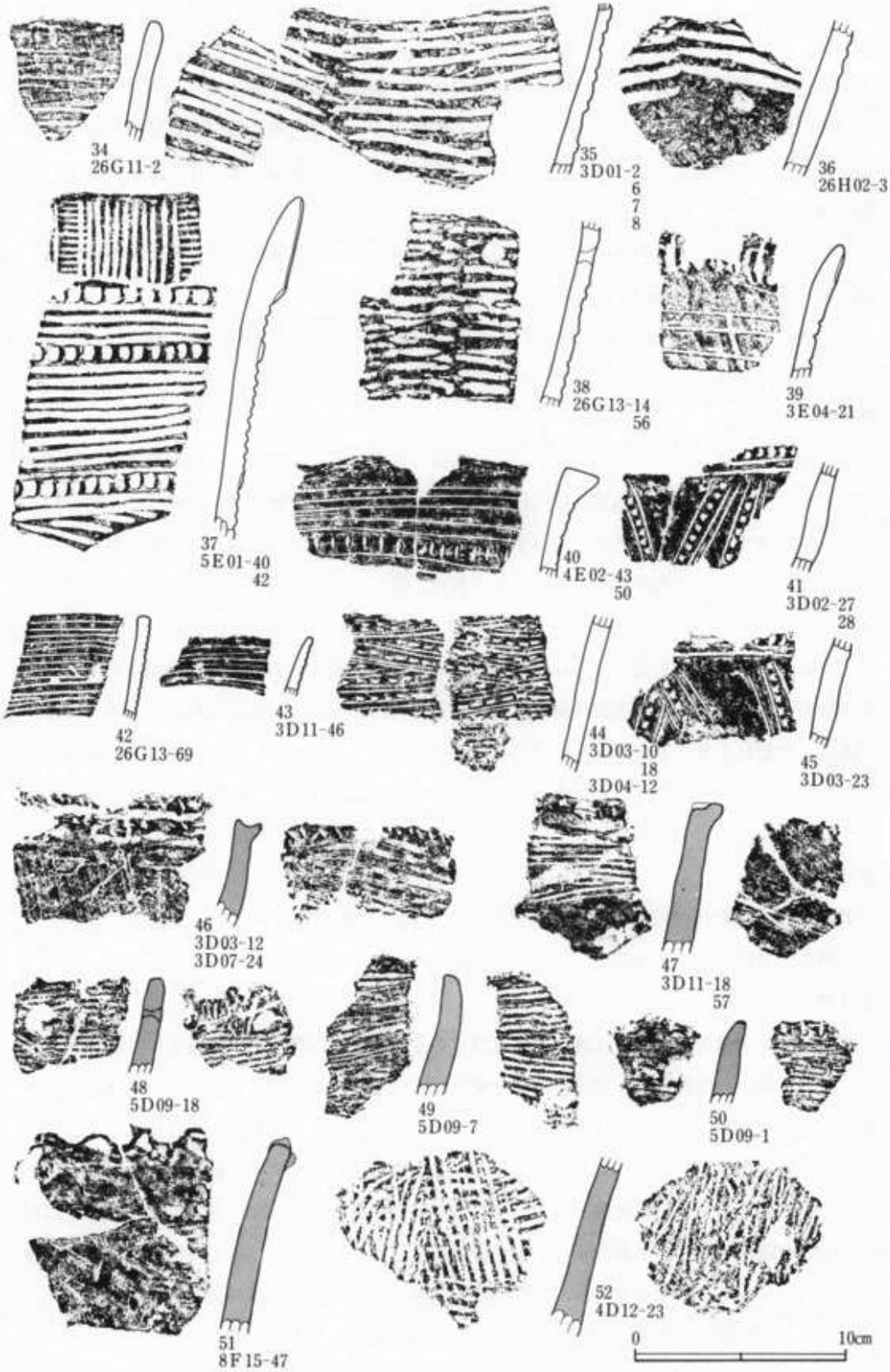
26～32，35～38は，竹管状工具による太い沈線を施す土器を一括した。第Ⅱ類230点中181点を占める。26～32は，口縁部で直線的にやや開く器形を呈する。断面は，角棒状で口唇が厚くなるものと薄くなるものがある。太い平行沈線を施す。胎土は，砂を混入し，ざらざらしている。35・36・38は，胴部破片である。35は，石英，長石の小石を混入し，灰白色に焼きしまる薄手の土器である。幅４㎜程の平行沈線を施す。36は，砂を多く混入する胴下半の破片である。５㎜幅の平行沈線を施す。38は，砂粒を多く含む胴部破片である。３～４㎜幅の沈線で，刺突状の短く連続した平行沈線を施す。両面穿孔の補修孔をもつ。37は，緩く外反する口縁部である。竹管状工具による縦位。横位の平行沈線と，区画帯に角棒状工具による連続した押引きを施す。口縁部は，縦位の平行沈線を横位の平行沈線で区画する。胎土は，砂を多く混入しざらざらする。

第Ⅱ類－B

33，34は小型の鉢の口縁部である。竹管による浅い沈線を横位に施す。胎土は，砂粒を含む。焼成は良好で焼きしまる。

第Ⅱ類－C

39～45は，半截竹管による沈線を施す土器である。39は，口唇部に半截竹管による連続した粗い沈線を施し，口縁部にも同じ施文具で横位の平行沈線を施文する。調整は，粗雑である。40は，口唇が外反するように肥厚する口縁部である。半截竹管による浅い平行沈線と，竹管による連続刺突文を施す。内外面を磨いており，成形も丁寧である。41・45は，同一個体と思われる。半截竹管による平行沈線と棒状工具による連続した押し引き文を施す。42・43は，口径の小さい口縁部である。半截竹管による平行沈線を丁寧に施文する。胎土も密で，成形も丁寧である。44は，長石の小石を含み，丁寧に成形，調整される。半截竹管による浅い平行沈線と，竹管による連続刺突文を施す。第Ⅱ類は，田戸下層式に比定できる土器である。



第68図　グリッド出土縄文式土器拓影図(2)(1/3)

第Ⅲ類　無文土器（第74図1，図版44）

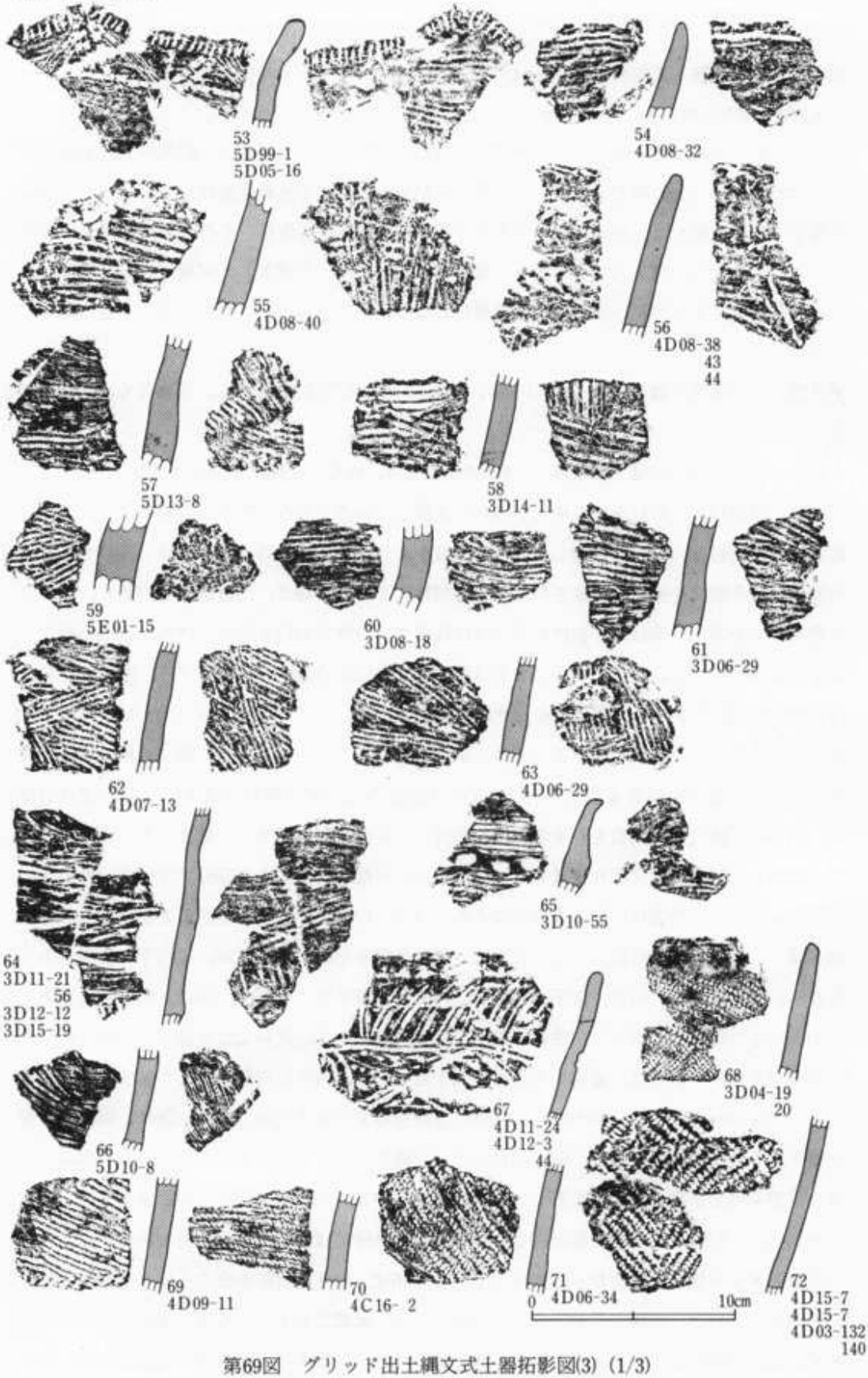
土器片100点を数える。台地先端から出土する。

1は，3E－04，4E－05グリッド付近27点の接合土器である。器形は，細長い尖底土器で，口径は21.5×20.7cmの楕円形を呈する。胴下半が一部欠損するため器高は不明であるが，36cmと推定できる。胎土は，長石，石英の小石を多く含み粗い。器面は，小石が左方向へ一律に動いていることから，施文具による削りと思われる。内面は，丁寧なナデが施される。焼成は良好で淡褐色を呈するが，口縁部で若干黒褐色となる。器形，胎土等から沈線文系土器に比定できる。

第Ⅳ類　条痕文系土器（第68・69図46～67，第74図2，第75図3・4・5，第76図6，図版38・39・44～46）

胎土に繊維を含む条痕文系土器で，625点を数える。台地の先端部より出土する。

46は，口唇頂部に刻目をもち中央が凹む，肥厚した口唇である。内側は貝殻条痕文，外側は擦痕を施す。47は，口唇が肥厚し，内外に条痕をもつ。48は，口唇に半載竹管の刻目をもつ。内面に貝殻条痕文を施す。繊維を多量に含み補修孔をもつ。49は，口唇がやゝ内傾し，内外に貝殻条痕文を施す。50は，小波状を呈する口縁部で，口唇に刻目を施す。内外に貝殻条痕文を施す。51は，厚手の口縁部である。口唇は指頭による圧痕の連続波形を呈する。内外とも無文で，器面に凹凸がある。ただ外面に2ケ所半載竹管の押し引き痕を有する。胎土は，繊維と砂を多く混入し，ざらざらしている。52は，胴下半部である。外面は縦位，横位の粗い貝殻条痕文を，内面は縦位の貝殻条痕文を施す。53と第75図5は，同一個体である。山形の波状口縁で，口唇に半載竹管の刻目を有する。半載竹管による連続押し引文と，数条の細い沈線によって，連続した三角形の文様を構成する。口縁下は，貝殻条痕文のある部分とない部分があるので判然としない。内面は，貝殻条痕文である。54は，口縁部で波状を呈すると思われる。口唇部が薄く，繊維を多量に混入する。外面は，貝殻条痕文を施す。内面は，口唇下に沈線がみられるが，条痕はない。55は，厚手の土器で，内外に貝殻条痕文を施す。56は，口唇部に斜方向の刻目をもつ口縁部である。二段に異方向の棒状工具による連続刺突文を施す。内面には，貝殻条痕文を施す。胎土は，繊維を多量に混入する。57は，内外に貝殻条痕文を施す厚手の土器片で，器厚が一定でない。58～63は，内外に貝殻条痕文を施す土器である。59は，繊維を多量に混入する厚手の土器である。62，63は，胎土に繊維と砂を含みざらざらしている。64は，内外に貝殻条痕文を施す薄手の土器で，口縁に近い部位と思われる。65は，口縁部である。口縁と胴部の境を肥厚し，半載竹管の押し引きを施す。口縁部は薄くなり，口唇が外反する。内外に貝殻条痕文を施す。器面がしっかりしている。66は，内外に貝殻条痕文を施す小型の土器片と思われる。67は，口縁が湾曲するように張り出す口縁部である。口唇下に半載竹管による連続刺突文，口縁部に斜位の沈線を施し，横一条の沈線で区画する。胴部は，規則性のない棒状



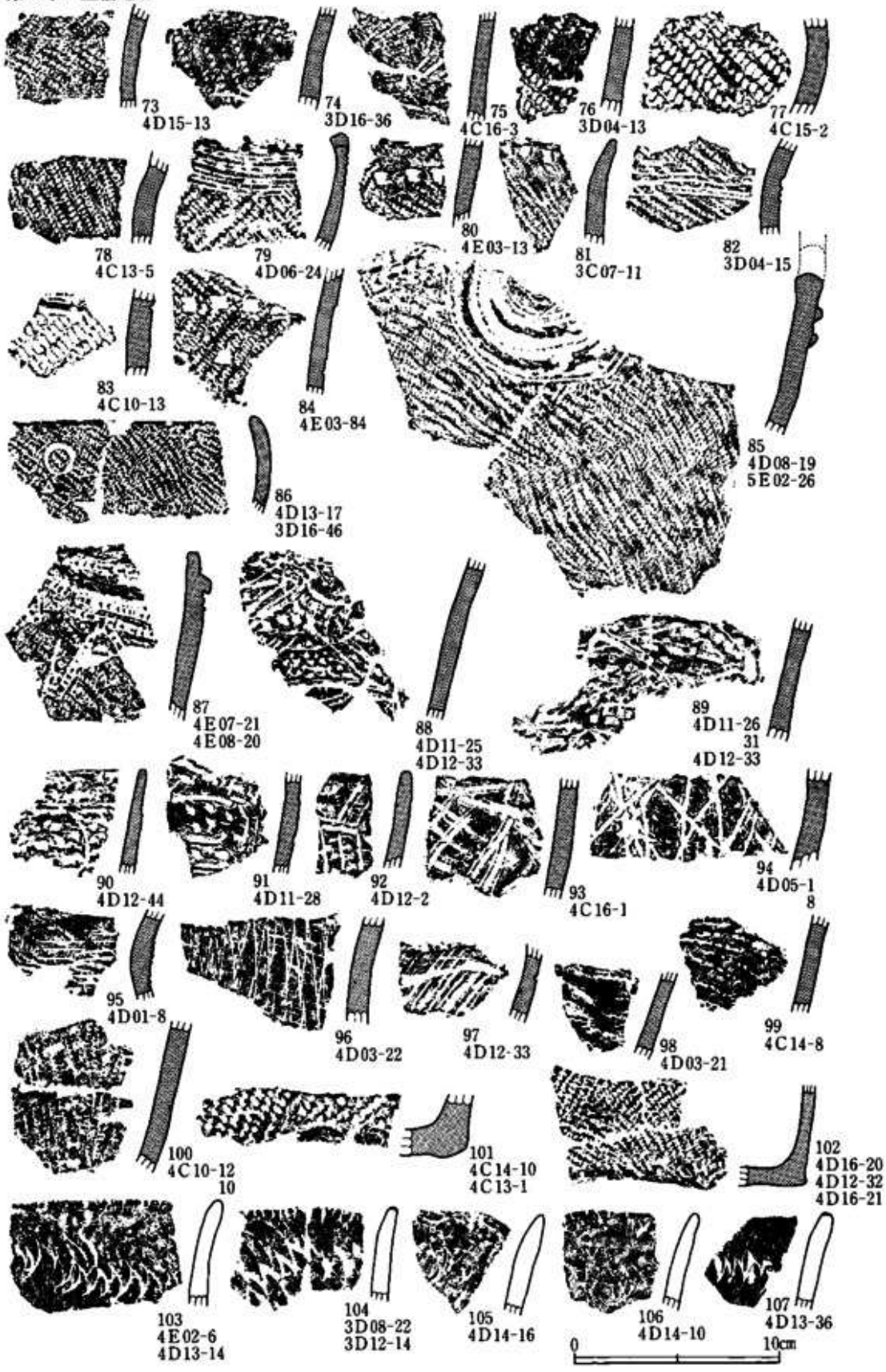
第69図　グリッド出土縄文式土器拓影図(3)（1/3）

工具による連続刺突文と貝殻条痕文を施す。内面は，擦痕がみられる。第74図2は，50－13・14，5E－01・02グリッド付近から出土する。推定口径23cm，器厚0.9～1cmの尖底深鉢である。1/3が遺存する。胴部は直線的に緩く外反し，波頂部に2個の円形突起を有する波状口縁となる。口唇は半截竹管による刻目を施し，若干外反する。胴部は内外に貝殻条痕文を施し，口頸部と胴上部に2条の連続刺突文を施文する。胎土は，繊維と細砂粒を多く含みざらざらしている。色調は外面が黒褐色で内面は茶褐色を呈する。第75図3・4，第76図6は，内外に貝殻条痕文を施し，口縁部を隆帯によって区画する尖底深鉢である。3は，5D－13，5E－01・02グリッドから出土する。推定口径43cmの大形土器である。胴下半で屈曲し，緩く外反して口縁に至る。口縁は胴部の境に刻目をもつ隆帯を施し，区画して薄手となる。縦位に刻目をもつ隆帯を貼付け，頂部として緩い波状口縁となる。なお，口唇部にも刻目を施す。胴部は，凹凸のある厚手の土器で，胴中位に刻目を施す低い隆帯を1条廻らす。胎土は，繊維と細砂粒を多く含み黒褐色を呈する。4は，3D－07付近から出土する口縁部片である。3と同様のパターンで口縁部は，縦横の隆帯によって区画される。口唇は，中央が凹み，刻み目が施される。6も前者と同様であるが，縦位の隆帯上に楕円形の凹みをもつ。第IV類は茅山上層期に比定する土器である。

第II群土器・前期の土器を一括した。

第I類　黒浜式土器（第69・70図68～102，第76図7，第77図8～10　図版39・40・46）胎土に繊維を混入する土器で，280点を数える。台地先端のみの出土である。

68は，口縁部で，口唇近くを無文とする。上帯RL，下帯LRの羽状縄文を施す。69は，粗いRの縄文を回転する。70は，RLの縄文を回転する。外面は黒褐色であるが，内面は赤褐色で丁寧な磨きを施す。71は，粗いRLの縄文を回転する。72，73は，羽状縄文で，72の上帯がRL，下帯がLR，73の上帯がLR，下帯がRLの縄文を施す。74は，浅いRLの縄文を回転する。75は，縄文原体を放射状に回転する。76は，粗い羽状縄文で上帯LR，下帯RLの原体を回転する。77は，粗いRLの回転で，内面を丁寧に磨く。78は，RLの縄文を回転する。79は，2個の突起を有する波状口縁で，LRの地文に，口唇下に2本の半截竹管による押し引きと，2条の半截竹管による沈線で切る。沈線はいずれも下側を深くして強弱がつく。80は，口縁部と思われる。口唇を無文とし，竹管の刺突とRLの縄文を施す。81は，外反する口縁部で，口唇に竹管を連続して刺突する。地文はRLの縄文である。内面は磨く。82は，RLの縄文を回転した地文に，半截竹管による沈線を施す。内面は磨く。83は，LRの粗い縄文を地文とし，半截竹管による沈線を施す。内面は磨く。84は，LR，RLの羽状縄文に半截竹管による連続刺突文を施す。85は，深鉢の口縁から胴部片である。RLの縄文を地文とする。円形の孔に渦巻き状の隆帯を施す。隆帯の側面は，半截竹管によっておさえる。左上は口唇部と思わ



第70図　グリッド出土縄文式土器拓影図(4)（1/3）

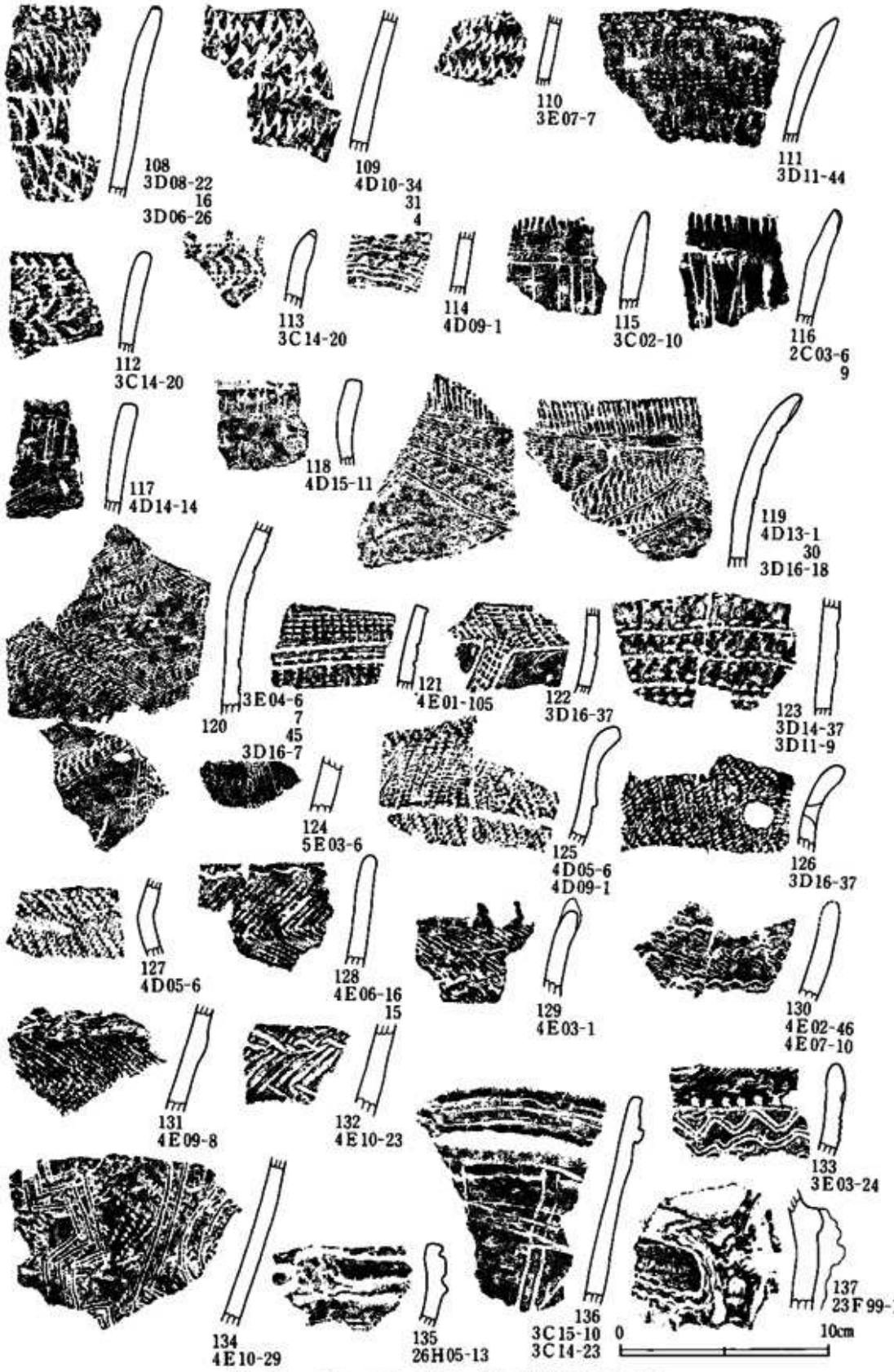
れる，半截竹管による押し引きが施される。86は，やゝ内傾する深鉢の口縁部である，ＲＬの縄文に，竹管による円形文を施す。内面は，磨かれる。87は，ＲＬの縄文を地文に，高い隆帯と半截竹管による押し引きが施される。内面は赤褐色で磨かれる。88，89は菱形の半截竹管文と棒状工具による刺突文を施す。胎土は繊維を多く含む。成形・調整が雑である。90～92は，半截竹管による楕円形の沈線と刺突文を施す。胎土は，繊維を多く混入し，黒色を呈する。93は，半截竹管文を施す。器面が凹凸し，雑な成形である。94は，厚手の大型の土器で，不規則なＶ字形の沈線を施す。内面は，丁寧なナデを施す。95は，ＬＲの地文へ半截竹管による沈線を施す。96は，浅い沈線を施す。97は，半截竹管による沈線で，胎土は繊維を多く混入する。98～100は，貝殻腹縁による。連続した圧痕である。101・102は，底部である。101は，ＬＲを，102は，ＬＲ・ＲＬの羽状縄文を施す。第76図７は，４Ｅ－03グリッドより出土する。口径31cm，器厚0.9～1.0cmの深鉢である。胴部は屈曲なく緩く外反する器形である。全面にＲＬ・ＬＲの縄文を左方より回転し，羽状となる。口縁から胴上半へ半截竹管による連続刺突文を５段廻らす。内面は茶褐色で丁寧な撫でを施す。第77図８～10は，縄文のみ施文する土器である。８は，４Ｅ－03・07グリッドより出土する。上帯ＬＲ・下帯ＲＬの羽状縄文を施す。９は，３Ｄ－16・３Ｅ－04グリッドより出土する。推定口径16cm，器厚0.7～0.9cmを測る。全面に粗いＲＬの縄文を回転する。胎土は繊維を多く含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。10は，３Ｄ－04，08グリッドより出土する。推定口径20cm，器厚0.8～1.0cmで，口縁が外反する。全面にＲＬの縄文を上から下へ施す。内面は丁寧なナデが施される。

第Ⅱ類　浮島式土器（第70・71図103～118，第77図11，図版40・41・47）

96点が出土する。３・４グリッドより出土する。

第Ⅱ類－Ａ

103～110・第77図11は，連続波状貝殻文を施す土器で，総点56点を数える。103～108は，口縁部である。いずれも口唇に刻目をもち，胴部に貝殻腹縁の波状文を施す。胎土に砂粒を多く混入するため，器表が脆くざらざらしている。105は，波状口縁を呈するが，他は平縁である。109・110は，貝殻波状文を施す胴部片である。第77図11は，４Ｄ－10グリッド付近より出土する深鉢である。口縁部と胴下半の２個体であるが，同一個体と思われる。全体的に器形は歪む。胴部は外反し平縁となる。推定口径17cm，推定器高26cm，器厚0.7～0.8cmを測る。胴上半に貝殻腹縁の連続波状文を施し，下半は無文となる。胎土は，細砂粒を含み，焼成は良好で内外とも赤褐色を呈する。



第71図　グリッド出土縄文式土器拓影図(5)（1/3）

第II類－B

111～114は，貝殻腹縁を押圧する土器で，総数25点を数える。111は，口唇部が尖る口縁部で，貝殻腹縁を連続的に押圧する。内面に縦方向の擦痕を残す。112・113は，貝殻腹縁による押圧である。砂粒を多く混入し，器表がざらざらしている。113は，口唇に突起をもつ。114は，貝殻腹縁の背による沈線と押圧痕である。

第II類－C

115～118，A，Bに分類できない土器15点である。

115・116は，口唇が尖り気味の口縁である。口唇と胴部に沈線を施す。胎土は，砂を多く混入する。117・118は，口唇に浅い沈線を施すもので，胴部は不明である。

第III類　興津式土器（第71図119～124，　第77図12，図版41，46）

33点が出土する。3・4グリッドより出土する。

第III類－A

119，120，124は，細い沈線で区画し，細かい貝殻腹縁文を施す土器である。119・120は，口唇に刻目を施す。胴部に菱形の無文帯を囲むように細かい沈線を施し，貝殻腹縁を施文する。124は，浅い沈線と貝殻腹縁文を施す。

第III類－B

121～123は，貝殻腹縁を圧痕し，Aより粗い土器である。

121・122は，V字状の深い沈線と貝殻腹縁の圧痕である。123は，貝殻腹縁の圧痕と思われる。

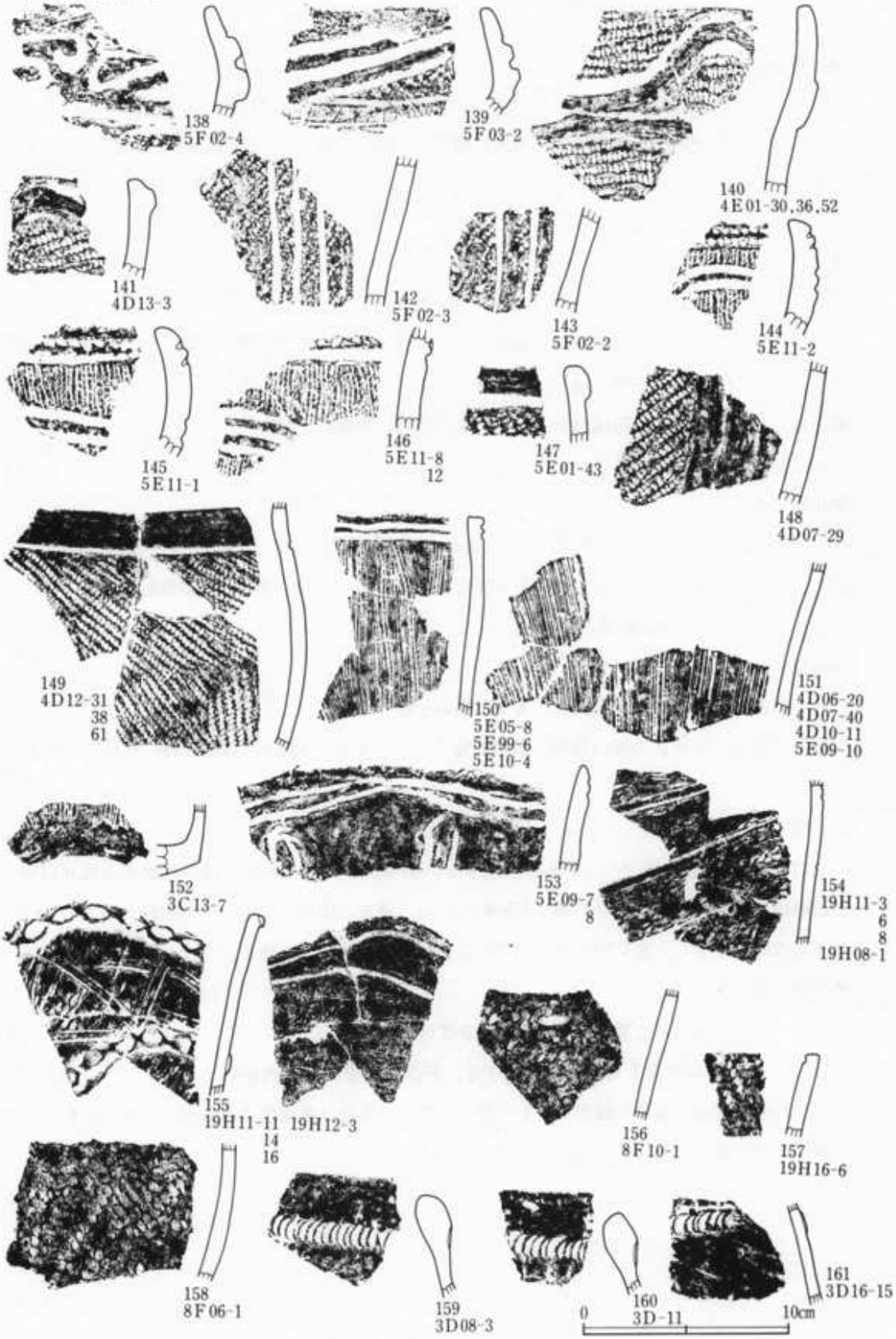
第III類－C

第77図12は，4E－05グリッドから出土する。胴中央がふくらみ，口縁が外反する波状口縁で口唇部に刻目をもつ。LRの縄文を回転した後，縄文の山をつぶすような痕跡が窺える。内外とも暗褐色を呈し，部分的に煤が付着する。推定口径22.5cmを測る。

第IV類（第71図，図版41）

125～127は，前期の土器である。細分できずIV類とした。

125は，波状口縁でRLの縄文を回転する。胴部との境に粘土紐を貼り，折返し状の段差がつく。126・127は，波状口縁部でRLの縄文を施す。外面は黒褐色であるが，内面は赤褐色で丁寧な磨きが施される。126は補修孔をもつ。



第72図　グリッド出土縄文式土器拓影図(6)（1/3）

第Ⅲ群土器　中期の土器を一括した。

第Ⅰ類　下小野式土器（第71図128～132，第78図13・14・15，図版41・47）

119点が4Eグリッドを中心に出土する。

128は，上帯LR，下帯LRの羽状縄文で口唇下に結節縄文を施す。胎土に石英の小石を混入し，焼きしまる。129は，連続する突起を有する口縁部である。無節の縄文に2段の結節縄文を施す。130は，浅い無節の縄文と結節縄文を施す。131は，結節縄文下が肥厚する。上帯LR，下帯LRの羽状縄文を施す。胎土に石英の小石を含み焼きしまる。132は，Lの縄文と異条の沈線と結節縄文よりなる。砂を多く混入し，器表がざらざらしている。内面は，丁寧なナデを施す。第78図13は，4E－07，03グリッド付近より出土する。推定口径28cm，器厚0.8～0.9cmを測る。Rの縄文を左より回転し，結節縄文を施文する。口縁部で輪積みするが，外面に段差をつけて折り返し状とする。成形は丁寧で歪みがない。第78図14は，4E－07グリッド付近より出土する胴部である。胴部中位から下位に位置し，強く括れる。Rの縄文を地文に数条の結節縄文を廻らす。A・B2個体出土したが，出土地点，土器様相から同一個体と思われる。第78図15は，4E－10グリッド付近から出土する。LRの縄文に結節縄文を施す。推定底径9cmを測る。

第Ⅱ類　阿玉台式土器（第71図137，図版41）

3点が出土するのみである。

137は，口縁部片である。窓枠状の隆帯内側を棒状工具で連続刺突する。胎土は，雲母，小石を混入し粗い。

第Ⅲ類　中期前半の土器（第71図133～136，図版41）

133は，口唇下部を肥厚し，半截竹管で刺突する。胴部は半截竹管で波形を施文する。全面に結節縄文が見られる。134は，LRの縄文を地文に半截竹管による沈線を施す。135は，口縁部に竹管の押し引きによる窓枠状の区画をもつ。窓枠下に山形の隆帯をもつ。136は，折返し口縁と，輪積み痕を残す粗い整形の土器である。全体に縦横の竹管文を施す。胎土は，砂を多く混入し，器表がざらざらしている。133～136は，中期初頭の可能性が高い。

第Ⅳ類　加曽利E式土器（第72図138～148，第78図16，図版42，47）

総数99点が出土する。4，5グリッドからの出土が多い。

138，139は，同一個体である。キャリパーを呈し口縁が内傾する口縁部で，隆帯を貼る。140・141は，ややキャリパーを呈する口縁部である。LRの縄文を地文とし隆帯によって文様を構成する。142・143は，RLの縄文を地文とし，沈線が下垂する。胎土は砂を多く含み，器表はざらざらしている。144，145は，同一個体でキャリパーを呈する口縁部である。RLの縄文を地文とする。口唇下に先端の尖った棒状工具により2段の連続刺突文を施す。キャリパー部に竹管による2条の沈線を施し，文様を構成する。146は，胴部から口縁部片である。RL

の縄文を地文に刺突文を有する隆帯と沈線を施す。147は，口唇が肥厚する口縁部でＲＬの縄文を施す。148は，ＲＬの地文に山形の低い隆帯を貼付ける。隆帯間は磨消される。第78図16は，4Ｄ－08グリッド付近より出土する深鉢である。口縁は，口径24cmを測りキャリパーを呈する。半截竹管による押し引きと沈線の２条を施し下位に半截竹管の刺突を連続する。突帯は，３個所でＳ字状の中に沈線を施す。胴部は，３条の半截竹管による下垂線と，２条の半截竹管による沈線が蛇行して下垂する文様が２ケ所と・２条の半截竹管が下垂する側面に，半截竹管の背を向けた刺突文が連続する施文で１単位となり，２単位で構成される。地文はＲＬの縄文である。内面は丁寧に撫でており，滑らかである。胎土は，雲母と砂を多く含み粗い。焼成は良好で，淡褐色を呈する。16は，加曽利ＥⅠ式に比定できる。

第Ⅴ類　中期の土器（第72図149，図版42）

149は，中期後半の土器と思われるが，時期不詳のためⅤ類とした。ＲＬの縄文を沈線で区画し，口縁部に磨消しを行なう。

第Ⅳ群土器　後期の土器を一括した。

第Ⅰ類　堀之内式土器（第72図150～153，図版42）

14点を数える。４Ｄ，5Ｅグリッドより出土する。

150～152は，同一個体と思われる小形深鉢である。胴部に４～５条の沈線を施す施文具で条痕を施した後，口唇下に２条の沈線を横位に施す。胎土は，砂を混入する密な胎土で，焼きしまる。成形・調整は丁寧である。153は，推定口径14cmの深鉢口縁部である。口縁に波状の２本の沈線と胴部に下垂する沈線を施す。胎土は，砂を多く含み，外面は雑であるが，内面は丁寧に磨かれている。

第Ⅱ類　加曽利Ｂ式土器（第72図154～158，図版42）

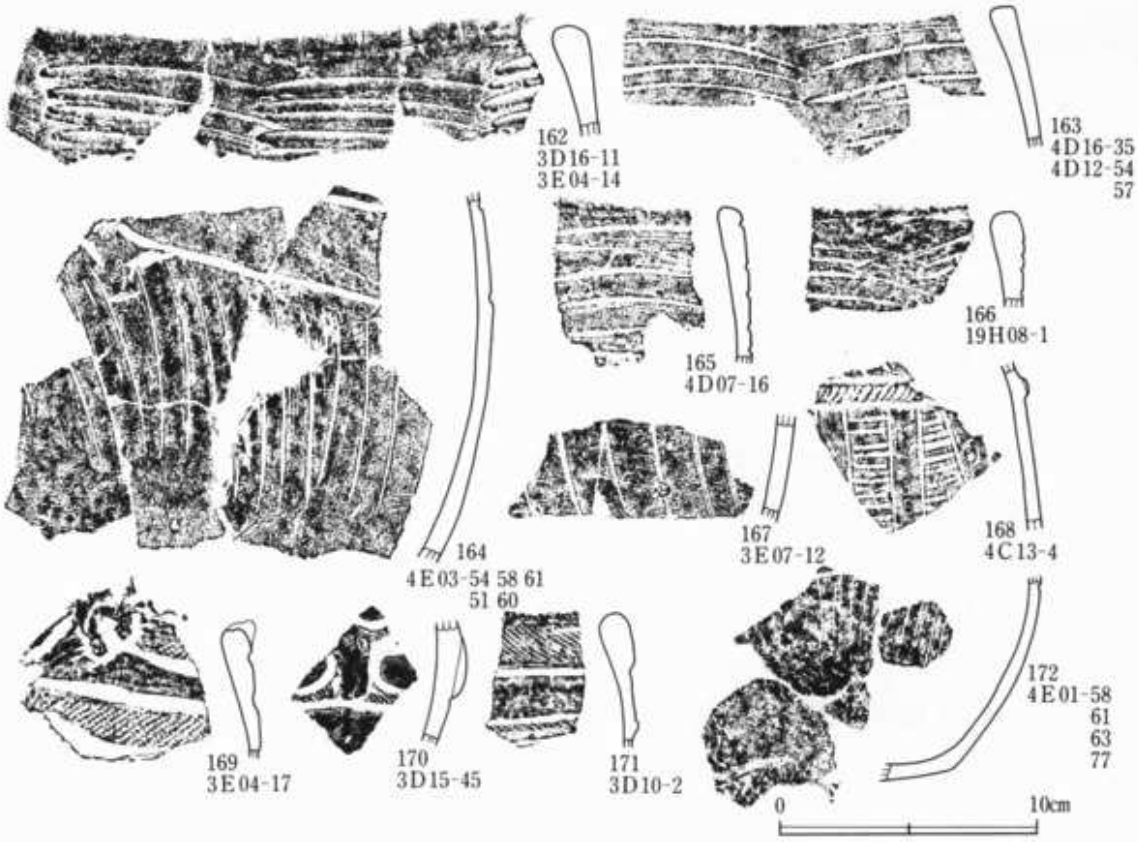
16点を数える。19Ｈグリッドより大半が出土する。

154は，撚りの弱いＬＲの縄文を回転した後，半截竹管による沈線を施す。155は，波状の口縁部である。粗い撚りの弱いＬＲの縄文を地文とし，半截竹管による沈線で文様を構成する。口縁部に２段の粘土紐を貼り，連続した指頭の圧痕を施す。内面は，丁寧なナデ後，竹管で浅い沈線を施す。胎土は，砂を多く混入する。156・158は，胴部破片である。粗いＬＲの縄文を回転する。胎土は砂を多く含み粗い。内面は磨きを施す。157は，口縁部である。粗いＲＬの縄文を回転する，口唇内側に竹管状の沈線を施す。

第Ⅲ類　後期後半の粗製土器（第72図159～161，第73図168，図版42・43）

81点を数える4Ｃ・4Ｄ・4Ｅ・3Ｄ・19Ｈグリッドより出土する。

159～161・168は，所謂紐線文粗製深鉢である。159・160は口縁部が肥厚し，口唇下に連続した瓜形文を施す。161は口縁部片と思われる。168は梯子状の条線を施す。時期的には，後期後



第73図　グリッド出土縄文式土器拓影図(7)（1/3）

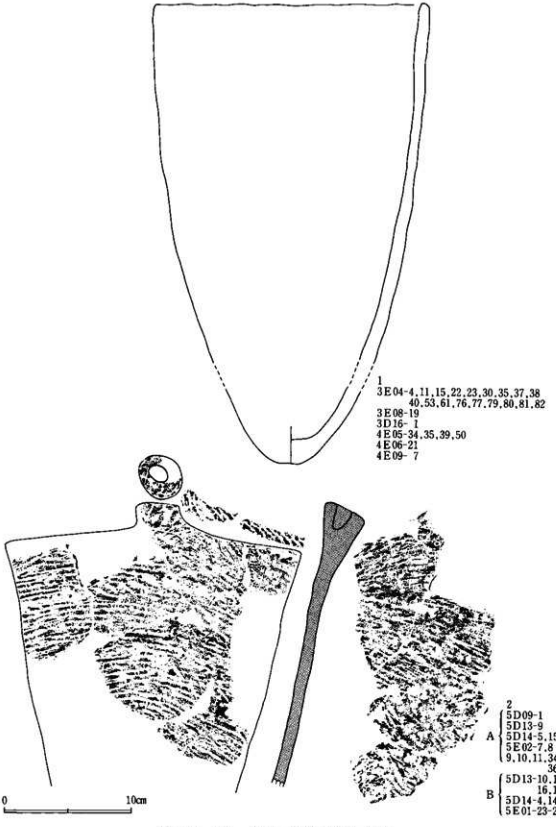
半安行系の土器であろう。

第Ⅴ群土器　晩期の土器を一括した。（第73図162～172，第79・80図17～24，図版43・48）

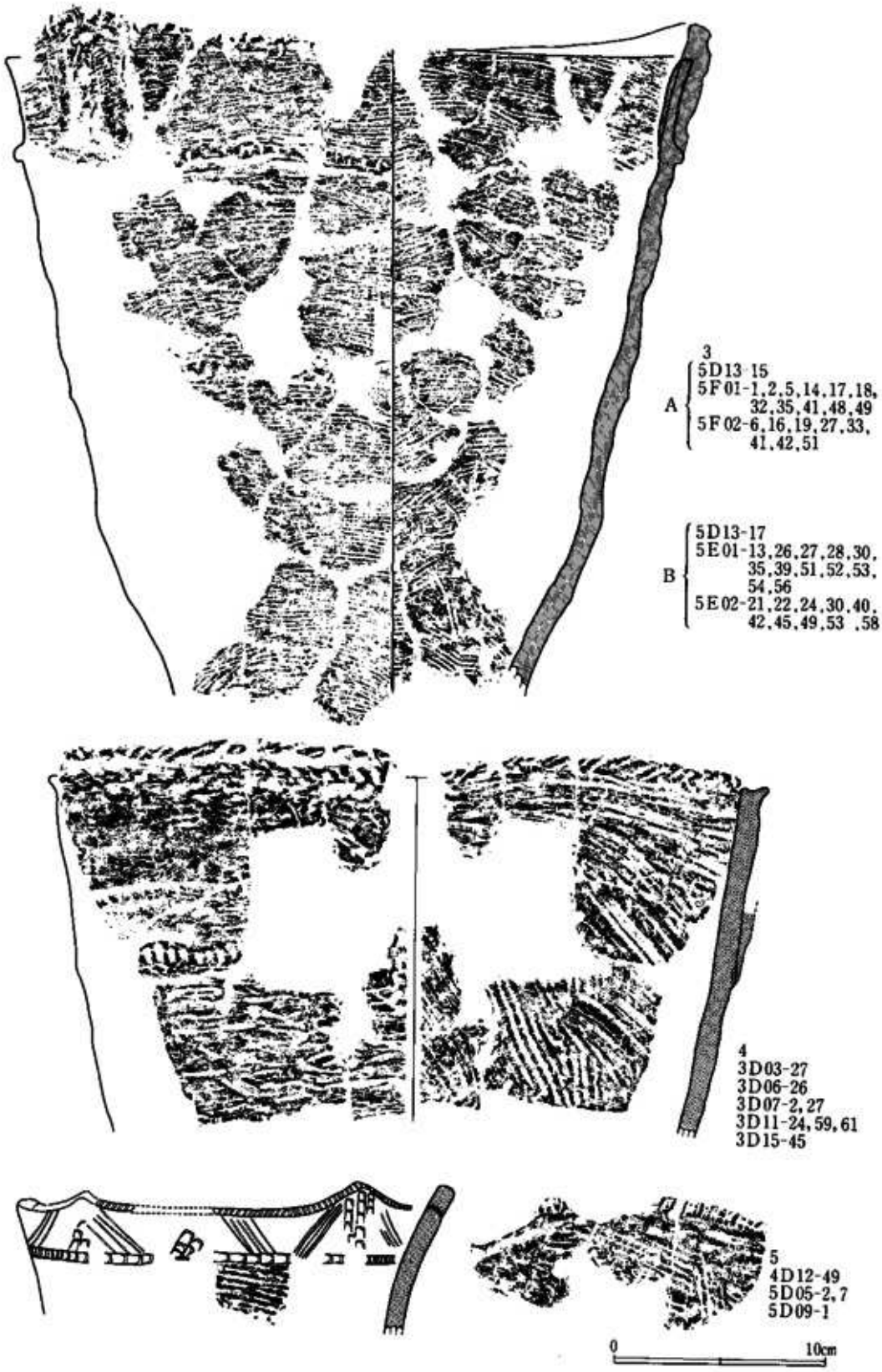
総数253点を数える。3・4グリッドより出土する。

162～167・第80図24は，口唇が肥厚して口縁が内傾する粗製土器の深鉢である。胴部が多少張出し，底部が小さい平底で平縁の器形と思われる。口縁から胴上半に横位の条線を，胴下半に縦位の条線を施す。姥山Ⅱ式に比定できる。169は，波状口縁で口唇に沈線を施す。ＬＲの縄文を沈線で区画し，磨消しを行なう。170は，所謂豚鼻状突起を有する胴部片である。安行式に比定できる。171は，口唇が肥厚しＲＬの縄文を施し，沈線を磨消す。前浦式に比定できる。172は，薄手の粗製小形深鉢と思われる。胴下半に縦位の条線が施される。晩期前半と思われる。第79図17は，8Ｆ－15･11グリッドより出土する鉢形土器である。口径26.5cm，底径7.2cm，器高22cmを計測する。胴部は外反し，口縁部が内傾する波状口縁で，Ｓ字状の突起を3個と中間に小突起をもつ3単位の文様で構成される。胴部との境に竹管の連続押圧を施し，胴部に深いＶ字状を呈する縦横の沈線で6単位の文様を構成する。内外の器面に磨きを施し，丁寧に整形される。胎土は密で，焼成も良好で赤褐色を呈する。安行Ⅲｂ式に比定できる。第79

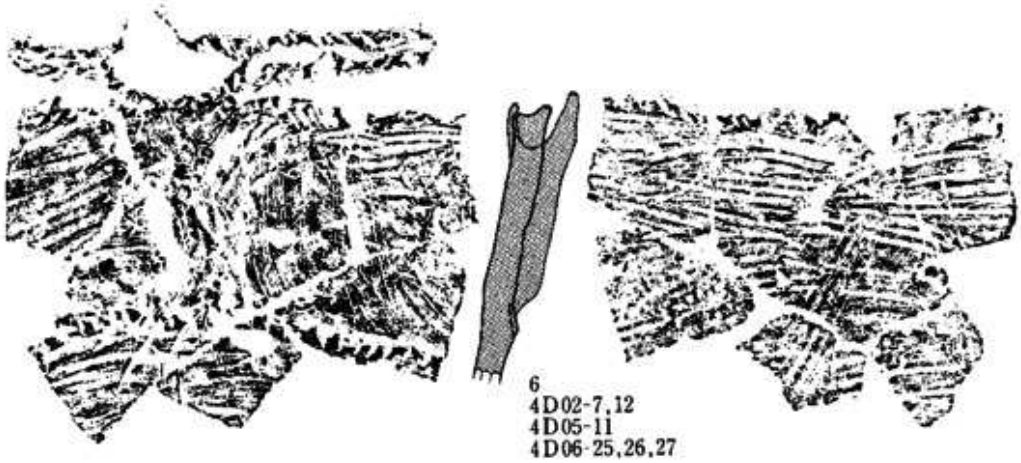
図18は，4Ｅ－01グリッドより出土する。口径30.5cm，底径９cm，器高13.5cmを測る浅鉢である。胴上半にＬＲの縄文と沈線を施し，下半は無文となる。口縁は大きい７個の突起と，突起間の小突起によってなり，口唇，突起上に竹管の沈線を施す。口唇下に１条の沈線と突起下に三角形の区画文を施し，２条の沈線で胴下半部となる。胎土は，砂を多く含み器表はざらざらしている。焼成は悪く暗褐色を呈する。安行Ⅲｂ式に比定できる。第79図19は，4Ｅ－03グリッドより出土する深鉢の口縁部である。口径21cmを測る。口縁に渦巻沈線文１個と長方形の沈線文８個を２段に施す。器表は，丁寧な磨きを施す。焼成は良好で，内外とも赤褐色を呈する。安行Ⅲｂ式に比定できる。第79図20は，4Ｄ－06グリッドより出土する注口土器である。全体的に球形で口径12cm，底径６cm，器高12.5cmを推定できる。胴の張りから口縁にかけ，細い竹管状の沈線を施す。文様の単位・構成は，欠損部が大きく不明である。口唇に，中央に沈線を施す小突起がみられる。口縁内面は，丁寧な磨きを施す。胎土は，細砂粒を多く含み，色調は暗茶褐色を呈する。安行Ⅲb式に比定できる。第79図21，第80図22・23は，胴部が球形に張り出し，口縁が若干肥厚し，強く内傾する大形の鉢である。いずれも胴下半を無文とし，胴上部に縄文と沈線，磨消しを施す点で共通する土器である。前浦式に比定できる。21は，4Ｅ－03グリッドより出土する口縁部片である。ＬＲの縄文を地文とし，太い沈線と磨きによって文様を構成する。口唇の突起を中心として，所謂「の」の字状の縄文を残す。胎土は密で焼きしまり，赤褐色を呈する。内外に丁寧な磨きを施す。22は，3Ｃ－05グリッドより出土する。ＬＲの縄文を地文に竹管の沈線と磨消帯による文様を構成する。口唇に４個の突起と所謂「の」の字を配し４単位の文様を構成する。胎土は密で砂粒を含む。色調は明褐色を呈する。法量は口径34cm，底径11cm，器高27cm，器厚0.5～2.2cmを測る。23は，3Ｃ－08グリッドより出土する。器形，整形とも前者21・22に類似する。地文はＬＲの縄文である。

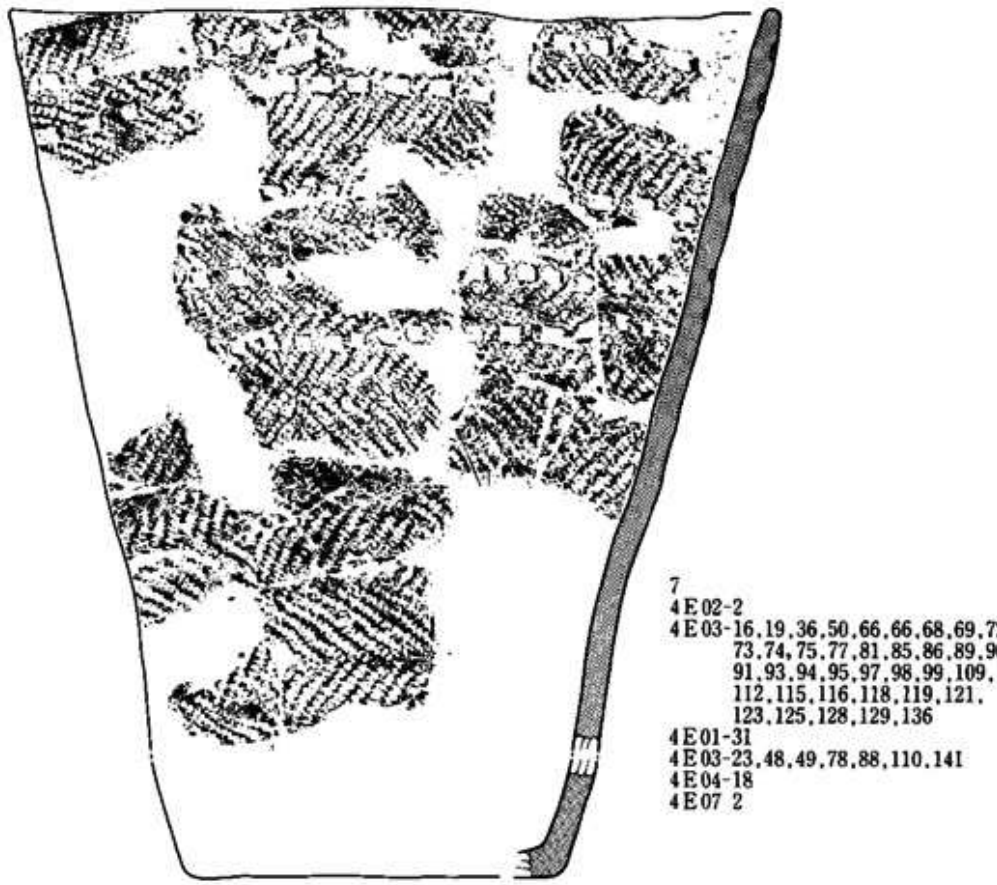


第74図　グリッド出土土器実測図(1) (1/3)



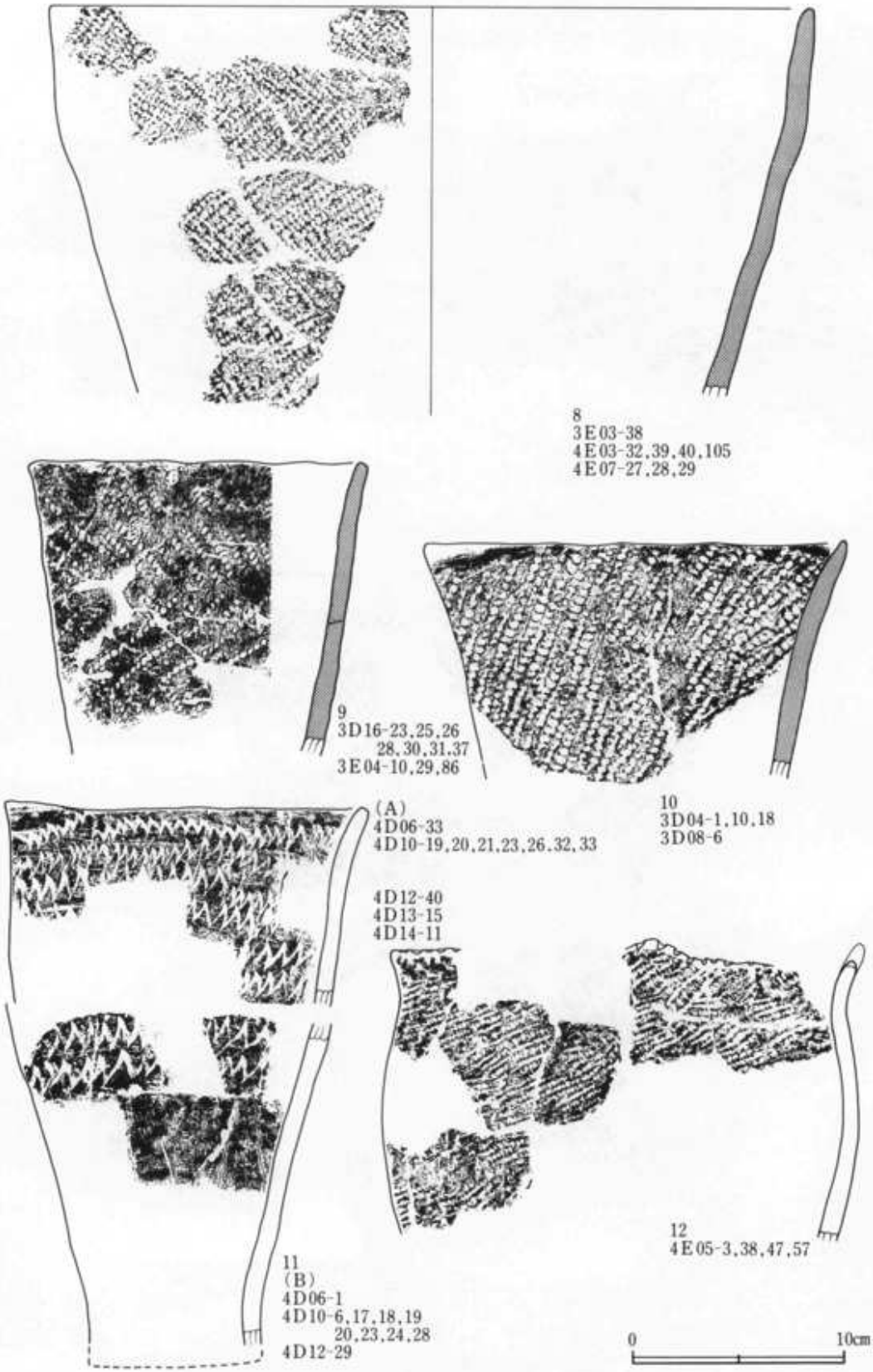
第75図　グリッド出土土器実測図(2)（1/4・1/3）



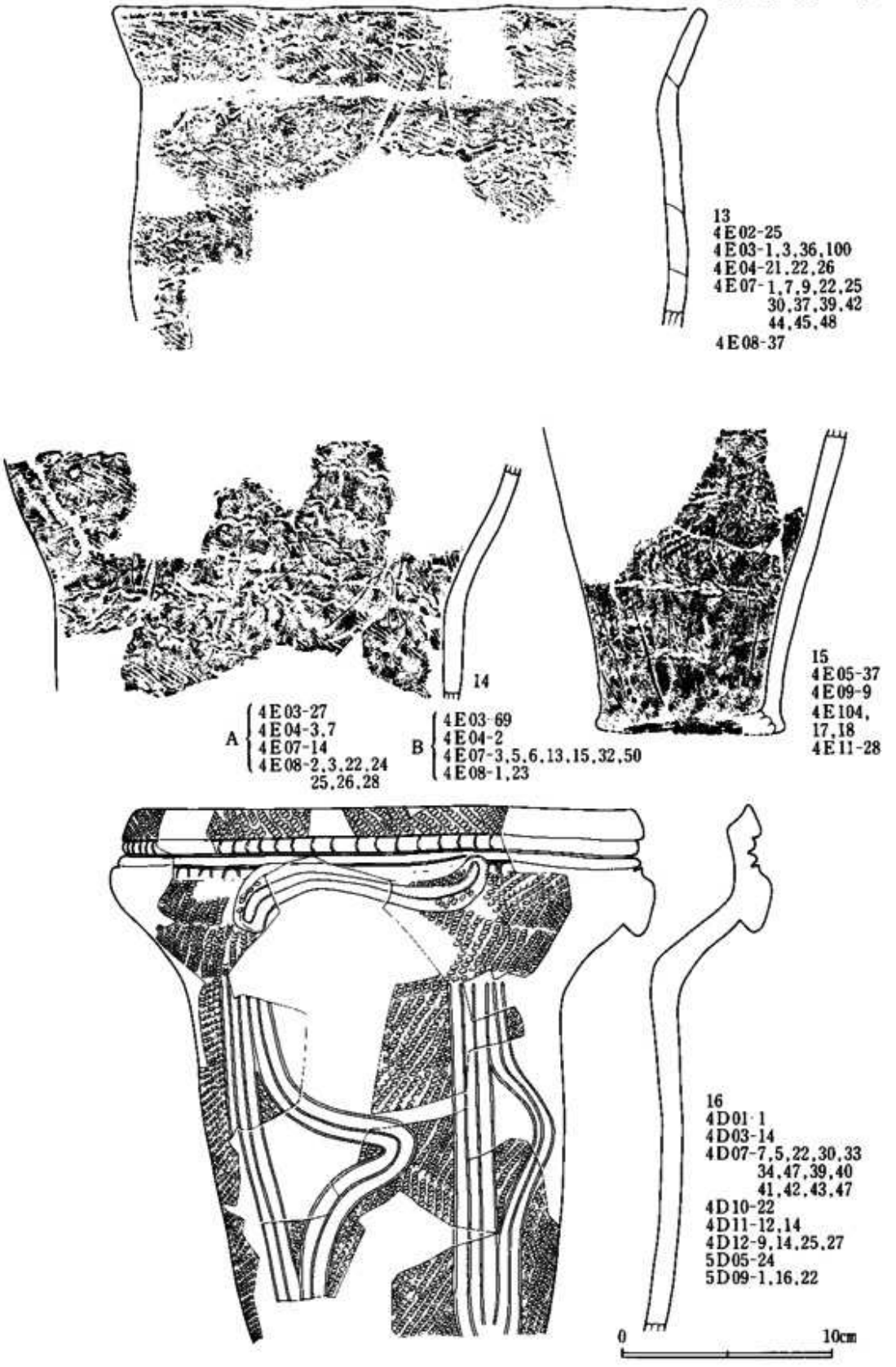


第76図　グリッド出土土器実測図(3) (1/3)

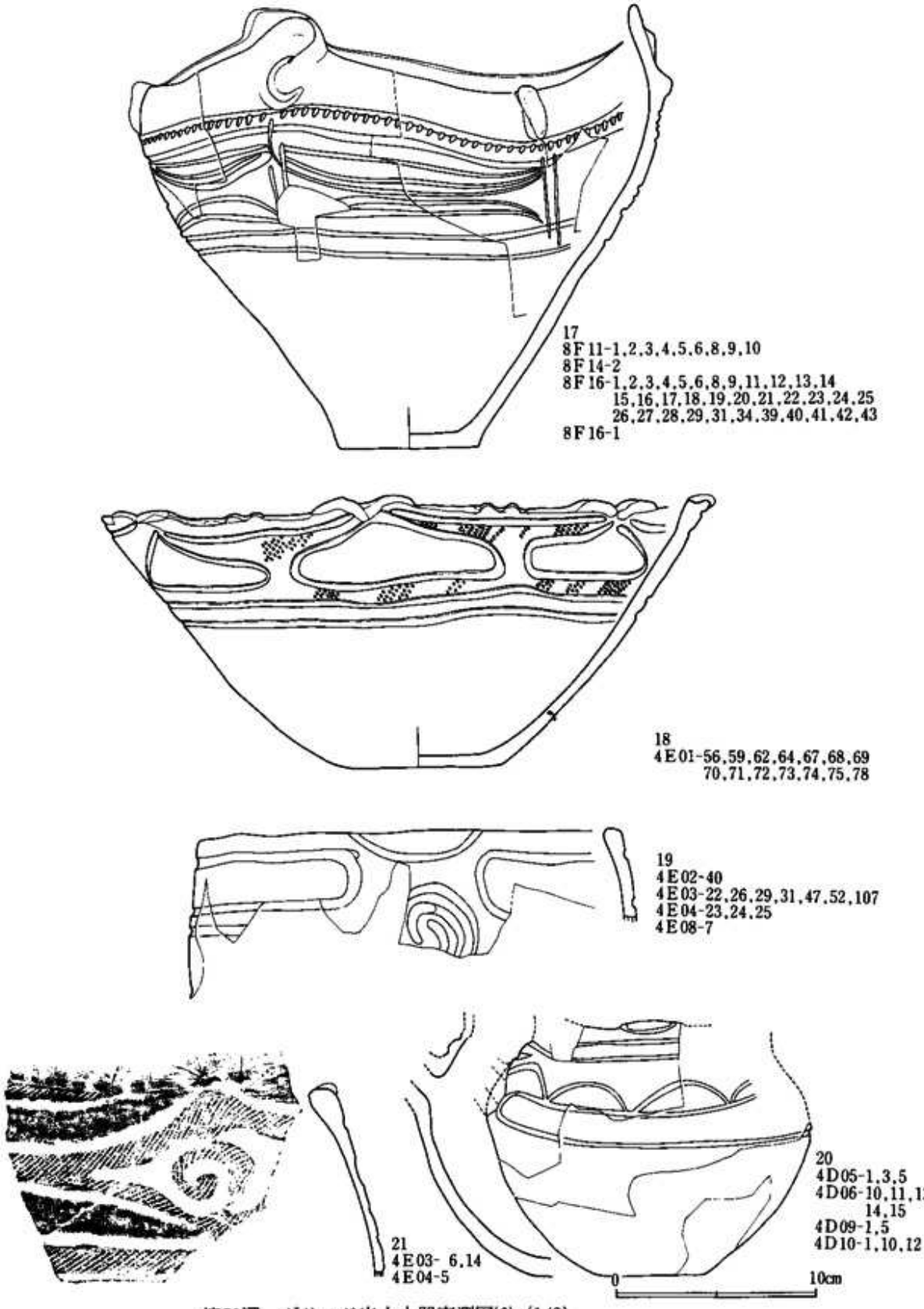
0　10cm



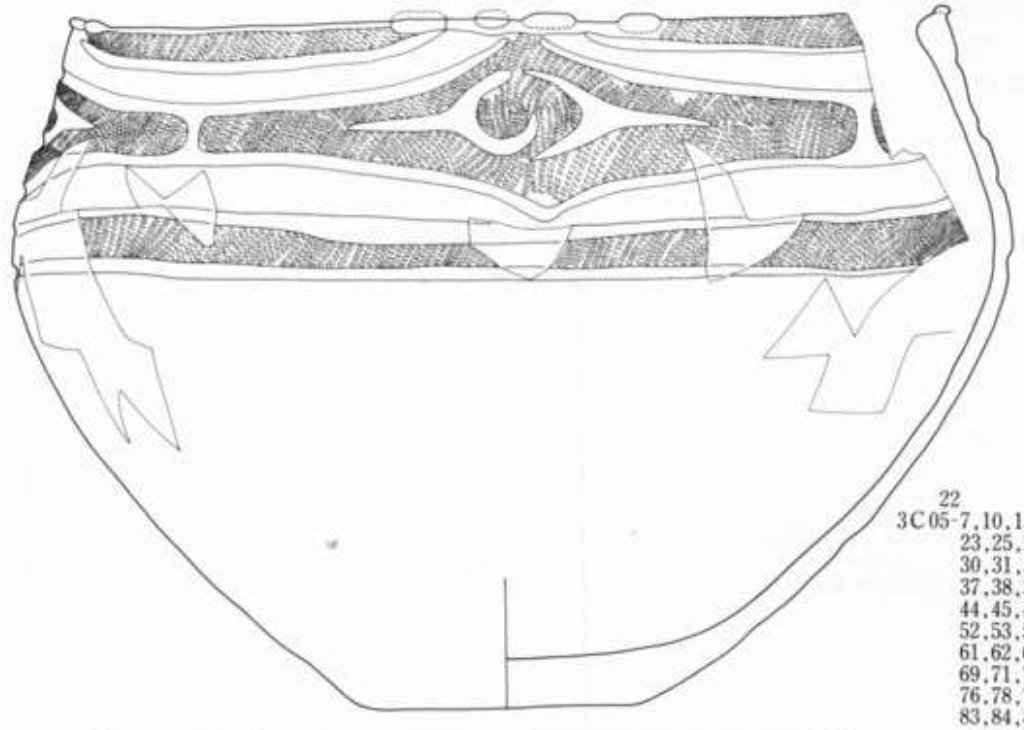
第77図　グリッド出土土器実測図(4)（1/3）



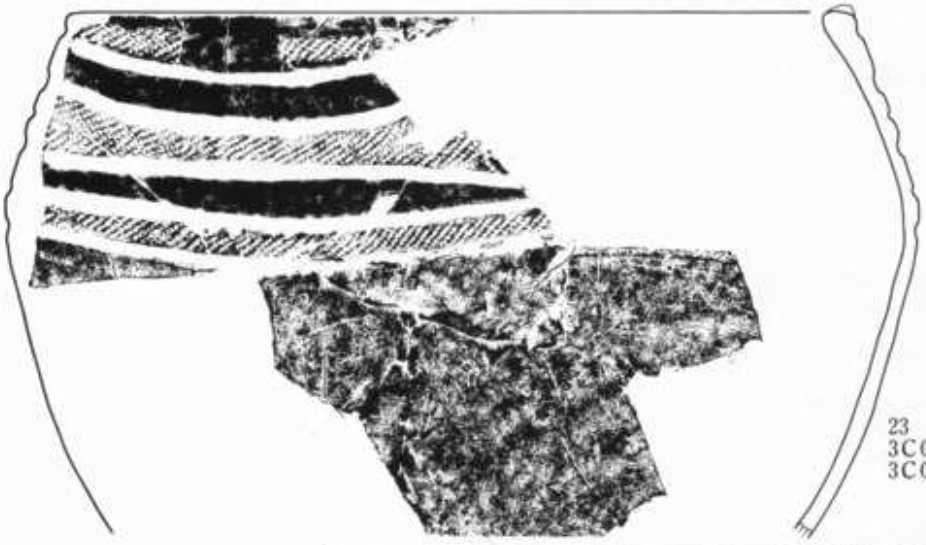
第78図　グリッド出土土器実測図(5)（1/3）



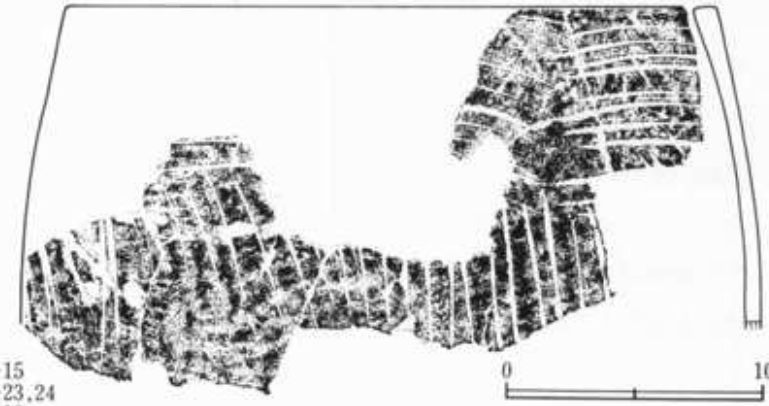
第79図　グリッド出土土器実測図(6)（1/3）



22
3C05-7,10,15,16,21,22,
23,25,26,27,28,29
30,31,32,33,34,36
37,38,39,40,41,42
44,45,46,47,50,51
52,53,54,57,58,59
61,62,64,65,67,68
69,71,72,73,74,75
76,78,79,80,81,82
83,84,85,88,90



23
3C04-2
3C08-1,2,3,4,5,6,8,10
11,13,14,17



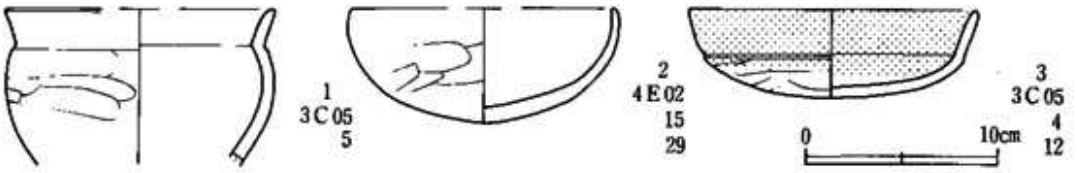
24
4D07-15
4D08-23,24
4D11-10
4D12-1-13-20

0　10cm

第80図　グリッド出土土器実測図(7)（1/3）

(2)　古墳時代の土師器　（第81図１～３）

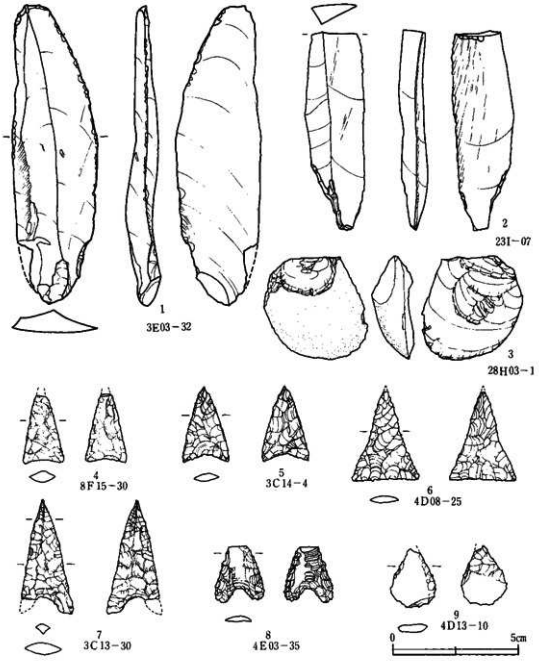
３点とも台地先端の３・４グリッドより出土するが，路線内の調査に限られたためか遺構の検出はなかった。１は，埦形土器で1/4が遺存する。器形は球形に近い体部から稜をなして口縁が外反する。整形は体部が左方向へのヘラ削り，口縁部内外が横ナデを施す。内面はヘラ状の工具による削りである。胎土は細砂粒を含み密で，焼成は普通である。色調は内外とも茶褐色で一部に煤が付着する。推定口径14cm，器高10cmを測る。２は，丸底の坏で2/5が遺存する。体部に丸みをもち口縁が若干内傾する器形で厚手の底をもつ。整形は左方向へのヘラ削り後ナデを施す。胎土は細砂粒を含み，焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。器高６cm，口径14cmを測る。３は，内外に赤彩を施す坏である。体部に稜をもち口縁が少し開く，整形は体部が右方向へのヘラ削り，口縁はナデを施す。胎土は細砂粒を含み密で，焼成も良好である。色調は内外とも赤褐色で体部上半に赤彩を施す。器高4.7cm，口径14.7cmを測る。３点とも６世紀の時期である。



第81図　グリッド出土土器実測図（８）(1/4)

(3)　石器類（第82～85図，図版49～51）

１は，珪質頁岩のナイフ形石器である。石刃を素材とし，基部と端部にプランティングがみられる。素材の打面は，基部側に残る。また，右側縁に使用痕がみられる。3E－03グリッドのⅦ層（第２黒色帯）より出土する。周囲を拡張したが，単独出土であった。（図版第32図に出土状況，第49図に層位）２は，頁岩のナイフ形石器，下半部である。石刃を素材とし，基部に表裏両面からのプランティングがみられる。素材の打面は先端部である。008号方形周溝遺構の溝内より出土する。３は，表面に礫面を残す，チャートの剥片である。28H－03グリッドの表土層より出土する。４は，安山岩で肉厚の凹基無茎鏃である。表面からの調整が主で，裏面は粗い剥離がなされる。５は，珪質頁岩の凹基無茎鏃である。調整は，表裏両面から行なう。石材は，珪化された良質の素材である。６は，赤色チャートの大型・薄手の平基無茎鏃である。側縁中央で若干えぐれるが，二等辺三角を呈する。形状，剥離ともに丁寧である。７は，灰白色を呈する珪質頁岩の凹基無茎鏃である。脚部を欠損する。縦長の左右対称形で，先端部は厚く，菱形状の鋭利な断面となる。調整は，裏面で粗く，表面で細かく調整する。８は，黒曜石の凹基無茎鏃である。基部の抉入が大きい。表裏両面に素材を母岩から剥離した面



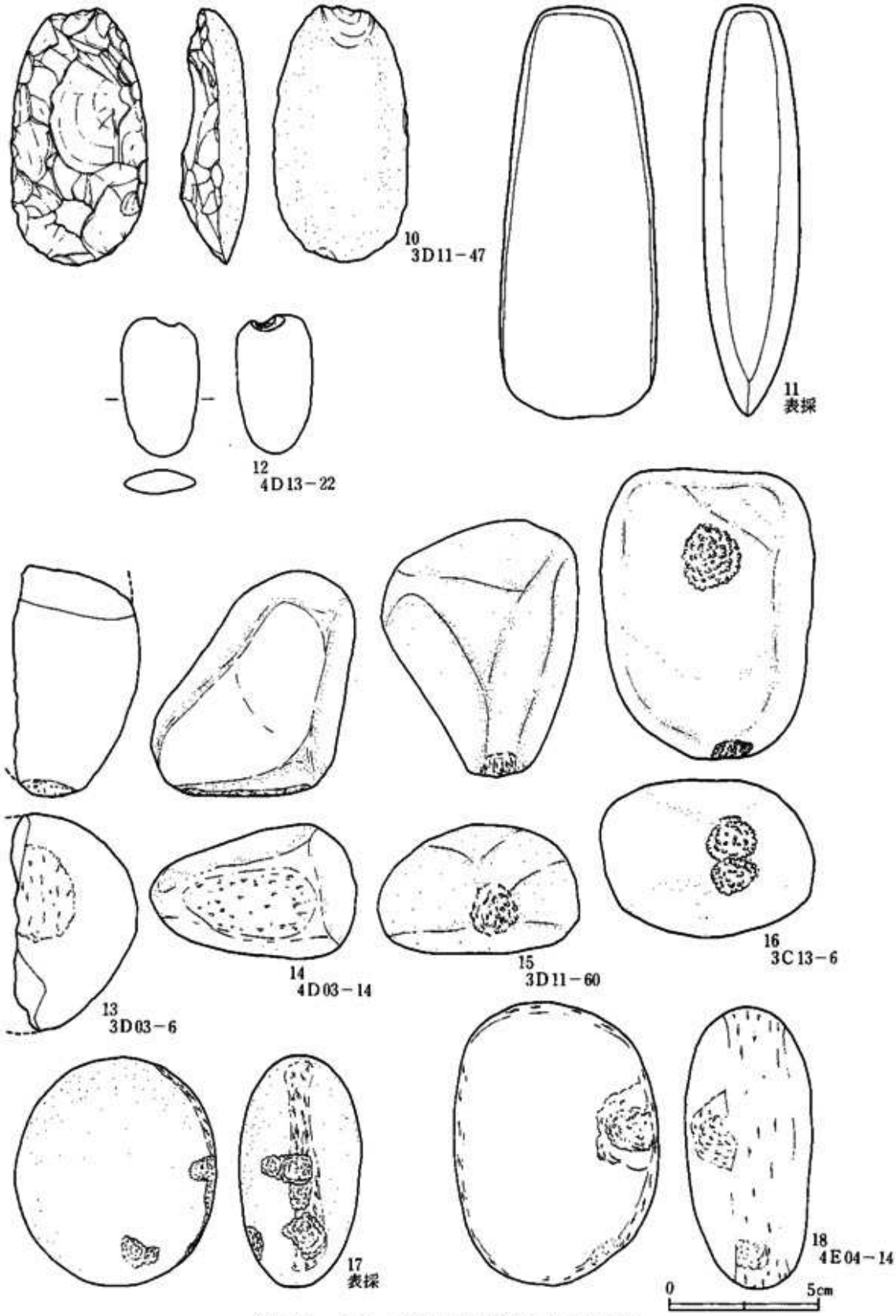
第82図 グリッド出土石器実測図（1）(2/3)

を残す。9は，裏面に自然面を残す円基鏃である。粘板岩の剝片を利用して側縁部を調整する。10は，石英質砂岩の自然石を片面剝離した，局部磨製石斧である。表面の一部に自然面を残すことから，薄い河原石を素材としたものである。右側縁を強く打撃した後，周囲を剝離して形を整え，刃部を磨製する。基端に打撃痕がみられるが，整形痕か使用痕か不明である。3D－11グリッドの新期テフラから出土する。11は，砂岩の磨製石斧である，刃部中央に若干使用痕を残す。12は，自然石利用の石斧である，刃部に使用痕を残す。石質は蛇紋岩。13は，中粒砂岩の敲石である。1/4が遺存する。14は，砂岩の敲石である。15は，輝石安山岩の敲石である。16は，石英砂岩の敲石である。打撃痕が3個所に認められる。17は，砂岩の磨石・敲石である。側面に打撃痕，表裏両面に磨り面を認める。18は，石英質中粒砂岩の敲石・磨石である。裏面に滑らかな面を認める。19は，石英砂岩の敲石である。中央と側面に打撃痕をもつ，火熱を受ける。20は，石英砂岩の敲石である。両側面に打撃痕をもつ。21は，中粒砂岩の敲石である。表裏両面に打撃の凹みを有する。表裏・側面を磨石として使用した可能性もある。22は，輝石安山岩の敲石である。打撃面が欠損したと思われる。風化のため表面観察ができないが，形状等から磨石の可能性もある。23は，多孔質安山岩の敲石である。磨石の可能性もあるが，風化のため使用痕を観察できない。24は，砂岩の磨石である。表裏両面が磨耗して滑らかである。25は，砂岩の磨石である。自然面が島状に残る。26は，石英砂岩の磨石である。全面が滑らかで，火熱を受ける。29は，輝石安山岩の敲石である。火熱を受けたうえ風化しているため詳細は不明である。27・28は，凝灰質砂岩の砥石である。28は，角柱を呈し四面が使用されている。30は，八面体をもつ碧玉の切子玉である。4D－08グリッドの表土層より出土する。

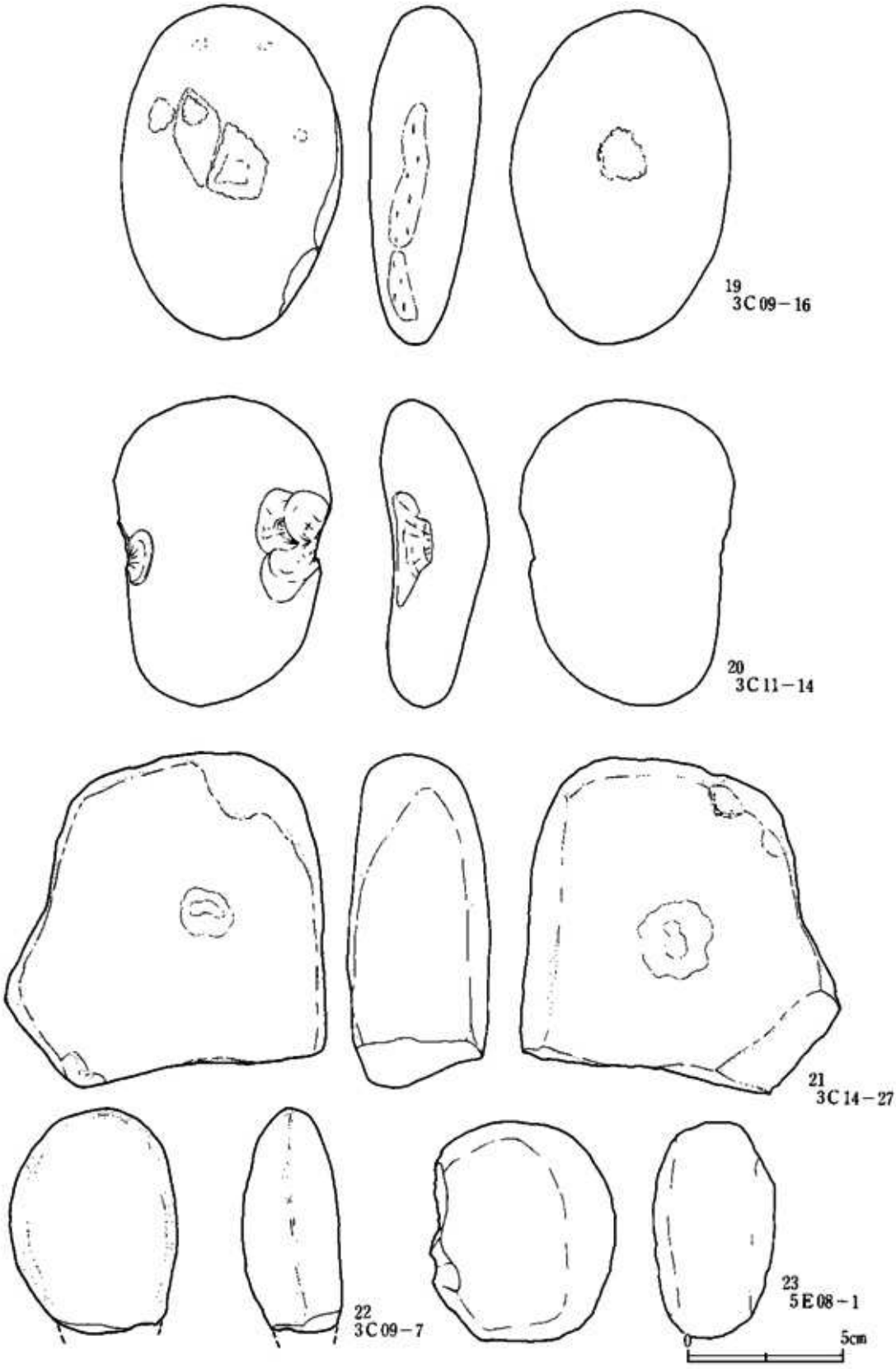
第15表　石器計測表（単位はcm）

番号	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)
1	11.7	3.3	1.1	34.4
2	7.6	2.3	1.3	17.3
3	4.0	3.7	1.3	23.0
4	(2.6)	1.6	0.5	1.9
5	2.4	1.9	0.3	1.5
6	3.4	2.6	0.3	2.3
7	4.5	(1.9)	0.5	3.2
8	(2.1)	2.0	0.2	1.7
9	2.3	1.8	0.3	1.6
10	8.5	4.5	2.2	96.4
11	13.7	5.3	3.2	348
12	4.6	2.6	0.7	14.6
13	(7.5)	(4.3)	(7.1)	250
14	7.3	6.8	4.4	308.4
15	8.5	6.6	4.2	282.5

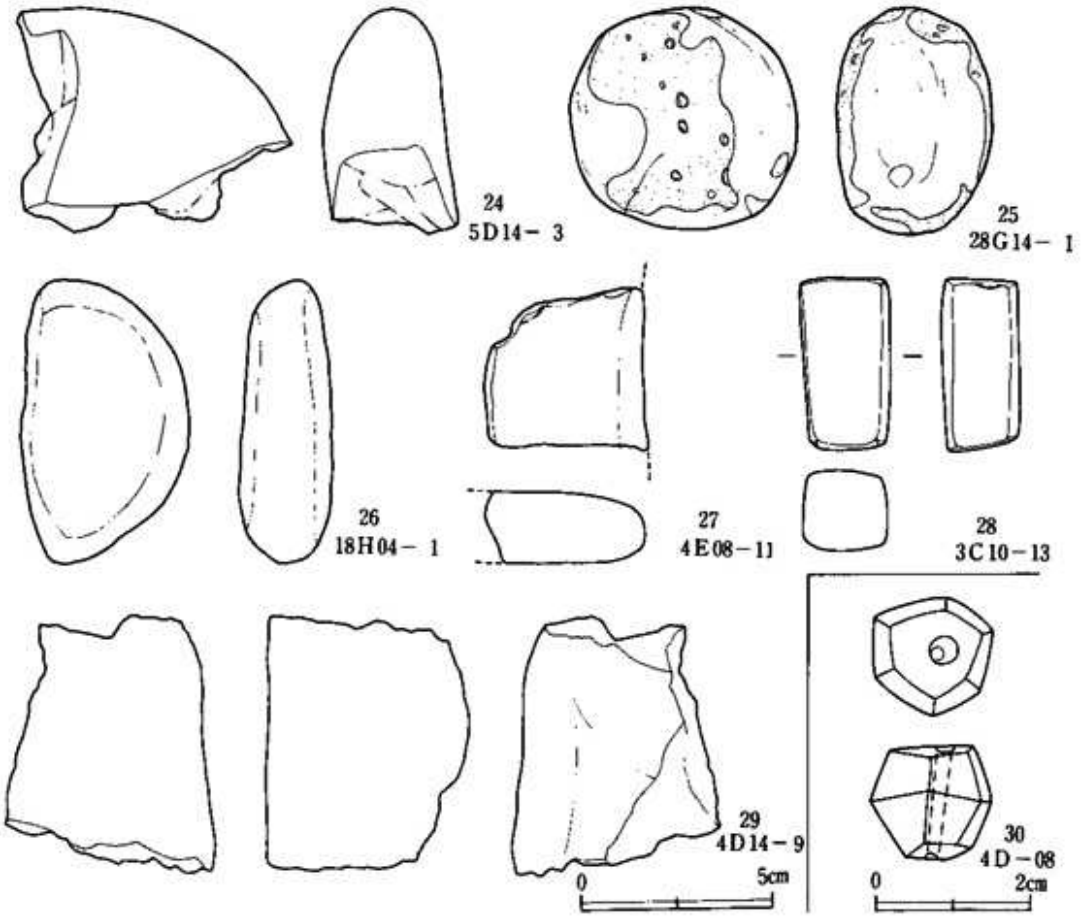
番号	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)
16	9.4	7.1	5.2	484.5
17	7.5	6.8	4.0	278
18	9.1	6.8	4.2	368
19	10.1	7.1	3.5	332
20	9.5	6.9	3.1	258.5
21	10.3	10.2	4.6	680.0
22	7.0	5.3	3.1	159
23	6.9	7.0	3.8	122
24	5.7	7.5	3.2	152.5
25	5.8	6.0	4.1	190
26	7.2	4.4	2.4	102.5
27	4.1	4.2	1.9	48.5
28	4.4	2.0	2.1	36.4
29	6.6	5.4	5.3	224.5
30				



第83図　グリッド出土石器実測図（2）(1/2)



第84図　グリッド出土石器実測図（３）（1/2）



第85図　グリッド出土石器石製品実測図（4）（1/2・1/1）

第４項　小　結

先土器時代

台地先端3E－03グリッドの第２黒色帯から単独出土と008号溝内よりナイフ形石器が出土した。剥片類の出土はなかった。

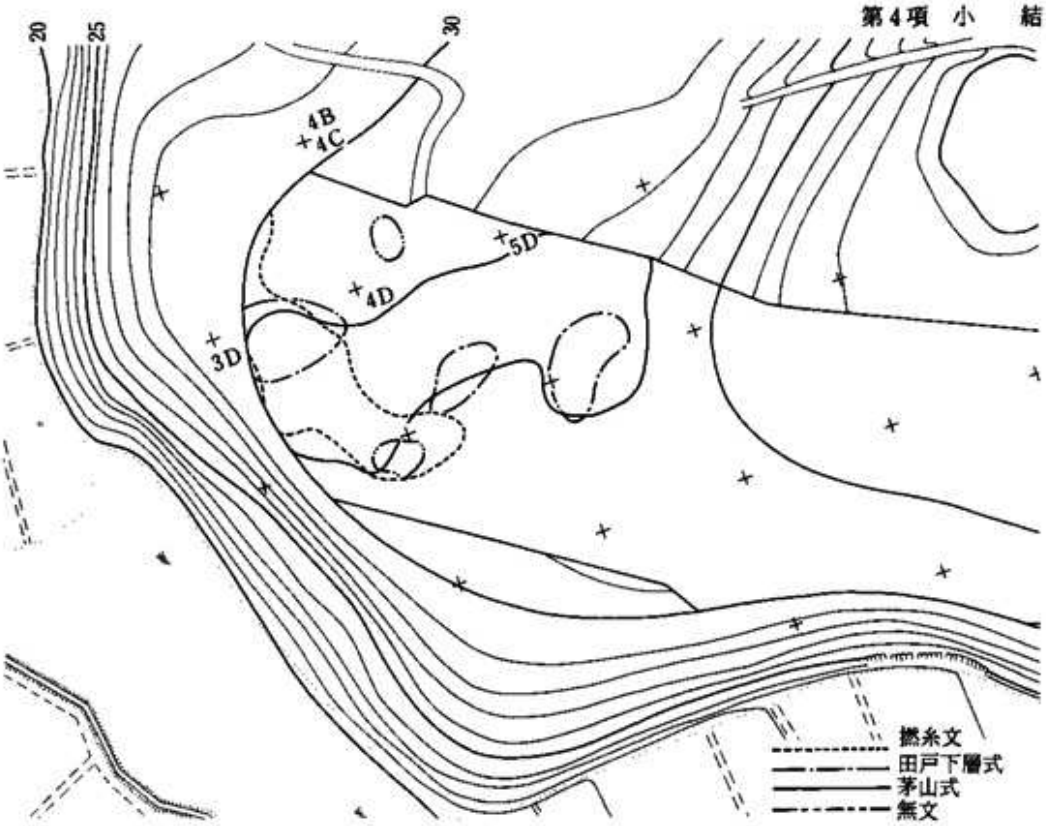
縄文時代

本遺跡出土の縄文式土器は全て包含層より出土するもので３地点より出土した。遺構は交差点付近の土壙が伴う可能性はあるが住居跡の検出はなかった。時期的には各期に及ぶ台地先端部は早期から晩期，19Hグリッドが後期，26Gグリッドが早期の時期である。

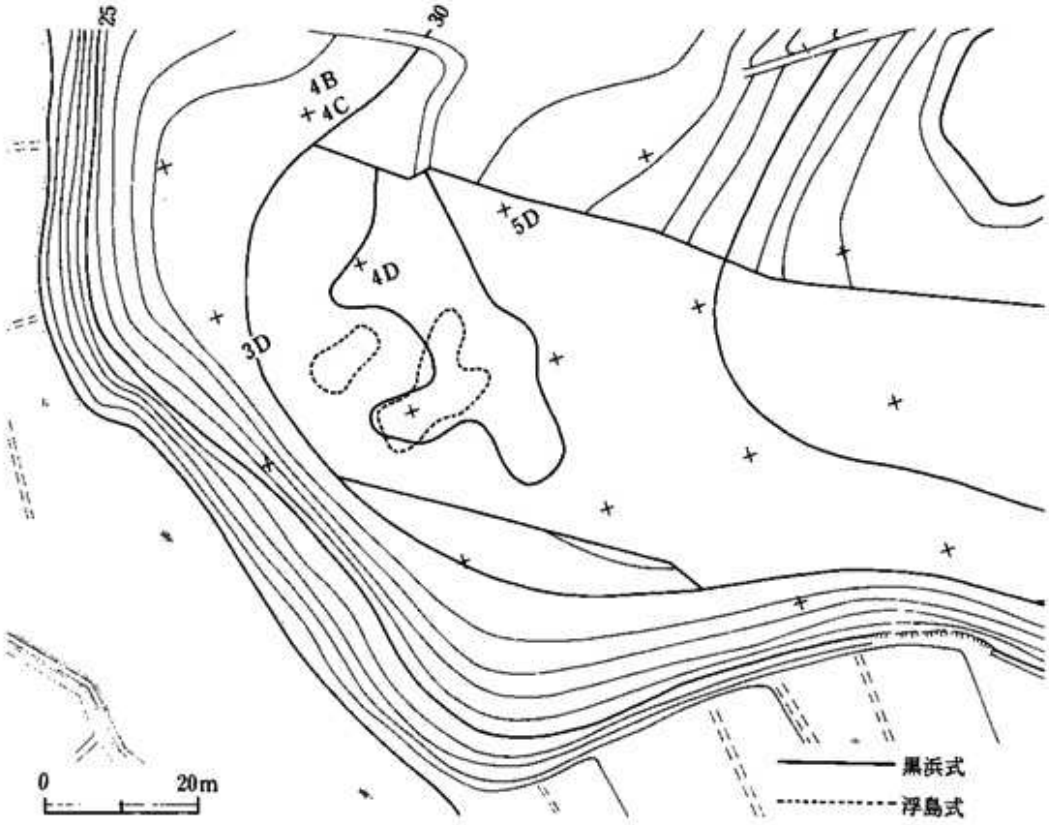
台地先端部は，第86～89図にみられるように肩部から5Dグリッドにかけ各時期の遺物が出土した。検出した縄文資料の大半がこの地点のものである。早期は，第86図のごとく各時期に及び遺物量も多い。撚糸文系は井草期が主体で井草Ⅰ，Ⅱ式が出土する。撚糸文を施す土器片が15点，縄文を施す土器片が85点出土した。沈線文系土器は田戸下層式が主体で沈線の太さ，文様がバラエティに富む。太い沈線を施文する土器片が36点，細い沈線を施文する土器片が８点。その他が14点出土した。出土地点は散在的である。貝殻条痕文系は茅山式で409点が出土した。3Dグリッド，5Dから4Dグリッドにかけ２ケ所の集中地点が窺える。無文土器は66点出土した。第74図１等から田戸下層に伴う土器と思われる。前期は第87図のごとく黒浜式と浮島式土器が集中して出土する傾向を示す。共に台地縁辺より若干内側となる。黒浜式は216点が出土した。縄文のみを施す土器片が149点，縄文と竹管の刺突文を施すものが22点，縄文に円形の隆帯を施すもの６点，貝殻腹縁の押圧するもの７点その他が32点であった。浮島式は96点が出土した。連続波状貝殻文を施す土器片46点，貝殻腹縁を押圧するもの18点，貝殻腹縁文と沈線を施すもの15点，竹管文を施すもの４点，その他が13点であった。他に興津式が若干出土する。中期は，第88図のごとく下小野式と加曽利E式が出土した。出土地点は大地のやゝ内側となる。下小野式は95点が出土する。加曽利E式は61点が散在し集中する傾向を示さなかった。後・晩期は第89図のように堀之内式土器が９点，後・晩期の粗製土器が43点，晩期の土器が164点出土した。晩期の土器は安行Ⅲb，前浦式に比定できるもので実測可能な土器が出土している。

調査区の中央19Hグリッドから後期，加曽利B式の土器片が少量出土した。

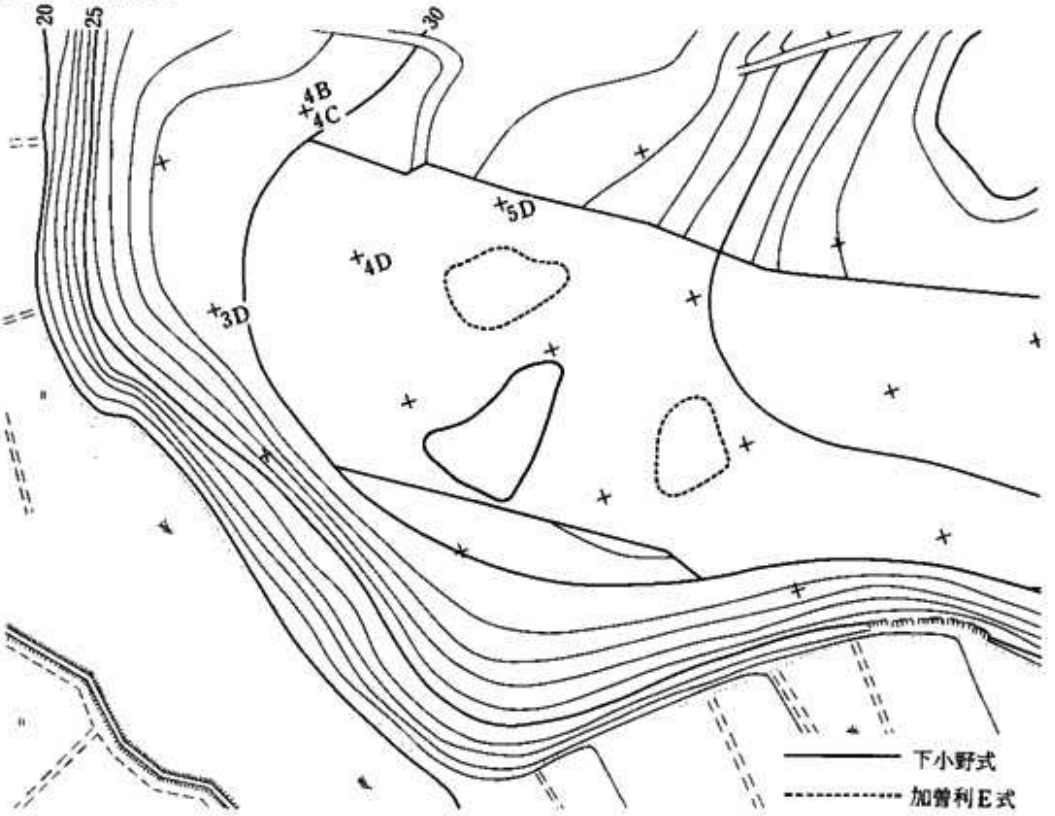
交差点付近の26H・26Gグリッドから田戸下層が90点，撚糸文が９点と石器，剥片が出土する。田戸下層は67･68図のごとく口縁に平行沈線を施す太い沈線文が出土土器の大半を占めた。



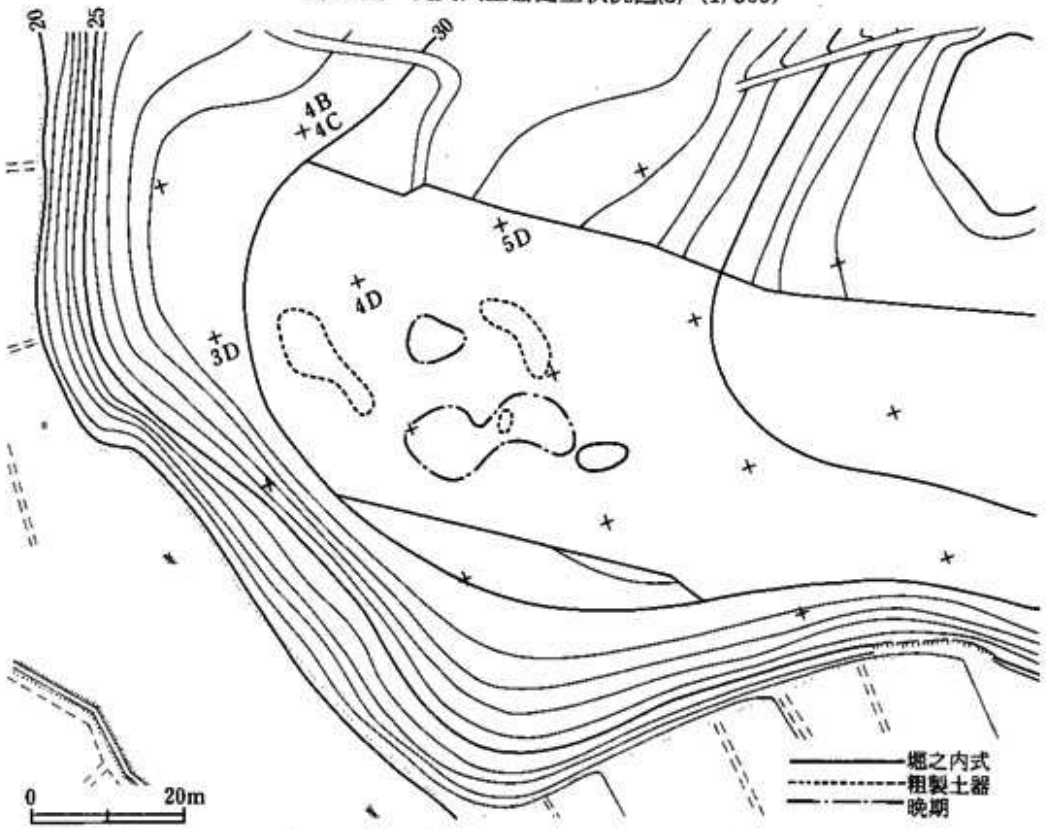
第86図 縄文式土器出土状況図（1）1/500



第87図 縄文式土器出土状況図（2）1/500



第88図　縄文式土器出土状況図(3)（1/500）



第89図　縄文式土器出土状況図(4)（1/500）

古墳時代

16Hグリッドから6世紀後半の焼失住居が1件のみ検出された。台地先端から第81図の鬼高式土器が出土した。6世紀後半の土器である。遺構が伴わないが，路線外に存在すると思われる。集落跡の周辺というより，単独住居の可能性が強い。

近世

交差点付近から方形周溝遺構，竪穴状遺構，土壙が検出された。出土遺物等から大半が近世の遺構と思われる。性格的には墓域的要素が窺える。

参考文献

『主要地方道成田松尾線Ⅰ』（財）千葉県文化財センター　昭58
『主要地方道成田松尾線Ⅱ』（財）千葉県文化財センター　昭60
鈴木道之助『図録石器の基礎知識Ⅲ』昭56
『常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』（財）千葉県文化財センター　昭57
『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』（財）千葉県文化財センター　昭59
『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』（財）千葉県文化財センター　昭58
西村正衛『利根川下流域の研究』　－貝塚を中心として－　昭59
『木の根』（財）千葉県文化財センター　昭56
『境遺跡発掘調査報告書』　境遺跡発掘調査会　昭55
鈴木公雄『史学36－1』千葉県山武郡横芝町姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて　昭38
鈴木公雄『史学38－1』千葉県八日市場市久方貝塚の晩期縄文土器に就いて　昭40
鬼高研究グループ「房総における鬼高期の研究」『日本考古学研究所集報Ⅳ』昭57

第５章　井森戸遺跡

第１項　調査の方法と概要

１.調査の方法

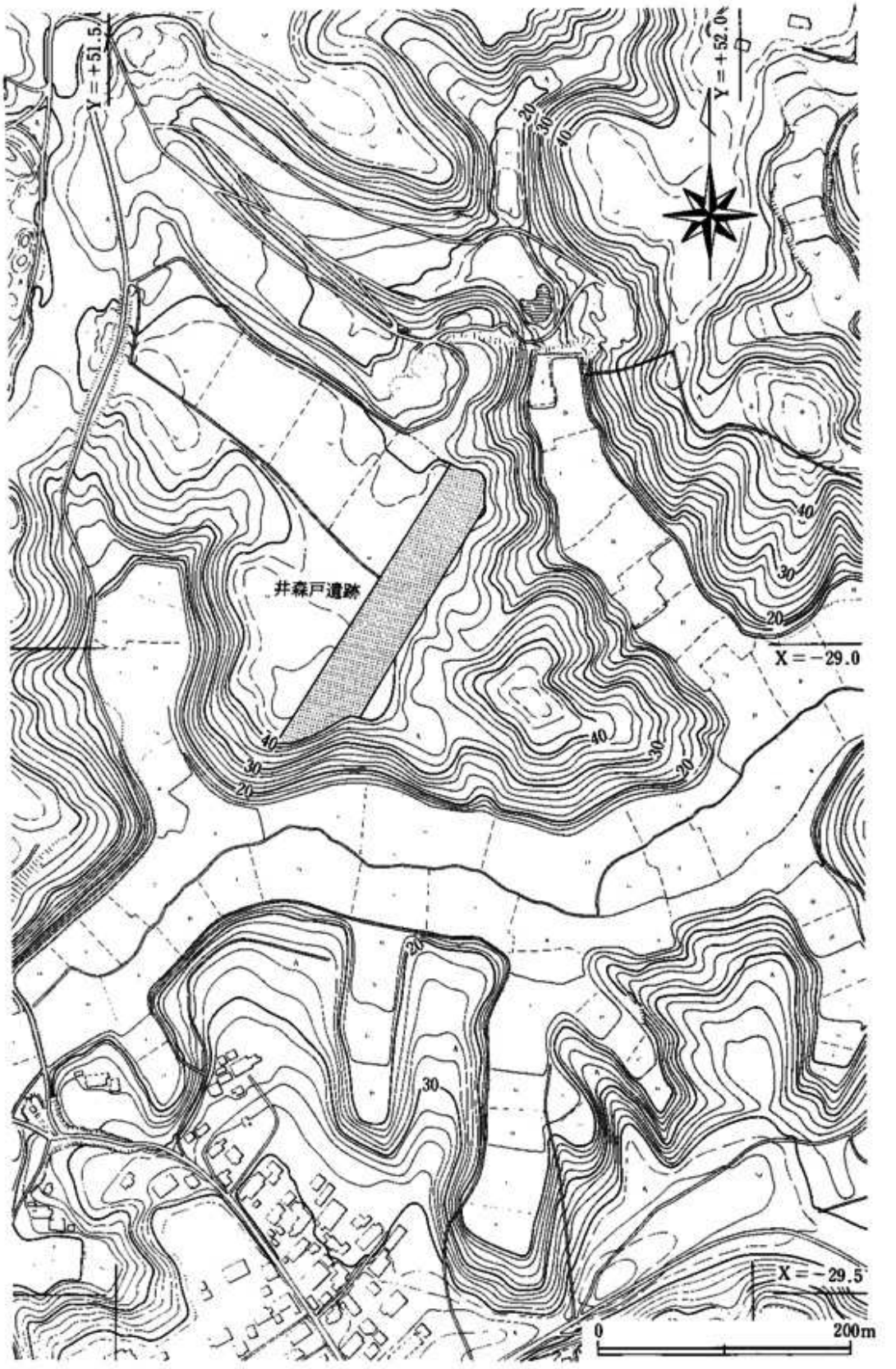
井森戸遺跡は，第一次調査が昭和57年８月から11月に南半分を概ね発掘し，第二次調査が翌年７月から11月に，北半分と南の斜面部を調査して現地作業を完了した。調査対象地が道路敷地内に限られるため，20m毎の道路中心杭を基準にグリッドを設定する方法が最良と考え，中心杭№30～№37の直線部を基準に，20×20mの大グリッドを設定した。グリッド名は，南から北へ１～14，東西方向は道路中心杭を挟みＢ，Ｃのアルファベットを付した。大グリッドの中を５×５ｍの小グリッドに分け北西から北東へ，次に南東の段へと１～16の小グリッド名を付した。

発掘調査は，道路方向に沿って２ｍ幅のトレンチを数条設定して遺構，遺物を確認した。遺跡の内容を把握した後，確認調査に基づき本調査範囲の表土を剝ぎ，遺構の精査を行った。実測は簡易遣り方測量を基本として，一部平板測量を採用した。上層遺構の調査後，先土器時代の確認を２×２ｍのグリッドで武蔵野ローム層上面まで掘り下げ確認した。遺構の番号は，精査の着手順に付し，整理作業においても踏襲した。写真は，４×５，６×７，35mmの白黒とカラースライドを撮影した。遺物は，遺構検出面より上をグリッド名で取り上げ，整理時に遺構出土の遺物と接合した。また，この大グリッドの基準杭は，道路建設予定中心杭№36（公共座標Ｘ＝－29.026.980，Ｙ＝51.687.945）と４Ｃ－01が，№34（公共座標Ｘ＝－28.994.118，Ｙ＝51.733.555）と８Ｃ－01が対応する。

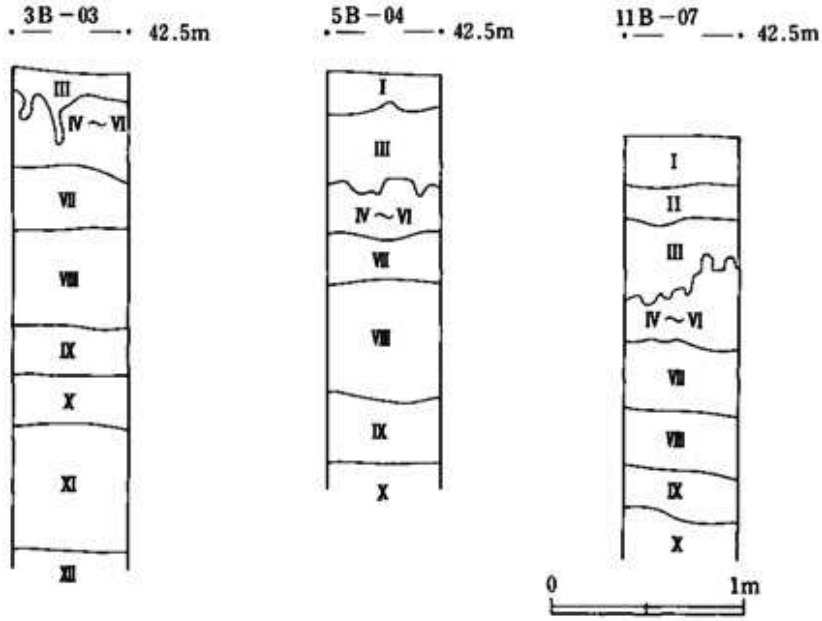
２.土　層（第90図）

調査地は，高谷川の支谷へ舌状に延びる，幅200m程の台地中央を斜めに横断する。調査地の南東側は，すでに開折が進み傾斜して，先端部は独立丘となる。台地の後方も側面を浸食され幅が狭まる。図示する柱状図は，３Ｂ－03，５Ｂ－04，11Ｂ－07で台地の肩にあたる。現地表と同様土層も南西で高く，北東で低い傾向を示す。標高は，42.2mから42.4mを測る。

Ⅰ	層……	黒色土	表土層
Ⅱ	層……	黒褐色土	黄褐色土を若干含む
Ⅲ	層……	黄褐色土	いわゆるソフトローム層
Ⅳ～Ⅵ	層……	橙褐色土	ハードローム層，クラックが発達する。スコリアを含む。
Ⅶ	層……	暗赤褐色土	黒色粒子を含み全体に暗い。立川第二黒色帯に比定できる。



第90図　井森戸遺跡周辺地形図（1/5000）



第91図　土層柱状図

VIII	層……	赤褐色土	IV～VI層よりやや明るい。
IX	層……	暗赤褐色土	IV～VIII層に比べ，硬質である。小粒の石を希に含む。
X	層……	褐色土	IV～IX層に比べ，軟質で粘性がある。
XI	層……	茶褐色土	黒色の微粒子を多く含む。
XII	層……	茶褐色土	全体に硬質である。黄褐色のしまりのないブロックを含む。

3．調査の経過

第一次発掘調査は，昭和57年8月1日から11月30日まで実施した。

8月2日～4日　現場設営，現場器材の搬入，グリッドの設定

8月5日～31日　トレンチ発掘，南西より第1トレンチとする

9月1日～10月28日　表土剝ぎ，遺構，遺物の検出

10月22日～11月30日　遺構の精査

11月1日～11月30日　先土器の調査

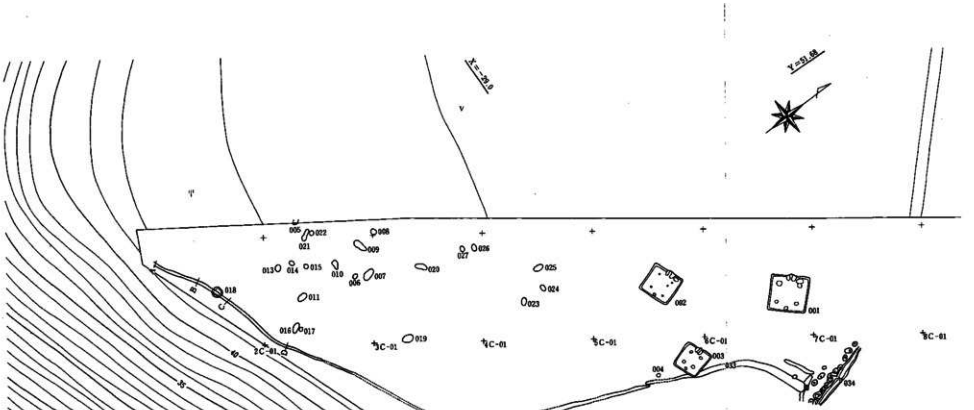
第二次発掘調査は，昭和58年7月25日から11月8日まで実施した。

7月25日～28日　現場設営，現場器材の搬入，グリッドの設定

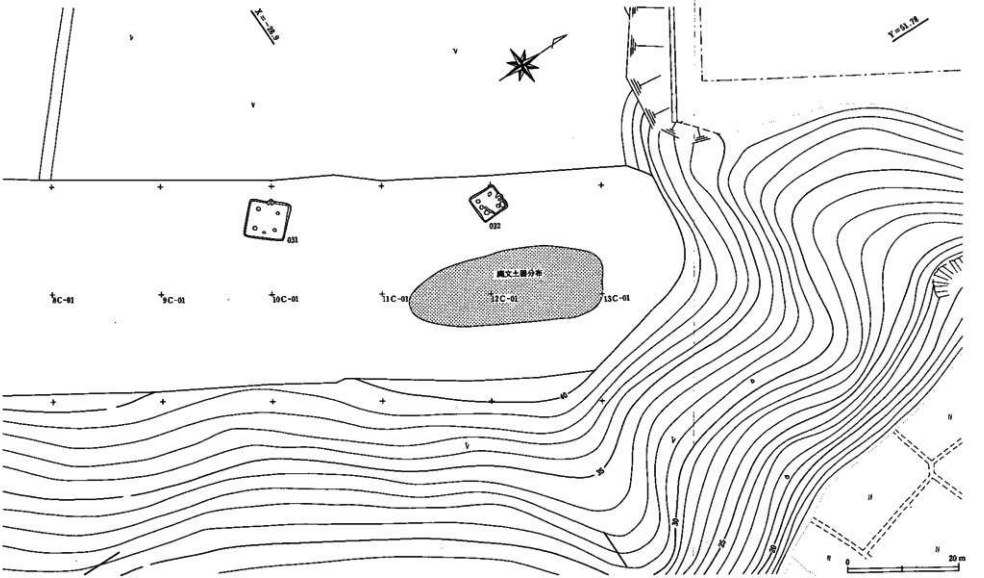
7月29日～9月5日　トレンチ発掘，遺物の検出

8月22日～11月8日　表土剝ぎ，遺構，遺物の検出，精査

8月31日～11月8日　先土器の確認



第92図　遺構分布図(1) (1/500)



第93図　遺構分布図(2)(1/500)

4.調査の概要

本遺跡において検出された遺構は，住居跡5軒，土壙23基，溝3条である。時期的には縄文時代の土壙3基，古墳時代の住居跡5軒，近世の土壙1基が判明した。遺物は縄文式土器早期末の土器片が，12・13グリッドと3グリッドより集中して出土する。また3グリッドからは縄文式土器晩期の土器を伴う土壙が2基検出された。調査区が台地の縁辺部のため遺跡の全容を解明することは困難であったが，古墳時代の集落が台地に展開するだろうという予想ができた。

第2項 遺　構

001号住居跡（第94・95図，図版53）

台地が東へ傾斜する縁辺に位置する。カマドを台地中央へ向け，主軸方位は，N－46.5－Wを指す。

平面形は，6.65×6.0mの方形を呈し，床面積は37.7m²を測る，床面は，ほぼ平坦で堅緻であった。壁溝は，幅20～30cm，深さ10cmで全周する。現存する壁高は，30～45cmを測りほゞ垂直に立ち上がる。主柱穴は，壁から約1.5mの位置にあり，各ピット間の距離は，P1P2-3.6m，P2P3-3.5m，P3P4-3.6m，P4-P1-3.5mを測る。ほぼ正方形で住居の対角線上の位置関係となる。各柱穴の深さは，P1-62cm，P2-39cm，P3-46cm，P4-50cmを測る，P5は，深さ28cmを測る。北壁隅，カマド右側に長軸1.2m，短軸0.76m，深さ0.43m，容量約244ℓの貯蔵穴をもつ，甑（第112図4）が15cm浮いた状態で検出された。

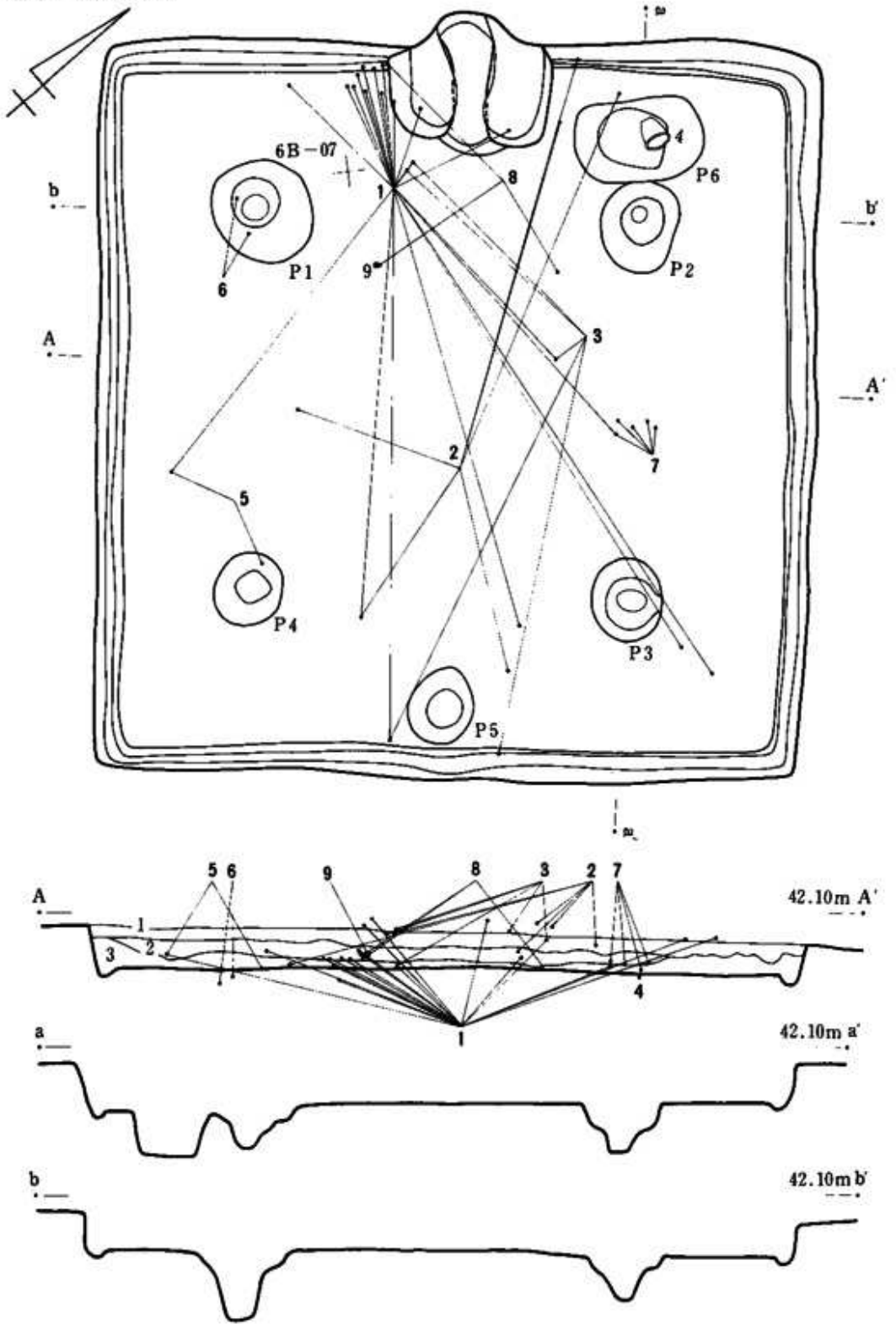
カマドは，北西壁の中央にある。壁を若干掘り込み構築する，袖幅60cm，張り出し90cmの灰白色砂質土を主体とする袖をもつ，カマドの中心部を耕作により攪乱されているため詳細は不明である。火床は，幅38cm，掘り込み15cmの規模であった。土層は，14層に分層できた。4～7層は焼土粒を含む層である。

住居跡の覆土は，上層が黒色土，下層が住居廃棄時のローム粒を含む茶褐色土であった。遺物は，2～3層の床より若干浮いた状態で検出された。貯蔵穴より出土した遺物も同時期であり鬼高期の住居跡と考えられる。

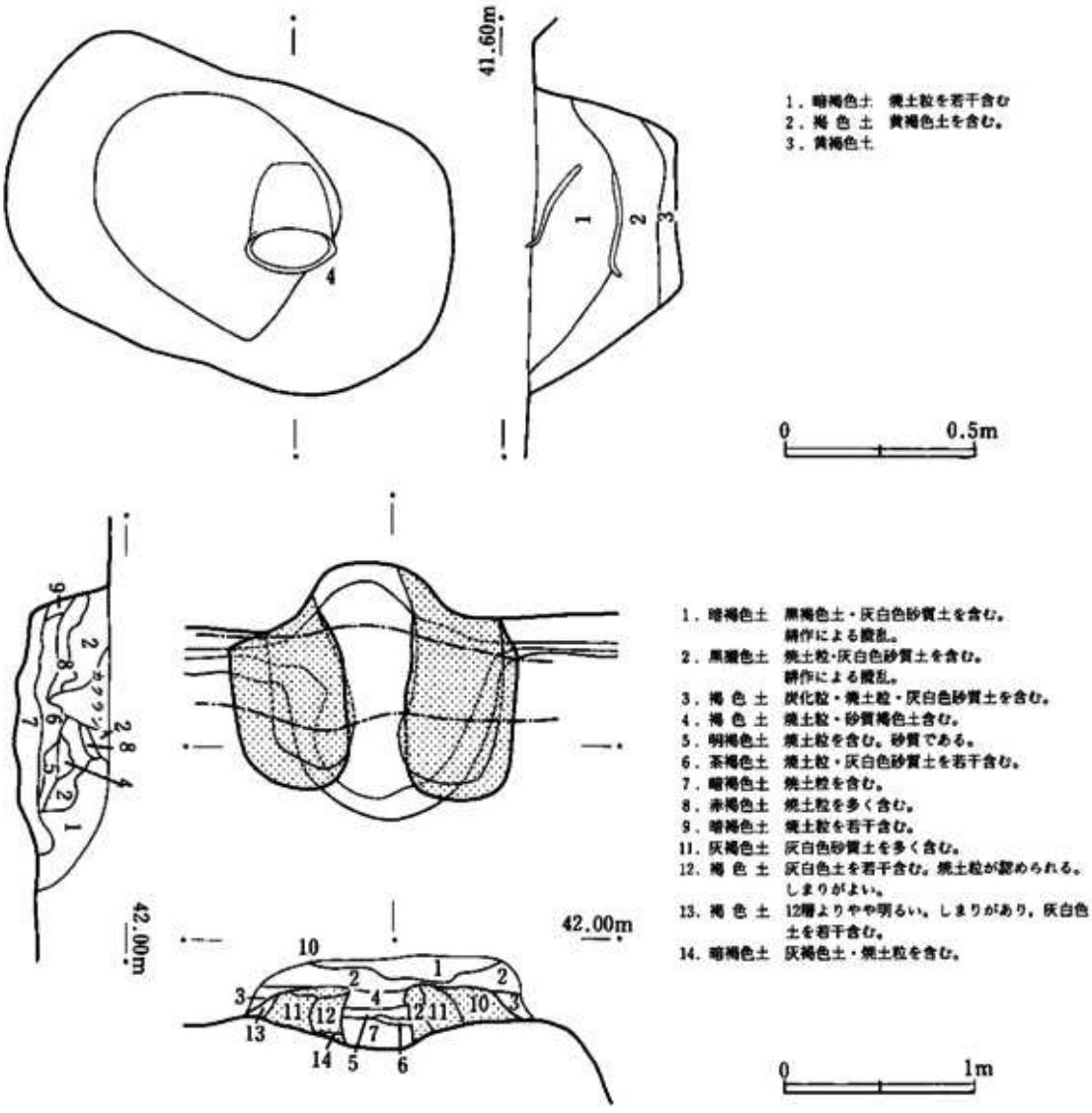
002号住居跡（第96・97図，図版54）

001号跡から15m，003号住居跡から8mの位置に隣接して，台地の肩部に位置する。カマドを台地の中央へ向け，主軸方位は，N－21.0°－Wを指す。001号住居跡の主軸より若干東へふれる。

平面形は，5.63×5.64mの方形を呈し，床面積は，25.9m²を測る。床面は，平坦堅緻である。壁溝は，北東のカマド右壁下で切れる，幅20cm，深さ5～10cmの規模でほぼ全周する。現存する壁高は，20～30cmを測り，やや外反するように立上がる。主柱穴は4本で他の

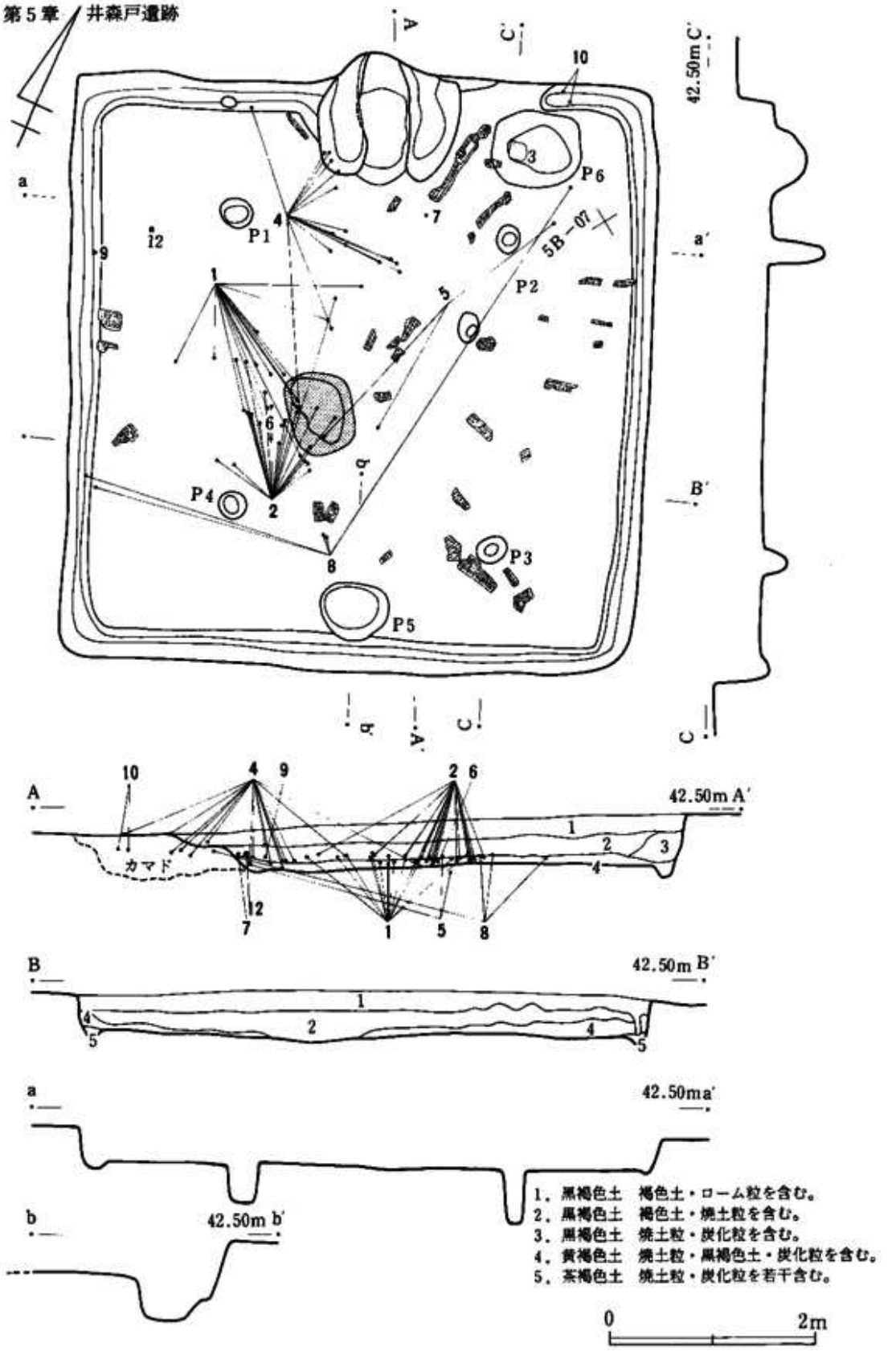


第94図　001号住居跡実測図（1/60）

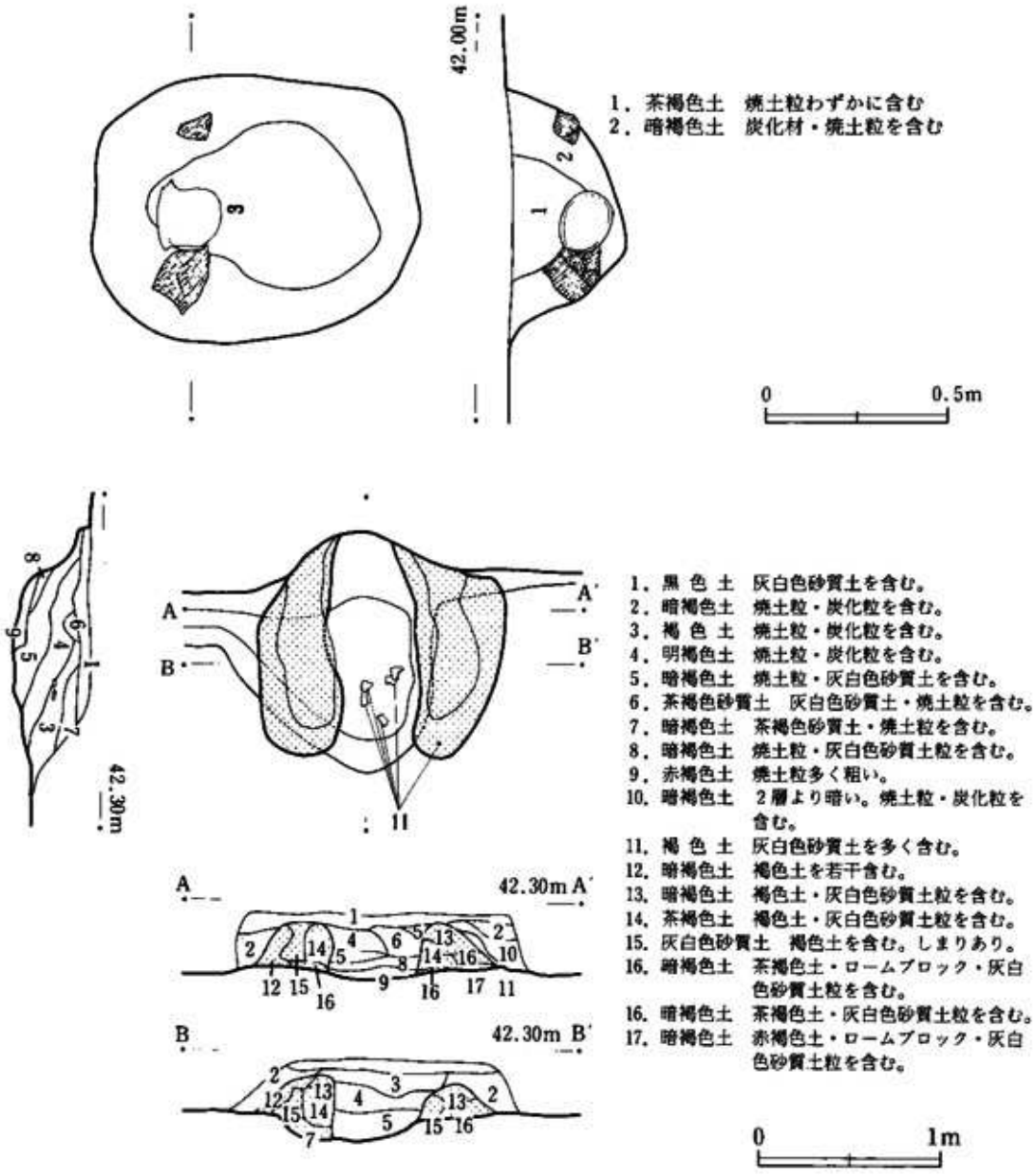


第95図 001号住居跡貯蔵穴及びカマド実測図(1/20・1/40)

住居に比べ小規模である。壁から1.3～1.6mの位置にあり，各ピット間の距離は，P1P2-2.7m，P2P3-2.9m，P3P4-2.6m，P4P1-2.8mを測る。住居の対角線からはずれ，若干菱形をおびた方形の位置関係となる。各柱穴の深さは，P1-37cm，P2-50cm，P3-27cm，P436cmを測る，住居の大きさに比べ径が小さい傾向を示す。P5は，壁直下で深さ27cmの円形のピットである，他のピットと異なり，径が大きいことから出入口の施設に伴う性格が高いと思われる。P7は，径20cm，深さ33cmを測る，柱穴と同規模・同形態から柱穴の可能性が強い。北東コーナーに長軸83cm，短軸62cm，深さ30cm，容量約106ℓの貯蔵穴をもつ，甕が底より出土



第96図　002号住居跡実測図（1/60）



第97図　002号住居跡貯蔵穴及びカマド実測図（1/20，1/40）

している。住居跡のほぼ中央に5cm程の落ち込みをもつ楕円形のプランがある。底面が強い火熱を受け赤変し，焼土が検出されていることから炉として利用された可能性が高い。

カマドは，北壁中央を若干掘り込み構築する，袖幅45cm，壁から張り出し90cmの灰白色砂質土の袖をもつ，天井は崩落するが遺存状況も良好で遺物も多く検出できた。土層は，17に分層できた。9層は焼土を含む赤褐色土，5・8層以上は天井部の崩落層である。火床は，45cmの幅で若干の掘り込みをもつ。

住居跡の覆土は，5層に分層できた。2層以下に炭化材，焼土粒を含むこと，貯蔵穴にも炭化材，焼土粒を含むことから焼失住居の可能性が高い。

遺物の出土量は多く，特に2層と4層の接する，レベルに多く検出された。遺物の出土状況，遺物から鬼高期の住居と考えられる。

003号住居跡（第98・99図，図版55）

本跡は，57，58年度の二次に分断され調査された。工事等との兼合いから一次に全面を剝ぐことが出来ず，完掘の写真等を撮ることが出来なかった。

台地が東で傾斜する縁辺に位置し，谷側で溝と切合う。001・002号跡より小規模であり主軸方位は，N－19°－Wを指す。本跡はカマド脇の貯蔵穴をもたない。平面形は，4.97×4.86mの正方形に近い形状を呈する。床面積は20m²を測る。床面は，ほぼ平坦堅緻である。壁溝は，南東隅で一部切れるが，幅10cm，深さ5cmの規模で全周する，現存する壁高は，50～57cmを測り，やや反外するように立上がる，主柱穴は4本である，壁から約1.3～1.5mの位置にあり，各ピット間の距離は，P1P2-2.0m，P2P3-2.1m，P3P4-2.0m，P4P1-2.1mを測る。住居の対角線上であり，ほぼ正方形の位置関係となる，各柱穴の深さは，P1-60cm，P2-46cm，P3-23cm，P4-60cmを測る。南壁下のP5は，深さ71cmを測り，出入口の施設に伴うものと思われる。

カマドは，北壁の中央に位置し，煙道は壁を大きく掘り込む，灰白色砂質土を主体とする袖は，左袖幅60cm，右袖幅45cmで壁より90cm張り出す，現存する袖高は16cm程で天井部は崩落している。火床は幅40cmで若干凹む，土層は13層に分層できた，カマド内より杯（第113図3）が出土する。

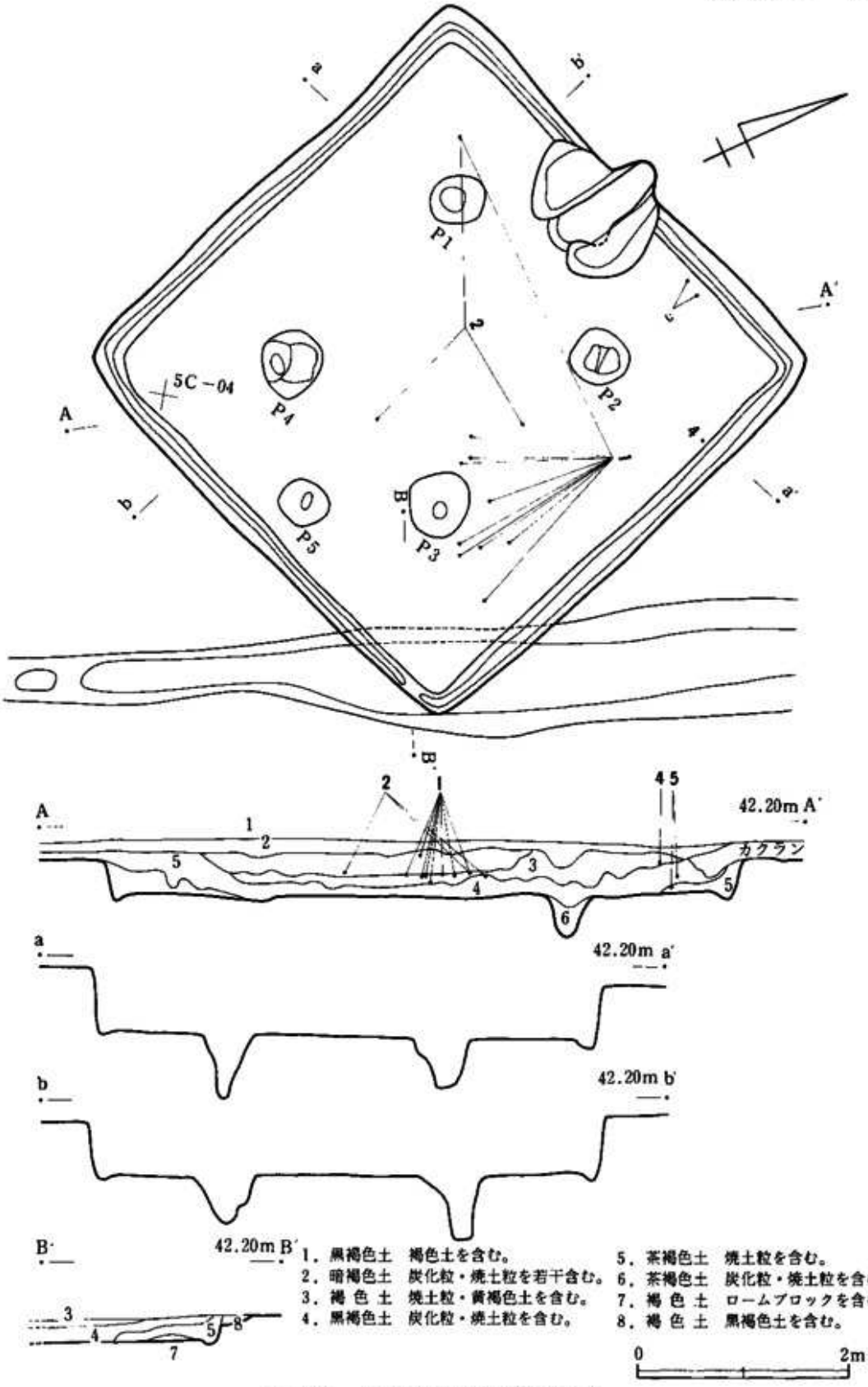
住居跡の覆土は8層に分層できた。遺物は2，3層より多く出土する傾向を示す。

本跡は033号溝と切り合う。土層観察より本跡が新しく，溝を切る。出土遺物から鬼高期の住居跡と考えられる。

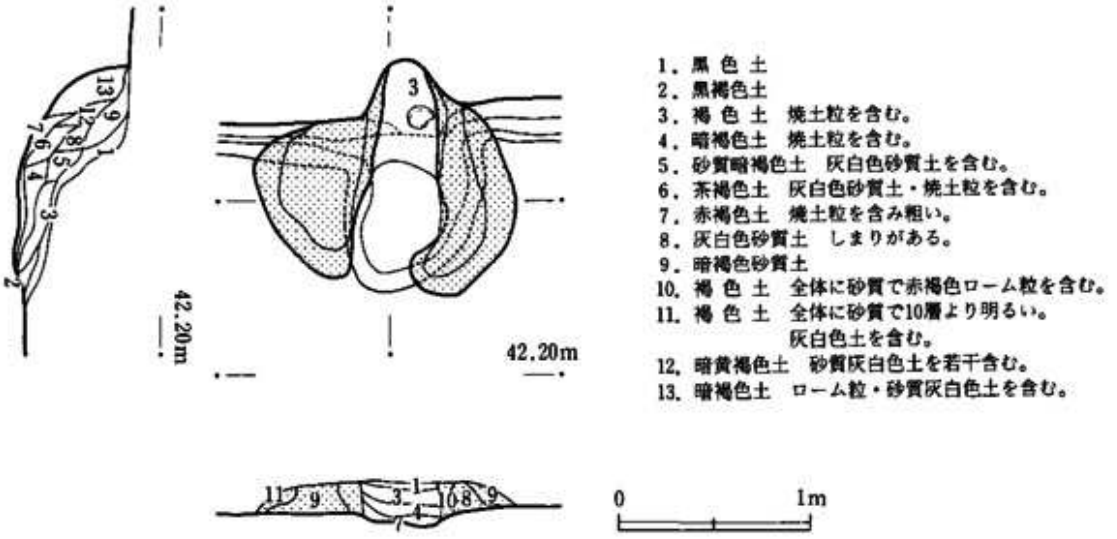
031号住居跡（第100・101図，図版56）

台地が東より若干侵触を受けた浅い谷に位置する。001～003号住居跡とは60m離れた距離にある，001号住居跡と規模・主軸方位が類似する。主軸方位は，N－43.6°－Wを指す。

平面形は，6.82×7.08mと大型で若干横長の方形を呈する。床面積は，43.5m²を測る。床面は，全体的に平坦で堅緻であった。壁溝は，幅10～20cm，深さ5～10cmで全周する。主柱穴は4本で，壁から約1.6～1.8mの位置にある。各ピット間の距離は，P1P2-3.6m，P2P3-3.2m，P3P4-3.5m，P4P1-3.6mを測る。住居の対角線上にあるが，北東側で多少短い台形状の位置関係となる。各柱穴の深さは，P1-68cm，P2-64cm，P3-82cm，P4-54cmを測る。P5は，円形で，深さ35cmを測る。柱穴か，出入口の施設に伴うものと思われる。北東隅に長軸95cm，短軸80cm，深さ40cm，容量約224ℓの貯蔵穴をもつ，遺物は検出できなかった。



第98図 003号住居跡実測図（1/60）



第99図　003号住居跡カマド実測図（1/40）

カマドは，北西壁の中央に位置し，壁を大きく掘り込み，床を若干掘り下げて構築する，左袖幅30cm，右袖幅40cm，壁より張り出し左袖50cm，右袖68cmの砂質粘土を主体とする袖をもつ，天井部は崩落している。火床部は幅43cmで中央が凹む。土層は15層に分層できた。

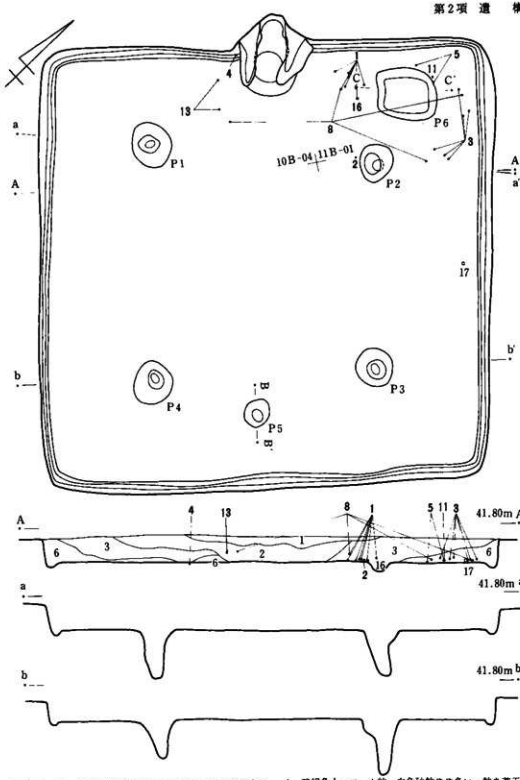
住居跡の覆土は，６層に分層できた。上層は黒褐色，下層に暗褐色の自然埋没の様相を呈している。炭化材，焼土が多く焼失住居跡と思われる。

遺物は，完形に近い遺物がカマドの両脇と貯蔵穴周辺より出土する。床面より土製勾玉が出土した。出土遺物等から鬼高期の住居跡と考えられる。

032号住居跡（第102・103図，図版57）

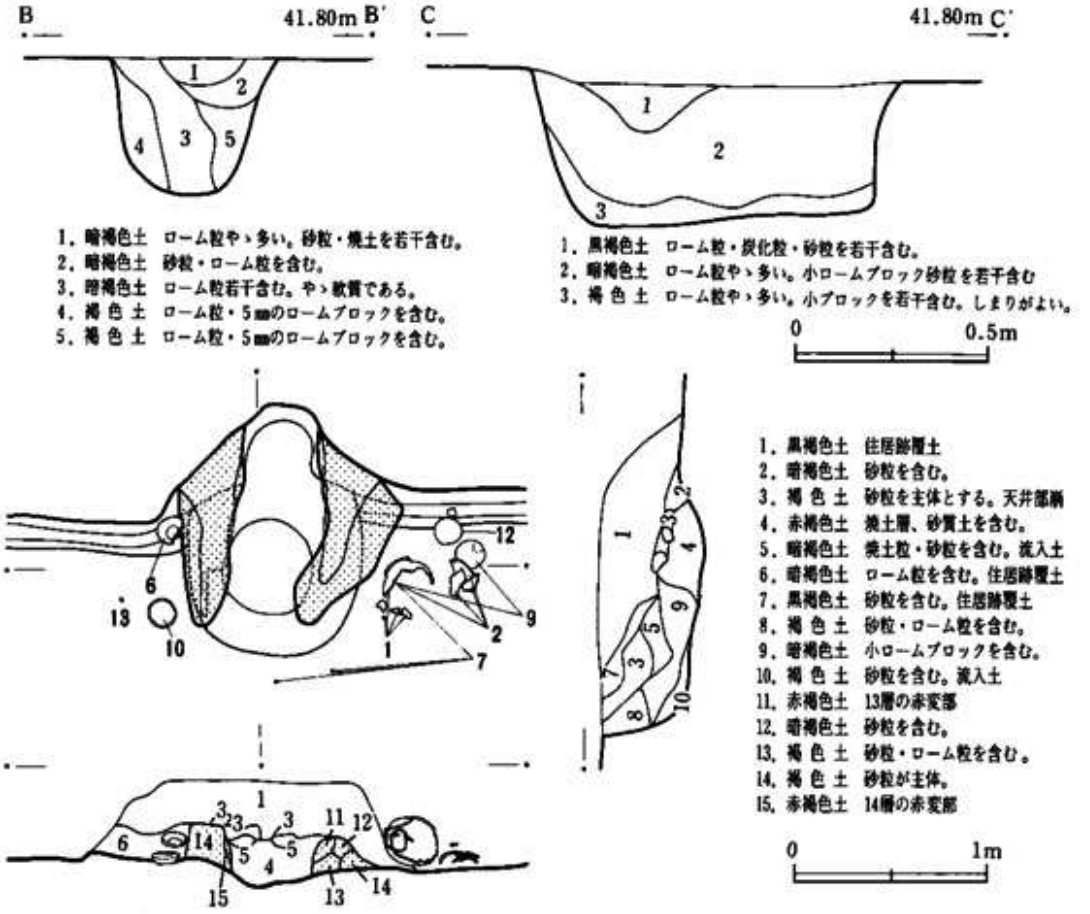
台地の北東隅に位置する。031号住居跡と20m離れる。カマドを北壁中央にもつ小型の住居跡で003号住居跡とほぼ同規模である。主軸方位は，N－1°－Eとほぼ真北を示す。

平面形は，5.0×5.04mとほぼ正方形に近い形態を呈する。床面積は，21.4m²を測る。床面は，ほぼ平坦堅緻である。床面の溝状遺構は，若干の凹みをもち壁側で浅くなる。覆土は，柱穴の土質と同質なので住居に伴うと思われる，壁溝は，幅10cm，深さ５cmで西の一部を除き一周する。現存する壁高は，42～50cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴は，壁から1.2mの位置にある。各ピット間の距離は，P1P2-2.6m，P2P3-2.5m，P3P4-2.5m，P4P1-2.4mを測る。住居の対角線上にあり正方形の位置関係となる。各柱穴の深さは，P1-72cm，P2-52cm，P3-43m²，P4-56cmを測る。P5はP3とP4間にあり，両柱穴を結ぶ線よりずれるので，柱穴の可能性は低い。出入口の施設に伴うピットと思われる。北東隅，カマド右側に長軸１m，短



1．黒 色 土　ローム粒・暗褐色土粒・炭化粒焼土粒を若干含む。
2．黒褐色土　ローム粒・炭化粒・焼土粒を若干含む。
3．黒褐色土　ローム粒・小ブロック・炭化粒を若干含む。
4．暗褐色土　ローム粒・白色砂粒やや多い。粒を若干含む。
5．暗褐色土　ローム粒・小ブロック・白色砂粒若干含む。
6．褐 色 土　ローム粒・小ブロックが多い。

第 100図　031号住居跡実測図（1/60）



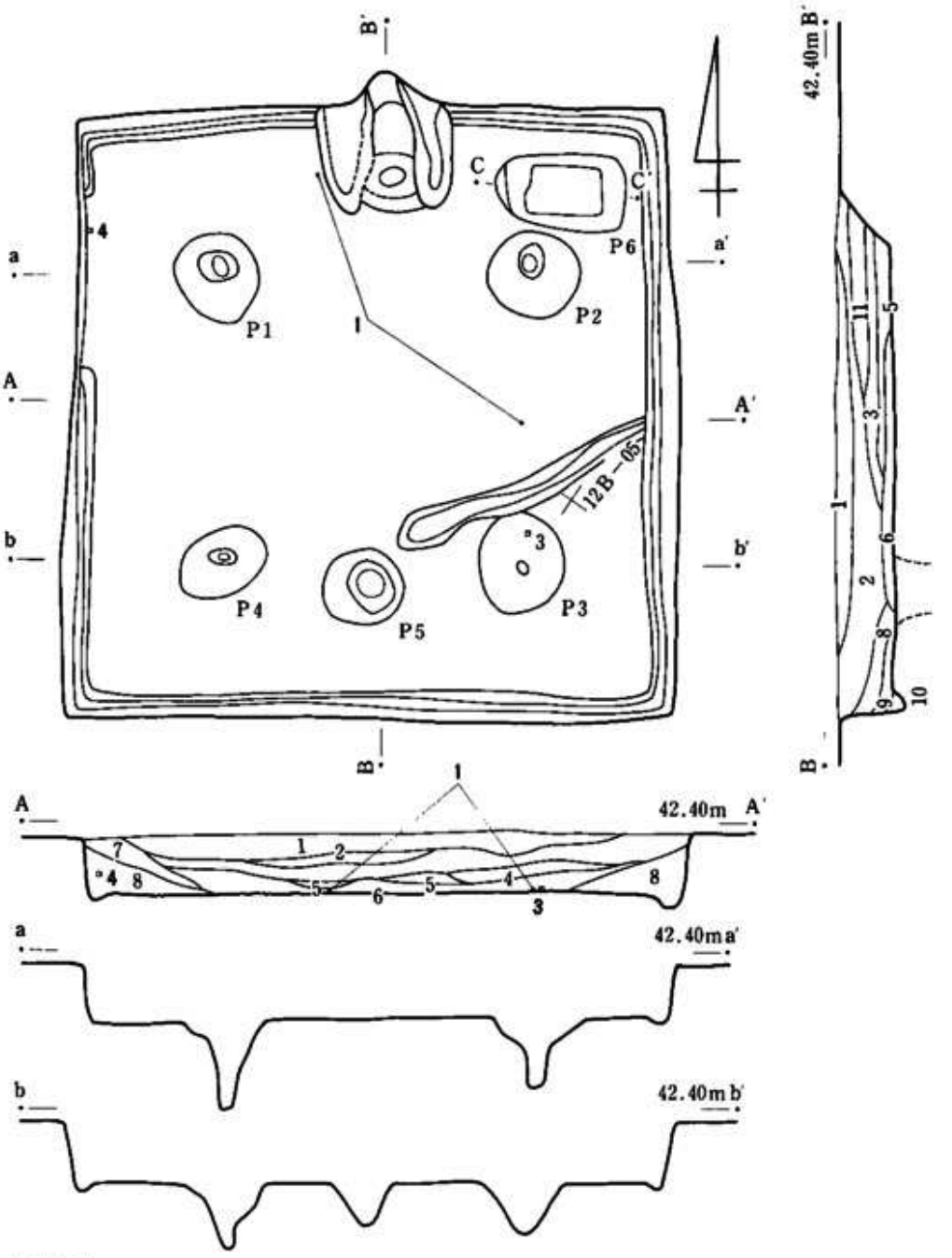
第 101図　031号住居跡ピット・貯蔵穴及びカマド実測図（1/20・1/40）

軸65cm，深さ36cm，容量146ℓの貯蔵穴をもつ，遺物はなく，覆土にロームブロックを多く含むことから，人為的に埋められた可能性がある。

カマドは，北壁中央に位置し，煙道が壁を掘り込む，袖は，砂質粘土を主体として左袖幅43cm，右袖幅33cm，壁より張り出し85cmの袖が現存する。天井部は崩落している。火床は幅33cmで5cm凹む。土層は14層に区分できた。中央部を根株が撹乱し遺存度はよくなかった。

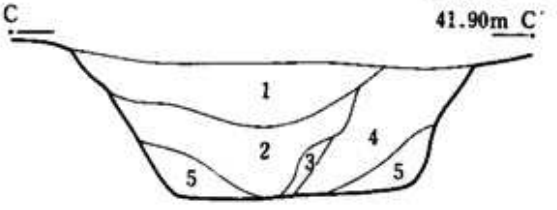
住居の覆土は，11層に分層できた。黒褐色土，暗褐色土を主体とする自然埋没の状態を示す。北東コーナーから中央部にかけローム粒混入の褐色土が堆積する，コーナー部では床近くまで達する。

出土遺物は少なく，実測可能な遺物は4点しかなかった。小玉は遺構確認面の覆土より出土したものである。出土遺物から鬼高期の住居跡と考えられる。



1. 黒褐色土
2. 黒褐色土
3. 黒褐色土　ローム粒を若干含む。2層より明るい。
4. 褐色土
5. 黒褐色土
6. 黒褐色土
7. 暗褐色土
8. 暗褐色土　ローム粒を含む。
9. 褐色土　灰白色砂質土を含む。
10. 褐色土　ローム粒を含む。
11. 暗褐色土

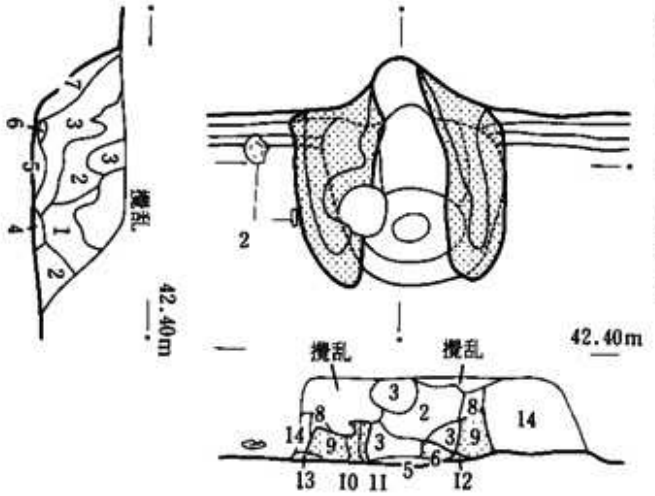
0　2m



1. 暗褐色土　ローム粒・小ロームブロックがやゝ多い。炭化粒若干含む。
2. 暗色土　小ロームブロックが多い。ローム粒・砂粒を若干含む。
3. 褐色土　ローム粒が多い。小ロームブロックを含む
4. 暗褐色土　ローム粒・小ロームブロックが多い。
5. 褐色土　ローム粒・小ロームブロックが多い。

0　0.5m

第 102図　032号住居跡実測図（1/60・1/20）



1．暗褐色土　ローム粒・小ロームブロック・白色砂粒を若干含む。
2．暗褐色土　ローム粒やゝ多い。焼土粒・黒褐色土粒を若干含む。
3．暗褐色土　白色砂粒を多く含む。赤変部を含む。天井部崩落層である。
4．赤褐色土　焼土・砂質土のブロック。天井部崩落と考えられる。
5．暗褐色土　焼土粒・炭化材・砂粒を含む。カマド内堆積物である。
6．暗褐色土　砂粒・焼土粒・ローム粒を含む。
7．暗褐色土　砂粒・ローム粒多く含む。奥壁に貼られたものか。
8．暗褐色土　砂粒・小ロームブロックを多く含む。
9．褐色土　砂粒多い。小ロームブロックを若干含む。
10．褐色土　砂粒多い。小ロームブロックを若干含みしまりがよい。
11．赤褐色土　10層の赤変部
12．黒褐色土　ローム粒がやゝ多い。
13．黄褐色土　ローム粒が主体で小ロームブロックを含む。
14．暗褐色土　住居跡の覆土である。

第 103図　032号住居跡カマド実測図（1/40）

004号土壙（第104号図，図版58）

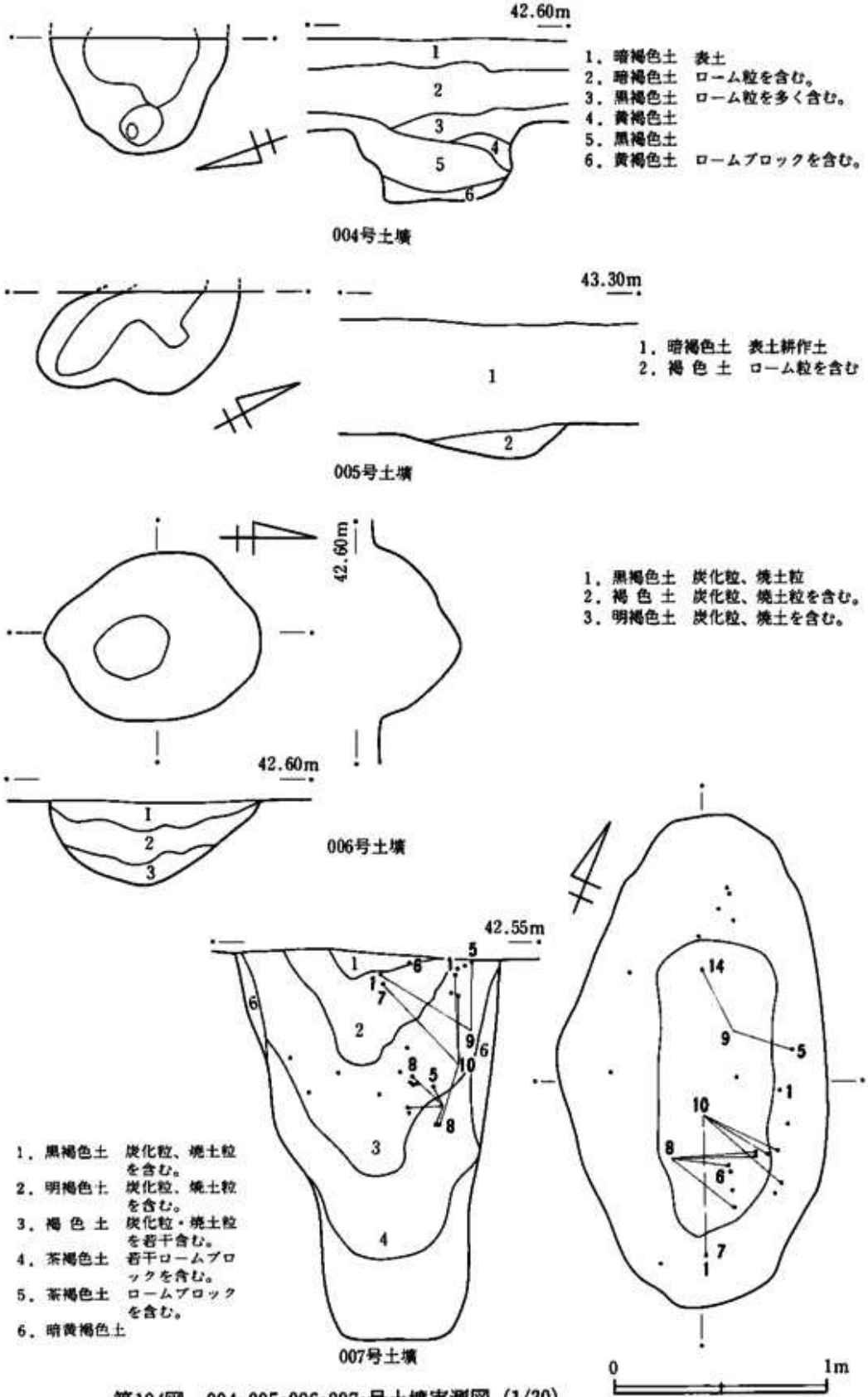
003号住居跡から南へ４ｍ，５Ｃ－７区に位置する。調査は二次にわたったが，一次のみの調査で全様を検出できなかった。平面形態は，楕円か円形と思われる，計測は現状で84×（54）cm，深さ38cmを測る。覆土は，６層でロームブロックを含む黄褐色土が堆積した後，５・４・３層が流れ込んだ様相を示す。遺物はなく，時期・性格は不明である。

005号土壙（第104図）

２Ａ－14区に位置する。約１／４が調査区外へ張りだす。平面形態は，不正円形でレンズ状の掘り込みをもつ，規模は，73×(47)cm深さ11cmを測る。遺物はなく，時期・性格共に不明である。

006号土壙（第104図・図版58）

２Ｂ－８区に位置する。007号･010号土壙に近接する。長軸101cm，短軸76cm，深さ39cmで楕円形の平面形態を呈する。覆土は３層に分層される。いずれも炭化粒・焼土粒を含む点に留意したい。遺物は，覆土より撚糸文１点，条痕文２点，縄文式土器片４点の計７点が出土するが，本跡に伴う遺物とは，断定できない。土器片は磨耗が激しく採拓は不可能である。



第104図 004・005・006・007・号土壙実測図 (1/30)

007号土壙（第104図・図版58）

２Ｂ－８区に位置する。上端で長軸2.3m，短軸1.3m，底面で長軸1.4m，短軸0.5m，深さ1.8mの規模を測る，楕円形の形態を呈する。遺物は25点で，大半が晩期の粗製土器（第118図）である。出土状況は，中位より上層で，中央より壁際に多く出土する。覆土は，５層に分層できた。１～３層は炭化粒，焼土粒を含み，４・５層はロームブロックを含む。土層の状況から流れ込みの遺物と思われるが，遺構の廃棄に近い時期と考えられる。

008号土壙（第105図，図版58）

３Ａ－13区に位置する。92×93cmの不正円形で深さは40cmを測る。遺物はなく，時期・性格共に不明である。

009号土壙（第105図，図版59）

２Ｂ－４区に位置する。長軸2.6m，短軸1.1m，深さ35cmの楕円形を呈する。掘り込みが浅く形態的特色もない。遺物の出土はなかった。時期・性格は不明である。

010号土壙（第105図，図版59）

２Ｂ－３区に位置する。長軸1.6m，短軸1.1m，深さ16cmと一部82cmを測る。茅山期の尖底深鉢形土器（第117図）２個体が破片で出土した。土器の内外に貝殻条痕をもつ。口唇は刻みをもち波状を呈する土器である。本土壙に伴う土器と思われる。

011号土壙（第106図，図版59）

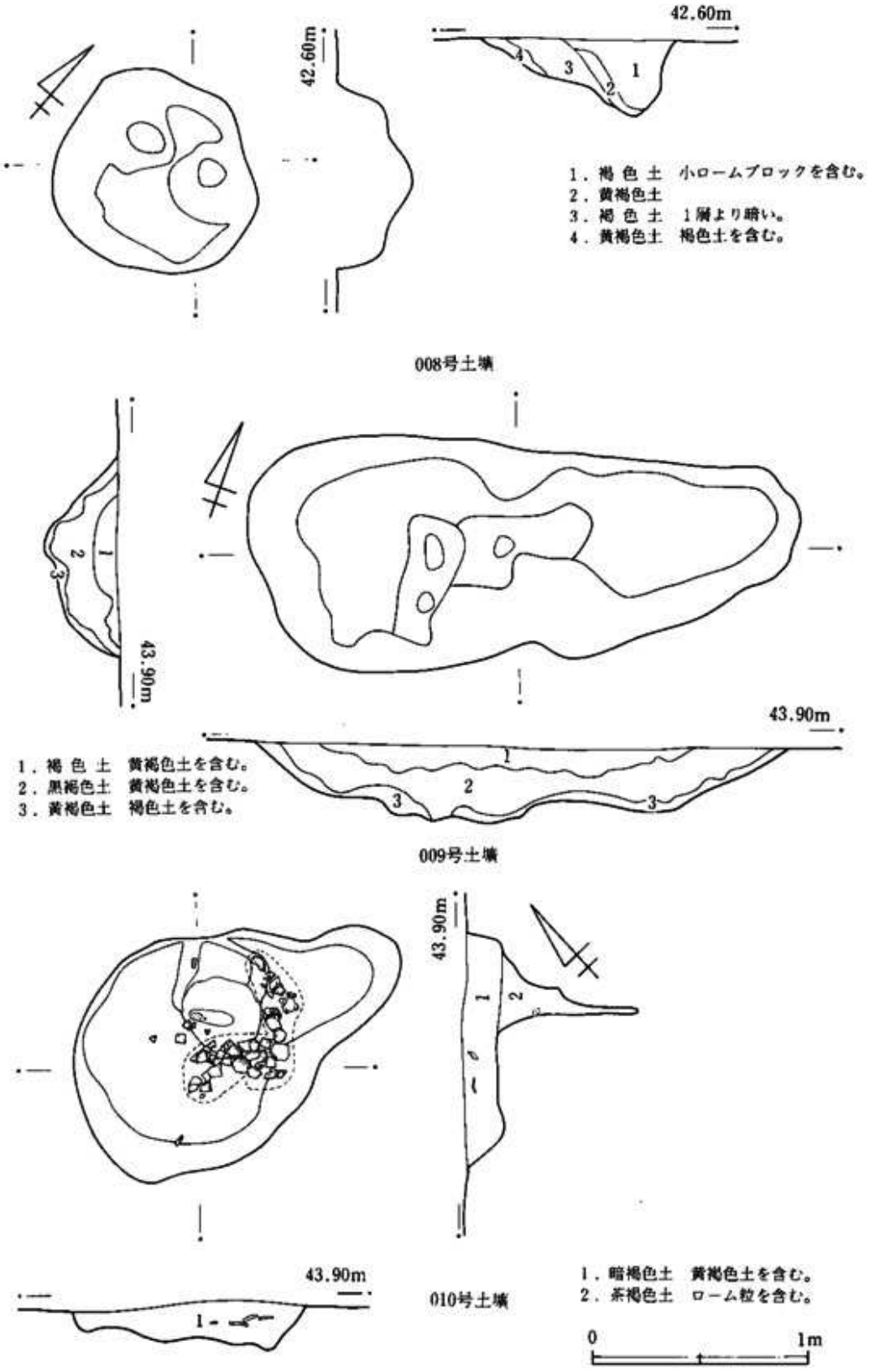
２Ｂ－10区に位置する。上端の長軸1.8m，短軸0.9m，下端の長軸1.3m，短軸0.6m，を測る，深さは1.4mで底面は平坦である。遺物は，茅山式の土器片１点が出土したが，流れ込みと思われる。覆土は，５層に分層できた。４・５層が一気に埋没した後，１～３層が埋没したものと思われる。覆土内に炭化粒・焼土粒を含むが，壁内面に火熱を受けた痕跡はなかった。

012号溝跡（第92・106図，図版59）

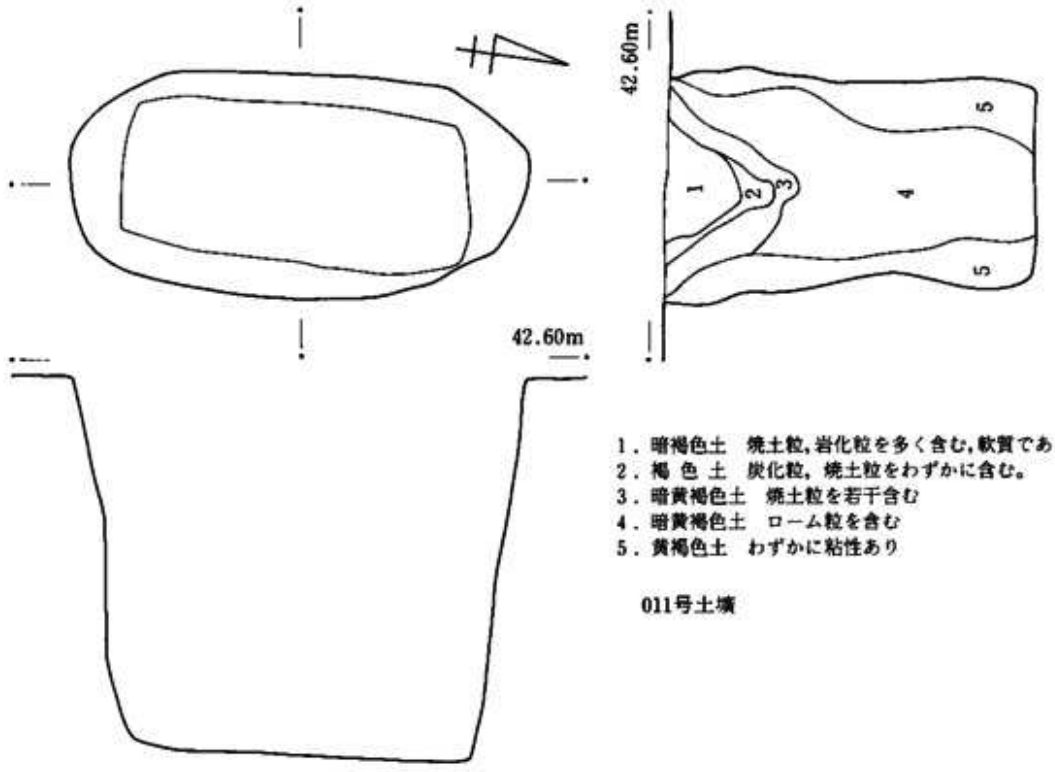
調査区南半の台地縁辺に沿って，くの字状を呈する。幅・深さ共に30cm前後で，掘り方に規則性がない，018号跡との切合い関係をみると，本跡が新しいこと，台地の縁辺に沿っていること等から，近世以降の道跡か耕作の根切り溝と思われる。土器片等21点が出土したが，遺構に伴うものではない。

013号土壙（第106図，図版60）

２Ｂ－５区に位置する，長軸1.2m，短軸1.0mの楕円形を呈し，深さは，20cmを測る。遺物は，67点の土器と石鏃１点，石２点が出土する。晩期の櫛目条痕を施す土器片が12点（第118図），無文土器の口縁部１点が時期を判断することができた。石鏃は，良質の黒曜石で基部のみの欠損品である。出土遺物等から縄文時代晩期の土壙と思われる。

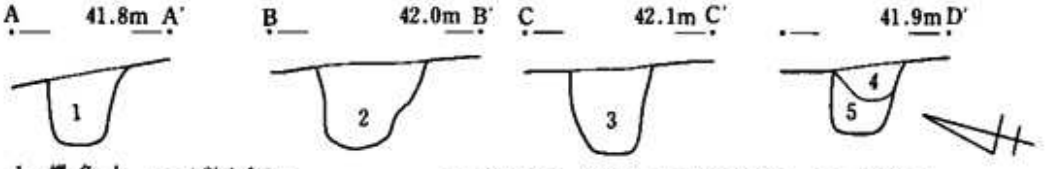


第105図 008・009・010号土壙実測図(1/ 30)



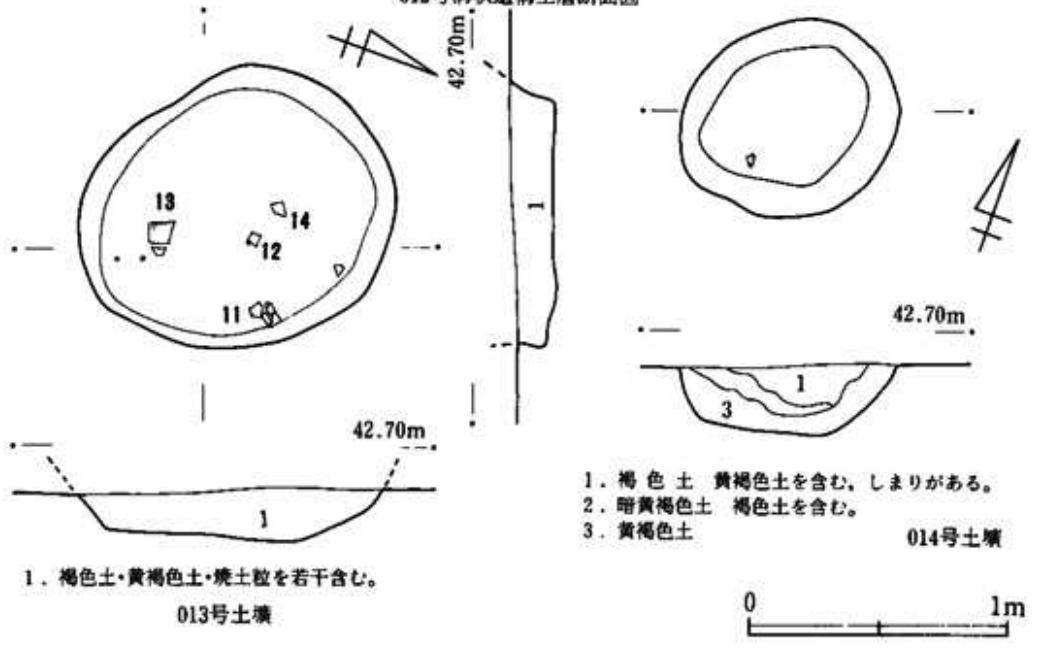
1．暗褐色土　焼土粒，岩化粒を多く含む，軟質である。
2．褐 色 土　炭化粒，焼土粒をわずかに含む。
3．暗黄褐色土　焼土粒を若干含む
4．暗黄褐色土　ローム粒を含む
5．黄褐色土　わずかに粘性あり

011号土壙



1．褐 色 土　ローム粒を含む。
2．暗褐色土　炭化粒・ローム粒を若干含む。
3．暗褐色土　炭化粒・ローム粒を含む
4．暗褐色土　炭化粒を含む
5．赤褐色土

012号溝状遺構土層断面図



1．褐色土・黄褐色土・焼土粒を若干含む。

013号土壙

1．褐 色 土　黄褐色土を含む，しまりがある。
2．暗黄褐色土　褐色土を含む。
3．黄褐色土

014号土壙

第106図　011・013・014号土壙，012号溝状遺構実測図(1/30)

014号土壙（第106図，図版60）

2Ｂ－２区に位置する。径80cm弱の不正円形で，深さ25cmの擂鉢状を呈する。覆土は３層で黄褐色土を主体とする。自然埋没の形態を示す。遺物はなく，時期・性格は不明である。

015号土壙（第107図，図版60）

2Ｂ－６区に位置する。長軸0.8m，短軸0.7mの楕円形を呈する。底面は，８cm程レンズ状に浅く掘り込まれる。覆土は単層で遺物もなかった。

016号土壙（第107図，図版60）

2Ｂ－14区に位置する。長軸1.9m，短軸0.9mの楕円形を呈する。深さは21cmを測る。南側に径60cmの焼土層が堆積する。土壙の覆土全体に焼土粒を含むが，底面の良く焼けている部分は，焼土層の付近だけである。遺物は，時期不詳の縄文式土器片２点を含む４点が出土する。本跡の時期・性格は不明である。

017号土壙（第107図，図版60）

2Ｂ－14区，016号土壙跡と隣接する。0.8×0.7mの楕円形で深さ28mを測る。覆土は，暗褐色で３層をなす。自然埋没の形態である。遺物の出土はなかった。

018号土壙（第107図，図版60）

1Ｂ－11区に位置する。上端の長軸1.9m，短軸1.7m，下端で長軸1.2m，短軸1.1m，深さ54cmを測る。012号溝跡と切り合う。土層観察より，本跡が古い。遺物は，寛永通宝(第116図)が17点出土する。覆土は，焼土粒・炭化粒を含み，床面に近づくと，焼土粒・被熱ロームブロックが多くなる。近世の土壙墓と考えられるが火葬跡の可能性もある。

019号土壙（第108図，図版60）

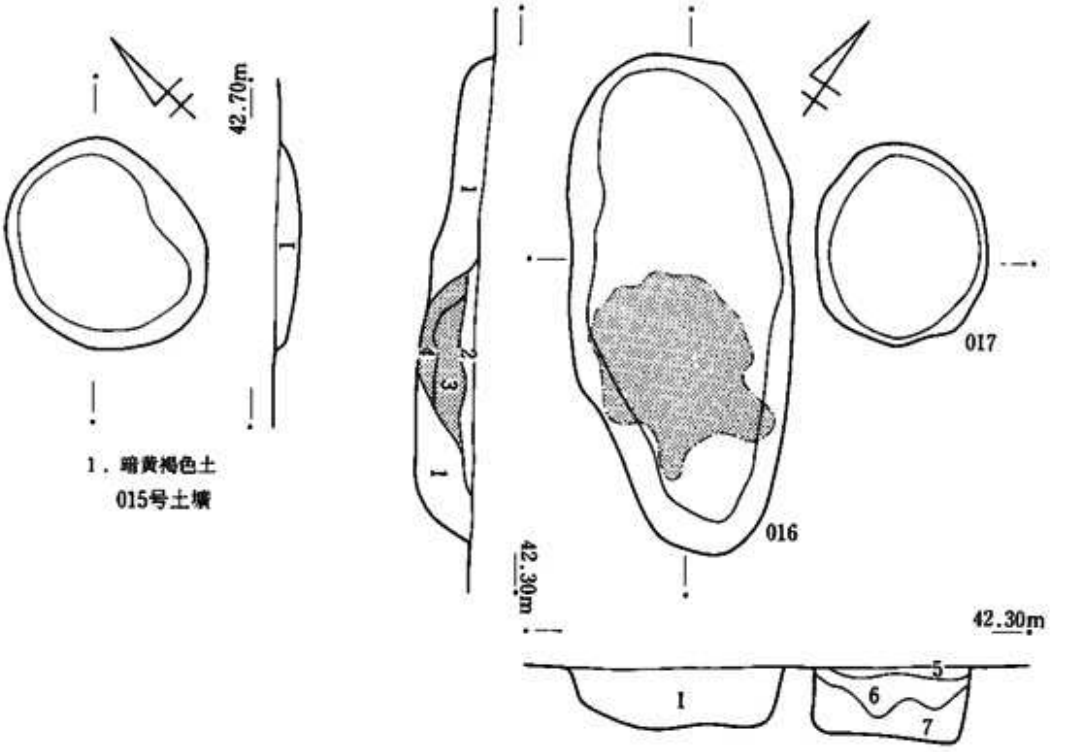
3Ｂ－14区に位置する。長軸2.0m，短軸1.2mの楕円形を呈する。掘り込みは，ほぼ垂直で1.9mを測る。覆土は，６層に分層できた。５・６はロームブロックを含む茶褐色土で３～６層は，一気に埋没している。１・２層は炭化粒・焼土粒を含む黒・茶褐色土で下層に焼土層が広がる。遺物の出土はない。堀り方等から中世以降と思われるが性格は明らかでない。

020号土壙（第108図，図版60）

2Ｂ－3・7区に位置する。長軸2.0m，短軸0.9mの楕円形を呈する。掘り込みは，最大30cmを測る。レンズ状を示す。覆土は，暗褐色土，黄褐色土の２層である。遺物は出土しなかった。時期・性格共に不明である。

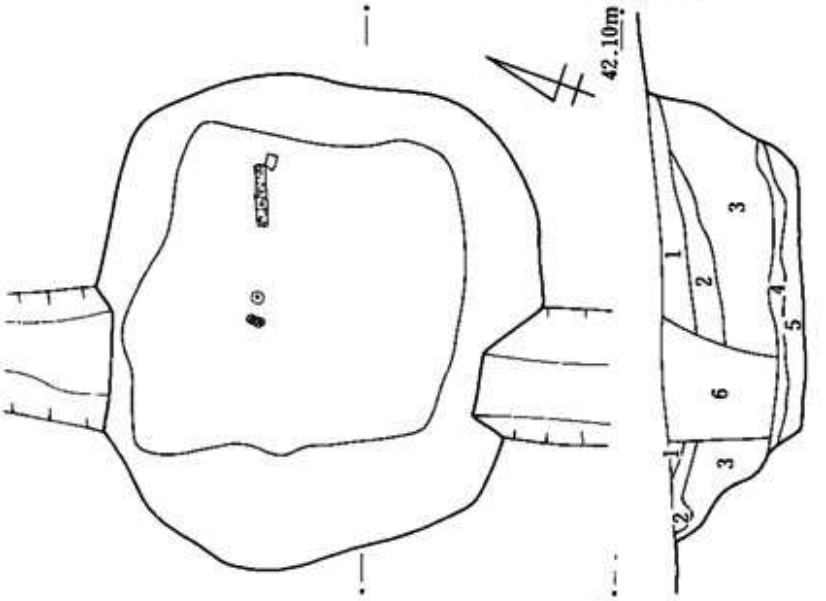
021号土壙（第109図，図版60）

2Ａ－14・２Ｂ－２区に位置する。長軸2.1m，短軸0.7m，深さ31cmを測る。掘り方は一定でなく，中央部が浅く両側が凹む。覆土は，暗褐色土で２層に分層できた。遺物の出土はなく時期・性格共に不明である。



1．暗赤褐色土　焼土粒を若干含む。
2．茶褐色土　焼土粒を若干含む。
3．赤褐色土　焼土粒を多く含む。
4．焼　　土
5．暗赤褐色土
6．暗黄褐色土　焼土粒を含む。
7．暗赤褐色土　1層より明るい，しまりがある。

016・017号土壙

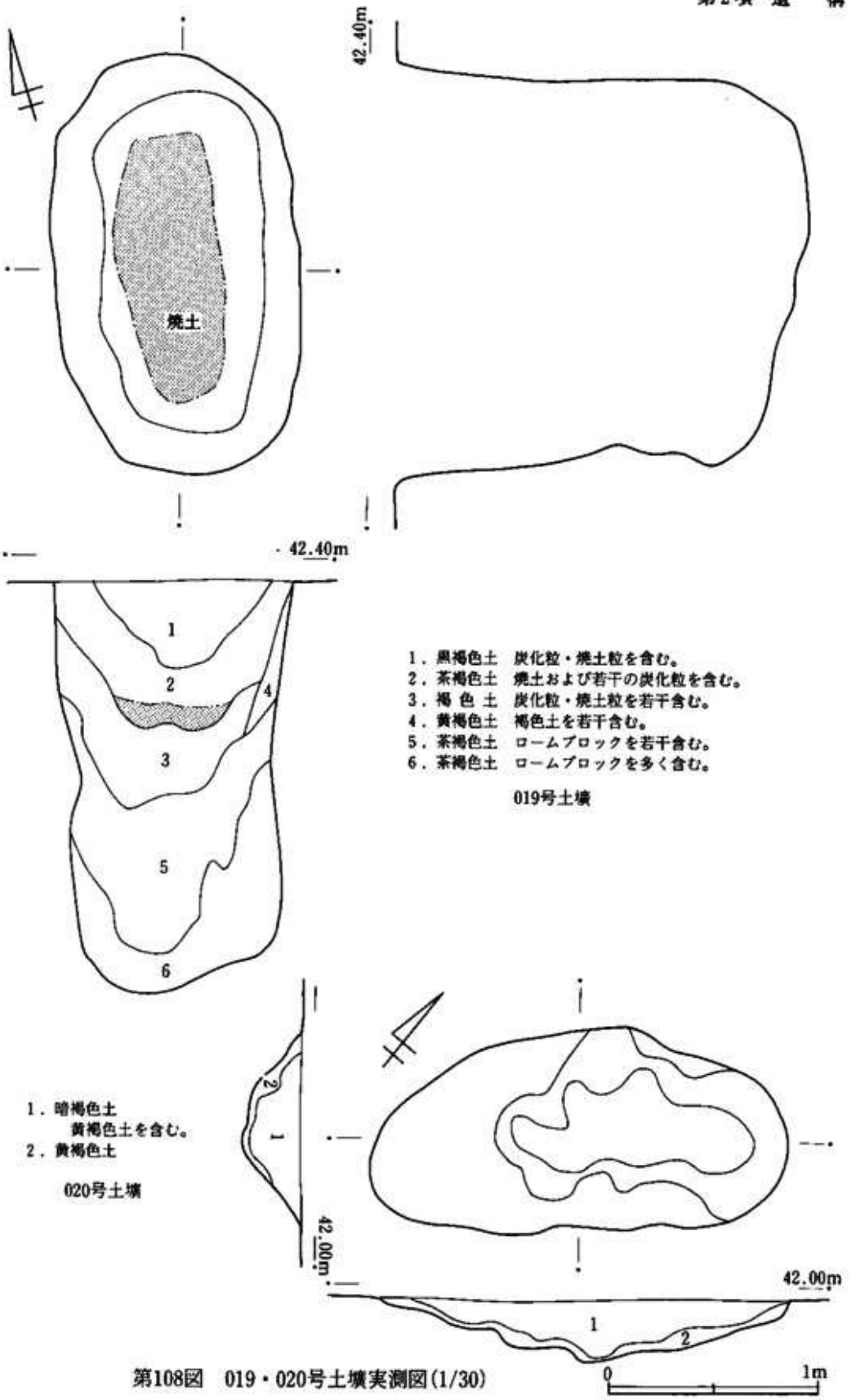


1．暗褐色土　炭化粒・焼土粒を若干含む。
2．炭化物層　焼土粒を含む。
3．褐色土　焼土粒を多く含む，炭化粒は若干含まれる。
4．炭化物層　2層より焼けた痕跡をとどめる。
5．赤褐色土　焼土粒・被熱ロームブロックが多い。被熱している。
6．暗褐色土　炭化粒・ローム粒を含む。12号跡の覆土。

018号土壙墓

0　1m

第107図　015・016・017号土壙，018号土壙墓実測図(1/30)



第108図　019・020号土壙実測図(1/30)

022号土壙（第109図，図版60）

２Ａ－14区に位置する。0.9×0.8mの楕円形を呈する。掘り込みは７cmを測り，平担な底面を呈する。縄文式土器片２点が出土する。１点は貝殻条痕を施す細片土器で時期不祥，覆土より出土する１点は，口唇部に棒状工具による刻み目をもつ無文の波状口縁で，口縁下に竹管による連続刺突を施す細片土器が床面より出土する。遺物は２点出土したが掘り込みが浅いこと，遺物が少ないこと等を考慮すると，本跡の時期，性格も不明である。

023号土壙（第109図，図版61）

４Ｂ－10区に位置する。長軸1.4m，短軸1.0mの楕円形を呈する。掘り込みは31cmを測る，覆土は３層で自然埋没の形態を示す。遺物の出土はなかった。時期・性格共に不明である。

024号土壙（第109図，図版61）

４Ｂ－11区に位置する。長軸1.0m・短軸0.8mのほぼ楕円形を呈する。掘り込みは18cmを測り，平担な底面をもつ。覆土は，暗褐色土・黄褐色土の２層でレンズ状に埋没する。遺物の出土はなく時期・性格共に不明である。

025号土壙（第109図，図版61）

４Ｂ－６・７区に位置する。長軸1.7m，短軸0.9mの楕円形を呈する。掘り込みは32cmを測り，平担な底面をもつ。覆土は黒褐色土・黄褐色土の２層で一方より埋没する。遺物の出土はなく時期・性格共に不明である。

026号土壙（第110図，図版61）

４Ｂ－１区に位置する。長軸1.3m，短軸0.7mの楕円形を呈する。掘り込みは18cmを測り，平担な底面をもつ。中央のピットは25cm掘り込まれる。覆土は，黒褐色土・黄褐色土の２層でレンズ状の埋没を示す。遺物はなく時期・性格共に不明である。

027号土壙（第110図，図版61）

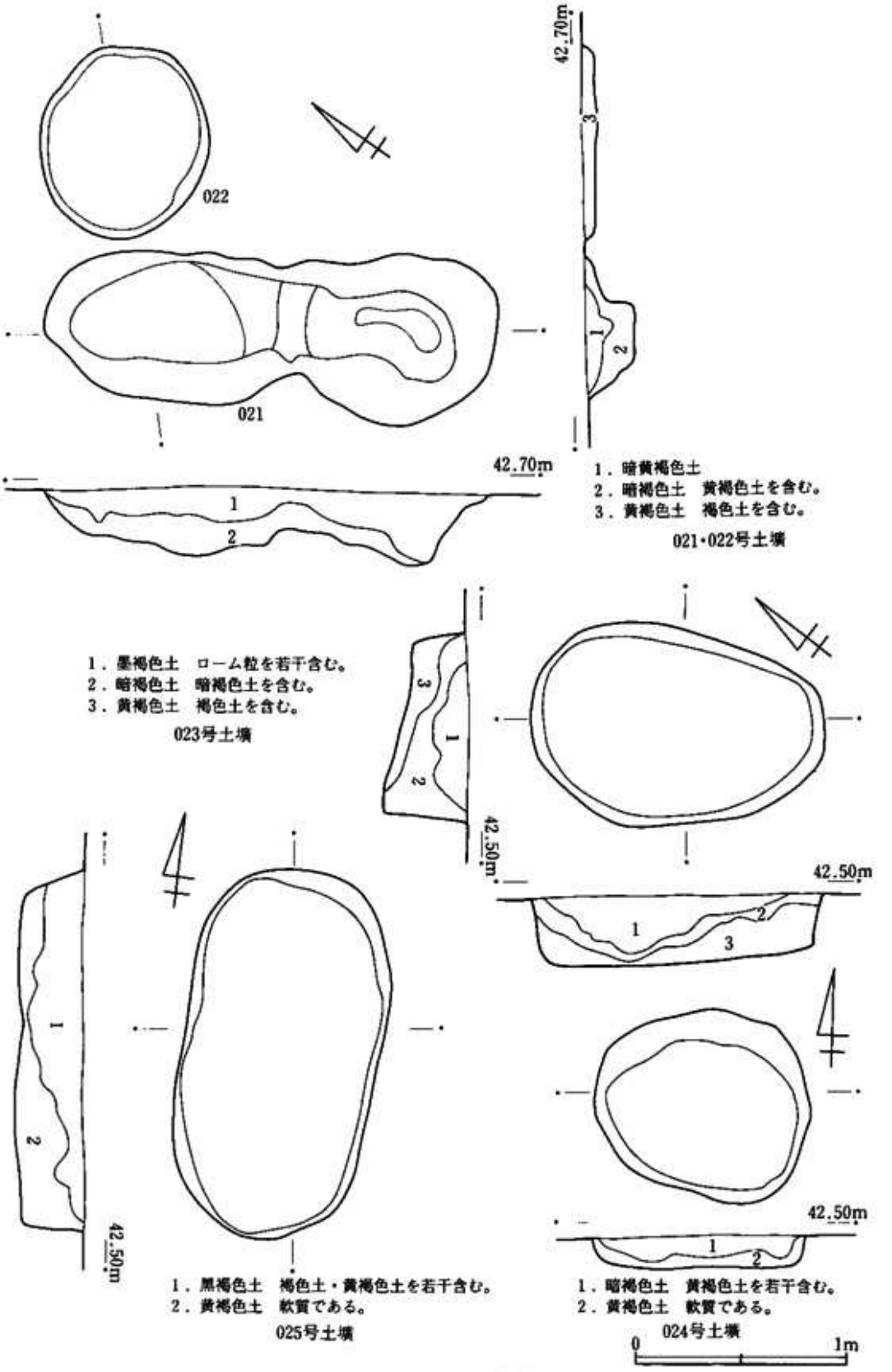
４Ｂ－１区に位置する。0.9×0.8mの不正円形を呈する。掘り込みはレンズ状で13cmを測る。覆土は暗褐色土で遺物は出土しなかった。時期・性格共に不明である。

033号溝（第110図，図版62）

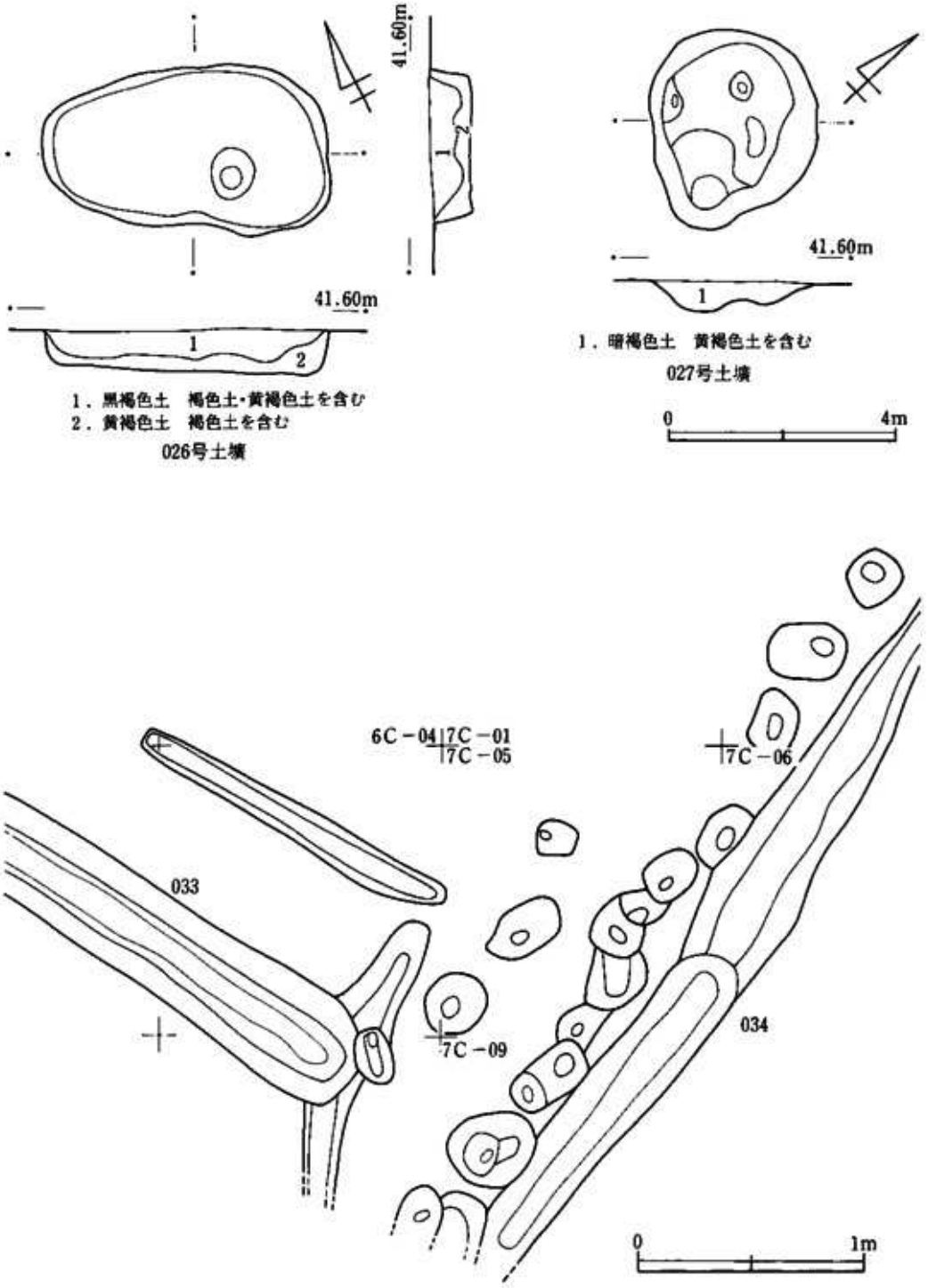
５・６Ｃ区に位置する。６Ｃ区では斜面にかかり谷に面して止まる。003号住居との切り合いは，本跡が古く住居が新しいことが土層観察より判明している。掘り込みは，逆台形状で，0.4～１mを測る。

034号溝（第110図，図版62）

７Ｃ区に位置する。傾斜地より台地平面に向い走向する。溝幅は，1.0～1.2m，掘り込み20cmを測る。溝の側面に，掘り込み30～40cmの連続したピットを配する。遺物は，流れこみで時期決定は出来なかった。溝か道路跡と思われる。



第109図　021・022・023・024・025号土壙実測図(1/30)



第110図　026・027号土壙，033・034号溝実測図（1/30・1/120）

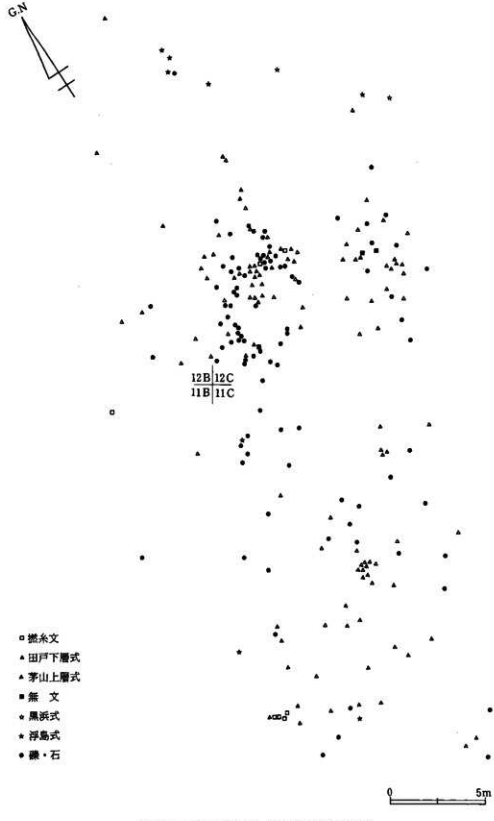
縄文式土器・礫出土集中地点（第111図，図版62）

北西に広がる台地が南の河川に東西を浸触された舌状台地の東側縁辺部に位置する。調査グリッドの11C・12Cにあたる。平担な台地が緩やかに傾斜して斜面となる肩部にかけて集中する。

確認調査で遺構の存在が予想され，地表から手掘り作業を行った。結果的には，土器片と礫が散布するのみで遺構は検出できなかった。12C－01グリッドを中心として撚糸文土器片7点，田戸下層式土器片106点，茅山上層式土器9点，無文土器片3点，黒浜式土器片4点，浮島式土器片6点，礫94点が検出された。層位的には，表土層，漸移層，ソフトローム上層より出土する傾向を示した。

田戸下層式土器は，106 点と多く出土したが住居跡，炉跡等の遺構は周辺にも検出できなかった。キャンプサイト的性格と考えられる。礫の出土傾向も田戸下層式と同様の傾向が窺えるので同時性と考えられる。土器の様相は，太い平行した沈線を施す土器と，細い沈線を横位，斜位，格子状に施す土器が相半ばする。

他の時期の土器片は数も少なく散漫的に出土するのみである。



第111図　縄文式土器・礫出土状況(1/100)

第3項 遺 物

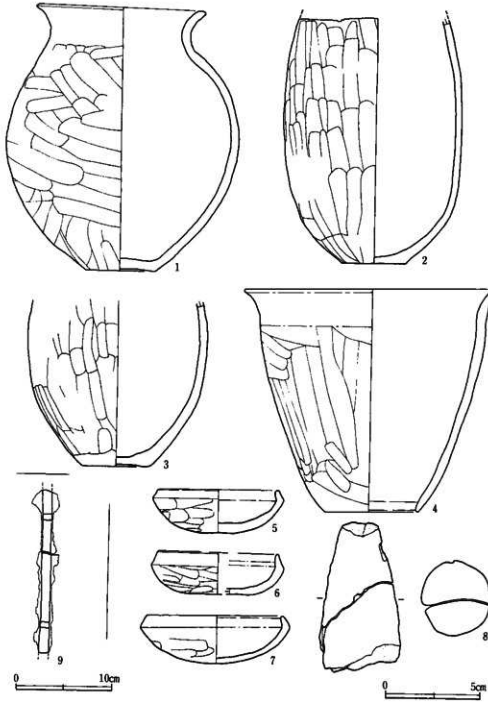
1.遺構出土の遺物

001号住居跡（第112図，図版65，66）

1～3は土師器の甕である。1は完形で，球形に近い胴部から口縁部が円弧を描くように強く外反する。胴下半は下方より，上半は上方より，中央は右よりヘラ削りし，口縁は横ナデする。胎土は，砂粒を多く含み，焼成は良好で暗赤褐色を呈する。口径18cm，底径7.6cm，器高17.4cmを測る。2・3は胴長の甕である。2は下脹れする胴部で口縁部が欠損する，上端は輪積みの刻目痕を残す。胴上半は上方より下半は下方よりヘラ削りする。胎土は砂粒を含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。底径7cmを測る。3は，胴部がやや張る甕である。胴上半は上方より，下半は下方より，底部側面は横方向へヘラ削りする。胎土は細砂粒を多く含み，焼成は普通で暗赤褐色を呈する。底径7.1cmを測る。4は土師器の甑である。胴部は緩かな丸味をもって立上がり口縁で強く外反する，高さに比べ広口である。口唇部は，やや尖り気味となる。胴部を下から上方へヘラ削り後下部を右下から左上へヘラ削りする。頸部・口縁部は丁寧なナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み焼成は良好で赤褐色を呈する。完形で口径26.8cm，底径9.7cm，器高28.2cmを測る。5～7は，土師器の坏である。5は，丸底で受部状の稜から口縁が内傾する。体部はヘラ削り，口縁は横ナデを施す。胎土は細砂粒を若干含む密な胎土で，焼成は普通で淡褐色を呈する。口径13cm，器高4.5cmを測り2/5が遺存する。6は，体部が厚く，底径が広く，受部状の稜から口縁部は内傾する。体部はヘラ削り，口縁は横ナデを施す。内面は幅の狭い磨き痕を残す。胎土は細砂粒を若干含み，焼成は普通で淡褐色を呈する。推定口径12.8cm，推定底径8cm，器高4.3cmを測り1/4が遺存する。7は丸底で受部状の稜から口縁が内傾する。体部はヘラ削り，口縁はナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み，焼成は普通で淡褐色を呈する。口径1.3cm，器高4.5cmを測り2/5が遺存する。8は，土製支脚である。9は，鉄製品で器種が不明である。

002号住居跡（第113図，図版66）

1・2は，土師器の甕で同一個体と思われる。胴部は肩の張る球形で，頸部が締まり口縁部は円弧を描くように立ち上がる。口唇は丸い。内外とも器表の剝離がひどく，調整は不詳であるが，胴部はヘラ削り，頸部はナデと思われる。胎土は砂を多く含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。口径17.8cm，底径8.5cm，推定器高33cmを測る。3は，土師器の鉢形土器である。内底が三方にコーナーを有する，底部・口縁部ともやや四角状を呈し，器形が歪む。胴下半で丸みをもち，口縁は強く外反する。口唇部は丸い。胴部は粗いヘラ削りを施す。胎土は細砂粒を若干含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。口径20.8cm，底径7.9cm，器高13.5cmを測り3/4が遺存す

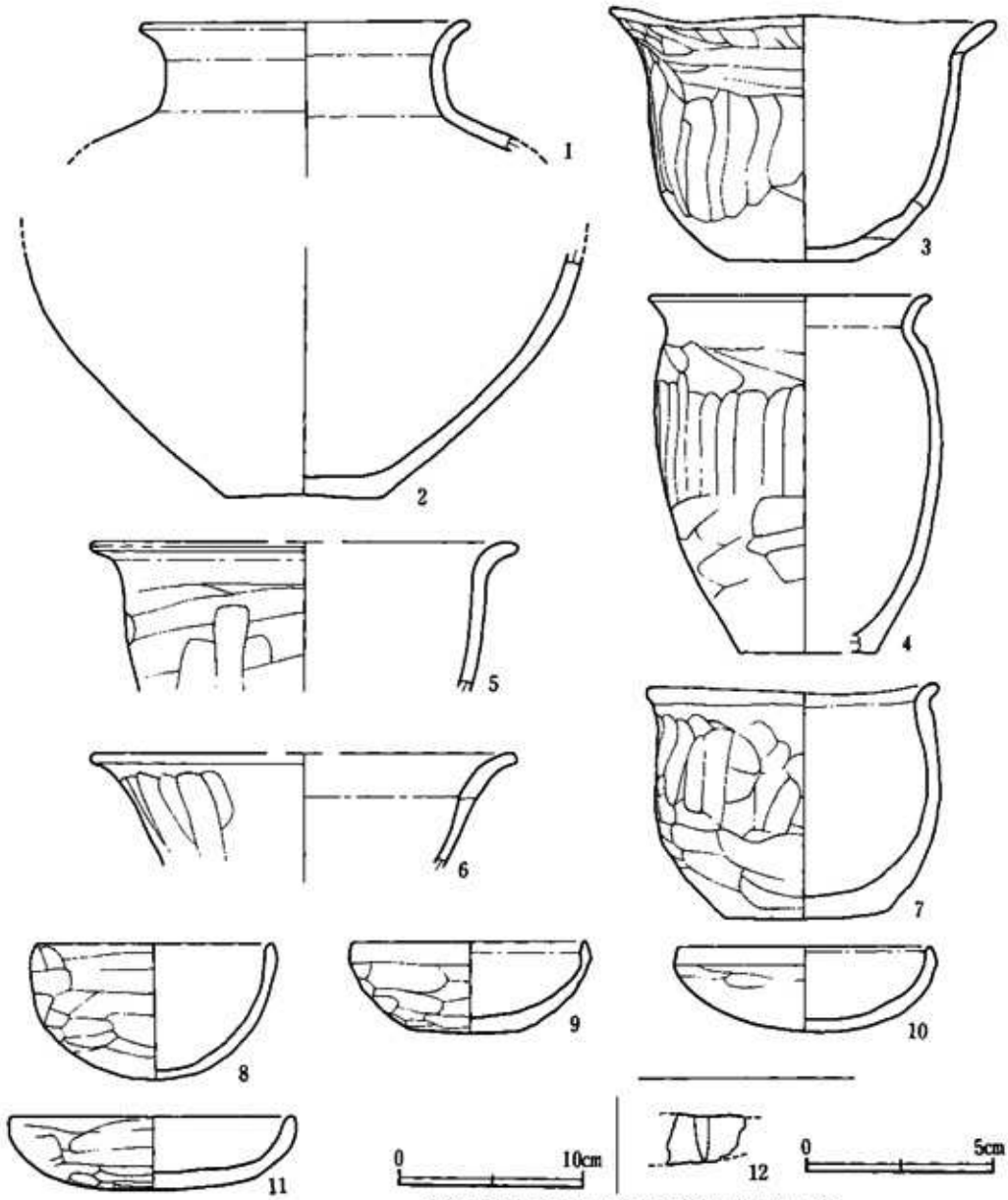


第112図　001号住居跡出土遺物実測図(1/ 2・1/4)

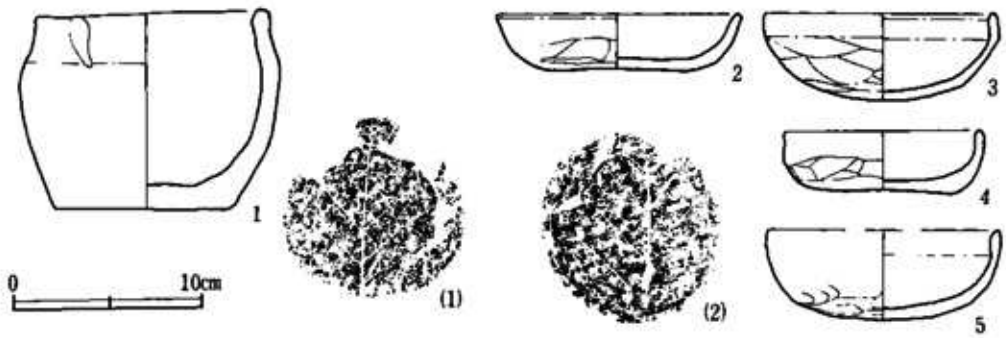
る。4は，土師器の小型甕である。胴はやや丸みをもち頸部の境に稜をもち口縁は強く外反する。口唇は尖気味となる。口縁部，頸部をナデ整形した後胴上半を左上方へ，胴中央を上から下へ，胴下半を右上方へヘラ削りしている。胎土は細砂粒を含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。口径15cm，底径7.4cm，器高19cmを測り完形である。5・6は，土師器の甑である。5は，胴部にやゝ丸味をもち，口縁が外反する。胴上半に横方向，胴部に縦方向のヘラ削りを施す。胎土は細砂粒を含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。一部煤が付着する。口径は推定23cmを測る。1/4が遺存する。6は，直線的な胴部で外反し大きく口縁が開く。胴部は上から下へヘラ削り後横ナデを施す。整形は全体的に粗い。胎土は細砂粒を多く含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。推定口径23cmを測り，1/4が遺存する。7は，土師器の鉢形土器である。胴下半は丸く，口縁はほぼ垂直に立ち上がり口唇が強く外反する。3と同様，全体的に四角状の歪みがある。口縁部を横ナデし，胴上部は縦方向へ，底部は左から右の横方向へヘラ削りする。胎土は細砂粒を多く含み，焼成はやや不良で暗赤褐色を呈する。口径15.5cm，底径9.1cm，器高11.7cmを測り，5/6が遺存する。8～11は，土師器の坏である。8は，丸底で球形を呈する椀状の坏である。口縁はほぼ垂直に立上がり口唇はやや尖り気味となる。口唇部を横ナデした後右から左へヘラ削りを施す。胎土は細砂粒を含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。口径12.5cm，器高7.1cmを測る完形品である。9は，体部が球形に立上がり稜をなして口縁が内傾する。器厚は底部が厚く口縁でくびれ口唇が肥厚する。調整は粗く体部は右から左のヘラ削り，口縁は横ナデが施される。胎土は細砂粒を多く含み，焼成は普通で赤褐色を呈する。口径12.7cm，底径6cm，器高4.8cmを測り4/5が遺存する。10は，丸底で体部が緩い円弧状を呈して立上がり，稜をなして口縁がやや内傾する。口唇は尖り気味となる。内外ともヘラ状の工具で磨きを施す。胎土は細砂粒を若干含み，焼成は普通で黒褐色を呈する。口径13.8cm，器高4.5cm，を測る完形品である。11は，体部が円弧状で口縁は直立する。体部から底部は粗いヘラ削りで，ヘラ跡が明瞭に残る。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は普通で内面は黒色，外面は赤褐色を呈する。口径15.3cm，底径9cm，器高3.8cmを測り1/3が遺存する。12は，鉄製品である，断面から刃部と窺えるので刀子の可能性がある。

003号住居跡（第113図，図版67）

1は，土師器の鉢形土器である。胴が若干脹れるように立上がり口縁で締る。口縁部との境には，はっきりしないが稜をもつ。口縁部は横ナデ，胴部は器表が剝離し詳しくは観察できないが，ヘラ削りの痕跡がある。胴下半は調整せず胎土が盛り上ったままである。底部は木葉底である。胎土は砂を多く含み，焼成は普通で暗赤褐色を呈する。口径12.3cm，底径9.5cm，器高10.2cmを測り1/2が遺存する。2～5は土師器の坏である。2は，底部が広く，体部から口縁が円



002号住居跡出土遺物実測図（1/4・1/2）

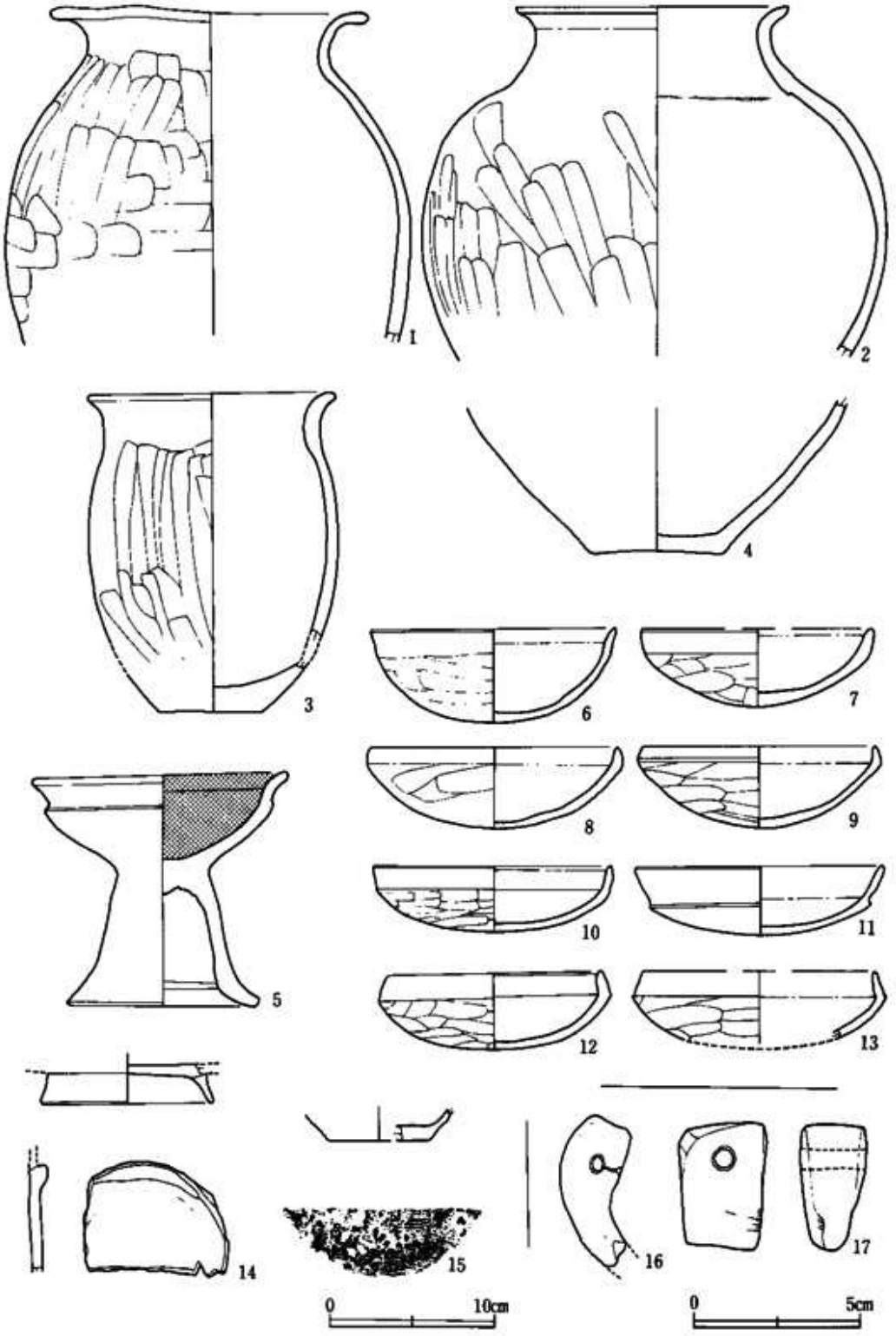


第113図　002・003号住居跡出土遺物実測図(1/4)

弧状を呈する浅い坏である。底部は木葉痕がある。調整は，体部のヘラ削り後口縁部を横ナデしている。胎土は細砂粒を含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。口径13cm，底径8.4cm，器高2.8cmを測り2/3が遺存する。3は，丸底の坏である。体部は球形を呈し口縁との境に稜をなす。口縁部は横ナデ，体部は左から右へ粗いヘラ削りを施す。胎土は細砂粒を含み，焼成は普通で暗赤褐色を呈する。口径12.4cm，底径6.5cm，器高4.4cmを測り4/5が遺存する。4は，体下部を右から左へ粗くヘラ削りし，口縁が垂直に立上がる。口唇は尖り気味である。口縁はナデ，底部はヘラ削りである。外面は雑であるが，内面は丁寧なヘラ削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み，焼成は普通で暗赤褐色を呈する。口径10.5cm，底径8.2cm，器高3.3cmを測る。小型の坏で完形品。5は，体部から口縁部が球形を呈して立上がり，尖り気味の口唇部となる。器面の荒れがひどく調整は不詳であるが，右から左へヘラ削りしたと思われる。底面のヘラ削りは粗い。胎土は細砂粒を含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。口径12.4cm，底径7cm，器高4.5cmを測り1/3が遺存する。

031号住居跡（第114図，図版68・69）

1～4は土師器の甕である。1・2は球形に近い胴部から口縁部が円弧を描くように立上がり強く外反する，1は，口縁部を横ナデ後胴部をヘラ削りする。胴と口縁の接合部に割れ目が入る。胎土は細砂粒を多く含み，焼成は普通で赤褐色を呈する。口径19cmを測り3/5が遺存する。2は，胴部と口縁の接合部内側に粘土の盛上がりを認める。胴部にヘラ削りを施した後頸部から肩にかけナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。口径16.5cmを測り2/3が遺存する。3は，若干胴部が張り，口縁が強く外反する小型の甕である。底部と口縁部が肥厚する。頸部を横ナデ後，胴部を上から下へヘラ削りする。胎土は砂を多く含み，焼成は良好で暗赤褐色を呈する。一部煤が付着する。口径15cm，底径6.2cm，器高18.6cmを測り，3/5が遺存する。4は，甕の底部である。底径8.7cmを測る。5は，高坏である。坏は口縁との境に稜をなし胴と脚部にナデを施す。口縁部は刷目状の擦痕を残す横ナデを施す。内面は黒色処理を施す。坏部と脚部の接合痕が脚部より観察できる。坏の底部を凸状にして接合し周囲をヘラで押圧する。胎土は細砂粒を多く含むやや密な胎土である。焼成は良好で赤褐色を呈する。口径15.2cm，底径11.4cm，器高13.5cmを測る完形品である。6～13は土師器の坏である。6は，丸底の坏で胴は球形を呈し稜をもって，口縁は緩く外反する。口唇は尖り気味となる。内外にヘラ磨きを施す。胎土は細砂粒を含み密である，焼成は良好で暗赤褐色を呈する。口径14.8cm，器高5.5cmを測る完形品である。7は，丸底の坏で，体部は緩い丸味を呈するが，口縁部で強く立上がる。体部をヘラ削り後，口縁部を横ナデする。胎土は細砂粒を多く含み，焼成は普通で暗赤褐色を呈する。口径14cm，器高4.5cmを測り1/2が遺存する。8は，丸底の坏である。体部は緩い丸味で立上がり，口縁が直立する。口唇部は尖り気味とな

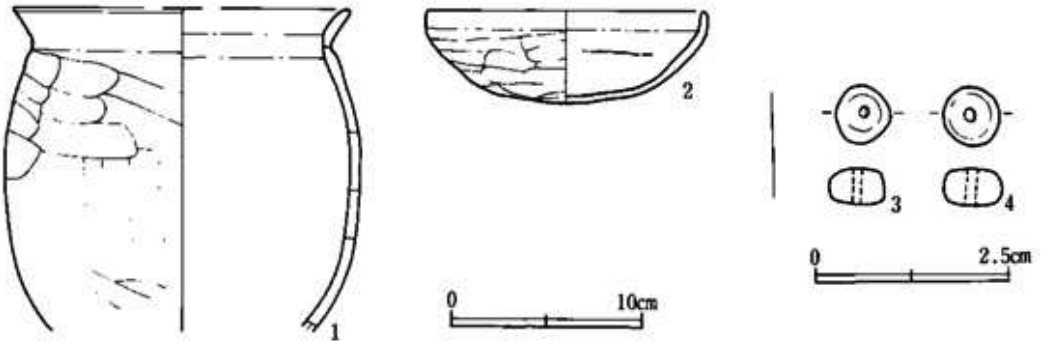


第114図　031号住居跡出土遺物実測図(1/4・1/2)

る。体部はヘラ削り後ヘラ状の工具で磨く，口縁部は横ナデを施す。胎土は細砂粒を含み焼成はやや不良で淡褐色を呈する。口径15.3cm，器高4.7cmを測り2/3が遺存する。9は，丸底の坏である。体部は緩い丸味で立上がり，受部状の稜をなし内傾する。口唇は尖り気味となる。体部をヘラ削りし口縁にナデを施す。胎土は密で砂を含む。焼成は良好で黒色を呈する。口径14.2cm，器高4.8cmを測る完形品である。10は，丸底の浅い坏である。体部は緩い丸味を呈し，稜をもって口縁部が立上がる。口唇は尖り気味となる。体部はヘラ削り，口縁は横ナデ，内面はヘラ磨きを施す。胎土は細砂粒を含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。口径14.5cm，器高4.8cmを測る完形品である。11は，丸底の坏である。体部は緩い丸味で稜をもち口縁部は外反するように立上がる。全面にナデを施す。胎土は砂を含み，焼成は普通で淡赤褐色を呈する。口径15cm，器高4cmを測る完形品である。12・13は，丸底の坏で，体部は丸味をもち受部状の稜から内傾する口縁部が立上がる。12は，細砂粒を多く含み，焼成は良好で褐色を呈する。口径13.3cm，器高4.5cmを測る完形品である。13は，細砂粒を含む密な胎土である。焼成は良好で黒色処理を施す。口径14cm，器高4.8cmを推定する。1/4が遺存する。14は，土師器の高台を再利用したものである。高台の一部が磨耗し砥石状に再利用されている。全体的に煤が付着する。15は，回転糸切り痕を有する坏底部である。14・15は本跡に伴う土器ではない。16は，土製の勾玉で床面より出土する。17は，凝灰質砂岩製の砥石で6mmの穿孔をもつ，全面が使用されるし棒状の研ぎ跡もみられる。

032号住居跡（第115図，図版69）

1は，土師器の甕である。胴部は緩い球形を呈し口縁でくびれて外反する。胴中央を上から下へ，胴上・下部を右から左へヘラ削りする。口縁部はヘラ削り後ナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み粗い。焼成は良好で赤褐色を呈する。口径17.5cmで1/3が遺存する。2は，土師器の丸底坏である。体部が球形を呈し口縁部が直立する。口唇は尖り気味である。体部をヘラ削り後口縁部を横ナデする。胎土は細砂粒を若干含み，焼成は普通で暗赤褐色を呈する。口径14.7cm，器高4.7cmを測り2/3が遺存する。3・4は，滑石製の小玉である7mmの径を測る。



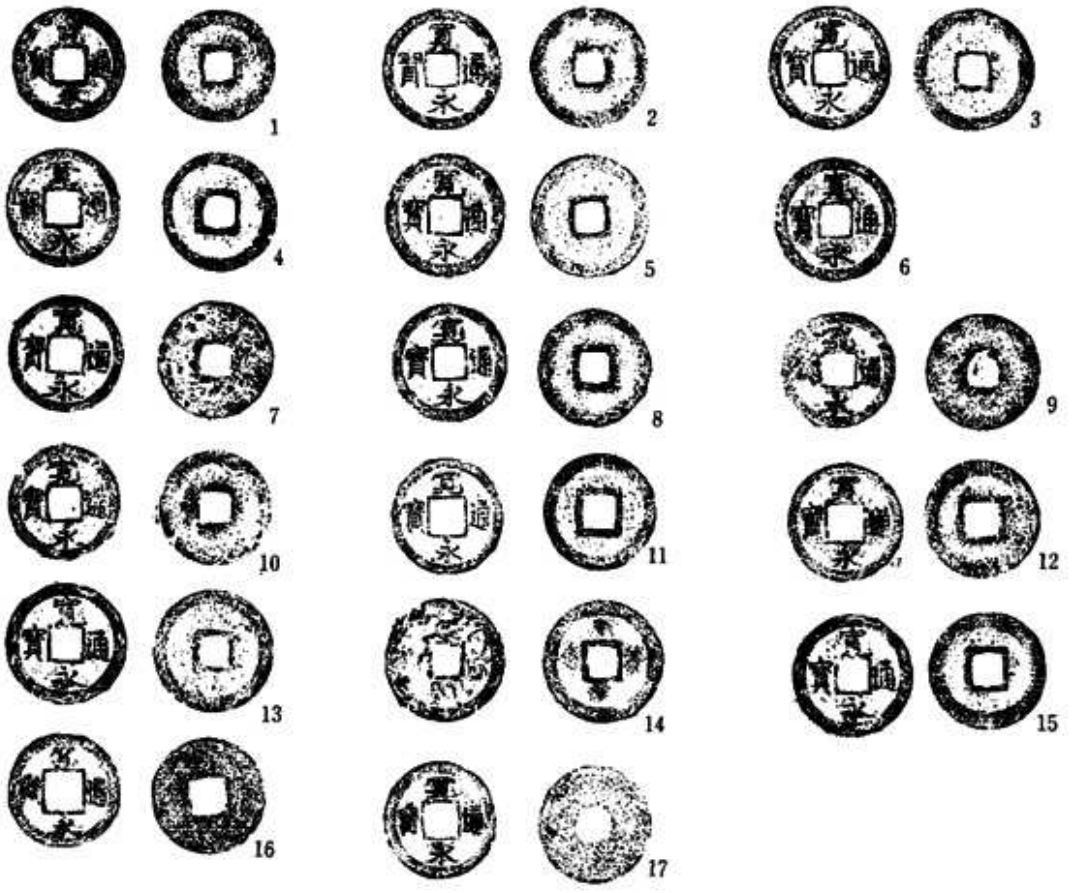
第115図　032号住居跡出土遺物実測図(1/4・1/1)

土壙出土遺物（第116・117・118図，図版69・70・71）

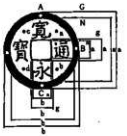
第117図1・2は，貝殻条痕文の尖底深鉢土器で010号土壙より出土する。底部を欠損する。胎土に繊維と砂を多く含み内外に貝殻条痕文を施す。口縁は緩い波状を呈し口唇に刻みをもつ。茅山上層式に比定できる。

第118図は，007，013号土壙より出土する粗製深鉢土器である。何れも砂を多く含み器表に貝殻条痕を施す点で共通する。器形は胴部が若干張み口縁がやや外反するものと思われる。口縁は平縁と突起状の小波状口縁を呈するものがある。何れも同時期でグリッド出土遺物第121図51・52と同様荒海式に平行する時期と思われる。15は，精製土器の底部で小形のものである。同時期と考えられる。

第116図1～17は，018号土壙墓より出土する寛永通宝である。鋳造は1638年から1748年の間であるが，元文藤澤銭・元文平野新田銭があることから1740年以降の遺構である。なお大半が元文期の鋳造であることから1740年以降の近時期の遺構と考えられる。



第116図　土壙出土遺物(2/3)



第16表　銭貨計測表（単位mm）

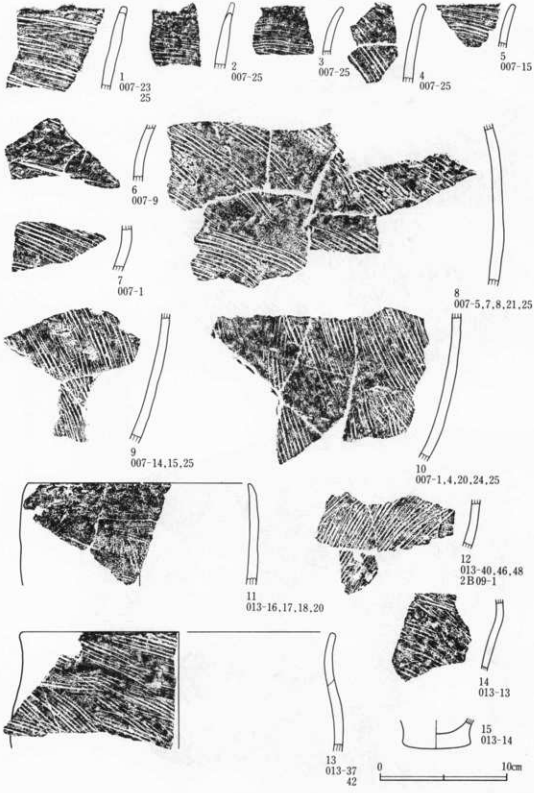
神図No		A	B	C	D	A−D/4	a	b	c	d	a−d/4	Ga	Gb	GaGb	Na	Nb	NaNb/2	ga	gb	gagb/2	na	nb	nanb/2
1	高田銭	1.40	1.43	1.38	1.31	1.38	1.01	1.02	0.92	0.76	0.93	22.65	22.72	22.69	17.66	17.52	17.59	8.27	8.03	8.15	6.19	6.11	6.15
2	延寶亀戸銭大字	1.55	1.61	1.57	1.44	1.54	1.04	0.95	0.91	0.88	0.95	24.05	25.07	24.56	19.15	19.10	19.13	7.49	7.30	7.40	6.13	5.74	5.94
3	延寶亀戸銭除雲	1.26	1.22	1.25	1.22	1.24	0.56	0.58	0.59	0.60	0.58	24.18	24.27	24.23	20.70	19.50	20.10	7.15	5.72	6.44	7.46	6.35	6.91
4	元禄丁字歪銭勢永	1.05	1.02	0.98	1.04	1.02	0.50	0.51	0.51	0.54	0.52	23.07	23.00	23.04	19.44	18.83	19.14	8.02	6.18	7.10	7.95	6.12	7.04
5	享保七篠銭遠永	1.25	1.23	1.23	1.24	1.24	0.5	0.51	0.49	0.52	0.51	24.07	24.15	24.11	18.50	18.17	18.34	7.87	6.00	6.94	7.05	5.60	6.33
6	享保七篠銭遠永	1.56	1.51	1.55	1.51	1.53	0.82	0.69	0.6	0.58	0.67	24.23	24.32	24.33	19.42	19.20	19.31	6.89	5.95	6.42	7.29	5.57	6.43
7	元文深川銭	1.45	1.39	1.44	1.39	1.42	0.75	0.72	0.78	0.67	0.73	23.16	23.10	23.13	18.94	18.65	18.80	7.50	5.60	6.55	8.35	6.30	7.33
8	元文隠深川北の尾	1.13	1.06	1.05	1.11	1.09	0.55	0.47	0.54	0.5	0.52	23.20	23.22	23.21	18.86	18.58	18.72	7.65	6.45	7.05	7.75	6.38	7.07
9	元文隠深川北尾銭	1.17	1.04	1.00	1.15	1.09	0.74	0.55	0.72	0.51	0.63	22.83	22.84	22.84	17.75	18.08	17.91	8.37	6.05	7.21	7.86	6.32	7.09
10	元文十真寸八分銭金二水本小屋	1.00	1.04	0.93	1.01	1.00	0.40	0.30	0.35	0.35	0.35	22.40	22.30	22.35	17.90	17.50	17.70	7.77	6.34	7.06	8.37	6.84	7.61
11	元分十真呼銭無印	1.28	1.20	1.13	1.20	1.20	0.49	0.52	0.42	0.42	0.46	22.75	22.66	22.71	18.40	18.85	18.63	8.39	6.60	7.50	7.60	6.64	7.12
12	元文小梅銭無背	1.25	1.23	1.29	1.22	1.25	0.75	0.79	0.69	0.66	0.72	23.19	23.14	23.17	20.00	19.77	19.89	8.04	6.56	7.30	8.00	6.60	7.30
13	元文横大路銭横神	1.25	1.30	1.24	1.22	1.25	0.35	0.40	0.38	0.37	0.38	24.18	24.08	24.13	18.67	18.66	18.67	7.78	6.45	7.12	7.23	5.64	6.44
14	元文横大路銭横神	0.96	0.97	0.97	0.94	0.97	0.51	0.7	0.51	0.66	0.60	24.38	24.25	24.32	18.75	18.73	18.74	7.52	5.76	6.64	7.48	5.75	6.62
15	元文加島銭	0.93	0.97	1.00	0.95	0.96	0.53	0.52	0.52	0.51	0.52	23.40	23.33	23.37	18.47	18.25	18.36	7.25	5.48	6.37	7.64	6.21	6.93
16	元文東海銭	0.96	0.95	0.90	1.04	0.96	0.47	0.30	0.38	0.38	0.38	22.43	22.52	22.48	17.77	17.68	17.73	8.88	6.95	7.92	8.36	7.40	7.88
17	元文平野新田銭虚無	0.83	0.93	0.90	0.89	0.89	0.44	0.45	0.43	0.44	0.44	22.88	22.89	22.89	18.37	18.30	18.34	7.42	6.76	7.09	8.09	6.80	7.45

参考文献

『古寛永泉志』　増尾富房編　昭51

『昭和泉譜』　平尾照泉編　昭49

第117図　010号土壙出土土器 (1/3)



第118図　007・013号土壙出土土器（1/3）

2．グリッド出土の遺物

（1）縄文式土器

本遺跡出土の縄文式土器は，12・13グリッドから出土する早期・前期の土器と南の土壙から出土する晩期の土器である。以下従来の編年に基づいて分類し説明を加える。

第1群土器　早期の土器を一括した。

第Ⅰ類　撚糸文土器（第119図1～13，図版72）

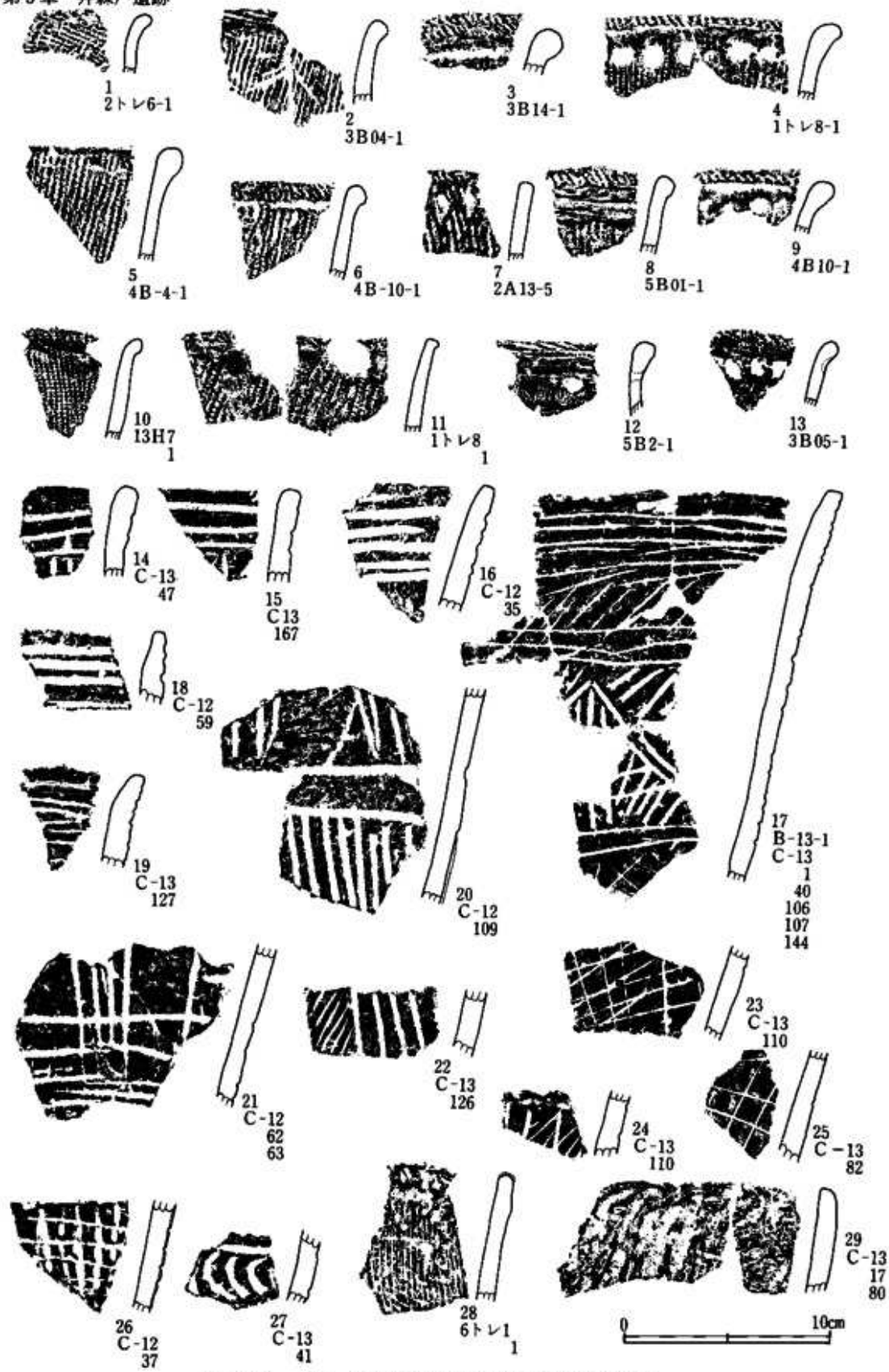
何れも井草期の土器で胎土に砂を多く混入し，器表がざらざらしている。

1は，口唇，胴部にＲＬの縄文を回転する。井草Ⅰ式に比定できる。2は，口唇と胴部にＲの撚糸文を施す。3は，肥厚する口唇に2列のＲＬの縄文を施し，口唇下に指頭による圧痕を施す。胴部の施文は不明である。4は口縁が肥厚し外反する，口唇，胴部にＲＬの縄文を施す。指頭による圧痕を明瞭に残す。5は，口唇が肥厚するが上面に施文はない。ＲＬの縄文を回転する。6は，口唇が肥厚し直線的に立上がる。Ｒの縄文を施文する。7は，口唇，胴部にＲの縄文を回転する。口唇は肥厚しない。指頭の圧痕を残す。8は，口唇，胴部にＲＬの縄文を施文する。口唇下を幅の広い工具で撫でる。9は，口唇が肥厚し外反する口縁で，口唇，胴部にＲの縄文を回転する。指頭の圧痕を施す。10は，口縁が薄く外反する。口唇，胴部にＲＬの縄文を施す。口唇下を指頭で圧痕する。11は，口縁で薄くなる小形の土器である。口唇，胴部にＲＬの縄文を回転し，口唇下を指頭で圧痕する。12は，口唇にＲの撚糸文を施文する。補修孔をもつ。13は，薄手の口縁部で外反する。口唇，胴部にＲの縄文を施文し，口唇下に指頭圧痕を明瞭に残す。以上1～13は，井草式に比定する土器である。

第Ⅱ類　沈線文系土器（第119図14～28，図版72）

胎土に石英，長石の小石と砂を混入し，器表がざらざらしている。焼成は良好で赤褐色を呈する土器である。

14～16は，口縁に竹管の太い沈線を施す口縁部である。器厚は14・15の口縁部が肥厚し16は狭まる。17は，緩く外反する口縁から胴部片である。口縁は斜位の沈線を挟み横位の沈線を施す。沈線は細く深い施文具を使用する。胴部の沈線は太い竹管を施す。18は，口縁部で竹管の太い沈線を施す，口唇は薄くなる。内面は磨かれる。19は，竹管の細い平行沈線を施す。口唇は尖り気味となり外反する。20～22は，太い竹管文を縦横に施す胴部破片である。22は，縦の太い沈線と斜位のヘラ状の沈線で構成する。23～25は，ヘラ状工具による格子目の浅い沈線を施文する。26は，縦に竹管文を施した後，横位に深く細い沈線を施す。27は，竹管による連続文である。28は，刻目を有する口縁部で，胴部に条痕を施す。以上14～28の土器片は，田戸下層式に比定する土器である。



第119図　グリッド出土縄文式土器拓影図(1)（1/3）

第Ⅲ類　無文土器（第119図29，図版72）

29は，器表に凹凸があり，縦方向の指の撫で跡が明瞭に残る。内面は横位の粗いナデを施す。胎土は細砂粒を多く含み，焼成は良好で赤褐色を呈する。推定口径は20cmである。時期的には，沈線文系土器と考えられる。

第Ⅳ類　条痕文系土器（第120図30～32，第116図1・2，図版72・69）

第Ⅳ類－A　鵜ガ島台式土器である。

30は，胴が張る屈曲部の破片である。稜線より上は細隆起線によって区画し，縄文を磨消す，細隆起線に連続した円形の刺突文を施す，稜線下は貝殻条痕文のみ施される。裏面は粗い貝殻条痕文を施す。胎土は繊維と細砂粒・雲母を含み，器表がざらざらする。焼成は不良で黒褐色を呈する。31は，口唇に竹管の刻目を有する波状の口縁部である。器形は直線的に開く。細隆起線に竹管の刺突を配し文様を構成する。裏面は貝殻条痕文を施す。32は，口唇に竹管の刻目をもつ口縁部である。沈線によって無文と竹管の押し引き文を区画する。内外に貝殻条痕文を施す。胎土は繊維を多く含む。

第Ⅳ類－B　茅山上層式土器である。

第117図1・2は，010号土壙より出土する。内外に貝殻条痕を施す大形の土器である。

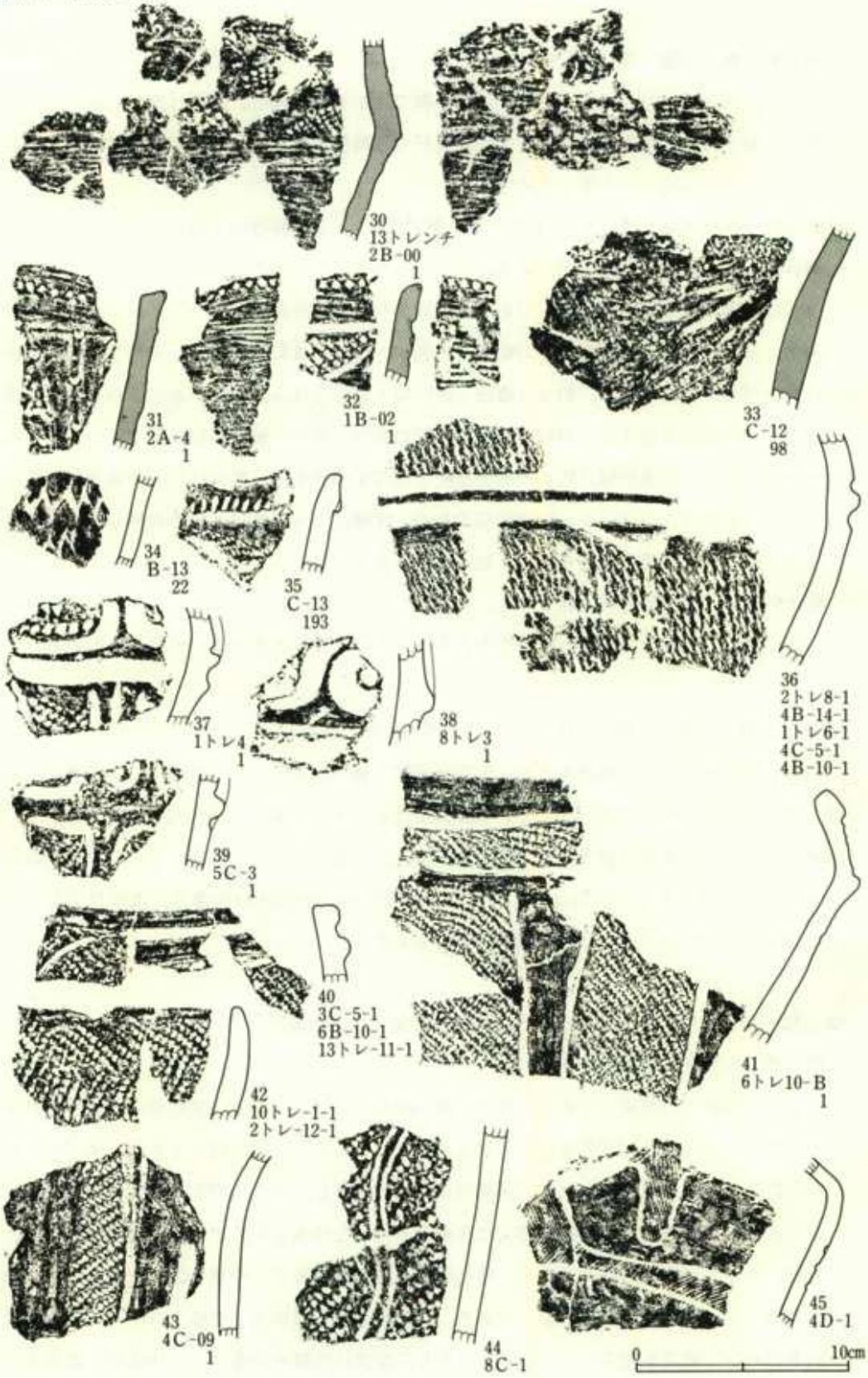
第Ⅱ群土器　前期の土器を一括した（第120図33～35，図版73）

33は，胴部片で胎土に繊維を含む。附加条縄文1種の回転に，ヘラ状工具による擦痕が観察できる。内面は滑沢で凹凸がある。黒浜式に比定できる。34は，連続波状貝殻文を施す胴部破片である。砂を多く混入し焼きしまる。35は，口縁を折返し，竹管による連続した刻目を施す波状口縁である。胴部はＲＬの縄文を回転する。胎土は砂を含み，焼成は良好である。前期末と思われるが，中期初頭の可能性もある。

第Ⅲ群土器　中期の土器を一括した。（第120図36～45，図版73）

第Ⅰ類　加曽利Ｅ式土器である。

36は，深鉢の胴部破片である。地文に粗い撚糸文を施し，横位の隆起帯に沈線を沿わせる。胎土・焼成は良好で赤褐色を呈する。37は，キャリパー部の破片である。楕円形の窓枠状隆起帯によって区画される。区画内は沈線が内周し，中に角押文を施す。胴部との境には太い沈線を廻らし，ＬＲの地文に3条の平行した沈線を下垂する。沈線間は磨消す。38は，キャリパー部の破片である。隆起帯よる渦巻文を施す。胴部との境は隆起帯と沈線が廻る。39は，深鉢胴上部の破片である。隆起帯による渦巻文と窓枠文を貼り，内側に沈線を沿わせて縄文を施文する。胴部は，ＲＬの地文に沈線を下垂する。沈線間は磨消す。40は，口縁が内傾する深鉢口縁である。ＲＬの縄文を地文に，隆起帯を楕円の窓枠に貼付



第120図　グリッド出土縄文式土器拓影図(2)（1/3）

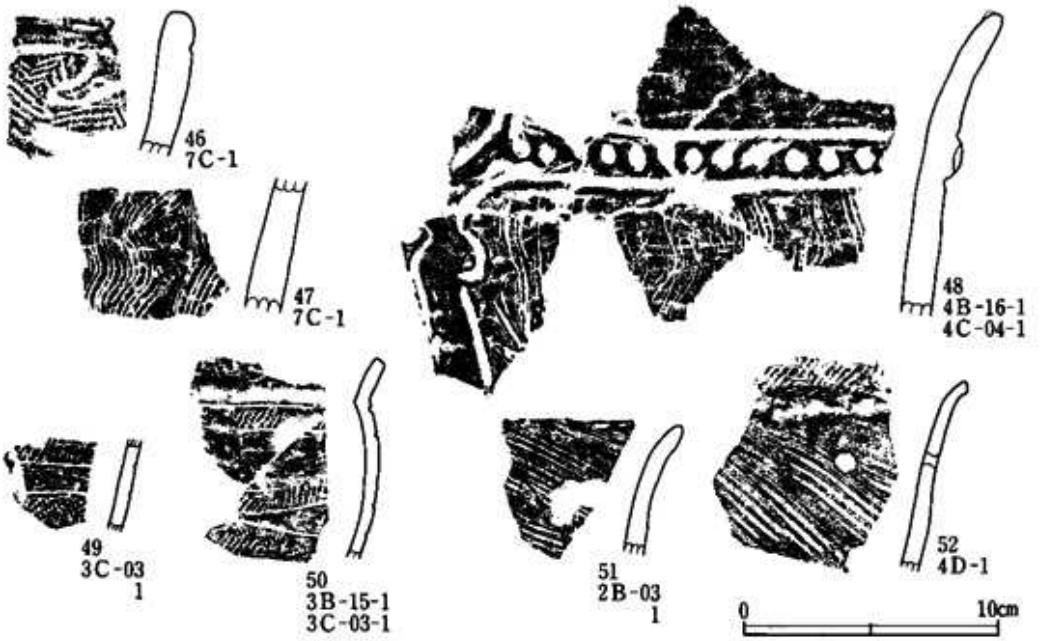
ける。拓影図左側に隆起帯が剝れ地文の縄文が露出する。41は，胴部が直線的に外反し，口縁部で内傾する深鉢である。口唇部は粘土紐を貼り付け肥厚して磨きを施す。口縁部は，口唇と張出し部の内側に沈線を施しＲＬの縄文を施文する。胴部との境は隆起帯を貼り，湾曲を誇張する。胴部はＬＲの地文に沈線と磨消し帯が下垂する。42は，やや内傾する口縁部である。上帯ＲＬ，下帯ＬＲの羽状縄文を施文し，口唇部を撫でる。胎土は細砂粒を多く混入し，焼成は不良である。43は，深鉢胴部破片である。地文にＲＬの単節縄文を回転し，沈線で区切り磨消す。拓影図右の磨消に蕨状の沈線がみられる。44は，深鉢胴部破片である。地文は粗いＲＬの縄文を回転し，２本の沈線が蛇行して下垂する。胎土は砂を多く混入し器表がざらざらしている。以上ＥＩＩが主体である。

第II類　その他

45は，深鉢の胴上部と思われる。灰色を呈し大きく湾曲する。細いＲＬの地文を沈線が区画する。胎土は少し小石を含む粗い胎土であるがよく焼きしまる。器表はナデを施しよく調整するが，裏面は石が露出する程である。中期末か後期初頭の土器と思われるが，大木式土器の搬入とも考えられる。

第IV群土器　後・晩期の土器を一括した（第121図46～52，118図１～15，図反74・70）

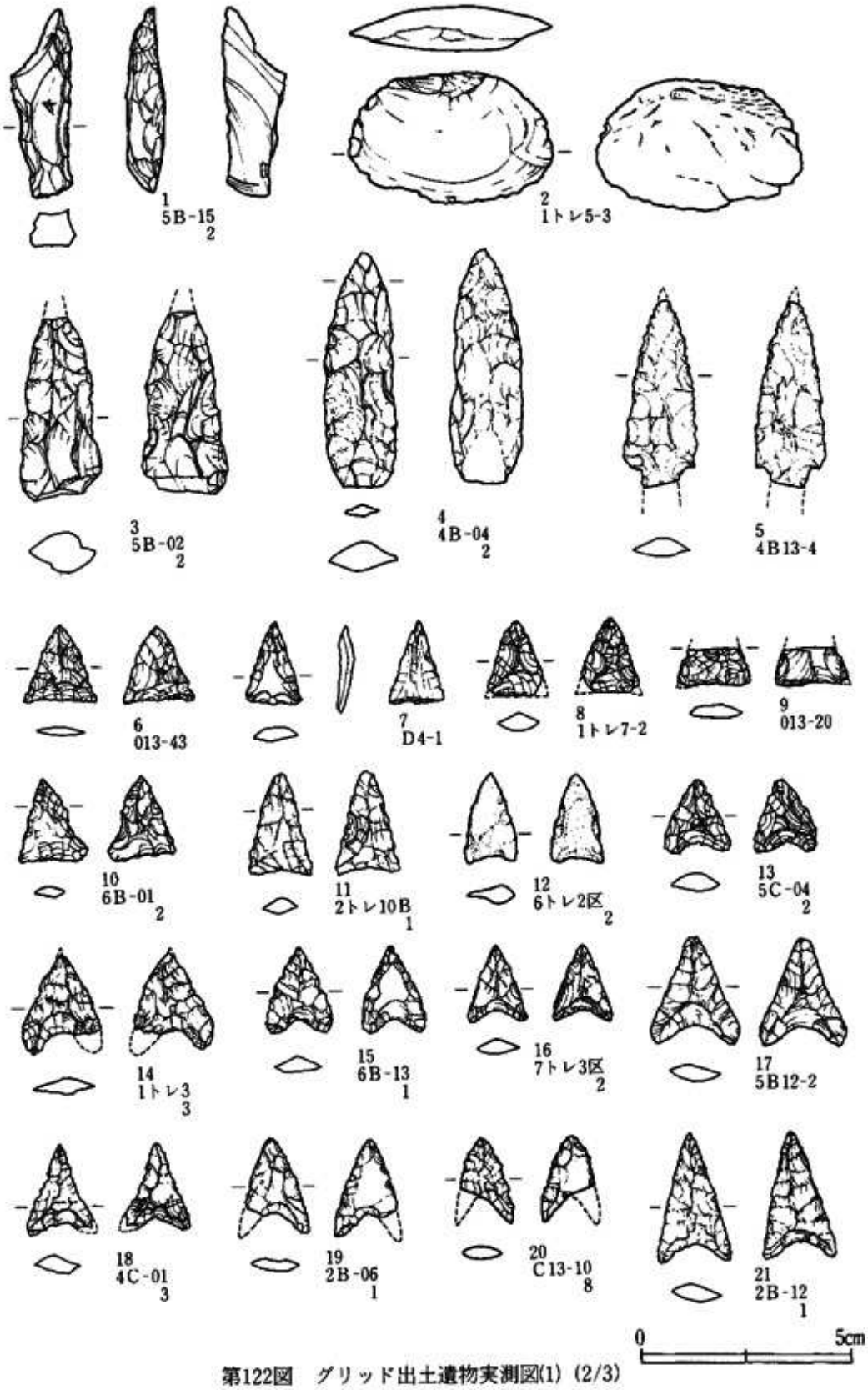
46は，深鉢の口縁部である。口縁にＪ字状の沈線を施す。地文はＬＲの縄文で縦横から回転して施文する。胎土は砂を多く混入しざらざらしている。裏面は丁寧なナデを施す。称名寺式の特色を示す。47は，深鉢胴部破片である。砂を多く含み厚い破片である。櫛歯状工具による連続した孤状の浅い条線が下垂する。48は，深鉢の口縁から胴部の厚い破片である。口縁に渦巻状の隆起帯と円形の刺突帯が廻る。胴部は櫛歯状工具による蛇行した条線が下垂する。渦巻文下には，沈線で区画された磨消し帯が下垂する。胎土は砂を多く含みざらざらしている。47・48は掘之内式土器である。49は，薄手の胴部破片である。地文にＬＲの縄文を回転し沈線内を磨消す。50は，胴部が緩く弧を描き，口縁が強く外反する薄手の鉢である。口縁は無文で波状口縁と思われる。胴部は，縄文と磨消しが入り組む。内外とも丁寧に器面調整がなされる。49・50は後期後半から晩期の土器である。51・52は，粗製土器の口縁部である。器表には貝殻腹縁による条痕を施す。胎土は砂を多く含み，焼成は不良で黒褐色を呈する。51は，補修孔を両面より穿孔する。口唇部は山形で稜をもち内外にＬの縄文を回転する。51・52は晩期末の土器片である。007，013号土壙から同様の土器が出土する。



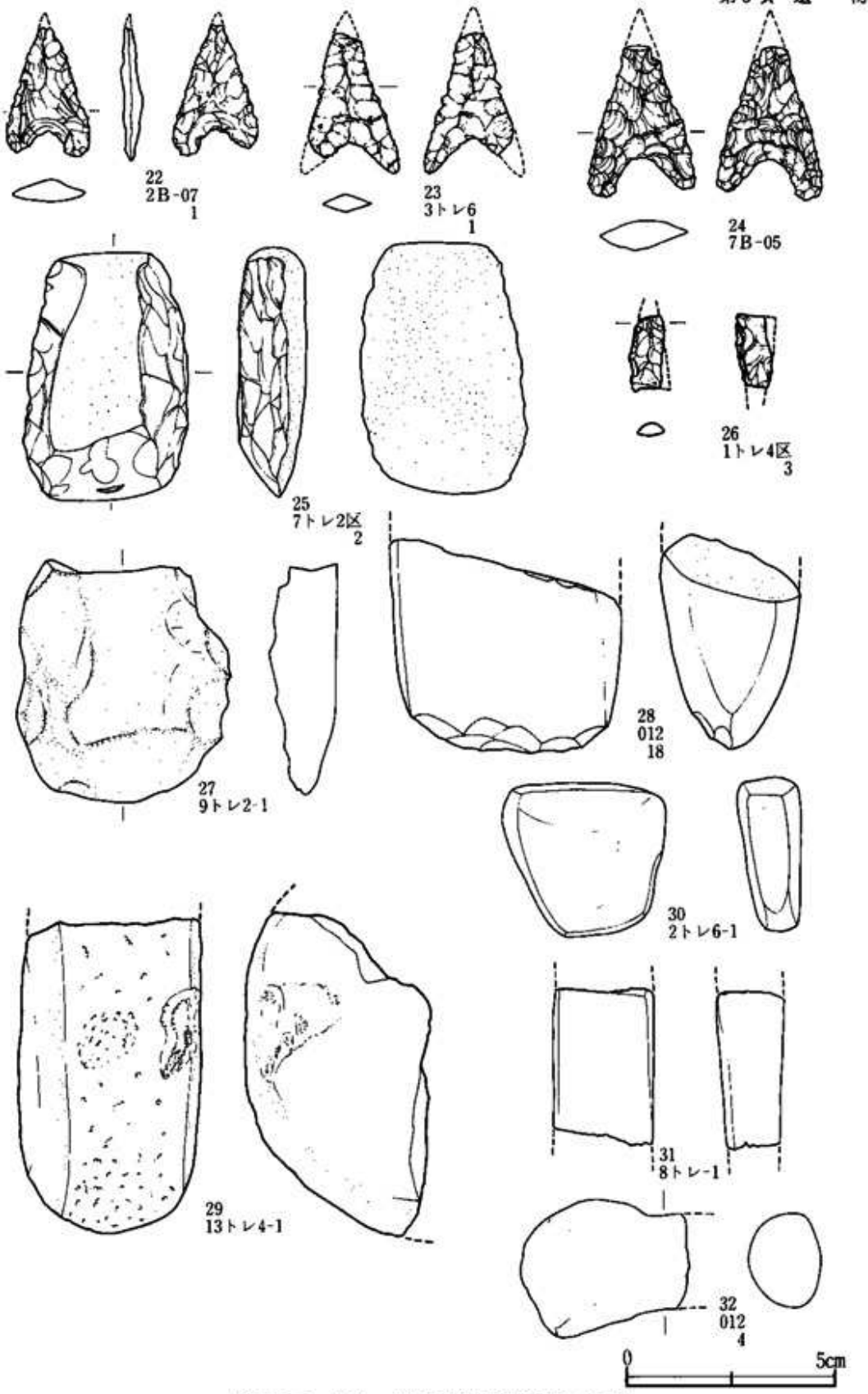
第121図　グリッド出土縄文式土器拓影図(3)（1/3）

（2）石器類（第122・123図，図版75・76）

1は，珪質頁岩のナイフ形石器である。横長剝片を素材とし，側縁を鋸歯状に剝離調整する。刃部は左上の湾曲部分である。断面は，肉厚の台形を呈する。5B－15グリッド表土層より出土する。2は，チャートの横長剝片である。細部を加工した様子は窺えない。5グリッドの表土層より出土する。3は，流紋岩の尖頭器である。先端部と下半部が欠損する。両面とも右側縁への粗い調整後，先端部に微細な調整を施す。5B－02グリッドの表土層により出土する。4は，頁岩の尖頭器である。両面とも平坦な加工が施され，断面は二等辺三角形を呈する。基部は欠損している。4B－04グリッドのソフトローム上面より出土する。3・4は南大溜袋の段階と思われる。5は，砂岩の有舌尖頭器である。両面とも平坦な加工が施され，縁辺部は鋸歯状を呈する。舌部は欠損する。隆起線文土器は伴わなかった。4B－13グリッドの表土層より出土する。6～24は石鏃である。形態的には，6～10が平基無茎鏃，11～24が凹基無茎鏃である。6は，薄手の黒曜石で，裏面の粗い調整後表面から微細な調整を施す。7は頁岩で，表面に自然面を残す。表面のみから調整を施す。8は，チャートで二等辺三角形を呈する厚手の石鏃，表裏とも右側から微細な調整を施す。9は，上半が欠損する。良質な黒曜石で透明。10は，形の歪んだチャート質の石鏃である。左側面が大きく剝離する。11は，チャート質で厚手の石鏃である。裏面に瘤状の凸面を有する。12は，砂岩である。器厚が一定でなく，剝離も明瞭でない。13は，黒曜石である。表面は山形を呈し丁寧な調整が施される。14は，黒曜石である。表裏共に細かな調整を行なう。15は，チャート質で裏面に素材を剝離した面を残す。表面を調整した後裏面を調整する。16は，珪質頁岩で小型の石鏃である。表裏に微細で丁寧な調整を施す。17は，頁岩で平坦な調整を施す。18は，チャート質で側縁部がくびれる。調整は粗い。19は，流紋岩で表面を調整後裏面を調整する。基部の抉入が深くなる。20は，チャートで脚部が長くなる。脚の先端は鋭い。調整は表面が微細で丁寧である。21は，縦長の石鏃できれいな二等辺三角形を呈する。石質はチャートである。裏面は粗く表面は微細な調整を行なう。22は，チャートで先端を欠損する。裏面は粗く，表面は細かく調整する。縦断面は表側に弓状となる。23は，大型で安山岩の石鏃である。側縁部が若干くびれ，脚が長い特色をもつ。平坦な剝離を施す。24は，大型で黒曜石の石鏃である。肉厚の二等辺三角形を呈する。微調整は，表が右から，裏が左から行なう。断面は肉厚で丸味を呈する。25は，砂岩の自然石を利用した，局部磨製石斧である。側縁を表裏から剝離し，刃部を磨く，鎬・刃縁は右上がりとなる。刃部に使用による剝離がみられる。2グリッドの表土層より出土する。26は，珪質頁岩の石錐である。先端と側部が欠損する。27は，安山岩の打製石斧である。基部・裏面は欠損し調整不明である。表面に平坦な磨製を思わせる面をもつ。28



第122図　グリッド出土遺物実測図(1)（2/3）



第123図　グリッド出土遺物実測図(2) (2/3)

は，定角式磨製石斧の刃部である。直刃で片面に使用痕をもつ，石質は砂岩である。断面は隅丸方形を呈する。29は，輝石安山岩の磨石である。風化のため使用痕が詳細に観察できないが，敲石の可能性もある。30，32は，砂岩の砥石である。30は全面を使用する。側面は凸状に磨耗するので曲面を研磨したものと思われる。31は，表裏の二面を使用する。32は，棒状の砥石で全体が磨耗する。

第17表　石器計測表

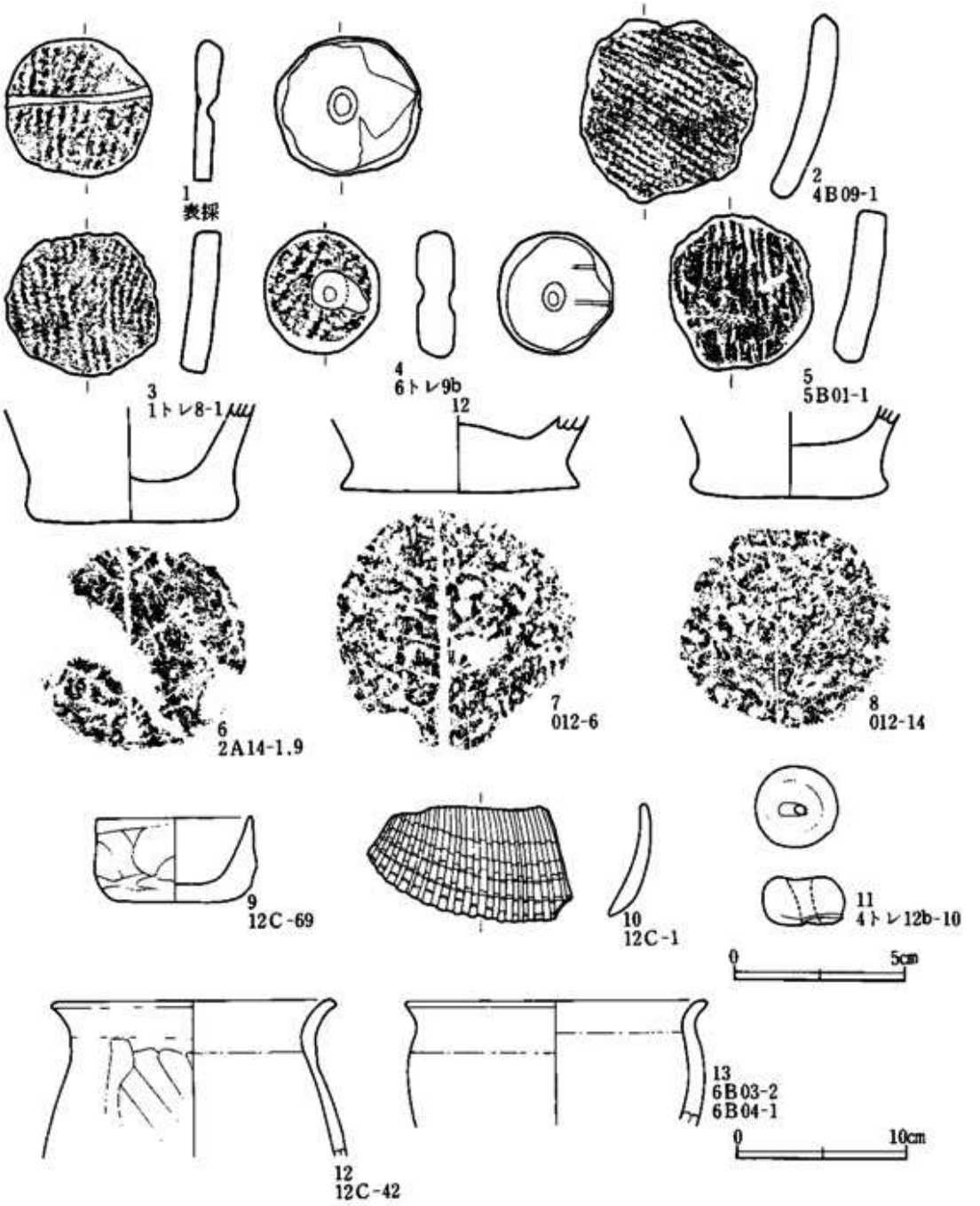
番号	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)
1	4.5	1.5	0.9	6.0
2	3.1	4.9	1.1	15.8
3	(4.3)	2.0	0.9	8.5
4	5.4	1.7	0.7	7.3
5	(4.3)	1.7	0.4	4.3
6	1.8	1.7	0.2	0.5
7	1.9	1.3	0.3	0.6
8	1.8	(1.3)	0.4	0.9
9	(0.7)	1.7	0.3	0.5
10	2.0	1.6	0.2	0.7
11	2.4	1.5	0.5	1.5
12	2.1	1.2	0.4	0.8
13	1.6	1.5	0.4	0.7
14	2.4	1.9	0.4	1.0
15	2.0	1.5	0.3	0.9
16	1.8	1.4	0.3	0.5

番号	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)
17	2.5	2.0	0.4	1.6
18	2.1	(1.5)	0.3	0.6
19	2.2	(1.5)	0.3	0.8
20	(2.0)	(1.3)	0.3	0.6
21	3.0	1.7	0.4	1.3
22	3.1	2.0	0.4	2.0
23	(3.3)	(2.0)	0.5	2.2
24	(3.5)	2.5)	0.7	4.1
25	5.8	4.0	1.6	84.2
26	1.7	(0.7)	0.3	0.6
27	(5.7)	5.1	1.5	57.8
28	(4.8)	(5.6)	(0.3)	101.3
29	(7.4)	(4.4)	(3.1)	52.5
30	3.6	3.9	1.5	30.1
31	3.7	2.4	1.6	24.5
32	3.2	(4.0)	(1.8)	34

（3）その他の遺物（第124図，図版71）

1～5は土製円板である。1・4は周囲が滑らかに調整される。1は裏面に，4は両面に円形の凹みをもつ。1の表面に横断する沈線は土器焼成以前のものである。6～8は，木葉痕を有する土器底部である。10は，貝殻片である。使用のため，腹縁が磨耗し脈先端が欠損し平縁となる。9は，手捏のミニチュア土器である。器表に粗いヘラ削り痕を残す。内面は丁寧なナデを施す。胎土は細砂粒を含みやや粗い。焼成は良好で内外とも赤褐色を呈する。法量は口径4.6cm，底径3.8cm，器高2.4cm，器厚0.3～0.9cmを測る。11は，土玉である。長径2.4cm，短径2.3cm，厚さ1.3cm，重量7.5gを計る。中央に3mmの穿孔を施す。12は，土師器の甕である。口縁の1/2が遺存する。口縁が肥厚し強く外反する，口縁部を横ナデ後，胴上部を上から下へヘラ削りする。内面はナデを施す。胎土は細砂粒を含みやや密で，焼成は良好である。推定口径17cmを測る。鬼高期の土器である。13は，土師器の鉢形土器である。頸部

が少し括れて口縁が外反する。胴部はヘラ削り。口縁は刷目痕の残るナデを施す。胎土は砂を多く含みやや粗い。焼成は良好で赤褐色を呈する。推定口径18cmを測る。鬼高期の土器である。



第124図　グリッド出土遺物実測図(3)（1/2・1/4）

第4項　小　結

先土器時代

調査区全域に2×2mの確認グリッドを4％行ったが，遺物の検出はなかった。5B－15グリッド表土層よりナイフ形石器が1点のみ出土した。

縄文時代

早期の撚糸文土器から晩期終末まで各期の土器が検出された。台地南端部に集中する土壙群のうち，何基かが縄文時代に伴う遺構と思われるが，他に遺構は検出できなかった。11C，12B・Cグリッドに土器片と礫群が検出された。多くは田戸下層式とそれに伴う礫群であることから，遺構は伴わないが，住居跡かキャンプサイト的性格のものと考えてもよいと思われる。

台地南端部2B，3Bグリッドに010号土壙を中心として茅山式の土器を多く出土する。この周辺に20余基の時期，性格不明の土壙が集中するが，このうち，茅山期に関する遺構が伴う可能性も高い。土器は数個体と思われるので一時的に営んだ生活の跡と思われる。

台地南端部に集中する土壙群の007，013号土壙は晩期末，荒海式土器を伴出する。住居跡もなく，土器個体数も少ないことから，中心が台地中央にあるか，一時的な生活の場と思われる。周辺に弥生時代の遺跡が確認されている例が少ないので，縄文時代末から弥生時代にかけての考察資料として興味深いものがある。

台地の南東端のみの調査で，中央部の調査を待たなければ性格を述べることはできないが，早期の2時期と晩期に営まれた遺跡である。規模・期間とも小規模で短期間の一時的生活の場と考えられる。前・中・後期の土器片は数量も少なく，集落を営んだ程の土器量ではない。

古墳時代

竪穴住居5軒が検出された。何れも6世紀の土器を伴出するもので，近時期の遺構と考える。

住居の形態は同様で，正方形に近い平面に主柱穴が4本と出入口の施設に伴うと思われるピットがカマドの反対側につく。貯蔵穴は003号跡を除くと大型の住居には242ℓ，小型の住居には106ℓ，146ℓの貯蔵穴がカマドの右側につく。壁溝は032号跡を除くと全周する。

台地の縁辺部を横切るように調査したのみで全体は把握できないが，調査した範囲では大型の住居跡と小型の住居跡の主軸方向が異なる。大型の住居は西へ45°傾き，小型の住居は032号を除くと20°西へ傾く。出土遺物からも時期的差が窺え大型の住居が古く，小型の住居が新しい。鬼高期の土器で一形式くらいの差があると思われる。

近　世

018号土壙が江戸時代のものである。出土した寛永通宝の鋳造期等から1740年以降の近時期の土壙墓と思われる。台地の肩部まで拡張したが同種の遺構は検出されず単独のものであった。他に当該期の遺構は検出されなかった。

参考文献

『房総考古学ライブラリー1』 先土器時代 (財)千葉県文化財センター 昭59
西村正衛『利根川下流域の研究』 －貝塚を中心として－ 昭59
『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』 (財)千葉県文化財センター 昭58
『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書』 (財)千葉県文化財センター 昭59
『木の根』 (財)千葉県文化財センター 昭57
鈴木道之助『図録石器の基礎知識Ⅲ』昭57
鬼高研究グループ「房総における鬼高期の研究」『日本考古学研究所集報Ⅳ』昭57
『船橋市八木ヶ谷遺跡』 (財)千葉県文化財センター 昭59
『主要地方道成田松尾線Ⅰ』 (財)千葉県文化財センター 昭58
『主要地方道成田松尾線Ⅱ』 (財)千葉県文化財センター 昭60

第6章　ま　と　め

本書に所収した遺跡は，小池元高田遺跡，柳谷遺跡，上宿遺跡，井森戸遺跡の4遺跡である。

小池元高田遺跡は，古墳時代後期から奈良・平安時代にわたる集落跡として特徴づけられる遺跡で総数11軒の住居跡が検出された。限られた範囲の調査で，資料的にも限定されたものであったが，奈良・平安時代では10軒の住居跡から出土した土師器，須恵器をもとにおおよその年代を提示できた。地域的には旧上総国武射郡にあたる地域ではあるが，旧下総国東部地域と共通する遺物も認められることから，既に報告している小池地蔵遺跡，小池麻生遺跡，小池向台遺跡，小池新林遺跡等木戸川中流域の諸遺跡との関連においても新資料を呈示できたものと思われる。

柳谷遺跡は，成田松尾線関連遺跡の中で最も北に位置する遺跡であるが縄文時代と思われる陥し穴状土壙，近世の馬土手，近代の炭焼窯を検出した。馬上手は佐倉七牧のひとつ取香牧の南端にあたる部分である。牧全体からみると新東京国際空港地域内に所在したいくつかの馬土手との関連性があり，近世牧の復元とその仕組みについて，全体像を浮きぼりにしていく必要があろう。

上宿遺跡は，縄文時代の遺物包含層と古墳時代の住居跡，江戸時代の土壙墓等を検出した。特に縄文時代においては台地平坦部から縁辺部にかけての広い範囲で多量の土器片が出土しており，早期から晩期に至る各時期の資料が得られた。土器片の分布からみると台地先端部が最も遺物の多い地域で，時期的にもまんべんなく出土している。平坦部では後期の土器片が集中する地点と早期の土器片，石鏃の未製品を含むフレイク・チップが集中する地点に分布の特徴が認められる。いずれも遺構が乏しいため生活跡としての明確な判断をするには至らなかった。

井森戸遺跡では，縄文時代早期の田戸下層式を伴う礫群と早期末の芽山式を伴う土壙，晩期の荒海式を伴う土壙，古墳時代後期の住居跡5軒，江戸時代の火葬墓1基を検出した。縄文時代の遺構は台地の縁辺に分布する特徴が認められる。晩期の荒海式の土器はすべて破片であり器形をうかがえる資料ではないが焼土層を覆土にもつ土壙の性格も含めて類例が少なく興味深い資料のひとつとなった。古墳時代の住居跡は出土した遺物及び住居跡の構造，規模，主軸方位の違いから2時期に分類が可能であった。集落の立地する台地は南東から北西にかけて平坦面が続いており少数ながらもなお集落が展開していく可能性が指摘できる。また江戸時代の火葬墓からは寛永通宝が一括出土しており，銭貨の分類を提示できた。上宿遺跡，井森戸遺跡においては，木戸川および栗山川支流の高谷川流域の最奥部に立地しており印旛，利根水系との分水界に接することから新東京国際空港地域内に所在する遺跡跡との関連性に基づく性格付けが必要となろう。

以上簡単ではあるが本報告のまとめとして各遺跡の特徴を列記した。調査範囲が限定されているため必ずしも遺跡の全容を把握したとは言えないが，今後の調査の進展に伴う遺跡相互の考察の資料としたい。さらに木戸川流域における古代文化の様相が解明されることを望むものである。

SUMMARY

This is a report of archaeology about 4 sites. There are Koikemoto-Takada site, Yanagiuyatsu site, Kamijuku site and Imorido site.

Koike-mototakada Site

Found remains in the site are 11 dwelling pits (one of them in Late Kofun age, and others are in Nara or Heian age) and one brock of Preceramic age. Many potsherds were excavated in ten dwelling pits, so we could know their age by them.

Yanagiyatsu-Site

This site located in an end of north in a group of Narita-Matsuosen site.

Found remains in the site are a pit which seems to be a trap of Jomon age, and some charcoal makers in modern age.

Kamijuku-Site

Found remains in the site are some dwelling pits in Kofun age, some graves in Edo age and the layer contained wrthin excavations in Jomon age. Especially, many potsherds were excarved in flat face of the upland, we could find postsherds of style spanning the extire Jomon age. In flat face of the site, many potsherds concentrate in one part.

Imorido-Site

Found remains in the site are stones (which contained The Tado kaso style of early Jomon age) some pits (which containded potsherds of The Arami style) 5 dwelling pits in Late Kofun age, and 1 crematorial grave in Edo age.

Remainds of Jomon age concentrate in edge of the upland. It is possible to divide dwelling pits in Kofun age into two ages by the difference of their siye and structure.

On the other hand, Kanei Tsuho, coin of Edo age, were excaved in the grave, so we could divide coins into classes.

写 真 図 版

図版 1　小池元高田遺跡

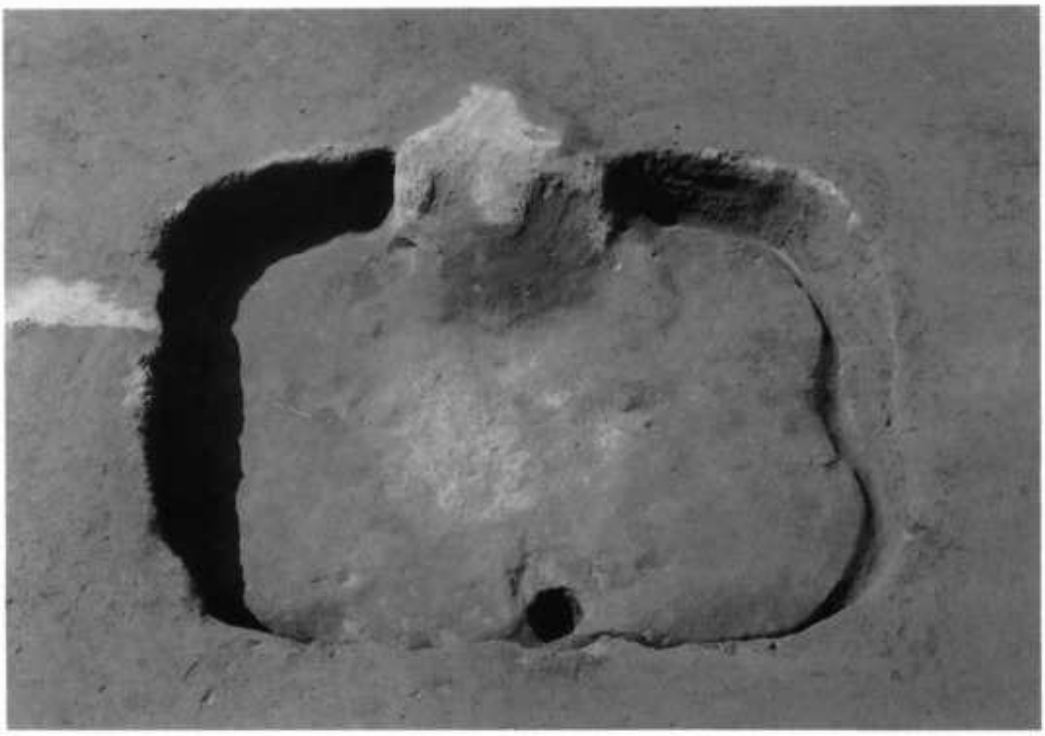
調査区北側発掘調査前全景　　南より

調査区南側発掘調査前全景　　北より

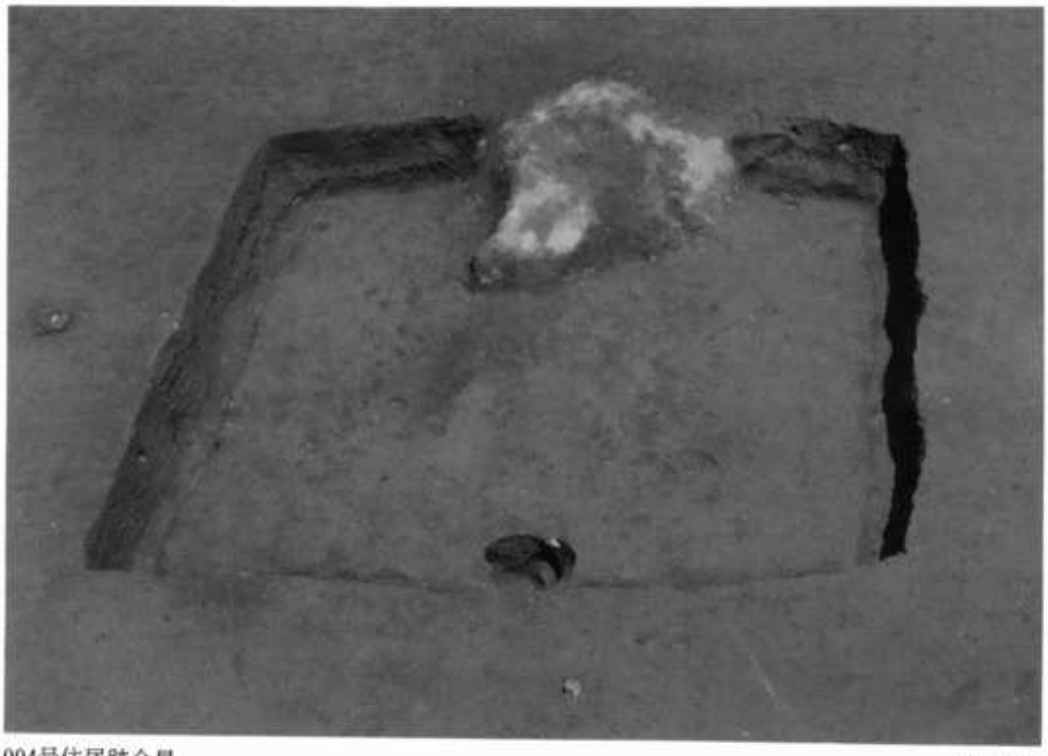
図版 2　小池元高田遺跡

001号住居跡全景　　南西より

002号住居跡全景　　南西より



003号住居跡全景　　南東より



004号住居跡全景　　南西より

図版 4　小池元高田遺跡

003・004・005号住居跡遺物出土状況　　南東より

005－A号住居跡全景　　南東より

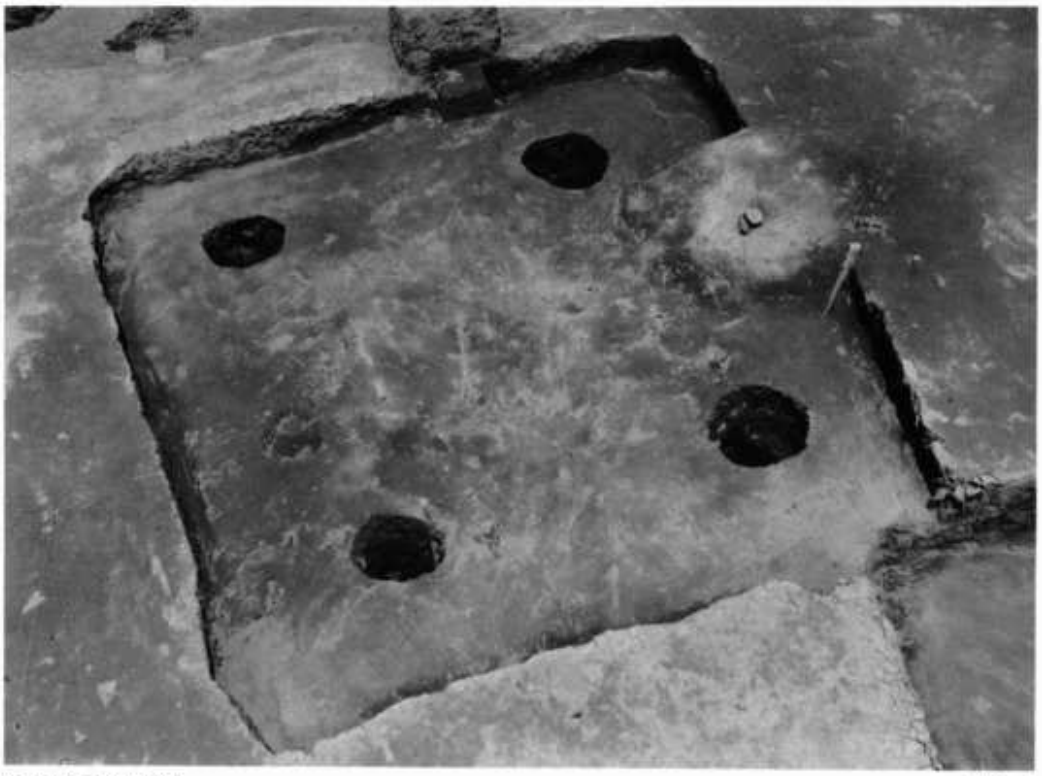
006号住居跡全景　　南東より

同，カマド　　南東より

図版 6　小池元高田遺跡

007号住居跡全景　　南東より

008号住居跡全景　　南東より



010号住居跡全景　　南より

同，カマド内鈎帯具出土状況　　南西より

図版 8　小池元高田遺跡

009号住居跡全景　　南より

011号住居跡全景　　南より

012号跡(掘立柱建物跡)全景　　東より

006号～011号住居跡全景　　北西より

図版10　小池元高田遺跡

013号跡上面坏出土状況　　北西より

同，掘り方全景　　北西より

001
1

001
2

002
5

002
6

002
1

002
8

001号住居跡・002号住居跡出土遺物

図版12　小池元高田遺跡

003号住居跡出土遺物

004
1

003
2

004
6

004
7

004
8

005
1

005
4

005
3

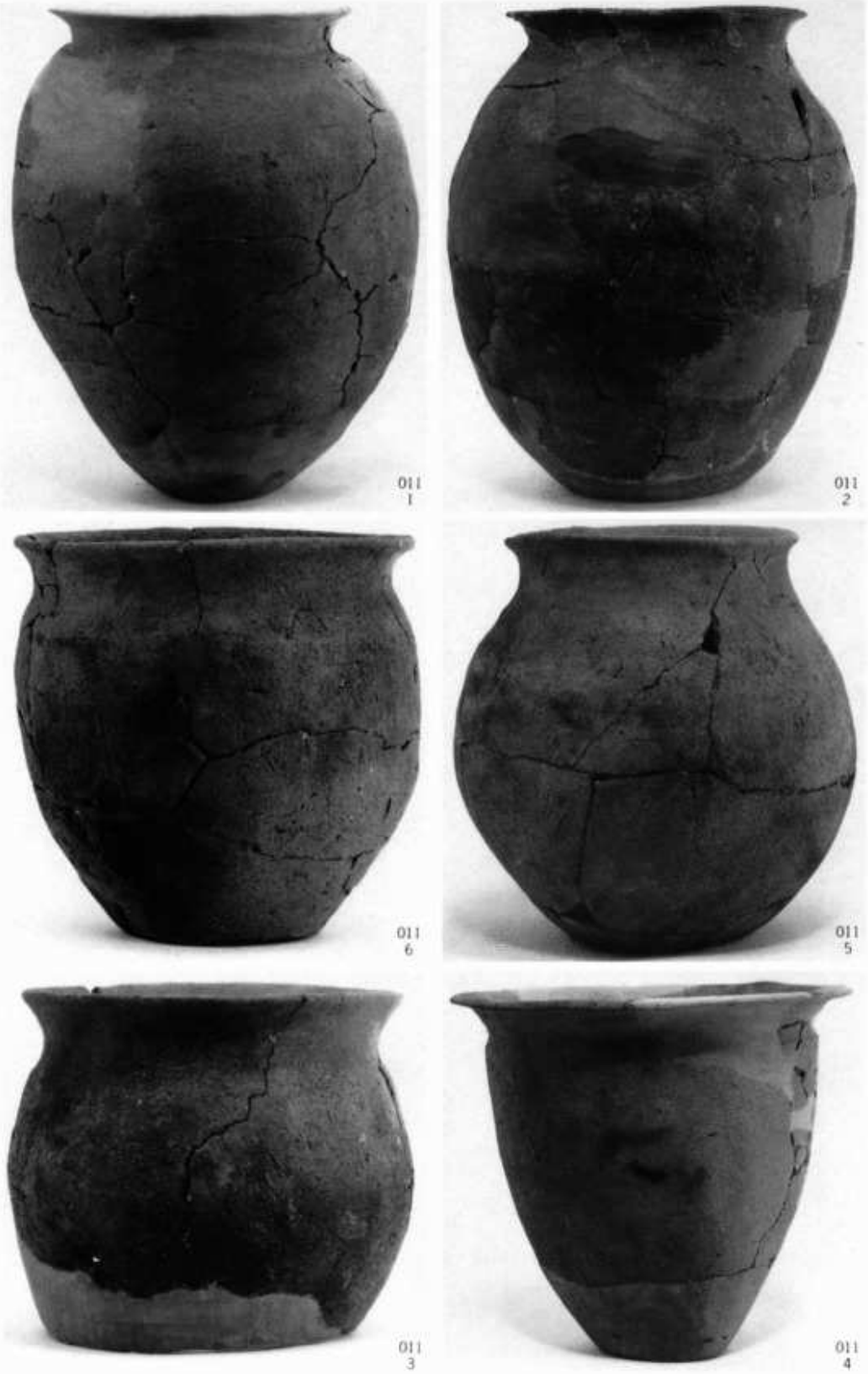
005
6

005
7

004号住居跡・005号住居跡出土遺物

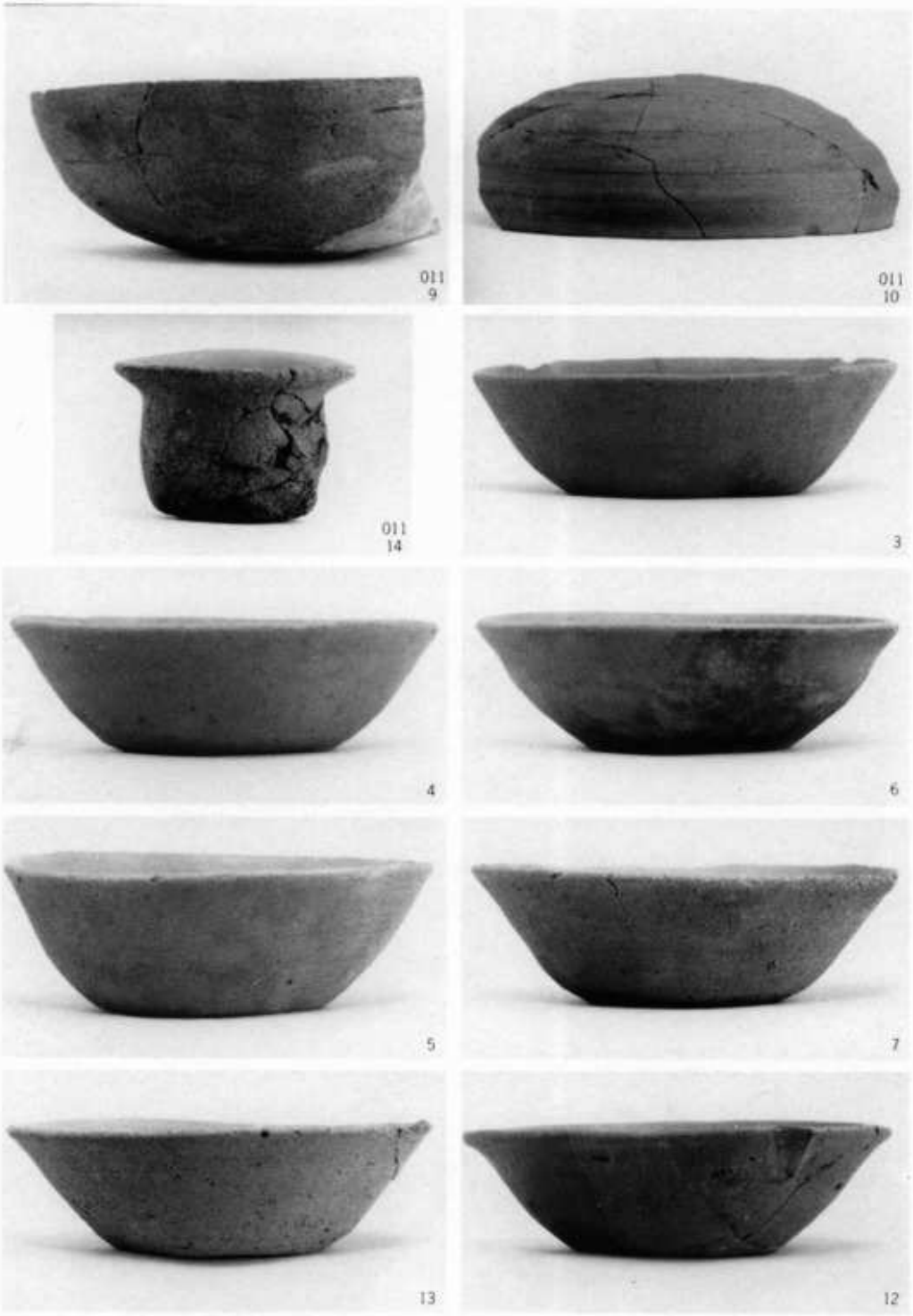
図版14　小池元高田遺跡

006号住居跡・007号住居跡・009号住居跡・010号住居跡出土遺物



011号住居跡出土遺物

図版16　小池元高田遺跡



011号住居跡・グリッド出土遺物

14

8

9

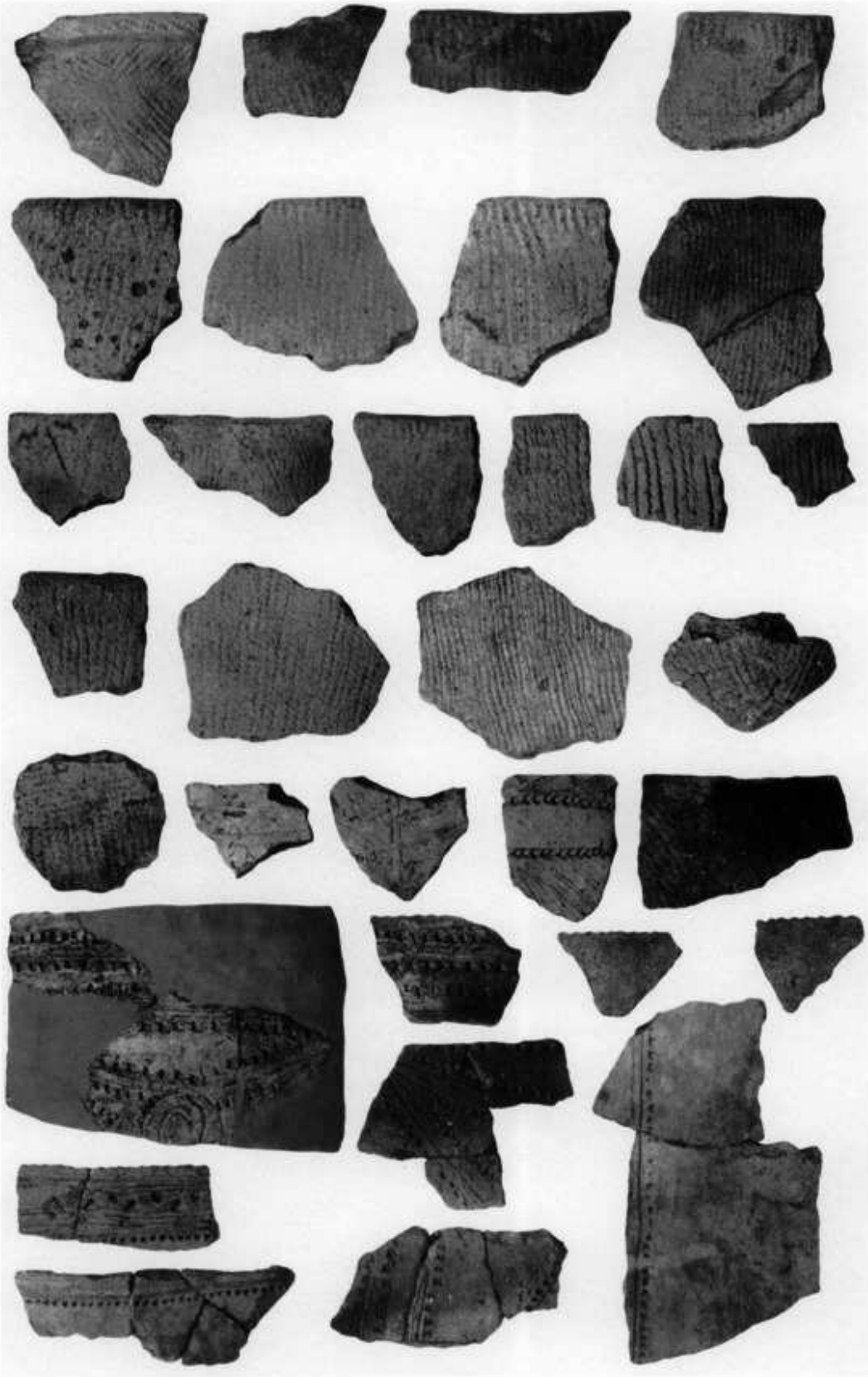
15

11

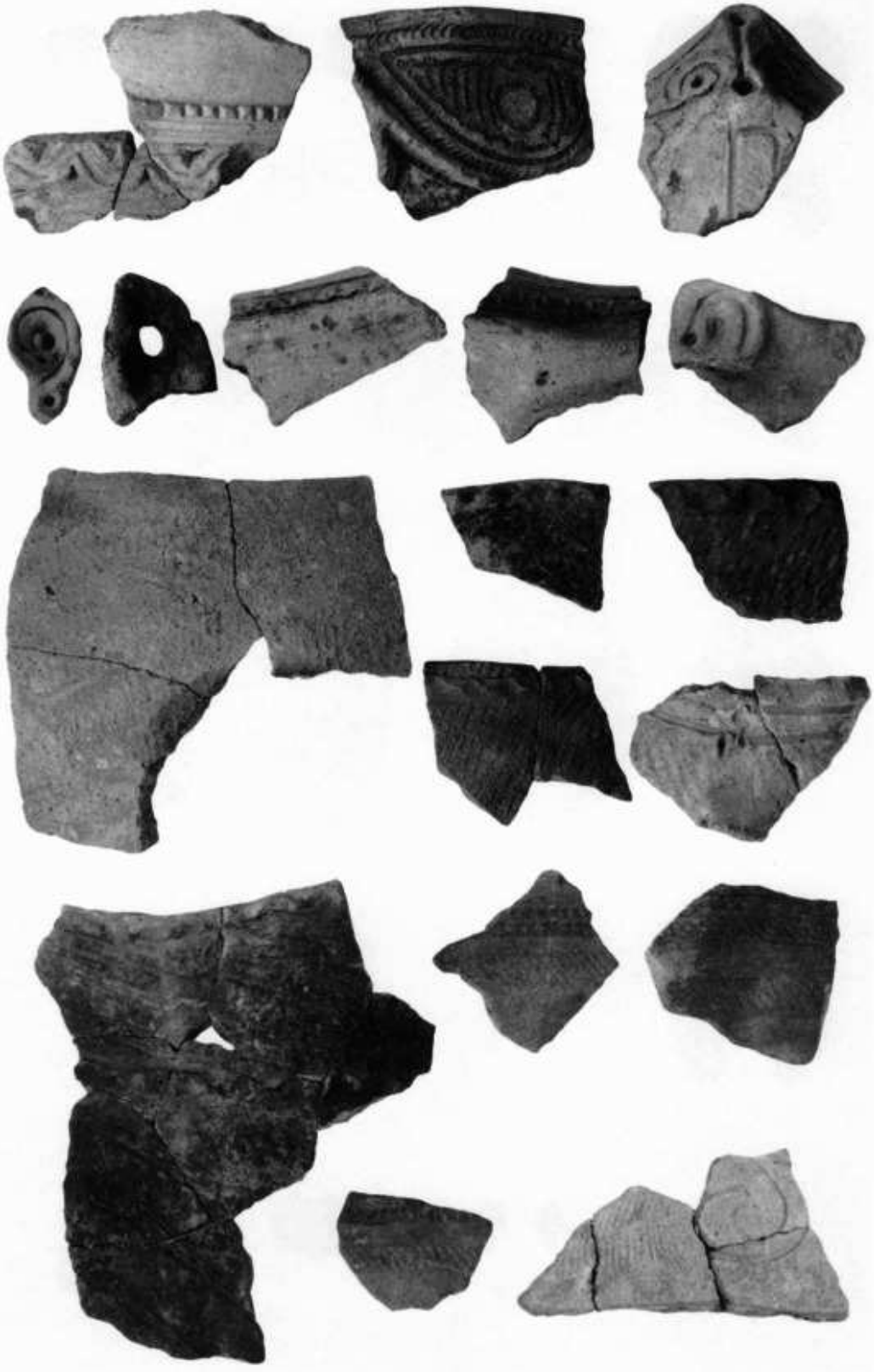
51

グリッド出土遺物

図版18　小池元高田遺跡

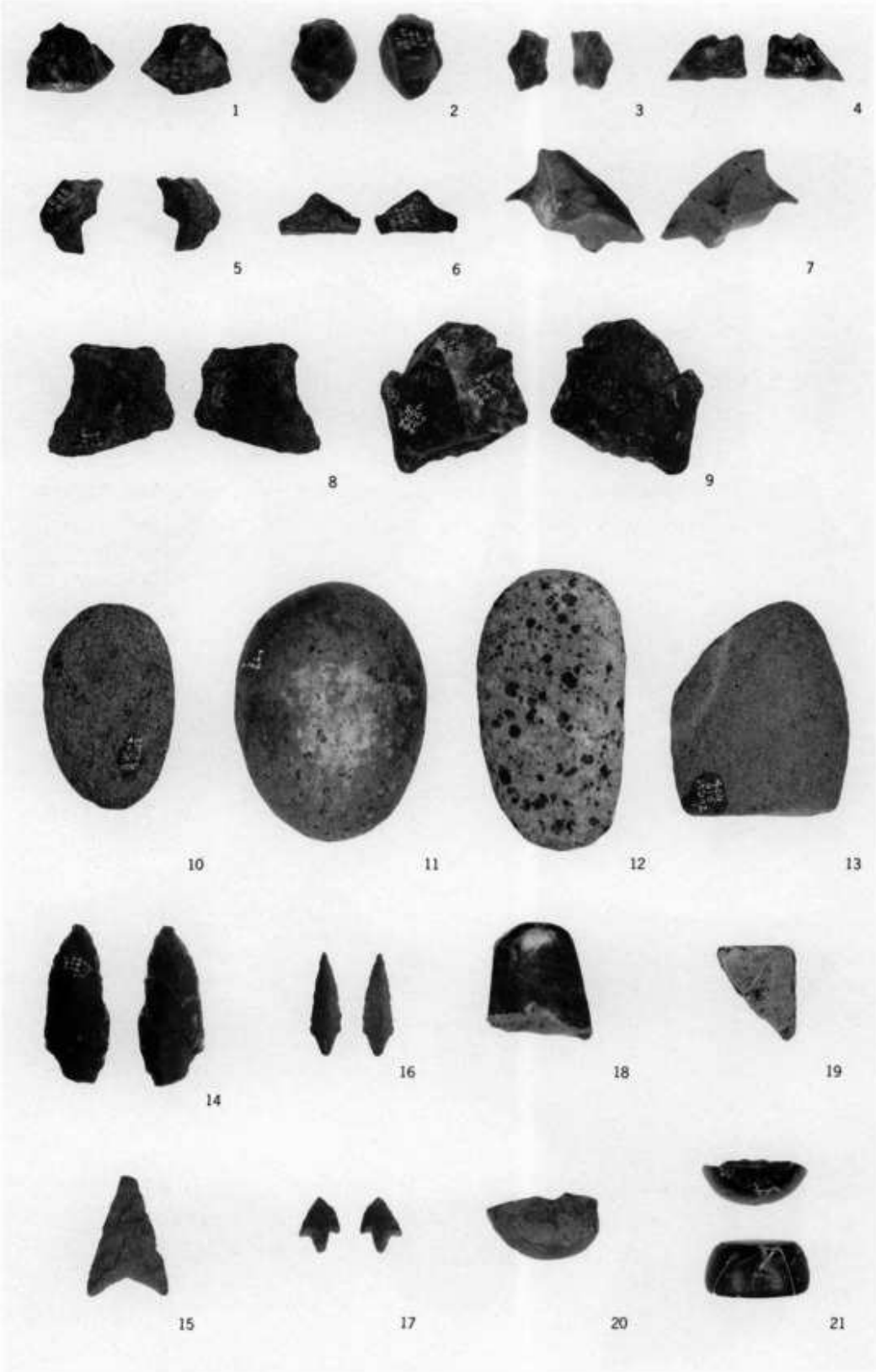


グリッド出土縄文式土器(1)



グリッド出土縄文式土器(2)

図版20　小池元高田遺跡



第1ブロック(1〜9)・グリッド出土石器(10〜21)

1．柳谷遺跡調査前近景　　南より

2．馬土手調査前近景　　南東より

図版22　柳谷遺跡

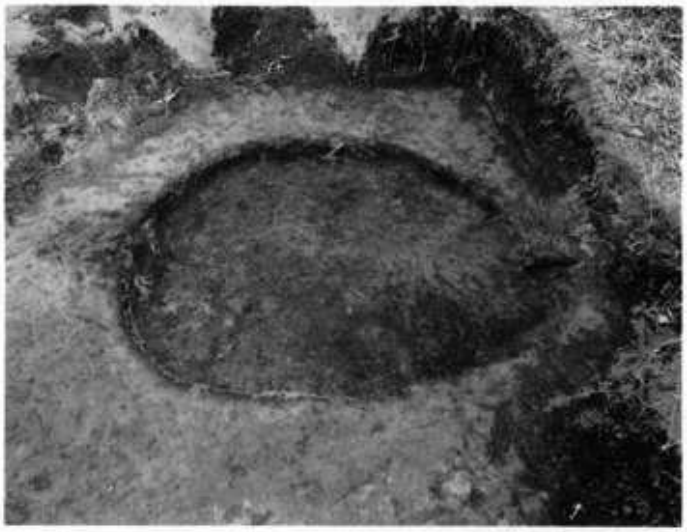
1．馬土手断面　　東より

2．柵列跡　　東より

1．003号跡全景

南西より

2．005号跡全景



北より

3．006号跡全景

北より

図版24　柳谷遺跡

1．007号跡全景　　南東より

2．008号跡全景　　東より

発掘前遠景　　北側台地より

発掘前近景　　南より

図版26　上宿遺跡

トレンチ設定状況(23～17グリッド)　　南より

5F01

5G01

16G08

土層

001号住居跡全景　南東より

炭化物出土状況　南東より

カマド　南東より

炭化物出土状況　東より

図版28　上宿遺跡

002号土壙　　南東より

001・002切合い状況　　南より

003号土壙　　南より

004号土壙　　東より

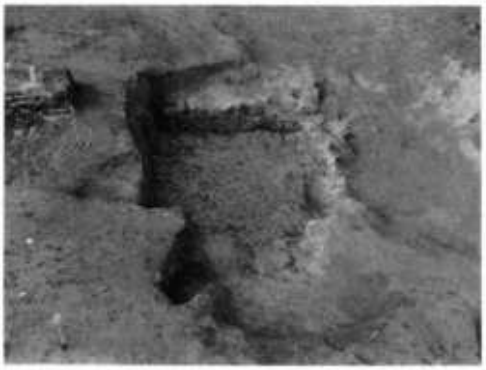
005・006土壙

005号遺物出土状況　　東より

008号溝状遺構全景　北東より

008号B－B′土層　南より

008号A－A′土層　北西より



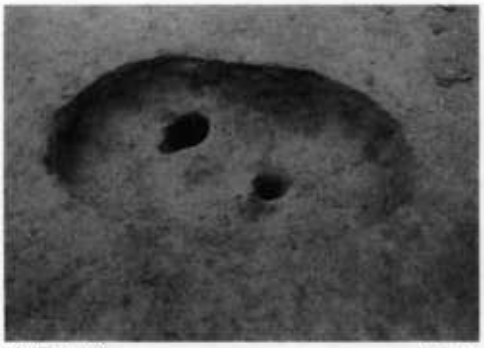
009号土壙　東より

009号土壙　西より

図版30　上宿遺跡

010土壙　東より

011号土壙



012号土壙　北より

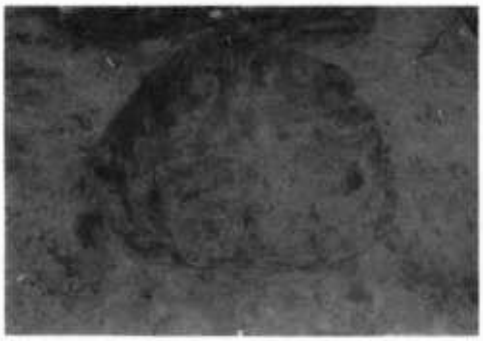
013号土壙　北西より

014号土壙　南東より

015号土壙　南東より

016号土壙　南西より

017・018号土壙　南西より



019号土壙　南西より

020号土壙　南東より

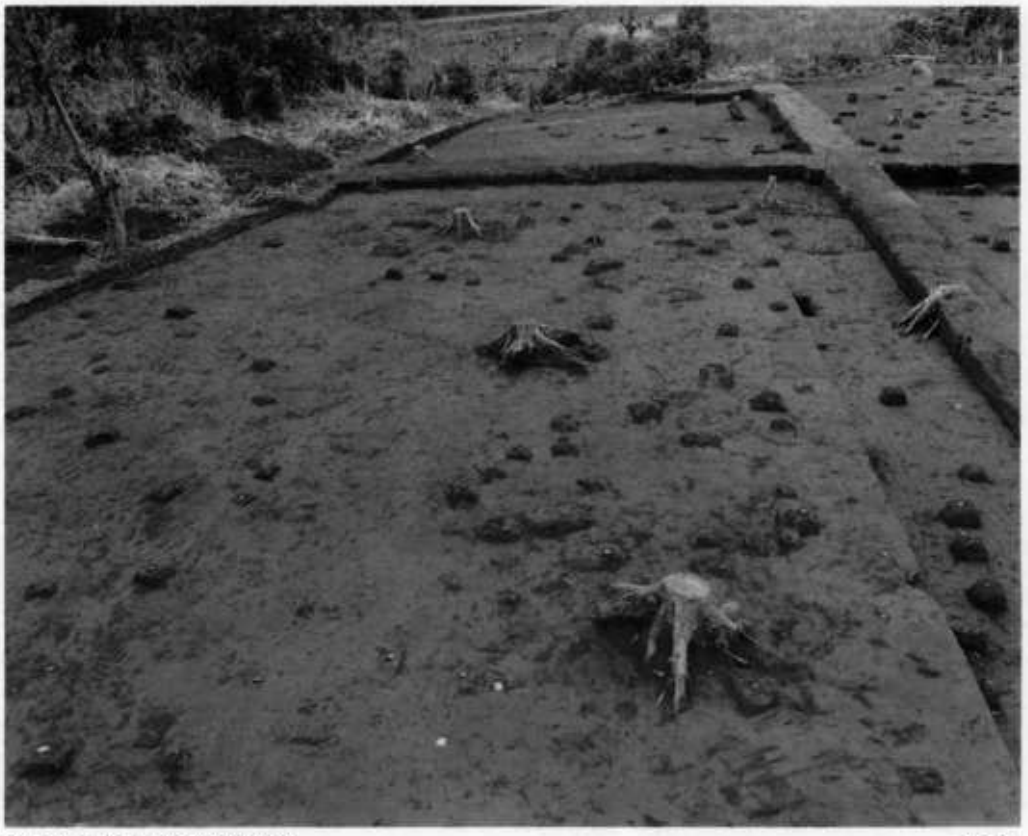
021号竪穴状遺構　北東より

同，遺物出土状況　西より

023号井戸　北より

図版32　上宿遺跡

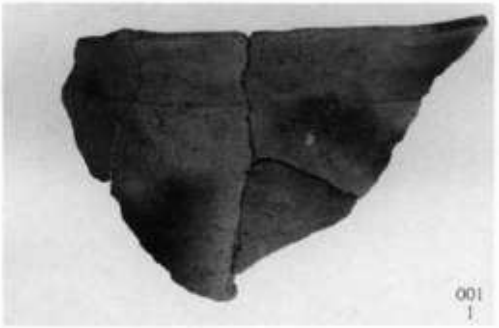
遺物出土状況　　西より



縄文式土器出土状況(北端部)　　南より

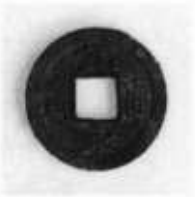
26H・Gグリッド遺物出土状況　　北西より

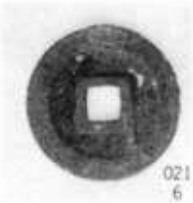
26G－16グリッド遺物出土状況　　南東より

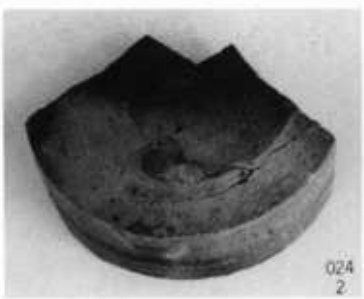


001号住居跡出土遺物

001号住居跡・005・008・009号土壙出土遺物

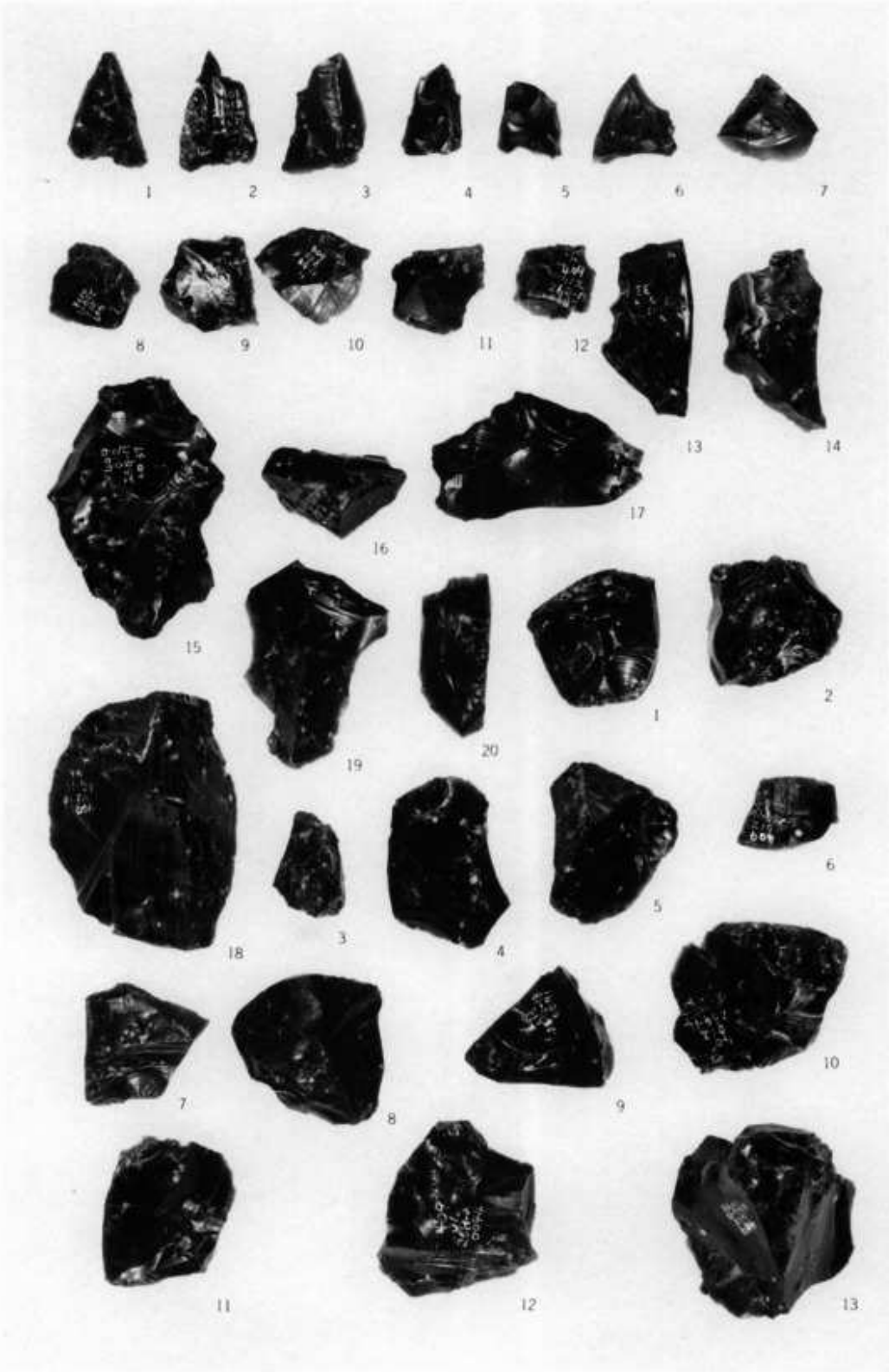




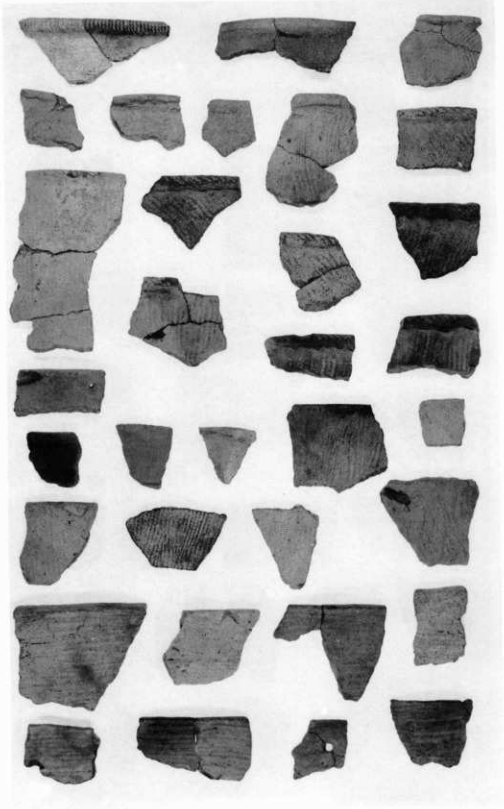


021・024号土壙出土遺物

図版36　上宿遺跡

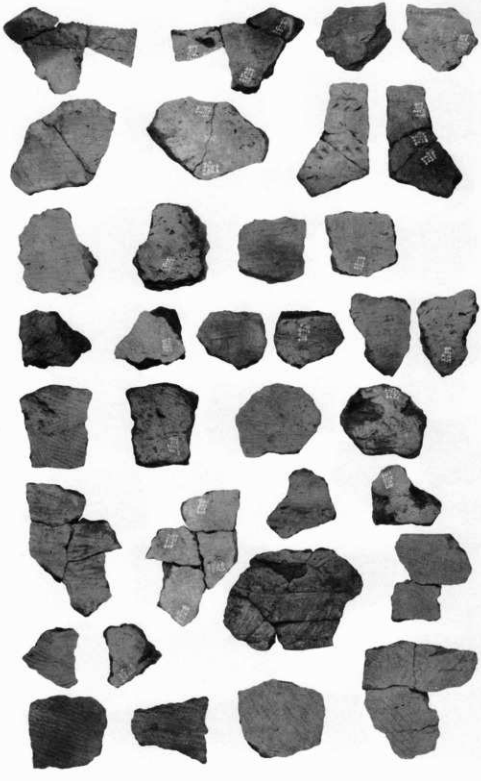


縄文時代石器(1)・(2)

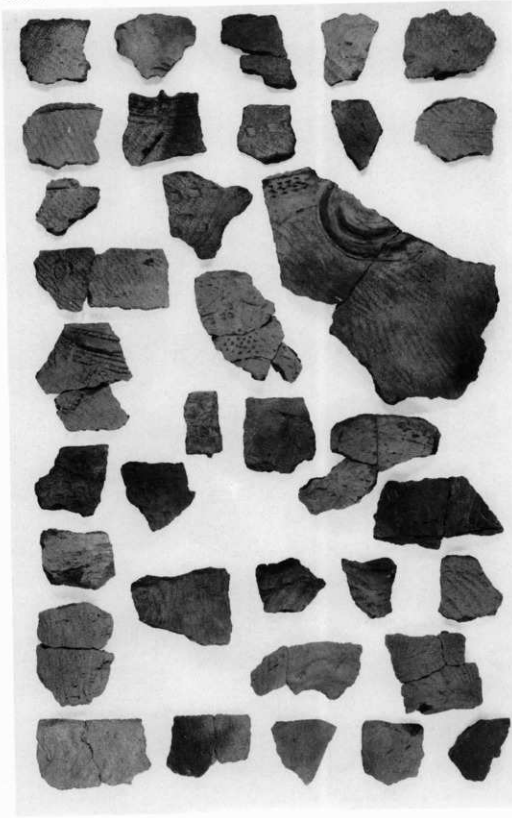


グリッド出土縄文式土器 (1)

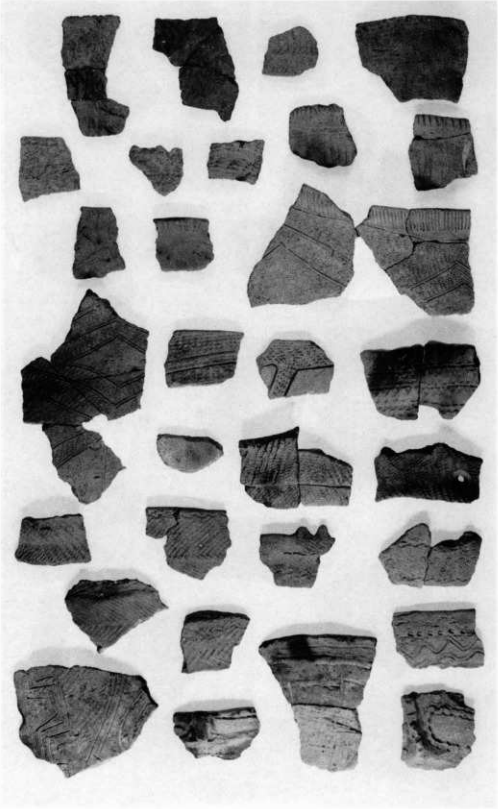
グリッド出土縄文式土器 (2)



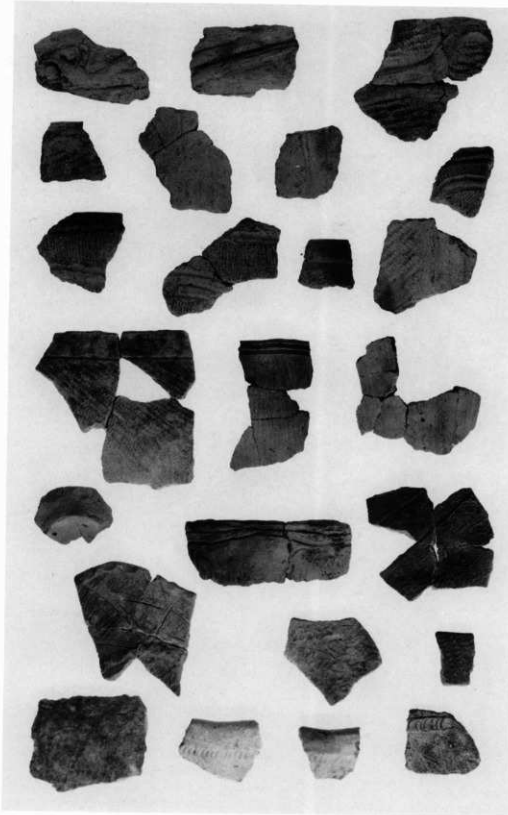
グリッド出土縄文式土器 (3)



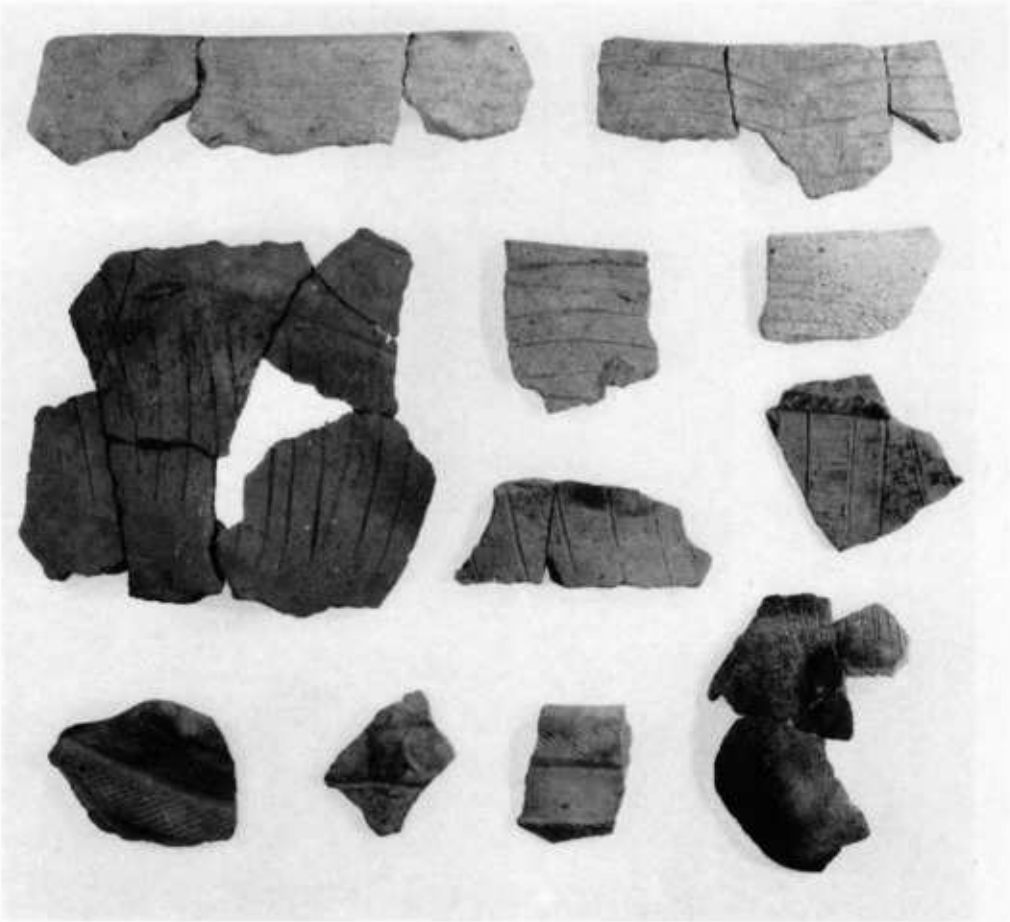
グリッド出土縄文式土器 (4)



グリッド出土縄文式土器 (5)

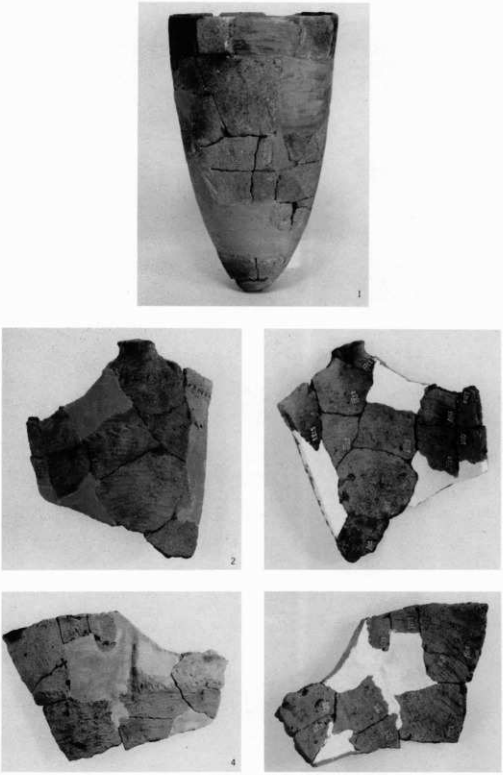


グリッド出土縄文式土器 (6)

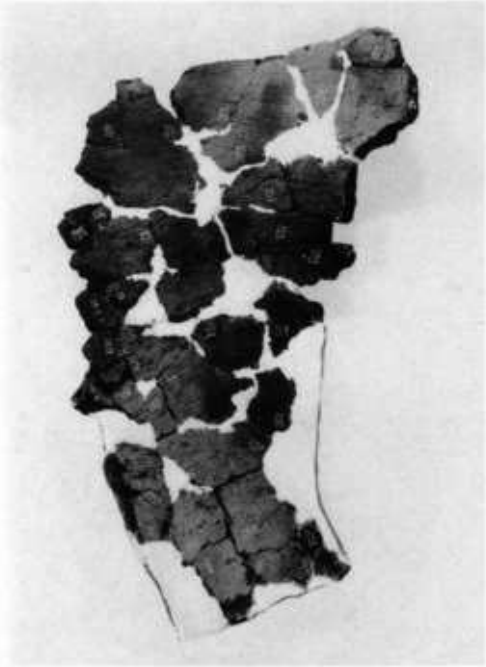


グリッド出土縄文式土器 (7)

図版44 上宿遺跡

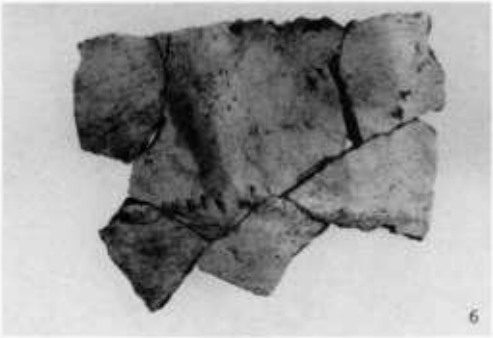


グリッド出土土器 (1)



グリッド出土土器 (2)

図版46　上宿遺跡



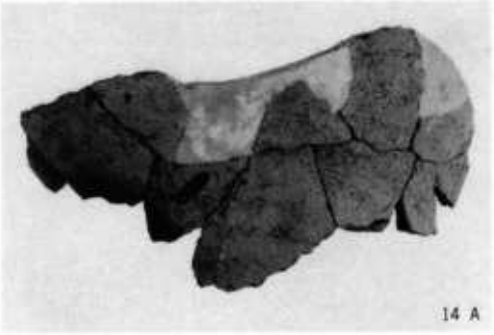
グリッド出土土器 (3)

11 A

13

11 B

14 B

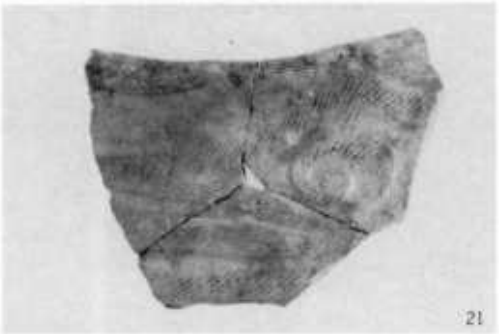

14 A

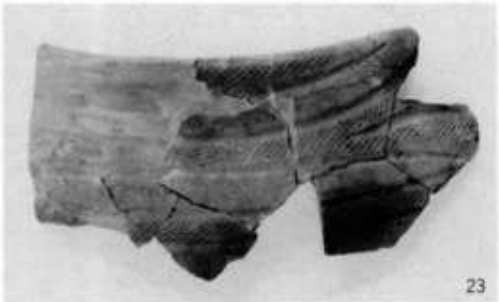
15

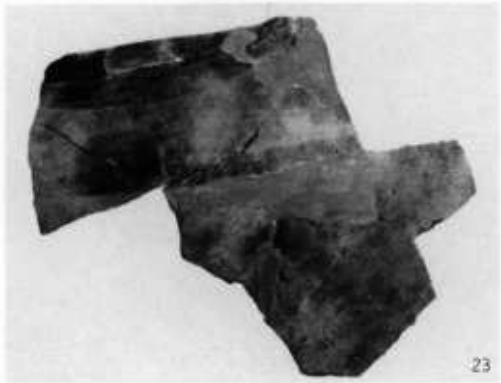
16

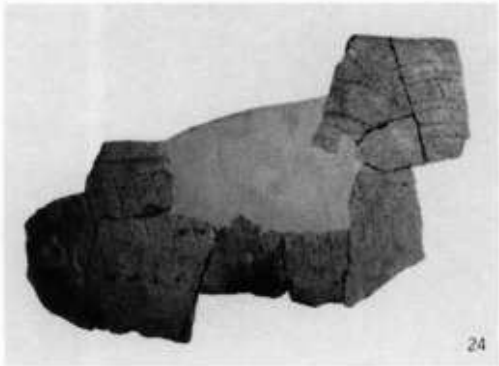
グリッド出土土器（4）

図版48　上宿遺跡

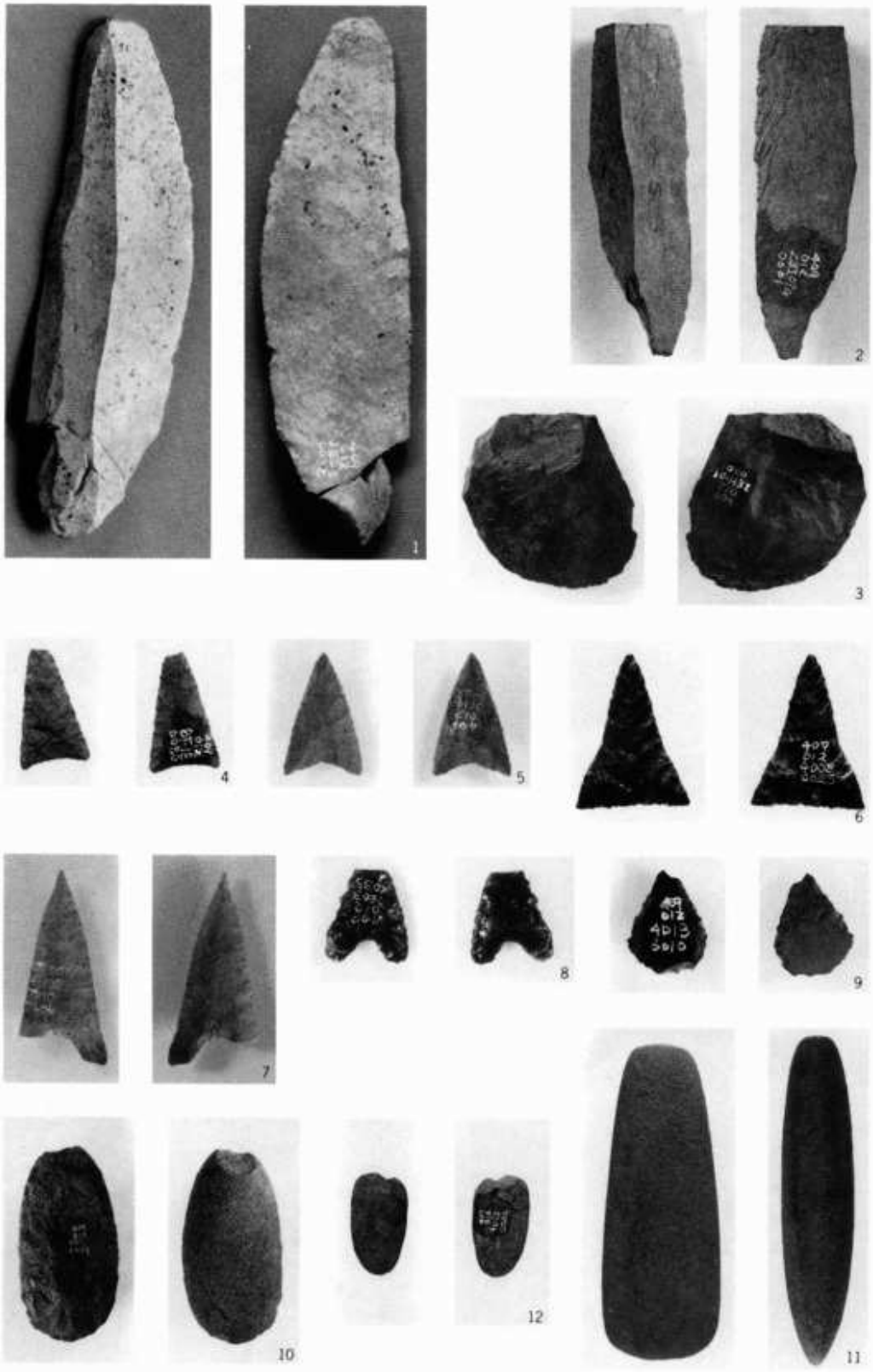








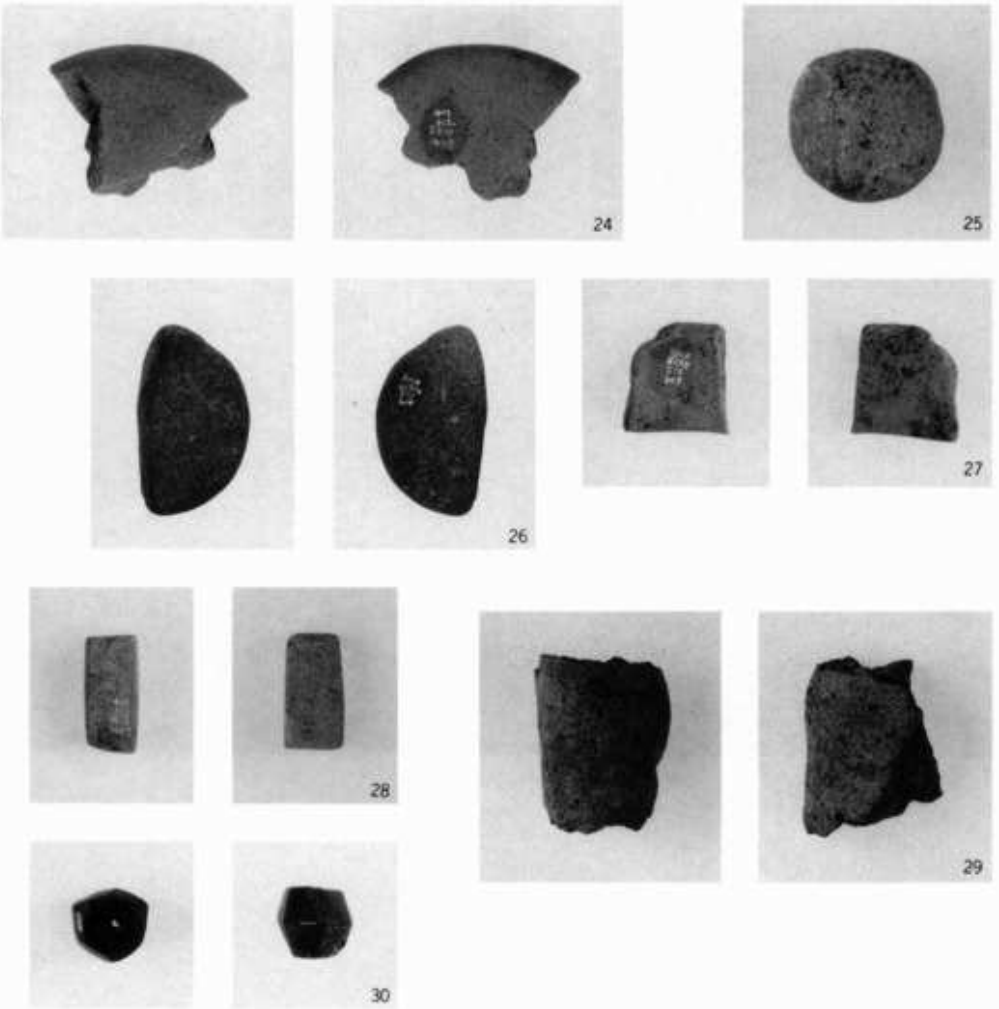
グリッド出土土器（5）



グリッド出土石器 (1)

図版50　上宿遺跡

グリッド出土石器 (2)



グリッド出土石器 (3)

図版52　井森戸遺跡

発掘前近景　　北より

トレンチ設定状況　　南より

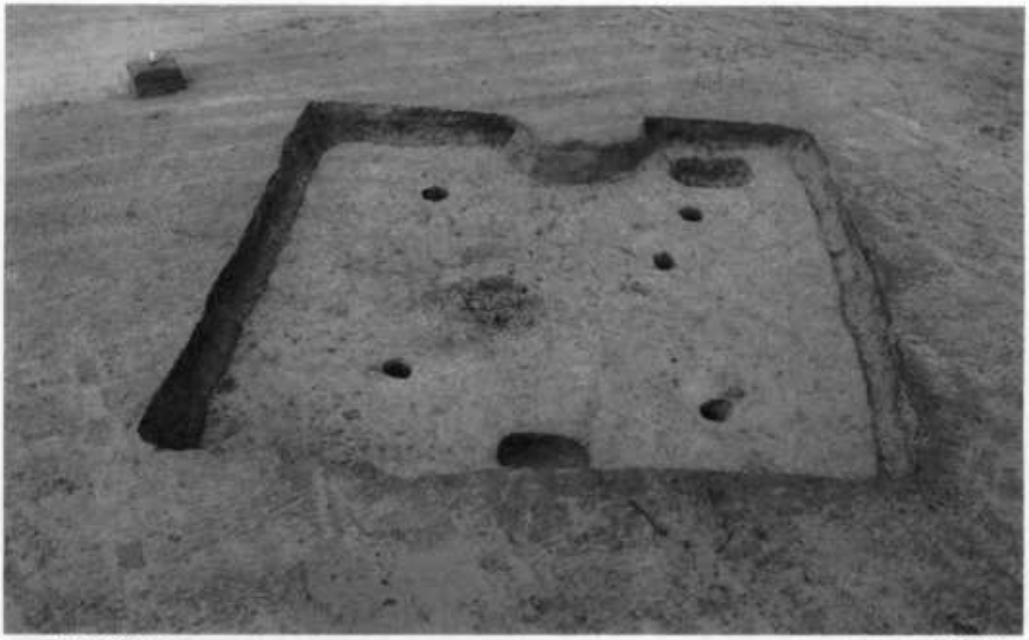
土層(11B－07)

001号住居跡全景　　南西より

貯蔵穴遺物出土状況　　南より

遺物出土状況　　南東より

図版54　井森戸遺跡



002号住居跡全景　　南東より

遺物出土状況　　南東より

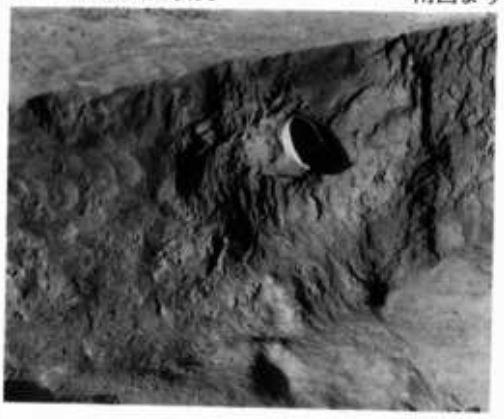
貯蔵穴遺物出土状況　　北西より

カマド　　南東より

003号住居跡全景　　南西より

遺物出土状況　　南西より

カマド遺物出土状況　　南西より



図版56　井森戸遺跡

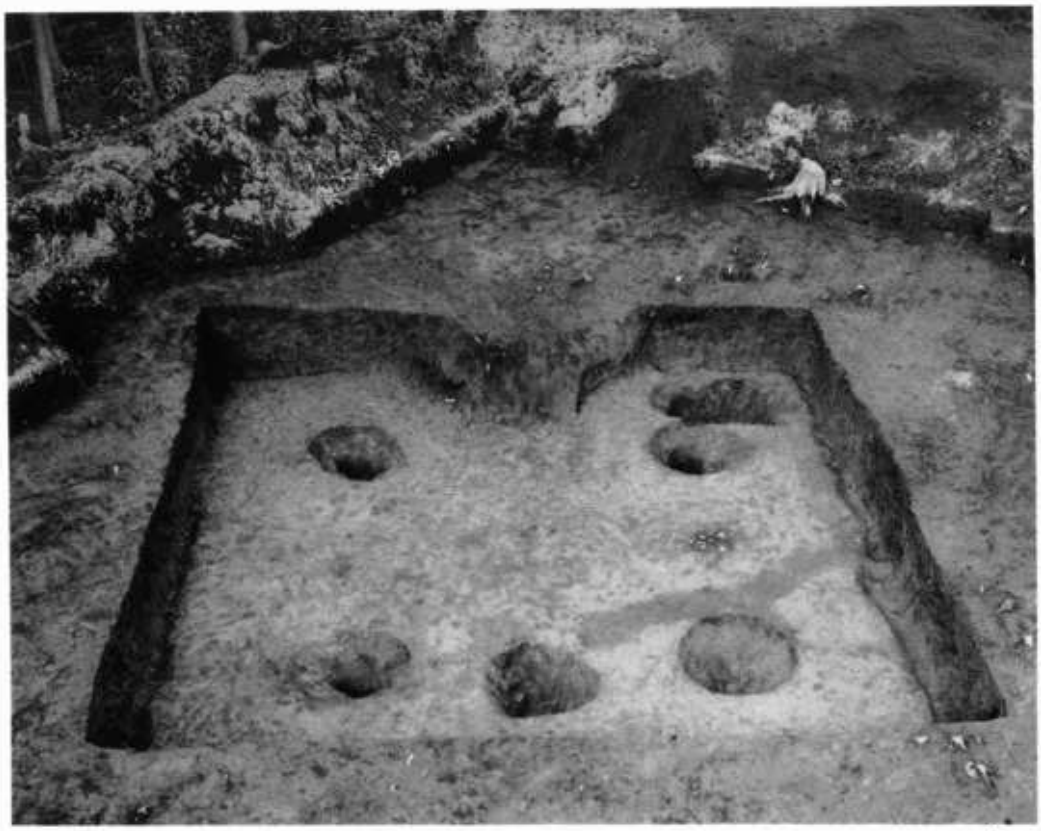
031号住居跡全景　南東より

カマド遺物出土状況　南東より

カマド　南東より

カマド遺物出土状況　北東より

貯蔵穴遺物出土・土層状況　南東より



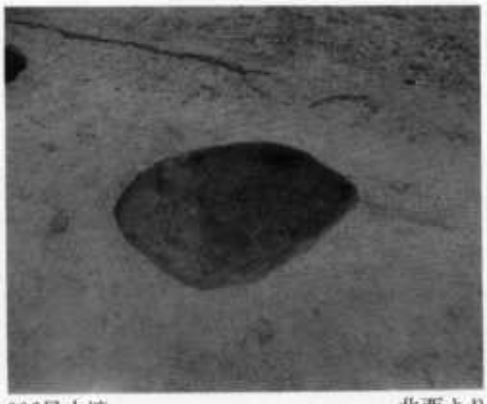
032号住居跡全景　　南より

カマド　　南より

図版58　井森戸遺跡

調査区南側土壙　　北東より

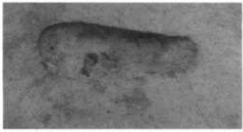
004号土壙　　西より



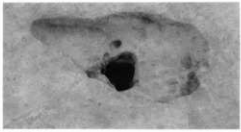
006号土壙　　北西より

007号土壙　　南西より

008号土壙　　南西より



009号土壙　南より

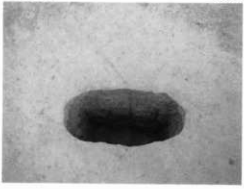


010号土壙　北より

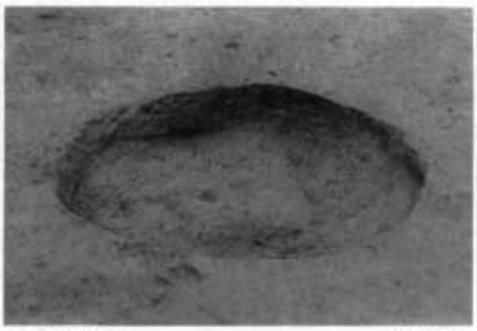
010号土壙　南より

012号溝
北東より

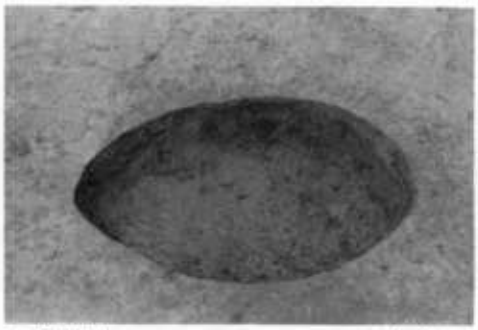
011号土壙　東より



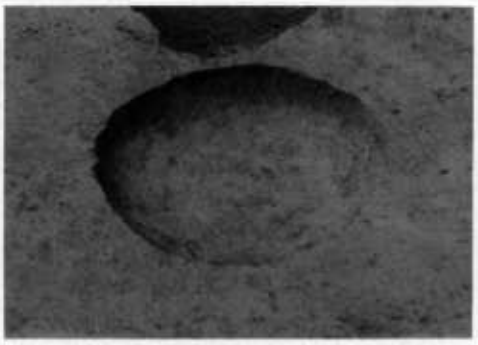
図版60　井森戸遺跡



013号土壙　北東より



014号土壙　南東より



015号土壙　南より

016・017号土壙　北西より

018号土壙遺物出土状況　南より

019号土壙　東より

020号土壙　南西より

021・022号土壙　南西より

023号土壙　南西より

024号土壙　南より

025号土壙　南より

026号土壙　南西より

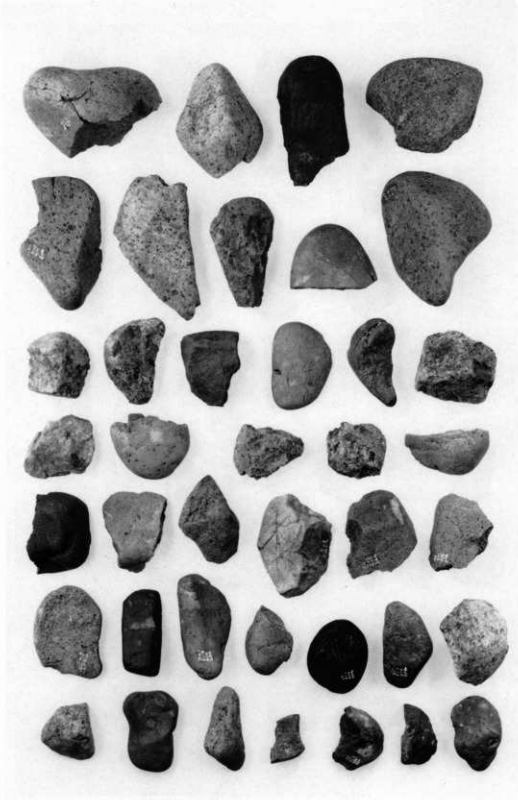
027号土壙　南西より

2A－13・14,2B－01・02グリッド遺物出土状況　南東より

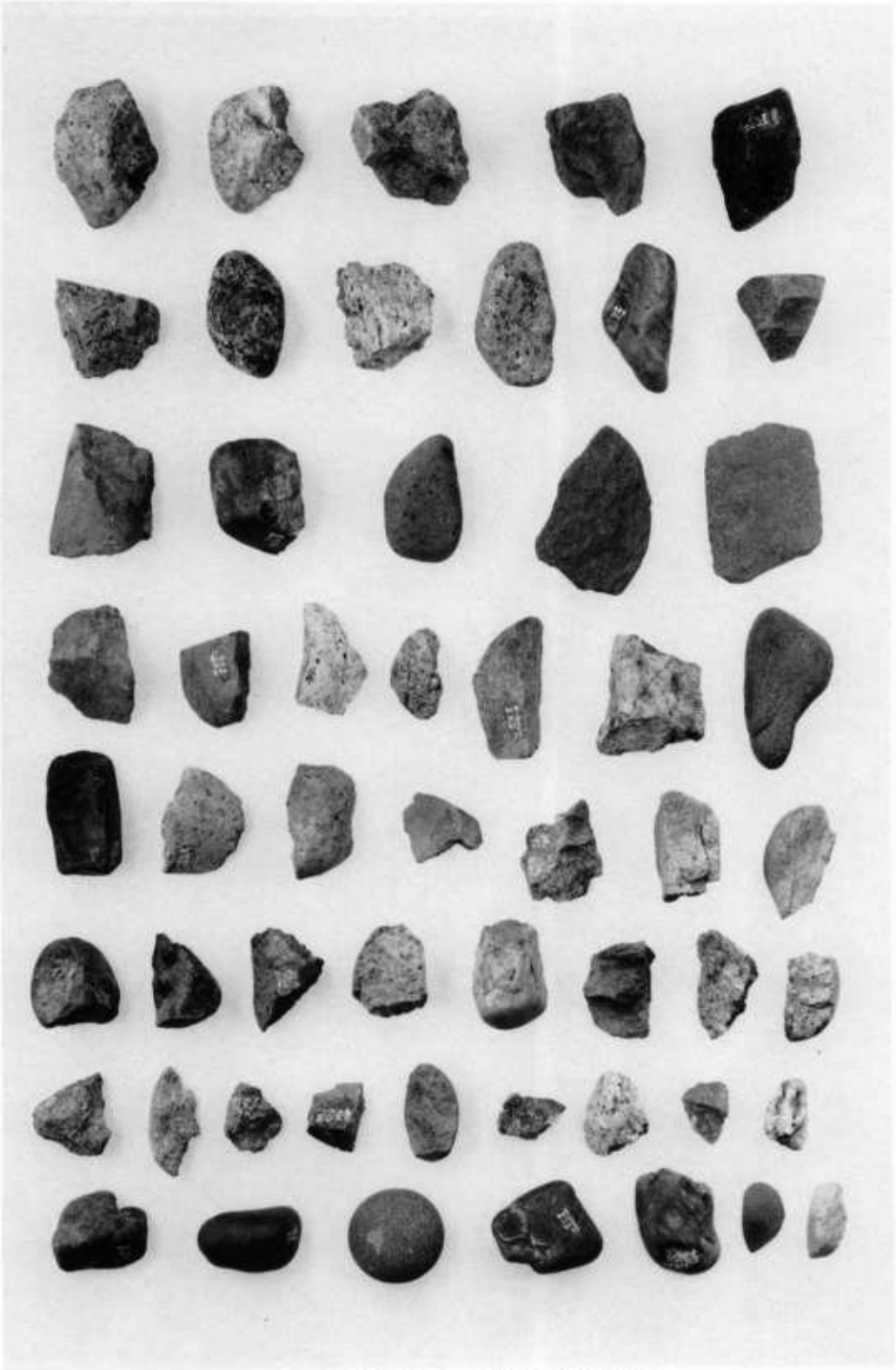
図版62　井森戸遺跡

033・034号溝　　南西より

11B・12B・11C・12Cグリッド縄文土器・礫出土状況　　北西より



11B・C，12B・Cグリッド出土礫 (1) (約2/5)



11B・C，12B・Cグリッド出土礫 (2)（約2/5）

001号住居跡出土遺物

図版66　井森戸遺跡

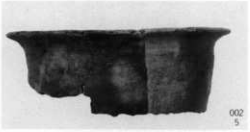
001
8

002
1

002
2

002
3

002
4


002
5

002
6

002
7

001・002号住居跡出土遺物

002
8

002
9

002
10

002
11

003
2

003
3

003
1

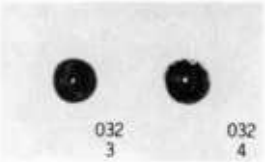
003
4

003
5

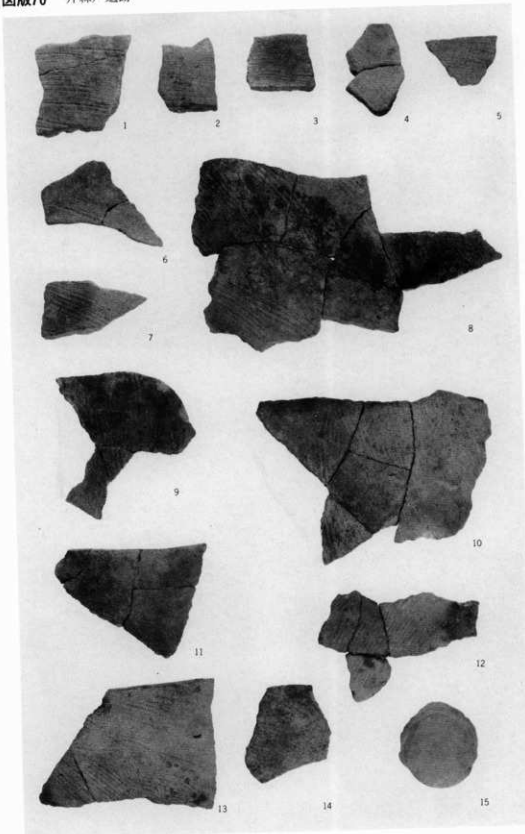
031
1

002・003・031号住居跡出土遺物

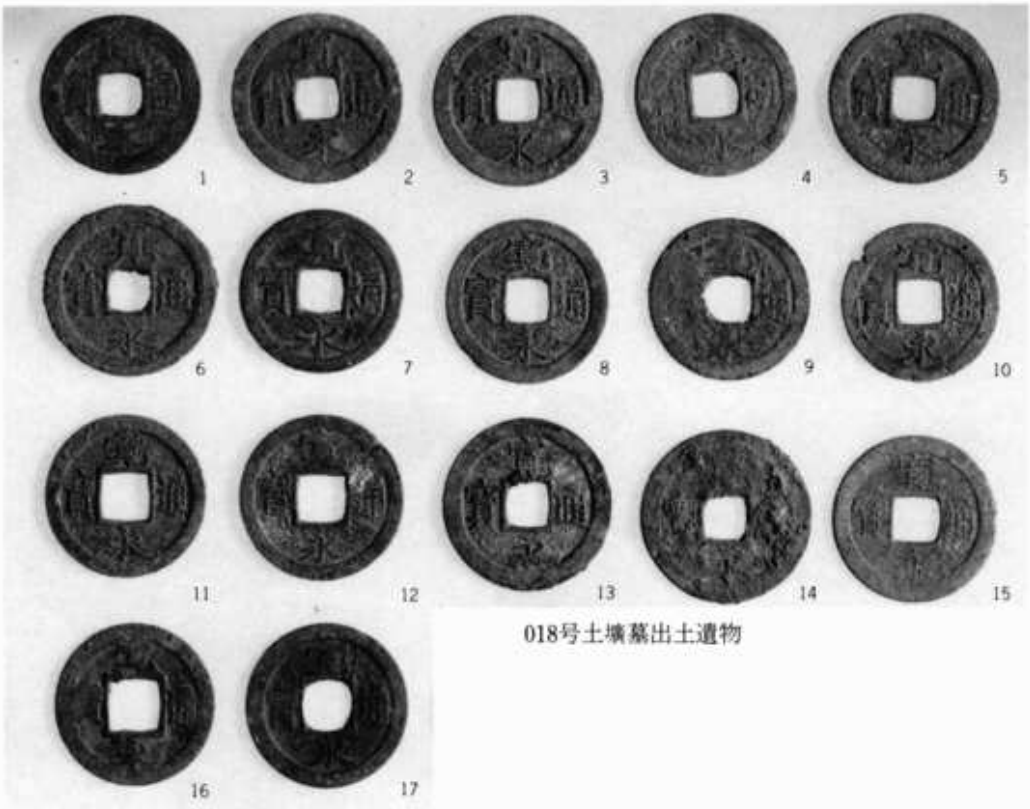
031号住居跡出土遺物



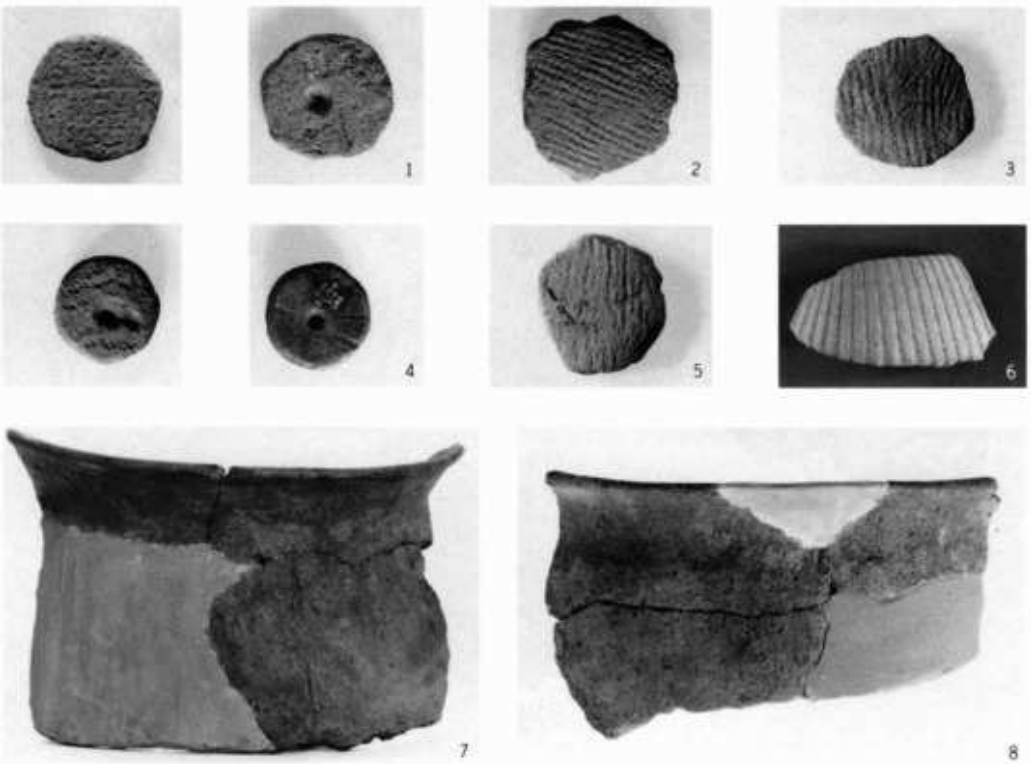
031・032号住居跡、010号土壙出土遺物



007・013号土壙出土土器

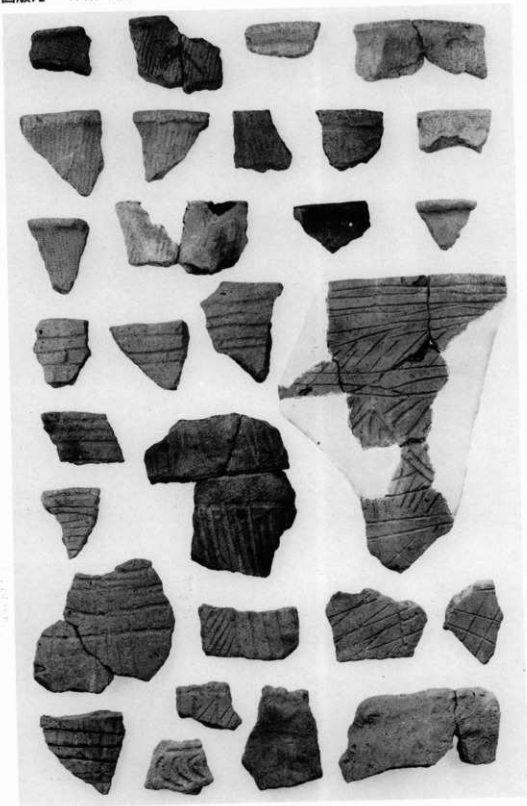


018号土壙墓出土遺物

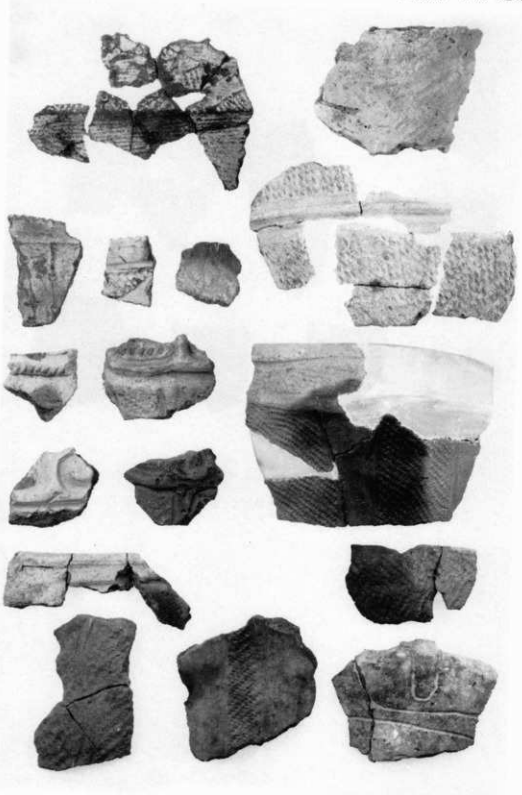


018号土壙墓及びグリッド出土遺物

図版72　井森戸遺跡

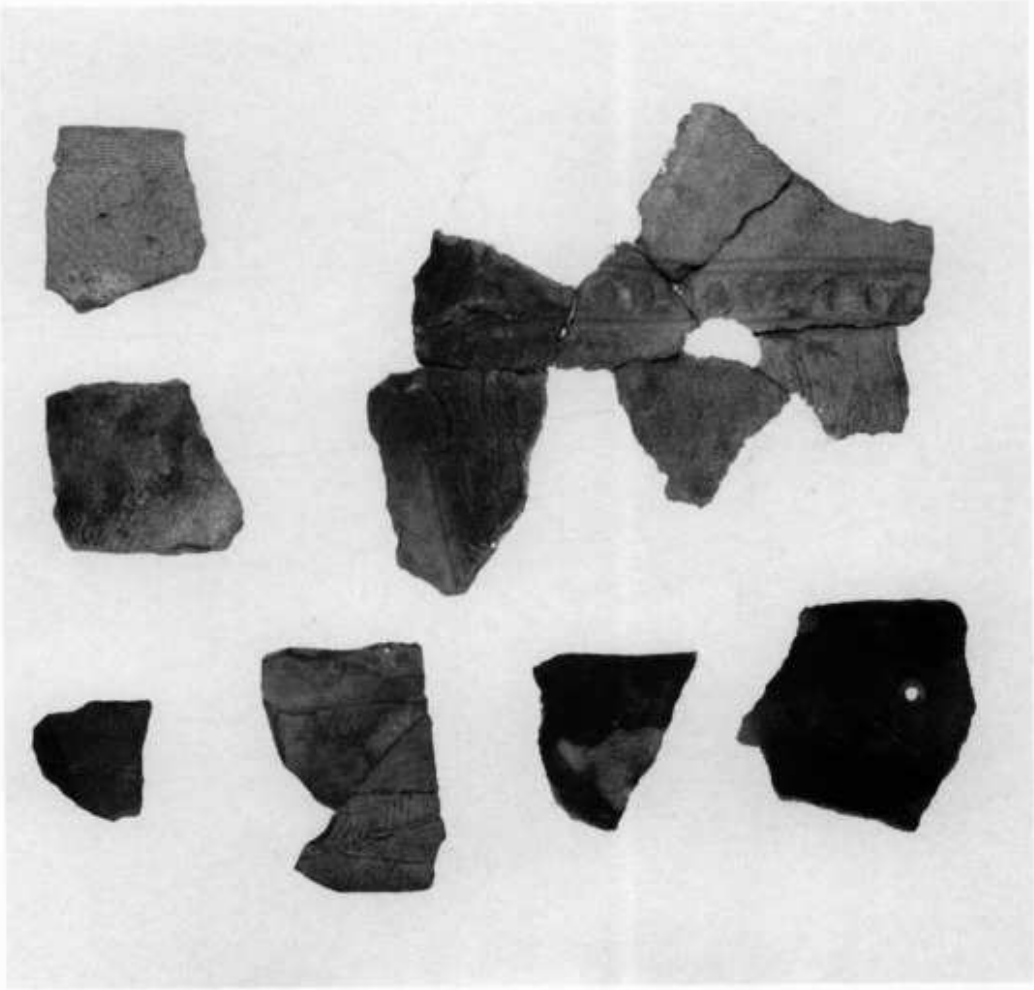


グリッド出土縄文式土器 (1)

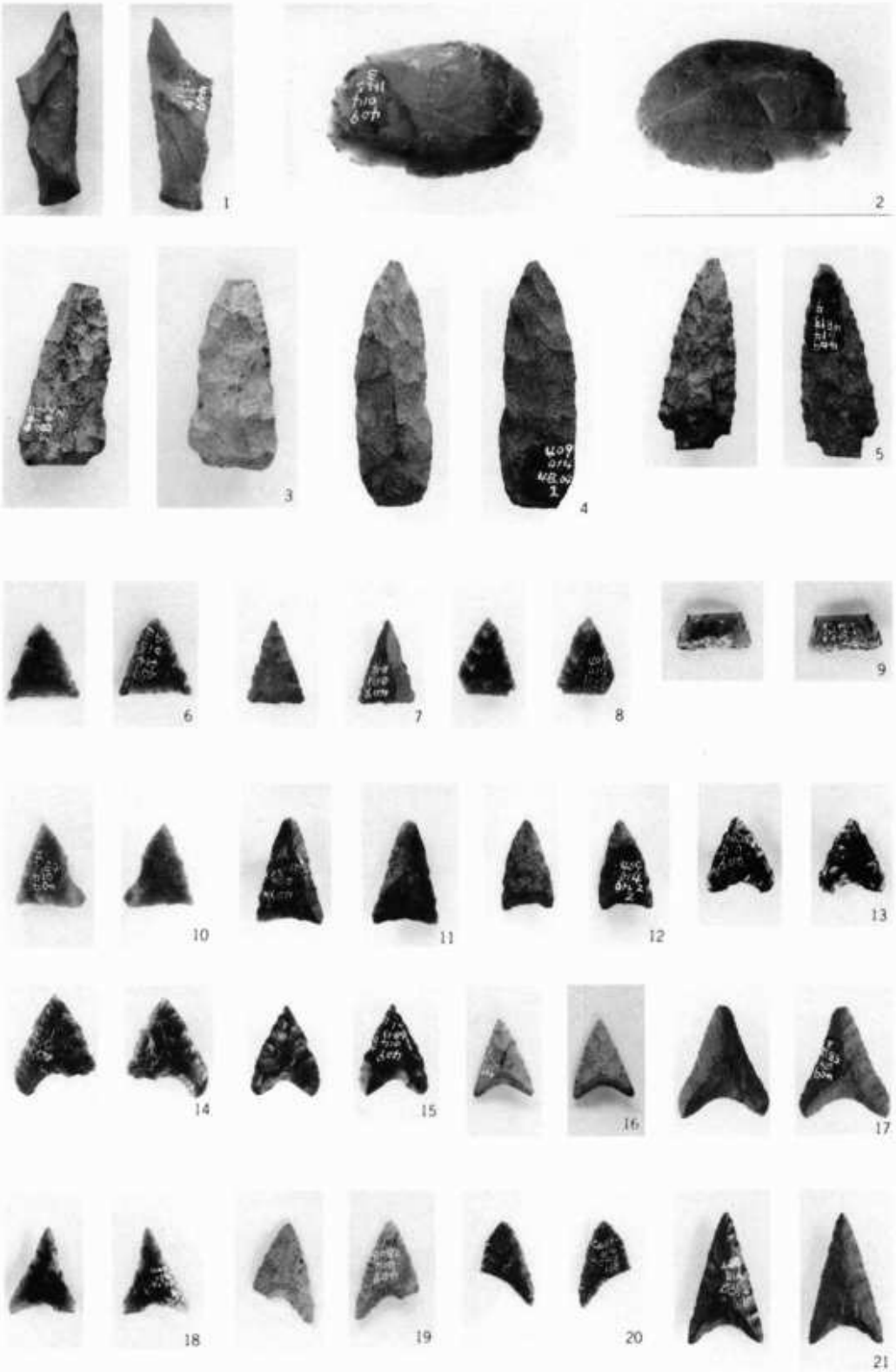


グリッド出土縄文式土器 (2)

図版74　井森戸遺跡

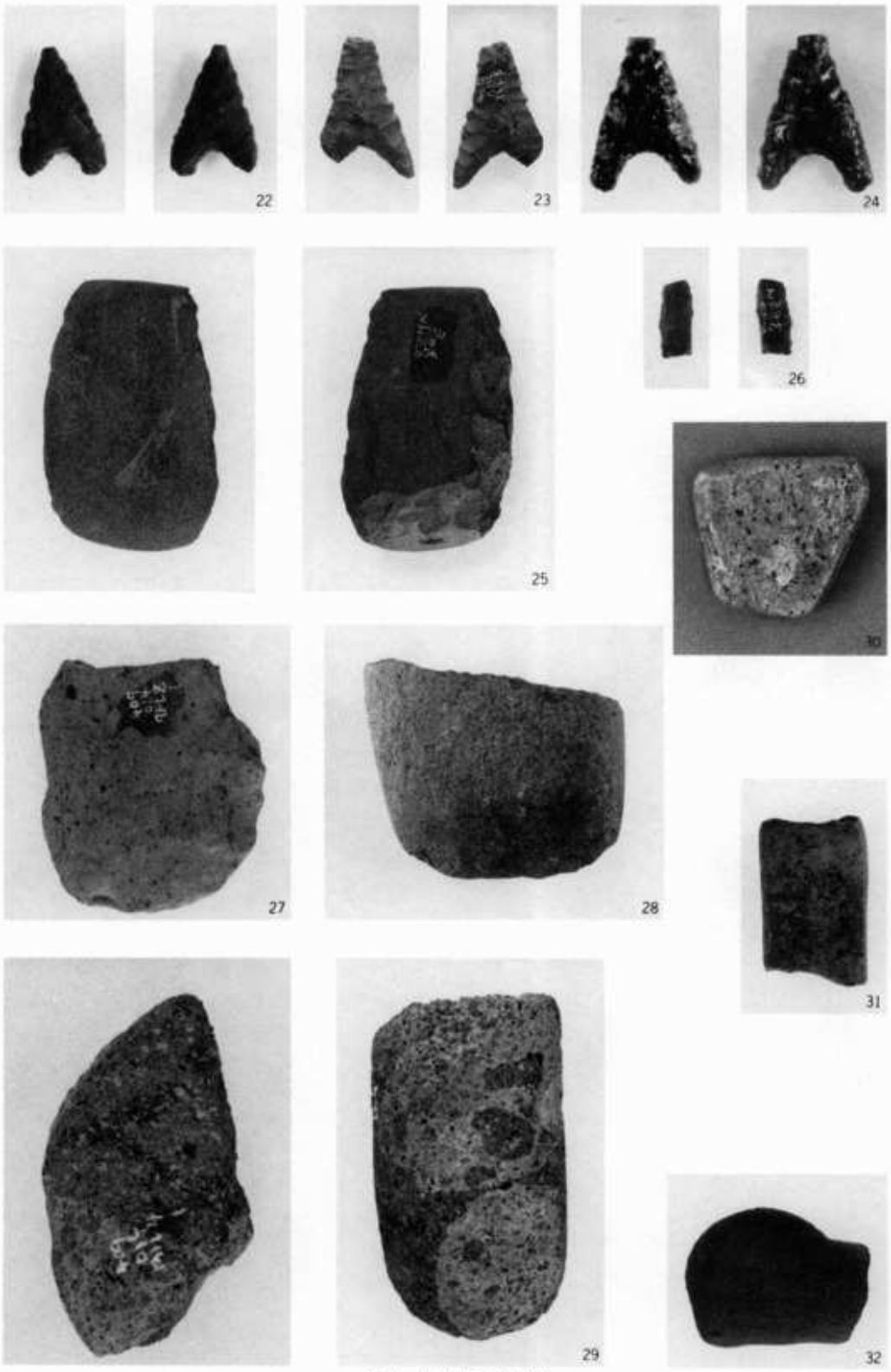


グリッド出土縄文式土器 (3)



グリッド出土石器 (1)

図版76　井森戸遺跡



グリッド出土石器 (2)

昭和61年3月20日印刷
昭和61年3月31日発行

主要地方道成田松尾線Ⅳ

小池元高田遺跡・上宿遺跡
柳谷遺跡・井森戸遺跡

発行　千葉県土木部
千葉県千葉市市場町1－1
財団法人　千葉県文化財センター
千葉県千葉市葛城2－10－1
印刷　有限会社　正文社
千葉県千葉市都町2－5－5

主要地方道成田松尾線Ⅳ　正誤表

頁	箇　所	誤	正
例言5		鈴木道之助(59年)	鈴木道之助(59年～)
例言5		高橋賢一(58年)	高橋賢一(58年～)
挿図目次第86～89図		(1/500)	(1/1,000)
P8	第6図　スケール	20m	2m
P26	第20図　スケール	50m	50cm
P53	第37図　スケール	5cm	3.3cm
P64	第42図　スケール	5m	4m
P85	第54図　スケール	4m	2m
P100	17行目	(弘仏吹継天保銭)	(弘化吹継天保銭)
P100	17行目	(元文十蔓坪八分銭)	(元文十萬坪八分銭)
P133, 134	第86～89図縮尺	(1/500)	(1/1,000)
P135	6行目	竪穴状遺構	竪穴状遺構
P148	12行目	やや皮外する	やや外皮する
P148	24行目	若干侵触	若干浸食
P150	17行目	P3－43m²	P3－43cm
P153	第102図住居内遺物	□3	□3
P154	3行目	調査で全様	調査で全容
P158	第106図012号溝セクション	·— D·	·D D·
P159	13行目	深さ28m	深さ28cm
P162	1，11，15，19行目	平坦な	平坦な
P162	2行目	時期不祥	時期不詳
P164	第110図土壙スケール	4m	1m
P164	第110図溝スケール	1m	4m
P166	第111図　スケール	5m	2.5m
P168	第112図　スケール	10cm　5cm	5cm　10cm
P175	第16表2，3	延賃亀戸	延賃亀戸
P183	15行目	図皮	図版
P183	19行目	孤状の	弧状の
P183	22行目	掘之内	堀之内
P192	11行目	馬上手	馬土手
P192	21行目	夛山式	茅山式
P192	30行目	遺跡跡	遺跡
P194	15行目	wrthin	within
P194	16行目	excarved	excaved